大阪府埋蔵文化財調査報告2005-4

吉　井　遺　跡

―府営岸和田吉井住宅建替えに伴う発掘調査―

２００６年３月

大阪府教育委員会

大阪府埋蔵文化財調査報告2005-4

吉　井　遺　跡

―府営岸和田吉井住宅建替えに伴う発掘調査―

２００６年３月

大阪府教育委員会

巻頭図版1　平成11年度16トレンチ出土の紀年木簡

巻頭図版2　調査地遠景

平成11年度A調査区全景

巻頭図版3　平成11年度B調査区全景

平成12年度1区全景

巻頭図版4　平成12年度2区全景

平成13年度3・5区全景

序　文

吉井遺跡は、大阪府の西南部、岸和田市吉井町地内に所在する古墳時代から鎌倉時代にかけての集落跡であります。本遺跡は、岸和田市の北西部に位置し、その北側は泉北郡忠岡町に接しています。

さて、大阪府教育委員会では、平成11年度から13年度、15年度の4年間に、府営岸和田吉井住宅の建て替えに伴う吉井遺跡の発掘調査を実施してまいりました。その結果、古墳時代～奈良時代の河川、平安時代末から鎌倉時代の建物などが検出されました。

特に、奈良時代の河川からは、「天平寶字三年四月十六日主守六人阝‥‥」と明瞭に墨書された紀年木簡が出土しており、それらの内容などから本遺跡周辺に古代の公的施設がかつて存在したことが考えられます。実際、本遺跡の東側には、古代八木郷の郷社であった夜疑神社が今も鎮座し、何らかの関係が想定されます。

これらのことは、本地域の歴史にとどまらず、日本の古代から中世の歴史を解明していく上でかけがえのない重要な資料になるものと確信されます。

本調査が、関係諸機関及び地元の皆様の多大なるご理解とご協力によって進めることができましたことに、深く感謝の意を表します。今後とも本府文化財保護行政に対して一層のご理解、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成18年3月

大阪府教育委員会
文化財保護課長　　丹上　務

例　言

1．本書は、大阪府教育委員会が大阪府建築都市部より依頼を受け、平成 11 ～ 13 年度、15 年度の 4 ヶ年にわたり実施した、岸和田市吉井町所在、吉井遺跡の府営岸和田吉井住宅の建替え工事に伴う発掘調査報告書である。

2．発掘調査にあたっては、平成 11 年度 (調査番号 99015) を大阪府教育委員会文化財保護課調査第一係技師上林史郎、平成 12 年度 (調査番号 00018) を調査第二グループ技師竹原伸次・井西貴子、平成 13 年度 (調査番号 01021) を調査第二グループ主査藤澤眞依・同技師大樂康宏、平成 15 年度を調査第二グループ主査藤澤眞依を担当者として実施した。これらに伴う遺物整理事業については、平成 15 年度を調査管理グループ技師林 日佐子・小浜　成、平成 16 年度を調査管理グループ技師竹原伸次・林 日佐子・藤田道子、平成 17 年度を調査管理グループ技師林 日佐子・西川寿勝・藤田道子を担当者として実施した。

3．本調査の写真測量は、平成 11 年度を朝日航洋株式会社、平成 12 年度を国土開発センター株式会社、平成 13 年度を写測エンジニアリング株式会社に委託した。なお、写真撮影フィルムについては各受託会社において保管している。

4．本書に掲載した遺物写真の撮影は、有限会社阿南写真工房、出土した木簡などの保存処理については、財団法人元興寺文化財研究所に委託した。

5．出土遺物及び記録資料は、大阪府教育委員会で保管している。

6．本報告書の編集は、藤澤・上林が担当し、第 1 章を調査第二グループ課長補佐高島　徹、第 2 章を調査第二グループ総括主査西口陽一、第 3 章及び第 4 章を藤澤・上林が執筆した。

7．府営住宅建て替え工事に伴う発掘調査・遺物整理及び本書の作成に要した経費は、全額を大阪府建築都市部が負担した。

8．現地での発掘調査、遺物整理及び本書作成にあたっては、下記の方々、機関から助言及び協力を得た (当時)。記して謝意を表する。

大庭　脩 (大阪府立近つ飛鳥博物館)、舘野和己・山下信一郎・吉川　聡 (奈良国立文化財研究所)、門脇禎二・狩野　久・増渕　徹 (京都橘女子大学)、栄原永遠男 (大阪市立大学)、岸和田市教育委員会。　(敬称略、順不同)

9．本報告書は 300 部作成し、一部あたりの単価は 2,360 円である。

本　文　目　次

序　文　　大阪府教育委員会文化財保護課長　　丹上　務

例　言

第１章　既往の調査及び調査の経過　　高島　徹　　1
第２章　遺跡の位置と環境　　西口陽一　　3
第３章　吉井遺跡の調査
　第１節　平成 11 年度の調査　　上林史郎　　5
　第２節　平成 12 年度の調査　　藤澤眞依　　44
　第３節　平成 13 年度の調査　　藤澤眞依　　70
　第４節　平成 15 年度の調査　　藤澤眞依　　85

第４章　ま　と　め
　第１節　調査のまとめ　　藤澤眞依　　86
　第２節　吉井遺跡出土の紀年木簡　　上林史郎　　88

報告書抄録

表　目　次

第1表　1

挿　図　目　次

第 1 図　吉井遺跡各年度の調査区　2
第 2 図　吉井遺跡位置図　3
第 3 図　吉井遺跡周辺遺跡分布図 (『大阪府文化財分布図』平成 13 年 3 月)　4
第 4 図　平成 11 年度　全調査区位置図　6
第 5 図　平成 11 年度　A 調査区上面平面図　7・8
第 6 図　平成 11 年度　A 調査区下面・B 調査区平面図　11・12
第 7 図　平成 11 年度　A 調査区各壁断面図　13・14
第 8 図　平成 11 年度　A 調査区掘立柱建物 A001 平面図・断面図　15
第 9 図　平成 11 年度　A 調査区掘立柱建物 A002 平面図・断面図　16
第 10 図　平成 11 年度　A 調査区出土遺物実測図①各遺構 (S=1/4)　17
第 11 図　平成 11 年度　A 調査区出土遺物実測図②井戸 A001(S=1/4)　18
第 12 図　平成 11 年度　A 調査区出土遺物実測図③各遺構 (S=1/4，1/2)　19
第 13 図　平成 11 年度　A 調査区出土遺物実測図④各遺構・包含層他 (S=1/4，1/2)　20
第 14 図　平成 11 年度　A 調査区出土遺物実測図⑤包含層他 (S=1/4)　21
第 15 図　平成 11 年度　B 調査区平面図・断面図　23・24
第 16 図　平成 11 年度　B 調査区各遺構断面図及び遺物出土状況図 =1/40，1/5)　26
第 17 図　平成 11 年度　B 調査区出土遺物実測図①各遺構 (S=1/4)　28
第 18 図　平成 11 年度　B 調査区出土遺物実測図②包含層他 (S=1/4)　29
第 19 図　平成 11 年度　試掘調査区 11 ～ 14，23 ～ 25 トレンチ平面図 (S=1/40)　31
第 20 図　平成 11 年度　試掘調査区 15 ～ 22 トレンチ平面図 (S=1/40)　32
第 21 図　平成 11 年度　試掘調査区柱状土層模式図① (S=1/30)　34
第 22 図　平成 11 年度　試掘調査区柱状土層模式図② (S=1/30)　35
第 23 図　平成 11 年度　試掘調査区 1,2,4,7,8 トレンチ断面図 (S=1/40)　37
第 24 図　平成 11 年度　試掘調査区 16,17,18 トレンチ断面図 (S=1/40)　38
第 25 図　平成 11 年度　試掘調査区 20,21,22,23 トレンチ断面図 (S=1/40)　39
第 26 図　平成 11 年度　試掘調査区出土遺物①各トレンチ (S=1/4，1/2)　42
第 27 図　平成 11 年度　試掘調査区出土遺物② 16 トレンチ出土紀年木簡 (S=1/2)　43
第 28 図　平成 12 年度　調査区配置図　44

第29図　平成12年度　1区第1層出土遺物実測図　45
第30図　平成12年度　1区平面図・断面略図・遺構断面図　47
第31図　平成12年度　1区ＳＢ001柱穴配置図・断面図　48
第32図　平成12年度　1区ＳＤ016・ＳＫ022・025・Pit030・031・035出土遺物実測図　49
第33図　平成12年度　1区ＳＫ017・018・019出土遺物実測図　50
第34図　平成12年度　2区第1面平面図・断面略図・遺構埋土断面図　52
第35図　平成12年度　2区第1面ＳＫ001・ＳＤ002出土遺物実測図　53
第36図　平成12年度　2区第1面ＳＤ003出土遺物実測図　54
第37図　平成12年度　2区第1面ＳＤ004出土遺物実測図(1)　55
第38図　平成12年度　2区第1面ＳＤ004出土遺物実測図(2)　56
第39図　平成12年度　2区第1面ＳＤ005出土遺物実測図　57
第40図　平成12年度　2区第1面ＳＤ006出土遺物実測図　58
第41図　平成12年度　2区第1面ＳＤ091・ＳＤ139出土遺物実測図　59
第42図　平成12年度　2区第1面Ｐit096・098・127・136・166・195出土遺物実測図　60
第43図　平成12年度　2区第2・3面平面図・遺構平面図・埋土断面図　61
第44図　平成12年度　2区第2面ＳＫ259・260出土遺物実測図　62
第45図　平成12年度　2区第2面SX411出土遺物実測図　63
第46図　平成12年度　2区第3面SE470出土遺物実測図(1)　63
第47図　平成12年度　2区第3面SE470出土遺物実測図(2)　64
第48図　平成12年度　3区第1・2面平面図・SD023・024埋土断面図　66
第49図　平成12年度　3区ＳＤ023・024出土遺物実測図　67
第50図　平成12年度　4・5・6・7区平面図・断面略図　68
第51図　平成12年度　4区ＳＸ001・ＳＤ002出土遺物実測図　69
第52図　平成12年度　5・6区出土遺物実測図　69
第53図　平成13・15年度　調査区配置図　71
第54図　平成13年度　1・2区平面図　72
第55図　平成13年度　1区出土遺物実測図　73
第56図　平成13年度　2区出土遺物実測図　73
第57図　平成13年度　3・4・5区平面図・SD001埋土断面図　75
第58図　平成13年度　3区出土遺物実測図(1)　75
第59図　平成13年度　3区出土遺物実測図(2)　76
第60図　平成13年度　3区出土遺物実測図(3)　77
第61図　平成13年度　4区出土遺物実測図　78
第62図　平成13年度　5区出土遺物実測図　79

第 63 図　平成 13 年度　6 区平面図・SD003 埋土断面図　80
第 64 図　平成 13 年度　6 区出土遺物実測図 (1)　81
第 65 図　平成 13 年度　6 区出土遺物実測図 (2)　82
第 66 図　平成 13 年度　6 区出土遺物実測図 (3)8・9 区出土遺物実測図　84
第 67 図　吉井遺跡の流路変遷　87
第 68 図　紀年木簡釈文　89

図　版　目　次

巻頭図版 1　平成 11 年度 16 トレンチ出土の紀年木簡
巻頭図版 2　調査地全景　平成 11 年度 A 調査区全景
巻頭図版 3　平成 11 年度 B 調査区全景　平成 12 年度 1 区全景
巻頭図版 4　平成 12 年度 2 区全景　平成 13 年度　3・5 区全景
図版 1　調査地全景
図版 2　平成 11 年度 A 調査区①
図版 3　平成 11 年度 A 調査区②
図版 4　平成 11 年度 A 調査区③
図版 5　平成 11 年度 A 調査区④
図版 6　平成 11 年度 B 調査区①
図版 7　平成 11 年度 B 調査区②
図版 8　平成 11 年度 B 調査区③
図版 9　平成 11 年度 B 調査区④
図版 10　平成 11 年度試掘調査区①
図版 11　平成 11 年度試掘調査区②
図版 12　平成 11 年度試掘調査区③
図版 13　平成 11 年度試掘調査区④
図版 14　平成 11 年度試掘調査区⑤
図版 15　平成 12 年度 1 区
図版 16　平成 12 年度 2 区第 1 面
図版 17　平成 12 年度 2 区第 1 面
図版 18　平成 12 年度 2 区第 2 面
図版 19　平成 12 年度 2 区第 2 面
図版 20　平成 12 年度 2 区第 3 面
図版 21　平成 12 年度 3 区

図版 22　平成 12 年度４・５・６区
図版 23　平成 12 年度７区
図版 24　平成 13 年度１区
図版 25　平成 13 年度２区
図版 26　平成 13 年度３・４区
図版 27　平成 13 年度３・４区
図版 28　平成 13 年度５区
図版 30　平成 13 年度６区
図版 31　平成 13 年度６区
図版 32　出土遺物 1
図版 33　出土遺物 2
図版 34　出土遺物 3
図版 35　出土遺物 4
図版 36　出土遺物 5
図版 37　出土遺物 6
図版 38　出土遺物 7
図版 39　出土遺物 8
図版 40　出土遺物 9
図版 41　出土遺物 10
図版 42　出土遺物 11
図版 43　出土遺物 12
図版 44　出土遺物 13
図版 45　出土遺物 14
図版 46　出土遺物 15
図版 47　出土遺物 16
図版 48　出土遺物 17
図版 49　出土遺物 18
図版 50　出土遺物 19

第１章　既往の調査及び調査の経過（第１図）

吉井遺跡の発見は平成元年に遡る。この年、大阪府教育委員会は、府営岸和田吉井住宅と府営岸和田春木住宅建替え計画に伴い、それぞれの住宅地内で試掘調査を実施した。その結果、吉井住宅地内では都市計画道路忠岡吉井線以西で、春木住宅地内ではその全域で、遺構や遺物が検出された。この試掘結果は、広範な遺跡の広がりを推定されるもので、吉井住宅から春木住宅にいたる南北約 800 m、東西約 400 mの範囲が吉井遺跡として認知されるにいたった。

その後、平成３年度には、府営岸和田春木第２期住宅建替え工事に伴う発掘調査が（財）大阪府埋蔵文化財協会によって実施された。遺跡の南限に近い場所で行われたこの発掘調査では、古代から中世にかけての集落跡が検出されるとともに、旧石器から中世までの多数の遺物が出土した。多数の遺物の出土から大規模な集落跡の存在が推定されるとともに、本遺跡が複数時期にわたる複合遺跡であることが明らかにされている。

平成４年度以降は、岸和田市教育委員会による発掘調査や立会調査が継続して実施され、遺跡の内容も、少しずつではあるが、確実に豊かなものになってきている。とりわけ、平成７年度に行われた都市計画道路忠岡吉井線建設に伴う試掘調査と発掘調査では、遺跡の範囲がさらに東へ 50 mほど広がることが確認されるとともに、15 世紀前半頃と推定される畦畔の跡や奈良時代前半から室町時代までのものを含む瓦溜めなどが検出されている。

府営岸和田吉井住宅建替え事業に伴う吉井遺跡の発掘調査は、平成 11 年度に始まり、建替え事業の進捗に合わせる形で、12 年度、13 年度と３年間連続して実施した。３年間の総調査面積は 12,126 ㎡。年度毎の調査期間、面積、担当者は第１表、年度毎の調査位置は第１図に示すとおりである。また、11 年度には、平成元年段階では試掘調査が十分でなかった北東部について、確認調査を併せて実施した。後述する木簡はこのときに出土したものである。

なお、平成 15 年９月９日～ 30 日の間、第１図の範囲について確認調査（調査面積 300 ㎡）を実施したが、遺構、遺物は出土しなかった。このため、当該範囲を発掘調査対象から除外することとし、後述する河川の延伸が予測される北辺部についてのみ、工事施工時に立会調査することとした。当該立会調査にかかる工事は、平成 18 年３月現在、未施工である。

年　度	調　査　期　間	調査面積	担　当　者
平成 11 年度	平成 11 年９月１日～平成 12 年３月 25 日	3, 950 ㎡	上林史郎
平成 12 年度	平成 12 年８月１日～平成 13 年３月 30 日	4, 648 ㎡	竹原伸次・井西貴子
平成 13 年度	平成 13 年９月３日～平成 14 年３月 29 日	3, 528 ㎡	藤澤眞依・大楽康宏

第１表

参考文献

（財）大阪府埋蔵文化財協会『吉井遺跡』（財）大阪府埋蔵文化財協会調査報告書第 73 輯　1992

岸和田市教育委員会『平成４年度　発掘調査概要』岸和田市文化財調査概要 18　1993

岸和田市教育委員会『平成５年度　発掘調査概要』岸和田市文化財調査概要 19　1994

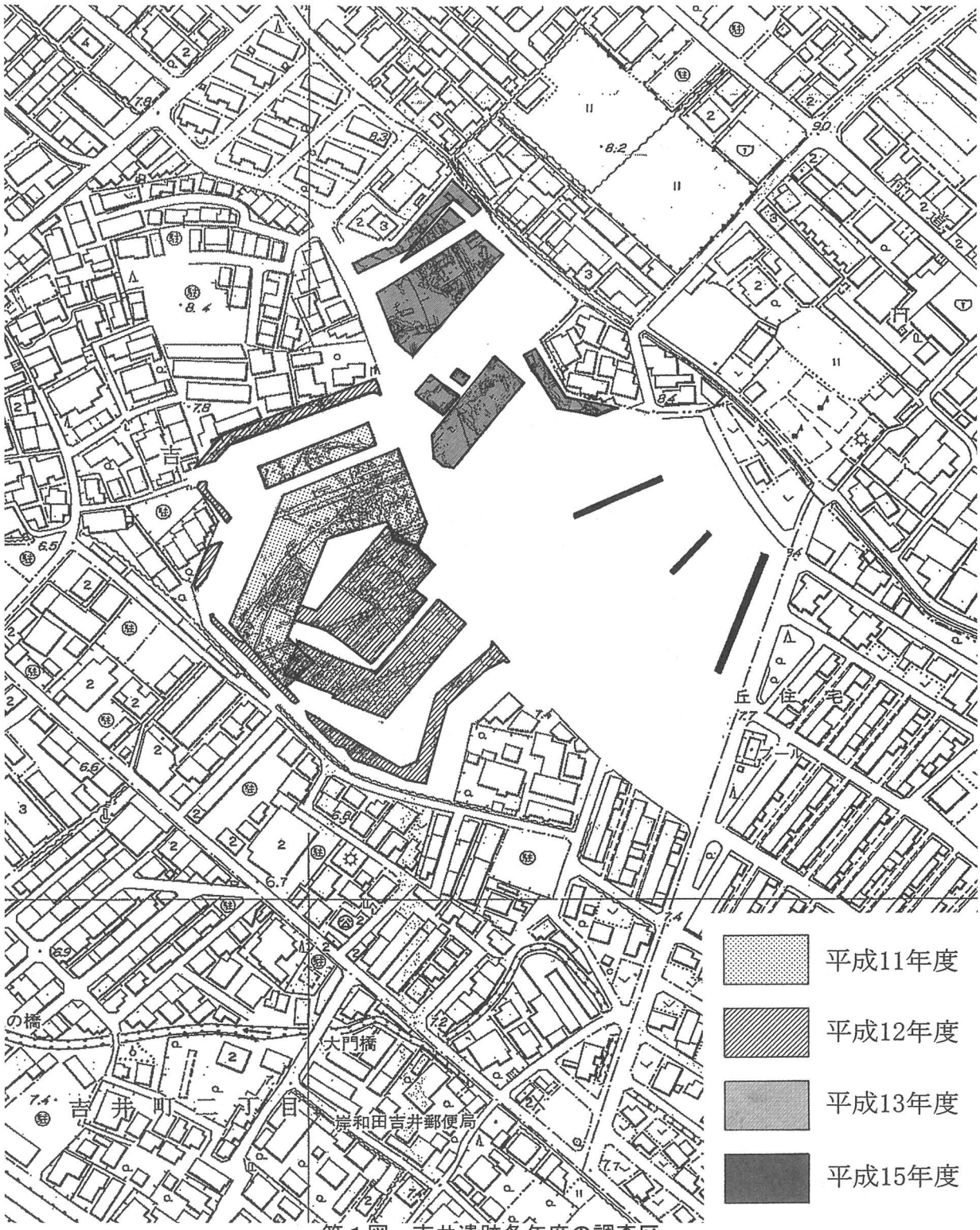
岸和田市教育委員会『吉井遺跡』岸和田市埋蔵文化財発掘調査報告書５　1998

岸和田市教育委員会『平成９年度　発掘調査概要』岸和田市文化財調査概要 23　1998

岸和田市教育委員会『平成 11 年度　発掘調査概要』岸和田市文化財調査概要 26　2000

岸和田市教育委員会『平成 12 年度　発掘調査概要』岸和田市文化財調査概要 27　2001

岸和田市教育委員会『平成 13 年度　発掘調査概要』岸和田市文化財調査概要 28　2002



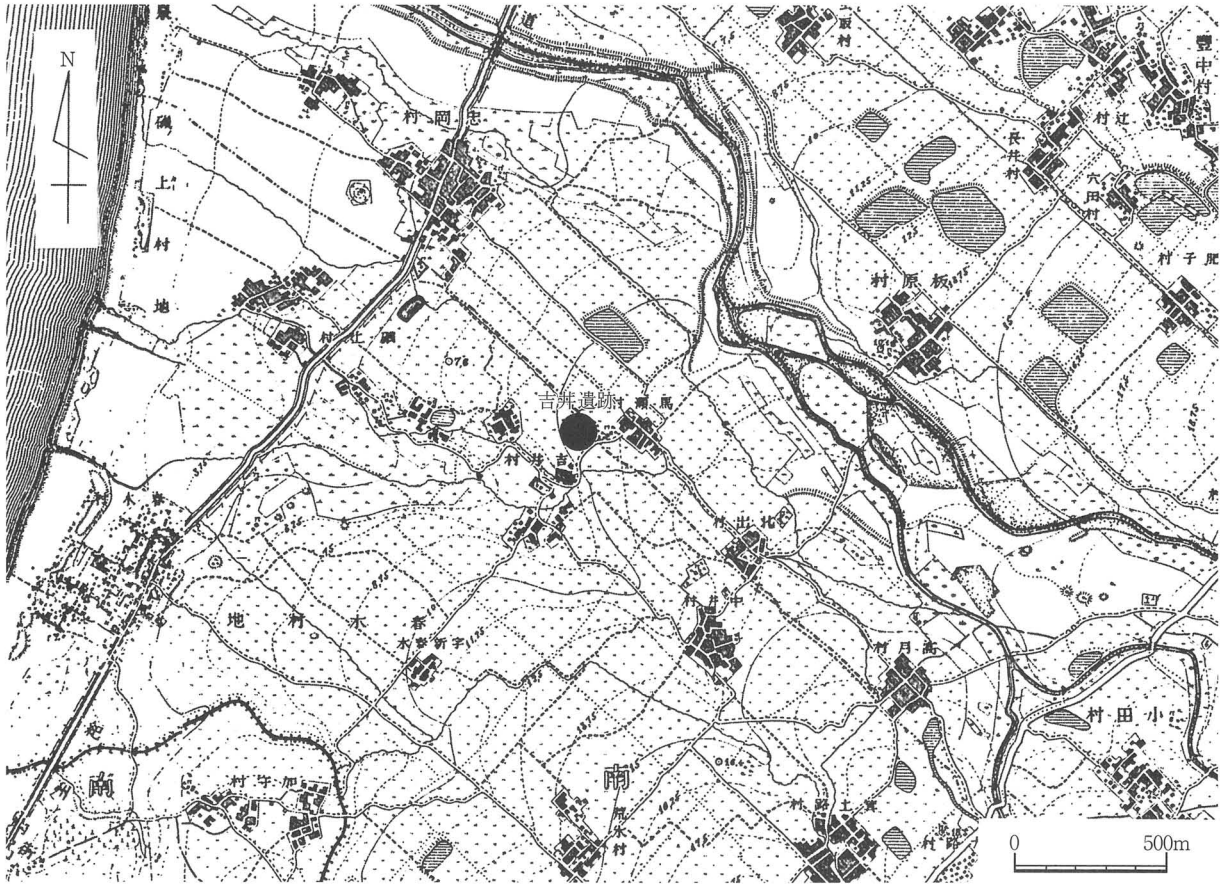
第１図　吉井遺跡各年度の調査区

第２章　遺跡の位置と環境（第２・３図）

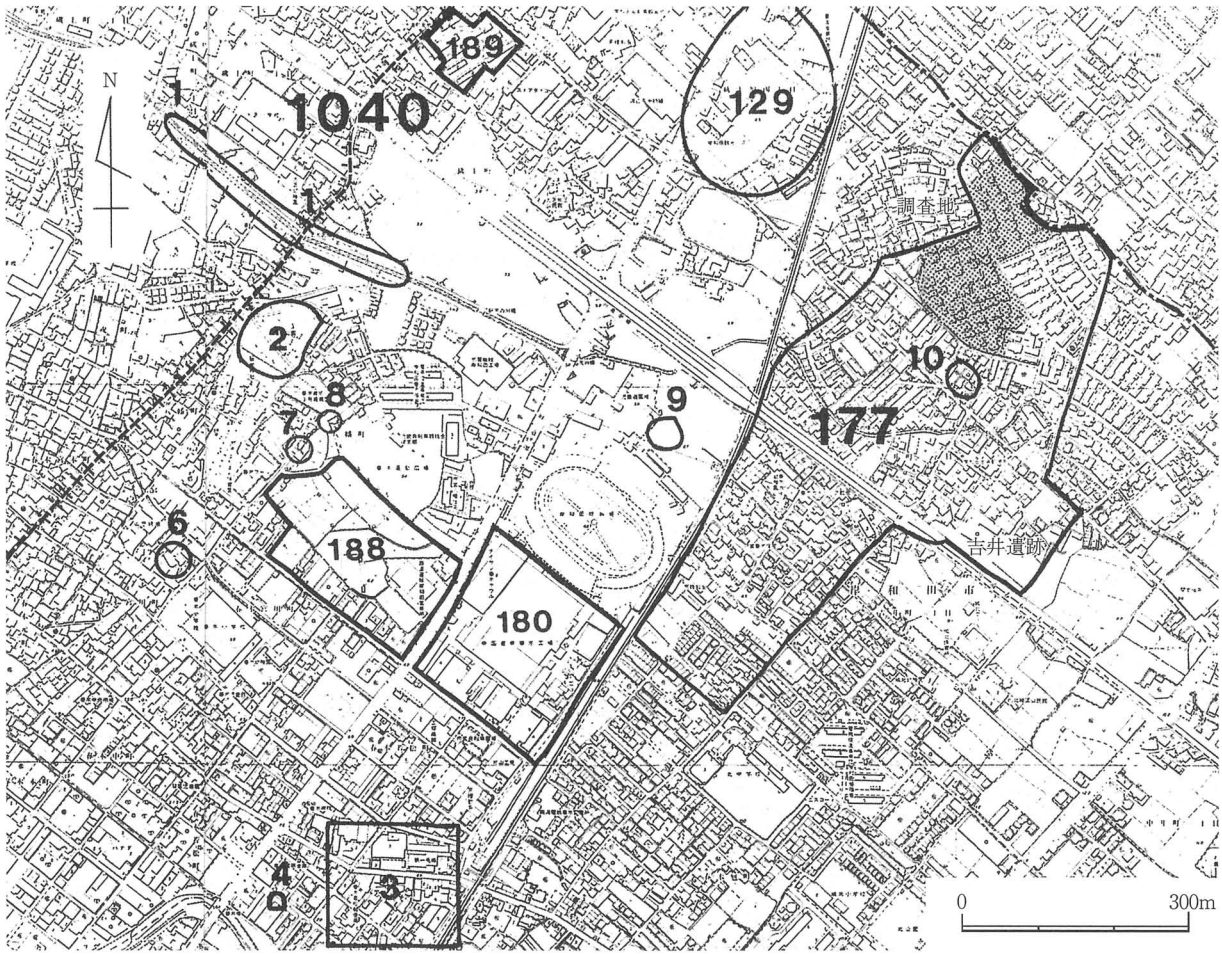
吉井遺跡は、行政区画では、大阪府岸和田市吉井町に所在している。岸和田市の北端、天の川下流域の平野上に存在し、遺跡の標高は、７～９ｍである。周囲は、近年に至るまで水田・宅地であった（第２図）。遺跡の範囲は、東西 600 ｍ、南北 800 ｍと大きな遺跡であることが、これまでの調査結果から判明している。西に 600 ｍほど行くと紀州街道で、さらにその西側はかつて茅渟海（ちぬのうみ）と呼ばれた大阪湾である。

この遺跡は、大阪府教育委員会による府営春木住宅建替え工事に先立つ試掘調査で、新規発見された遺跡である。

この遺跡の周辺には、平成 13 年３月発行の『大阪府文化財分布図』（第３図）によると、多数の遺跡が発見されている。１番の遺跡が、天の川改修工事の際に弥生時代前期の土器を含む多数の遺物が採集された春木天の川遺跡である。２番の遺跡が、縄文・弥生・古墳時代の多数の遺構・遺物が発掘調査によって検出された著名な春木八幡山遺跡である（堅田直『春木八幡山遺跡の研究』昭和 40 年）。３番の遺跡が、奈良時代前期の瓦が発見された春木廃寺で、４番が春木廃寺窯跡である。６番の遺跡が古墳時代の円墳である牛神古墳で、石棺らしきものが地中に残っている。７番・８番の遺跡がやはり古墳時代の円墳である権現山古墳、八幡古墳である。９番の遺跡が、古墳～



第２図　吉井遺跡位置図（アミの部分が調査区）



第３図　吉井遺跡周辺遺跡分布図（『大阪府文化財分布図』平成 13 年３月）

奈良時代の吉井一ノ坪遺跡である。この遺跡が、今回調査された吉井遺跡に一番近く、古墳時代の須恵器、平安時代中期の「家」と書かれた墨書須恵器、土師器小皿、須恵器イイダコ壺などが採集されている。イイダコ壺は、春木天の川遺跡や春木八幡山遺跡でも、他の土錘などの漁具と共に多数発見されており、吉井遺跡ともども海岸沿いの遺跡ならではの状況を呈している。10 番の遺跡が、平安時代後期の吉井上品寺跡である。129 番の遺跡が、弥生～古墳時代の集落跡である磯ノ上遺跡である。177 番の遺跡が、吉井遺跡で、今回の調査区は、遺跡の北半部に当っている。180 番の遺跡が、古墳時代～中世の集落跡である春木四ノ坪遺跡である。181 番の遺跡が、弥生時代～中世の集落跡である春木宮ノ上遺跡である。189 番の遺跡が、鎌倉時代の集落跡である磯ノ上十ノ坪遺跡である。掘立柱建物や井戸・溝などの遺構が検出されている。1040 番は、紀州街道である。

以上のように、吉井遺跡周辺には、縄文時代から中世に至るまでの数多くの遺跡が存在する歴史的遺産の豊富な地域であったと指摘することができる。また、『吾妻鏡』嘉禎３年（1237）６月１日条には、「矢部禅尼、賜和泉吉井郷御下分」とあって、中世の文献にも、この吉井郷（吉井遺跡）の登場していることが分る。以降、近世・近代、連綿として吉井郷、吉井町として発展し、現在に至っている。

第３章　吉井遺跡の調査（第４～50図）

第１節　平成11年度の調査（第４～27図）

平成11年度における吉井遺跡の調査は、住棟にあたるＡ調査区（約3,200㎡）とＢ調査区（約500㎡）、それから両調査区の北・南・東の広大な空地に設定された試掘調査区（1～25トレンチ・約250㎡）である。三つの調査区の合計面積は3,950㎡をはかる。

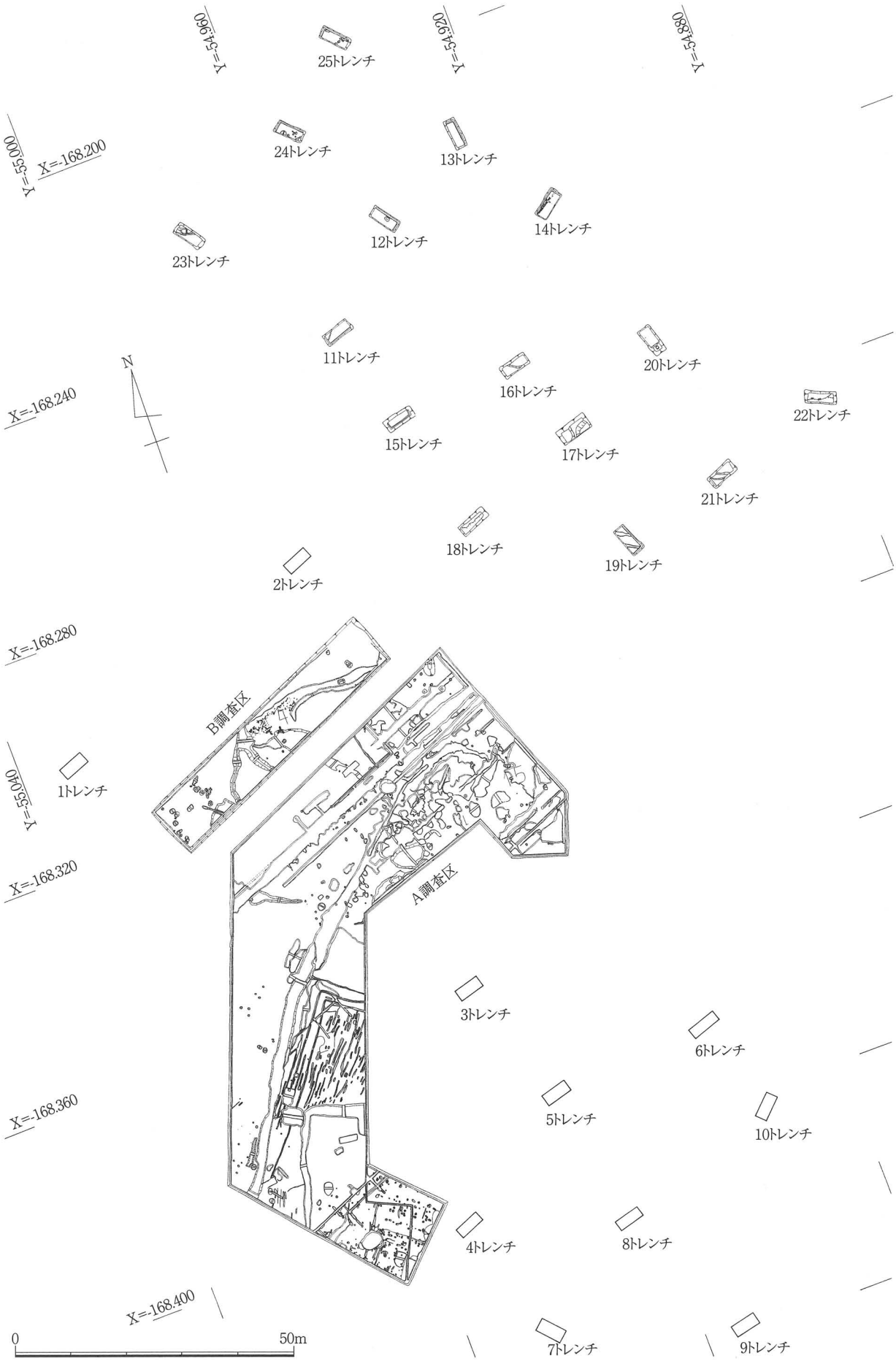
Ａ調査区（第４～14図）

ａ　層序（第７図）

Ａ調査区は、住棟の形に合わせているため、平面多角形を呈し、およそ11角形になる。それゆえ、Ｂ調査区のような長方形を呈し、四壁で構成される断面ではない。そこで、調査区の断面が長く採れる西側断面と、掘立柱建物などが集中する南側断面を中心に掲載する。その場合、直線で捉えられる断面（一辺）を基準として、Ａ～Ｆまでの６ヶ所の断面図を作成した。なお、断面図の縮尺は、垂直方向1/40、水平方向1/200に改変して掲載する。

Ａ－Ａ′断面は、調査区の東南部にあたり、西北―東南断面である。長さ約16ｍ、最大深度約1.25ｍをはかる。この断面には、多くのピットなどの遺構がかかっている。上から0.6ｍくらいまでは、撹乱土や盛土、耕土・床土が堆積している。南端から５ｍあたりの断面をみると、上から盛土・耕土（約0.4ｍ）、褐灰色土（約0.05ｍ）、灰褐色土（0.08ｍ・包含層）、灰黄褐色粘質土（約0.2ｍ・包含層）、黄灰色粘質土（約0.1ｍ・整地土）、暗灰色粘質土（約0.1ｍ）となり、地山は黄色粘質土である。最も低い地山の高さは、T.P＋5.48ｍをはかる。灰黄褐色粘質土は、瓦器や土師器などを含む中世の遺物包含層であり、黄灰色粘質土は地山を掘削して積んだ整地土と考えられる。また、最下層にあたる暗灰色粘質土は、須恵器や土師器などを含む古墳～奈良時代の遺物包含層と考えられる。当初、遺構面として、灰黄褐色粘質土下面と黄灰色粘質土（整地土）下面の二面があり、前者が12～13世紀の遺構面、後者が10～11世紀の遺構面と考えていた。ところが、断面をみると、灰黄褐色粘質土を切り込んだピットが多くみられ、もう一枚遺構面が上にあった可能性が高い。ただ、調査当時、灰黄褐色粘質土上面で遺構は検出できなかった。

Ｂ－Ｂ′断面は、調査区の南端部にあたり、東北―西南断面である。Ａ－Ａ′断面に対して90度振っている。長さ約16ｍ、最大深度約1.3ｍをはかる。この断面にもピットなどの遺構がかかっている。上から0.5ｍくらいまでは、撹乱土や盛土、耕土・床土が堆積している。北端から３ｍあたりの断面をみると、上から盛土・耕土（約0.3ｍ）、床土（約0.05ｍ）、褐灰色砂質土（約0.05ｍ）、灰黄褐色砂質土（約0.15ｍ）、黄灰色砂質土（約0.05ｍ・整地土）、暗灰色粘質土（約0.2ｍ）となり、地山は黄色粘質土である。最も低い地山の高さは、T.P＋5.35ｍをはかる。灰黄褐色粘質土上面と下面の二面にピットなどが切り込まれている。Ａ－Ａ′断面でいえば、上から一面と二面に対応するものと考えられる。



第４図　平成 11 年度　全調査区位置図

第５図　平成 11 年度　Ａ調査区上面平面図

C－C′断面は、調査区の西南端部にあたり、東南―西北断面である。A－A′断面とは平行し、B－B′断面に対しては90度振っている。長さ約37 m、最大深度約1.1 mをはかる。撹乱が激しく、三ヶ所で大きく土層がえぐられている。南端から10 mあたりの断面をみると、上から撹乱土・盛土・耕土（約0.35 m）、床土（約0.07 m）、橙色砂質土（約0.08 m）、黄橙色砂質土（約0.1 m）、マンガン混じりの灰褐色砂質土（約0.05 m）、灰黄褐色粘質土（約0.08 m）、暗灰色粘質土（約0.1 m）となり、地山は黄色粘質土である。最も低い地山の高さは、T.P ＋ 5.2 mをはかる。特に、南端から14 m付近までは地山の高さがT.P ＋ 5.5 mであるのに、ここから北に向かって約0.3 m下降していく。なお、遺構などは、灰黄褐色粘質土上面から切り込まれている。A－A′断面でいえば、上から一面目に対応するものであろう。

D－D′断面は、調査区の西端部にあたり、西南―東北断面である。長さ約60 m、最大深度約1.4 mをはかる。この断面も撹乱が激しく、十ヶ所以上で大きく土層がえぐられている。南端から30 m付近の断面をみると、上から撹乱土（約0.25 m）、黄褐色砂（約0.05 m）、黄褐色粘質土（約0.08 m）、黄褐色砂質土（約0.1 m）、オリーブ灰粘質土（約0.1 m）、赤褐色粘質土（約0.1 m）、灰黄褐色粘質土（約0.1 m・中世の遺物包含層）があり、低い部分の一部に暗灰褐色粘質土（約0.1 m）が堆積している。地山は、緑灰色砂質土や灰色粘質土である。このあたりの地山の高さは、T.P ＋ 5.05 m～ 5.35 mをはかる。また、南端から43 m付近の断面をみると、撹乱土・耕土・床土（約0.15 m）、灰黄色砂質土（約0.08 m）、黄褐色砂質土（約0.08 m）、暗灰色砂質土（約0.15 m）、灰黄褐色粘質土（約0.15 m・中世の遺物包含層）があり、低い部分の一部に灰褐色砂質土（約0.1 m）や暗灰色粘質土（約0.1 m）が堆積していることがわかる。地山は、緑灰色砂質土や灰色砂質土などの砂質系である。このあたりの地山の高さは、T.P ＋ 5.1 m～ 5.6 mをはかり、長さ60 mの範囲で約0.55 mの起伏がみられる。

E－E′断面は、調査区の北端部にあたり、西北―東北断面である。長さ約52 m、最大深度約1.35 mをはかる。西端から18 m付近の断面をみると、上から表土・盛土（約0.1 m）、灰黄褐色砂質土（約0.1 m）、黄褐色砂質土（約0.1 m）、灰褐色砂質土（約0.1 m）、マンガン混じりの黄褐色砂質土（0.1 ～ 0.15 m）、暗灰色砂質土（約0.15 m）が堆積しており、地山は黄褐色砂質土である。地山面の高さは、西端部でT.P ＋ 5.5 m、西端から6 m付近でT.P ＋ 5.95 m、西端から28 m付近でT.P ＋ 6.1 m、西端から40 m付近でT.P ＋ 6.7 m、東端部でT.P ＋ 6.8 mである。長さ約52 mの範囲で約1.3 mの起伏がみられたことになる。特に、西端から40 m付近では西へ地山が急に下降しており、地形の変化をよく示している。

F－F′断面は、調査区の東北端部にあたり、西北―東南断面である。長さ約35 m、最大深度約0.9 mをはかる。撹乱土が全体にわたって入っており、それらを除去すると、黄褐色粘質土の地山になる。おそらく、堆積土や遺構面は削平されているのであろう。地山の高さは、T.P ＋ 7.0 mをはかる。北端から22 ～ 33 mの範囲では、撹乱土直下に最大深度約0.6 mにわたり、汚れた黒色粘土の堆積がみられた。おそらく、粘土取りの穴と考えられる。

b　検出された遺構と遺物(第6～14図)

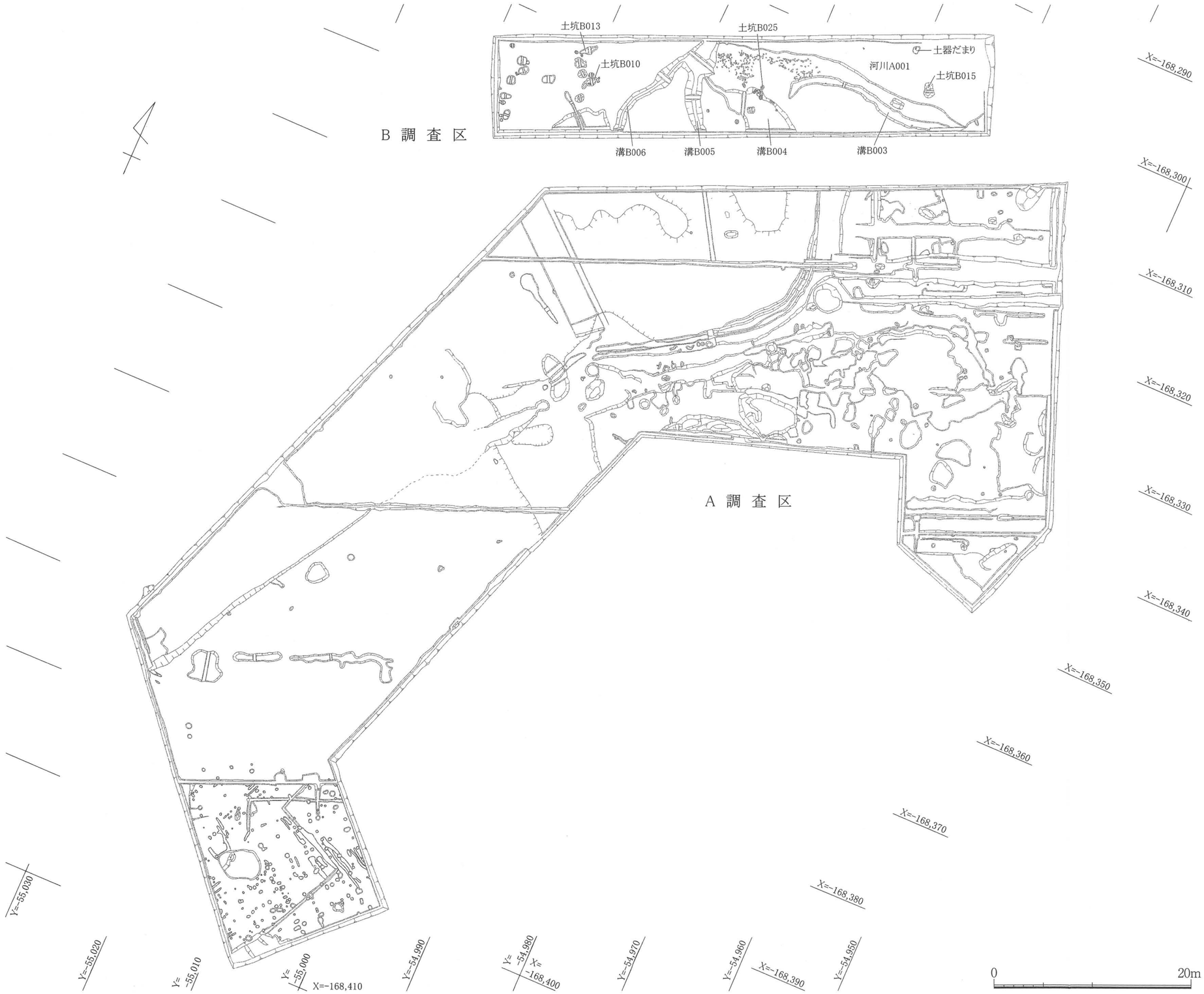
検出された主要な遺構には、掘立柱建物、柵列、溝、土坑、井戸、ピットなどがある。ただ遺構は、多角形を呈する調査区全体に検出されているのではなく、西南端部の一辺約16m四方の部分に集中している。それより北側は、地山が黄色粘質土から緑灰色砂質土に変化し、安定した生活面にはなっていない。湧水が激しく、太古の河川の跡といった土地であり、せいぜい利用できても水田くらいであったろう。さらに東北端部は、地山が黄色粘質土に戻るが、撹乱が激しく遺構らしきものは存在しなかった。本調査区の地形は、両端が高く、中央が低いというものであり、特に東南端部は南側に展開する古代末～中世の集落の北端部にあたっているのであろう。

掘立柱建物A001(第6～8図)　調査区の東南端部で検出された。基本的には梁行三間、桁行四間の東西棟の総柱建物であり、北東側に一間×二間の廂が付いている。出入口であろうか。また、身舎の南北中央柱が二重になっており、重量物などを安置しておく倉庫の可能性が高い。平面逆L字形の建物であり、建物主軸はN 55°Wである。建物の主軸は西へ約55度振っているが、これは和泉地方の中世以降の条里が海岸線に平行しているためであろう。

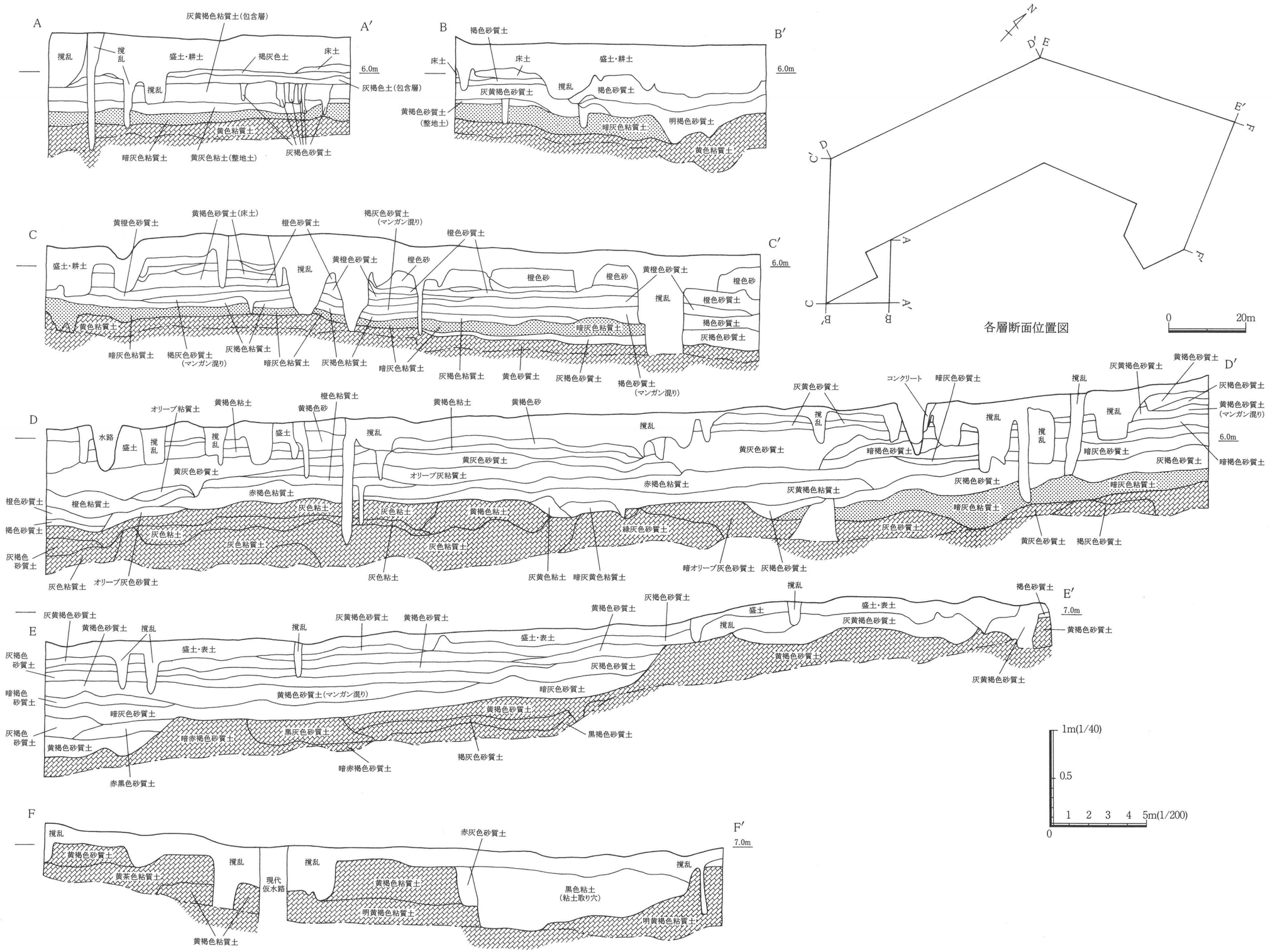
建物の身舎の規模は、東西約8.4m、南北約6.2mであり、面積は約52㎡をはかる。柱穴は23ヶ所で検出されており、4ヶ所欠失している。これは、側溝や後世の遺構によって削平されたためである。柱穴の中には、柱の残骸や柱を支える石が遺存しているものもあり、おそらく柱を抜き取っているのではなく、上部を切り取ったものと考えられる。各柱間は約2.0mと平均しており、切妻屋根の建物と考えられる。柱穴の形態は、円形、楕円形、隅丸方形と様々であるが、その規模は径0.4m前後、深さ0.3～0.5mのものが多い。建物の構築時期については明確ではないが、周辺の状況から12世紀後葉頃を想定している。

掘立柱建物A002(第6・7・9図)　掘立柱建物A001の西側で、ほぼそれに重複する形で検出された。掘立柱建物A001が何らかの理由で廃絶したため、新たに建て替えられたほぼ同規模の建物と考えられる。基本的には梁行三間、桁行四間の南北棟の総柱建物であり、西南側に一間×二間の廂が付いている。倉庫の可能性が高い。平面L字形の建物であり、建物主軸はN 52°Wである。身舎の規模は、東西約5.7m、南北約8.5mであり、面積は約48.5㎡をはかる。柱穴は18ヶ所で検出されているが、5ヶ所欠失している。これは、後世の遺構による削平と未検出のためである。柱間は、桁行が2.1～2.2m、梁行が1.9～2.0mであり、桁行の方が長い。切妻屋根の建物と考えられる。柱穴の形態は、円形が大部分を占めている。その規模は径0.3m前後、深さ0.3～0.4mのものが多い。建物の構築時期については明確ではないが、掘立柱建物A001が廃絶後、あまり隔たらない時期を想定している。

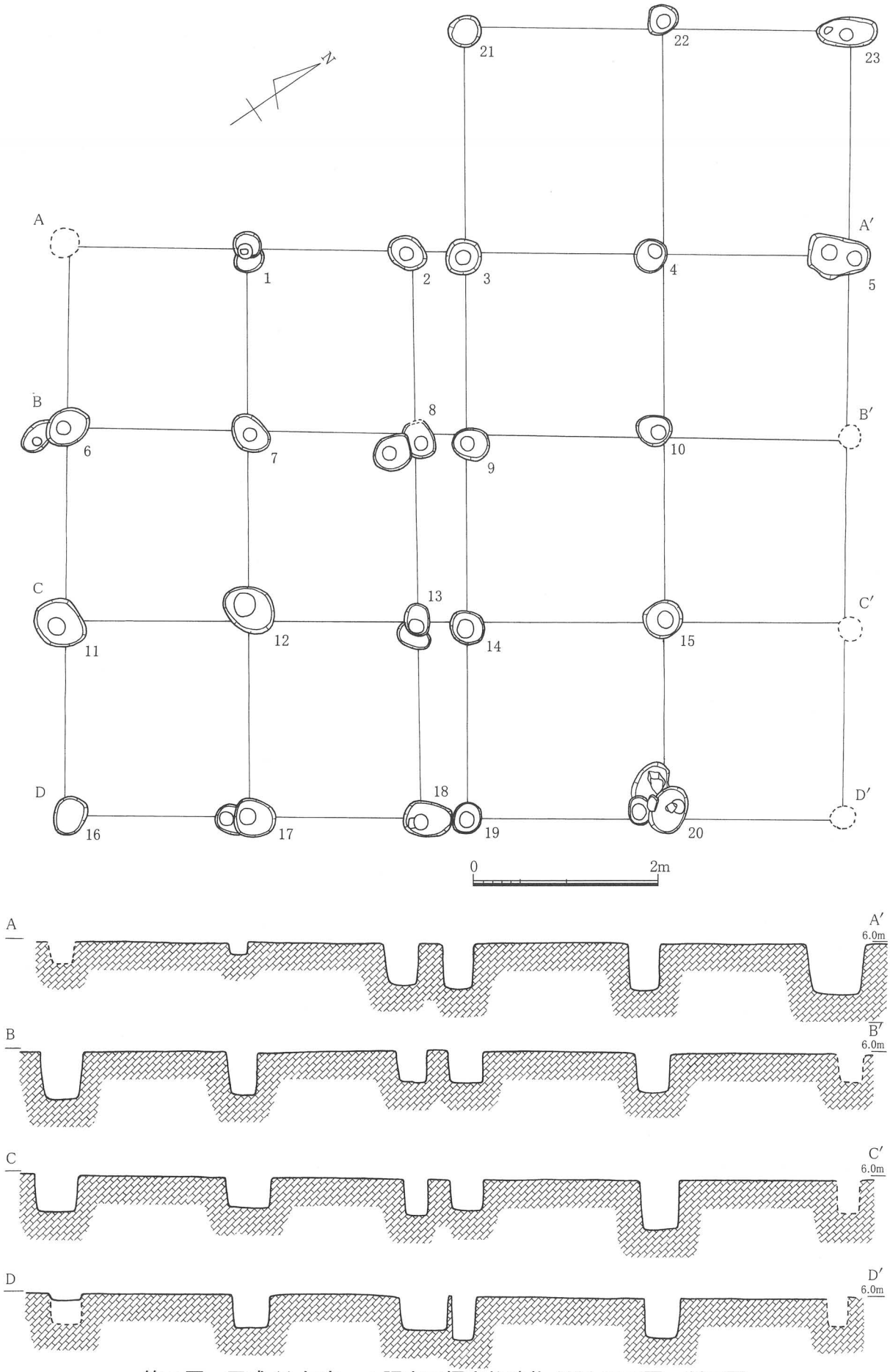
柵列A003(第6・7図)　調査区の東南端部、側溝際周辺で検出されている。掘立柱建物A002の北側と東側を画す柵列と考えられる。南北方向に14m伸びて、西へ直角に6.6m伸びた後屈曲し、さらに北へ直角に屈曲して6m伸びている。柱間は1.9～2.2mをはかり、柱穴は径0.15～0.3mと小振りである。掘立柱建物A002に併行するものと考えられる。



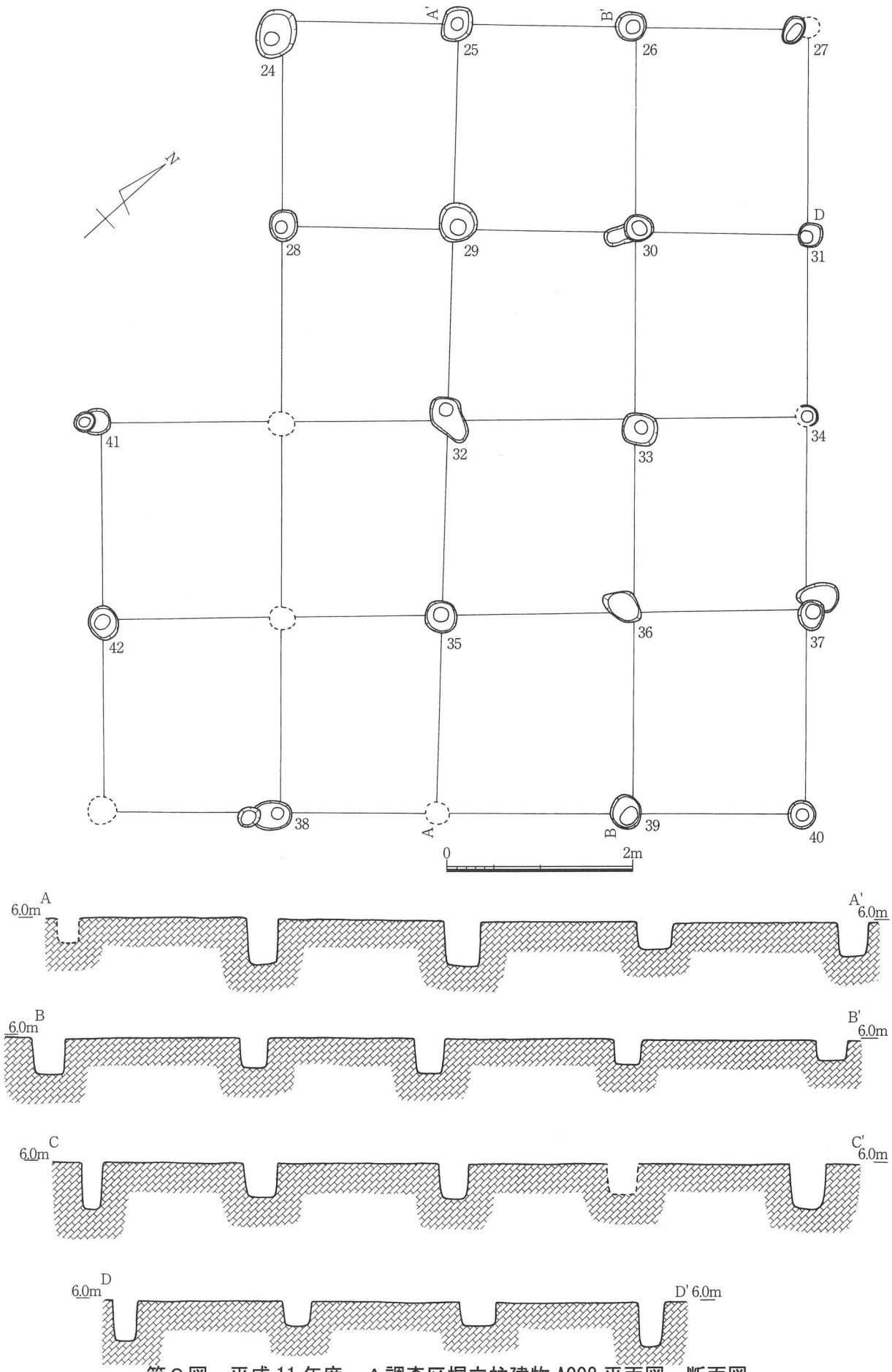
第６図　平成 11 年度　Ａ調査区下面・Ｂ調査区平面図



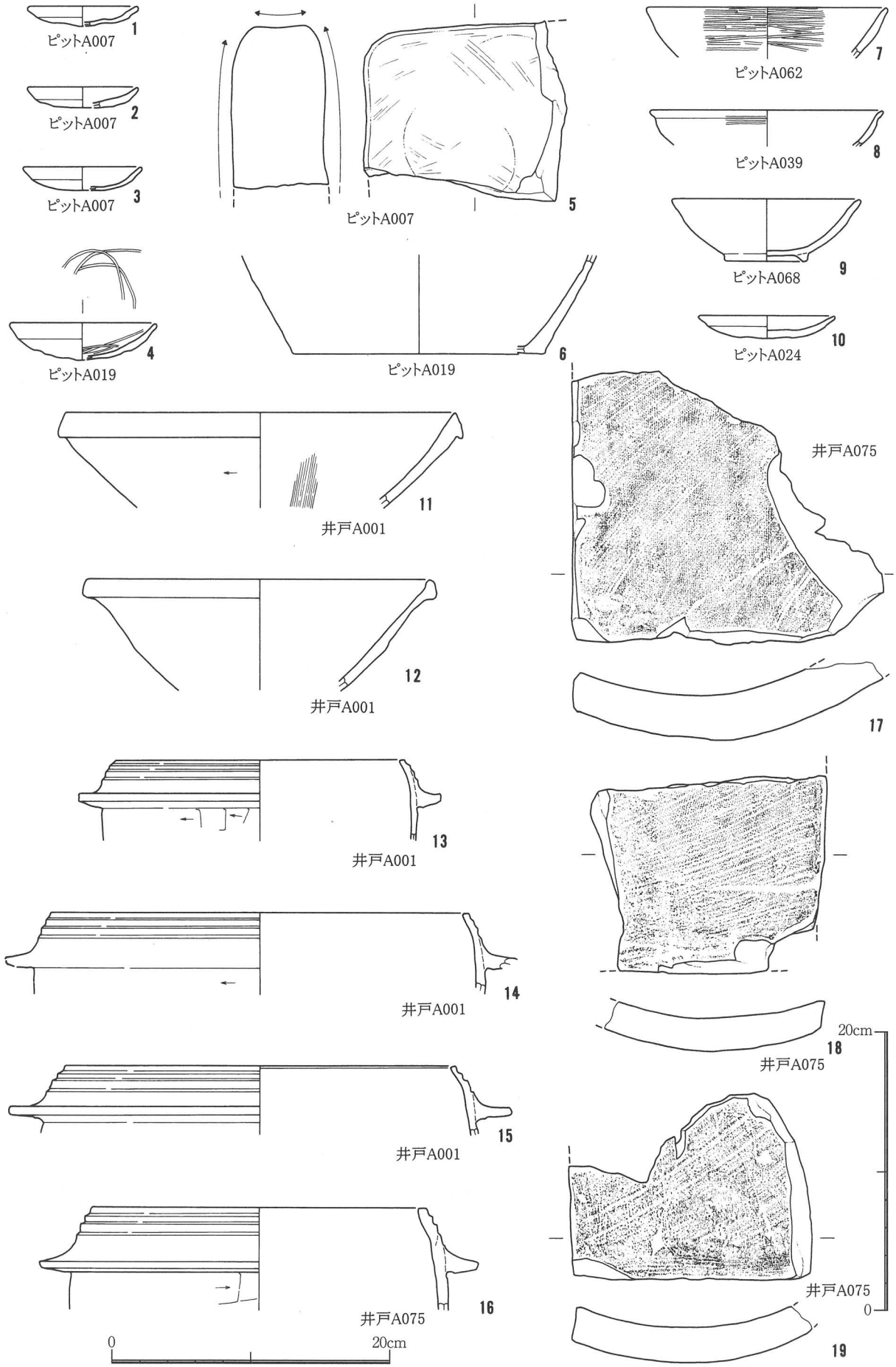
第７図　平成 11 年度　Ａ調査区各壁断面図



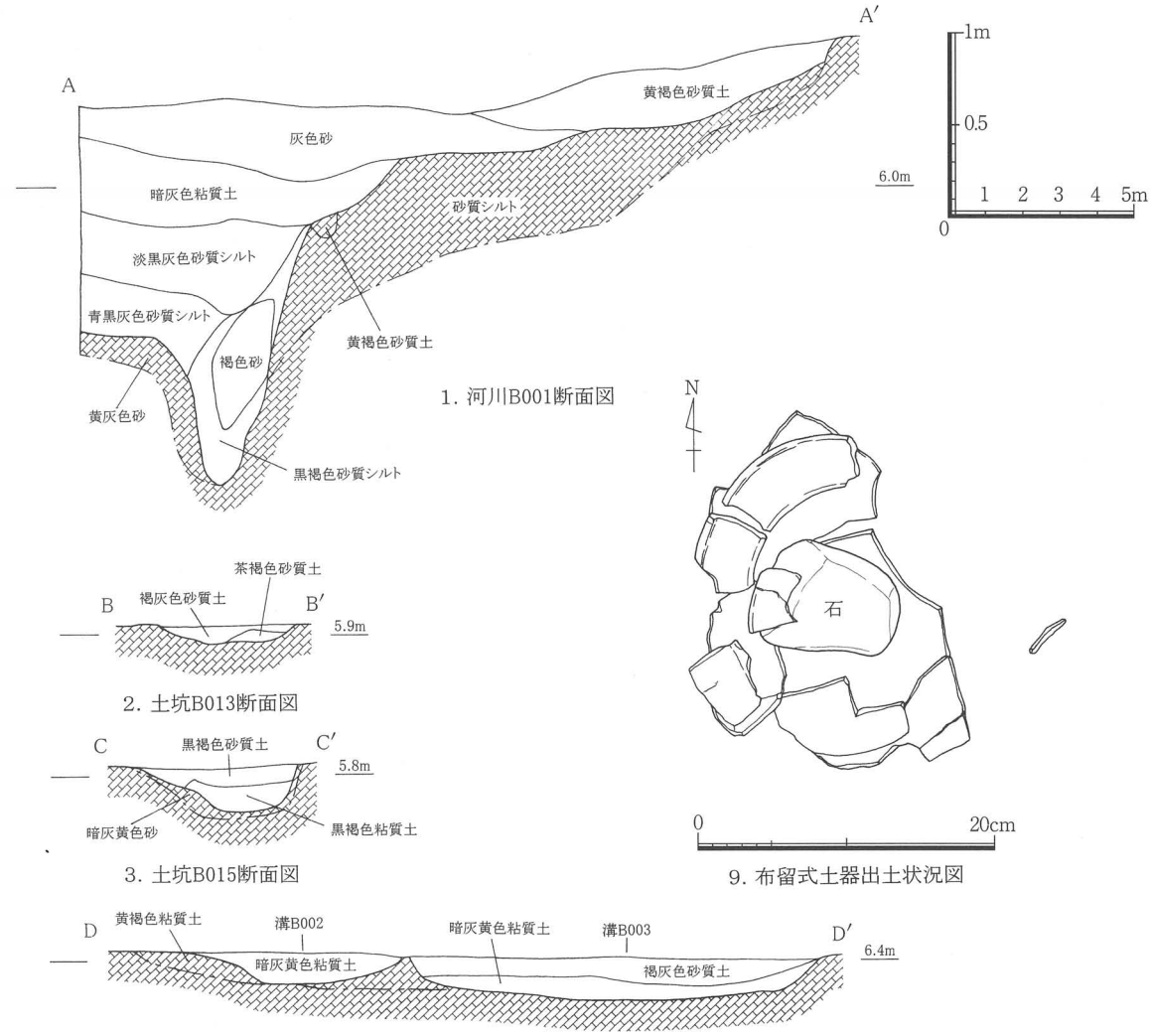
第８図　平成 11 年度　Ａ調査区掘立柱建物 A001 平面図・断面図



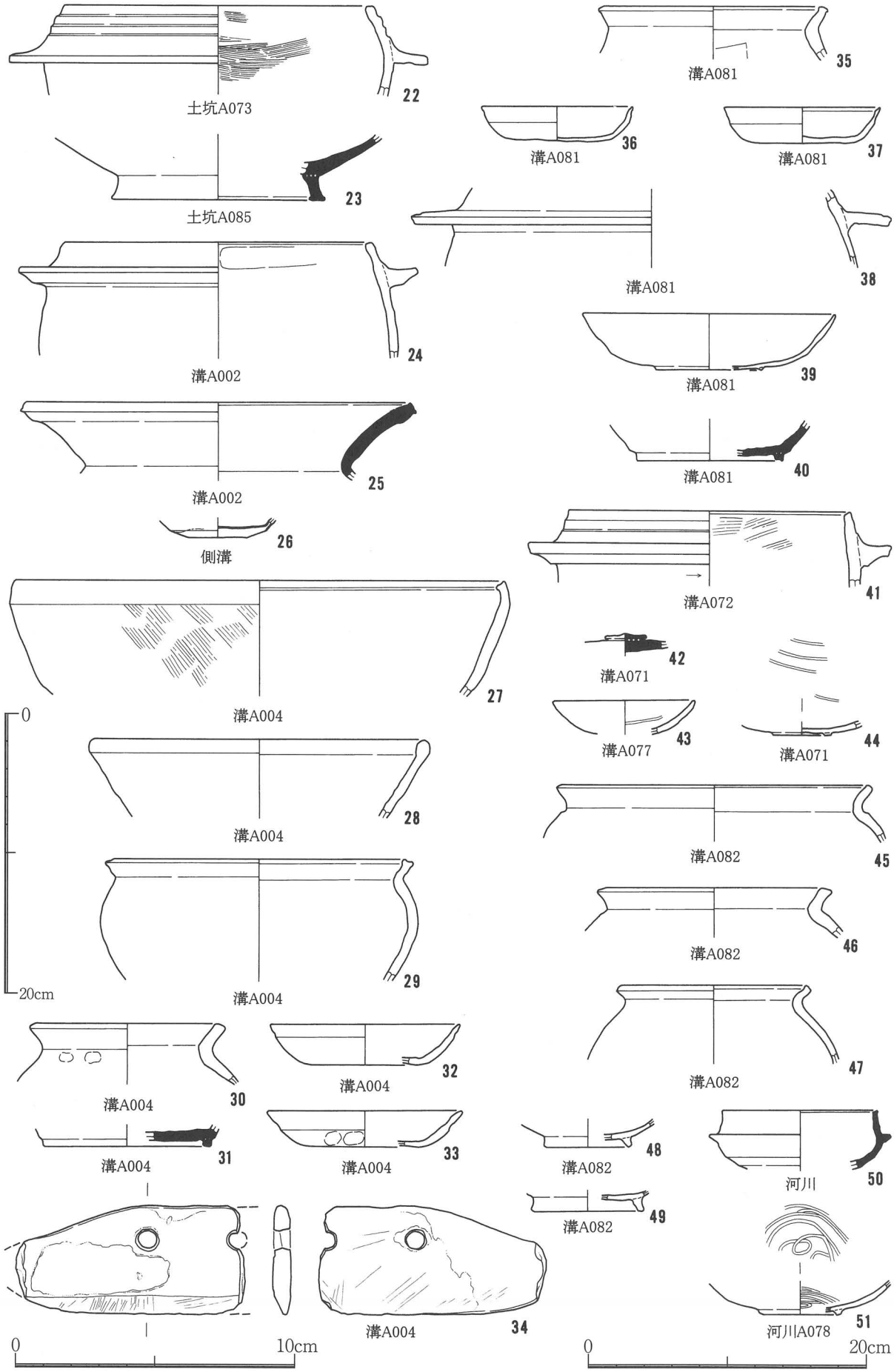
第９図　平成 11 年度　Ａ調査区掘立柱建物 A002 平面図・断面図



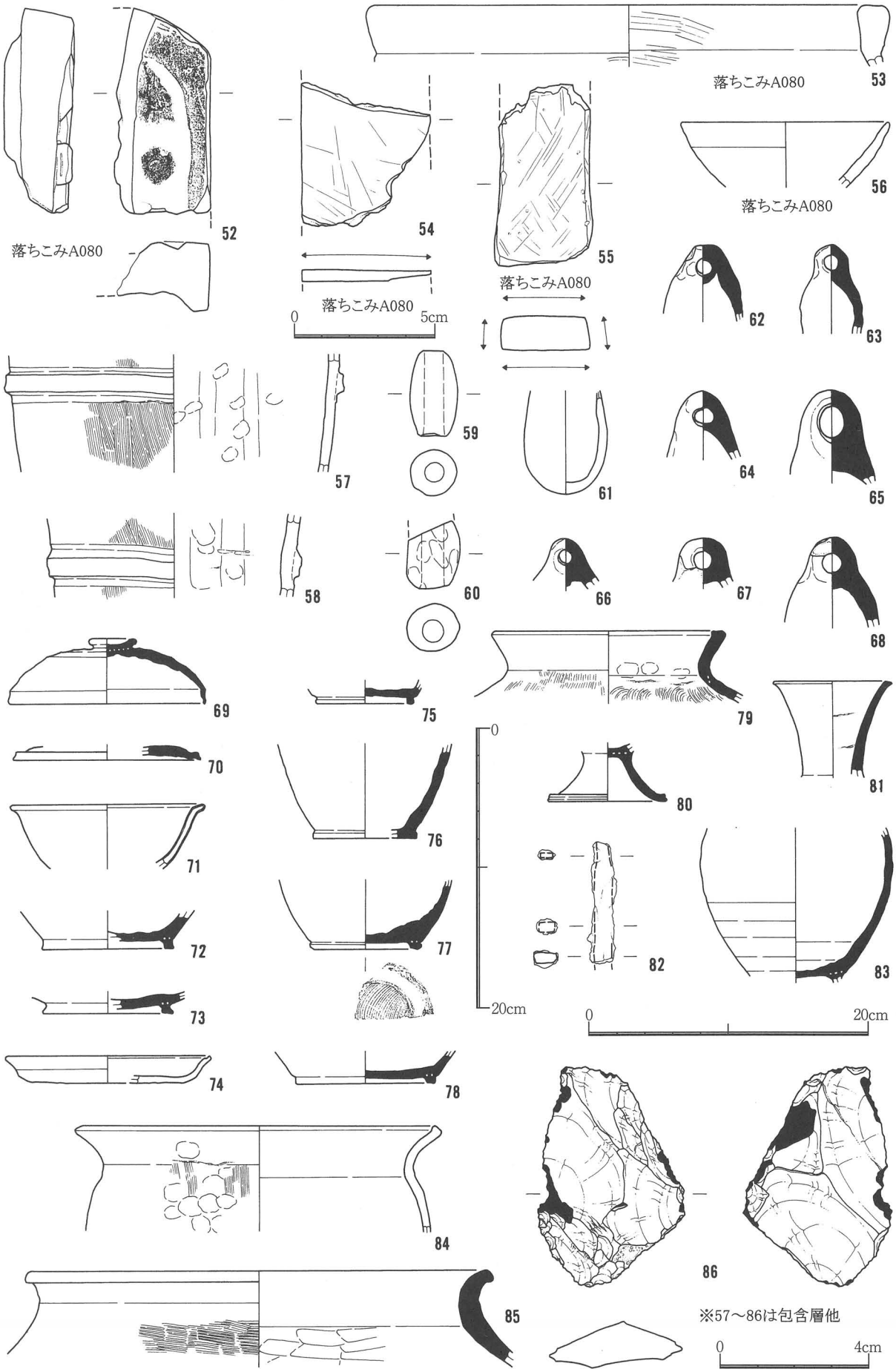
第10図　平成11年度　A調査区出土遺物①各遺構（S=1/4）



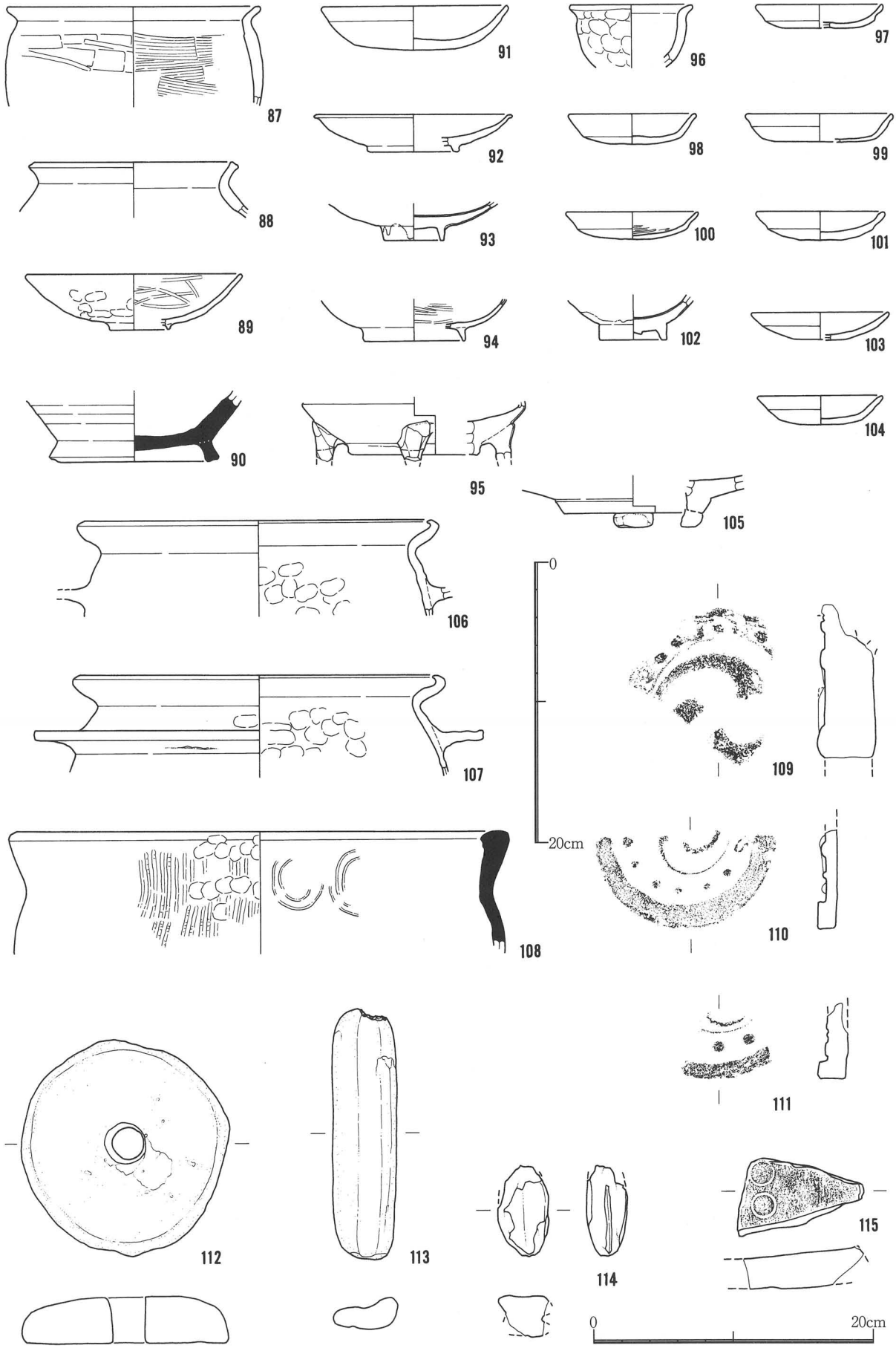
第11図　平成11年度　A調査区出土遺物②井戸 A001 (S=1/4)



第 12 図　平成 11 年度　A 調査区出土遺物③各遺構（S=1/4，1/2）



第13図　平成11年度　A調査区出土遺物④各遺構・包含層他（S=1/4. 1/2）

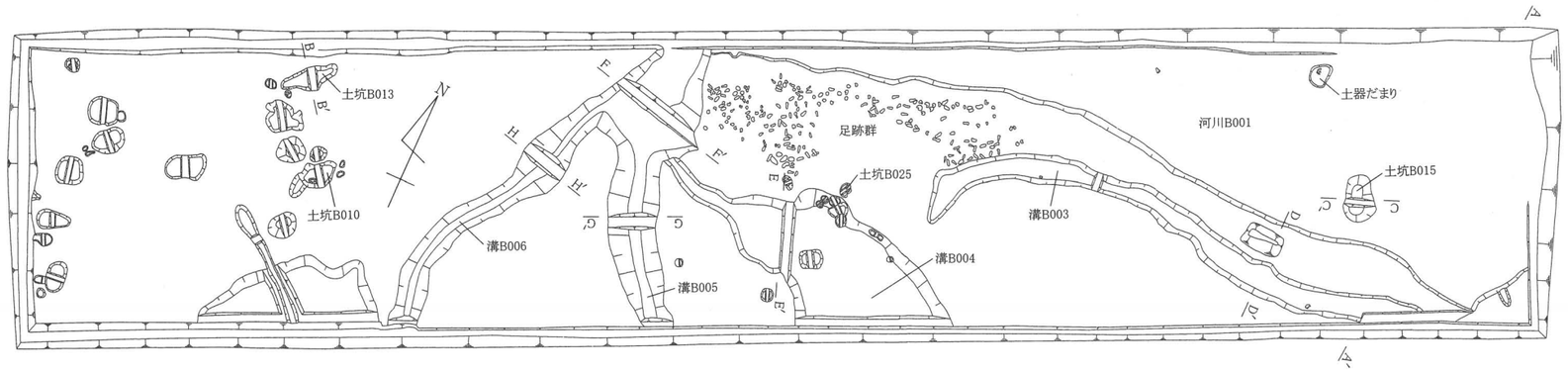


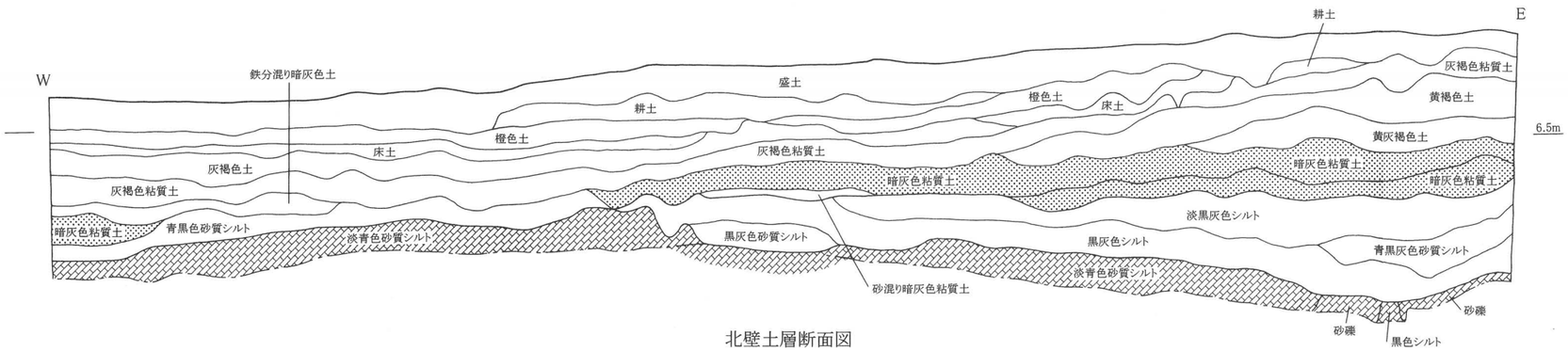
第 14 図　平成 11 年度　A 調査区出土遺物⑤包含層他 (S=1/4)

B調査区（第15～18図）

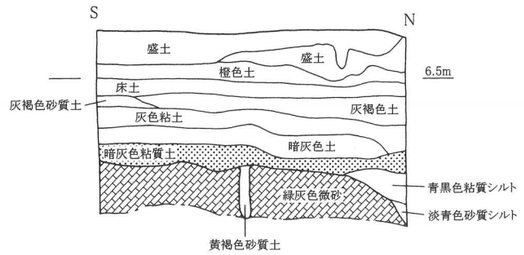
a　層序（第15・16図）

調査区の北壁、東壁、西壁断面図を垂直方向1/40、水平方向1/200に改変して掲載する。後述するが、東側試掘調査区で検出されている大規模な河川B001の続きが、本調査区の東南から西北にかけても検出されているため、北壁と東壁は大部分が河川内堆積になる。北壁は、長さ約50 m、最高深度約2 mをはかる。東端部から西へ約5 m付近が河川の中心と思われ、最も深い。このあたりの層序は、上から盛土（約0.2 m）、部分的に耕土・床土（約0.08 m）が遺存している。その下は、灰褐色粘質土（0.1～0.2 m）、黄灰褐色粘質土（0.1～0.25 m）、灰黄褐色土（約0.2 m）となる。この灰黄褐色土は、瓦器や土師器などを含む中世の遺物包含層である。この層は、西側では灰褐色粘質土に相当するものと考えられる。その下は、暗灰色粘質土（約0.2 m）となり、須恵器や土師器などを含む古墳～奈良時代の遺物包含層となる。暗灰色粘質土より下は河川B001の堆積になる。上から淡黒灰色シルト（約0.3 m）、一部で青黒灰色砂質シルト（0.15～0.25 m）、黒灰色砂質シルト（約0.2 m）となり、地山は灰色砂礫もしくは淡青色砂質シルトになる。調査区東端から西へ30 m付近で河川B001の南肩が検出されており、その高さはT.P＋6.0 mをはかる。この断面での河川底面の高さはT.P＋5.35 mであり、そのレベル差は0.65 mをはかる。ただ、このレベル差は河川の深さではない。東壁断面をみると、河川底面はさらに北に傾斜しており、本調査区は河川B001の南肩の一部を検出したにすぎない。東壁は、長さ約10 m、最高深度約1.8 mをはかる。河川B001の横断面がわかる土層である。上から盛土（0.2 m～0.4 m）、灰褐色粘質土（0.1～0.25 m）、灰黄褐色粘質土（約0.25 m）となる。この灰黄褐色粘質土は、瓦器や土師器などを含む中世の遺物包含層である。その下は、暗灰色粘質土（0.2 m～0.3 m）となり、須恵器や土師器などを含む古墳～奈良時代の遺物包含層となる。暗灰色粘質土より下は河川B001の堆積になる。上から淡黒灰色シルト（約0.25 m）、一部で黄砂、青黒灰色砂質シルト（0.1 m～0.4 m）、黒灰色シルト（約0.25 m）になる。地山は灰色砂礫、淡青色砂質シルト、褐灰色砂質土、黄色粘土などである。調査区南端から北へ2 m付近で河川B001の南肩が検出されており、その高さはT.P＋6.75 mをはかる。また南肩は、北へ4 m付近で一旦平坦（T.P＋6.15 m）になり、さらに北へ6 m付近で北に下降し、段状になる。河川底面の高さがT.P＋5.45 mであることから、肩からのレベル差は約1.3 mである。西壁断面では、河川B 001の影響は少ないが、北端で一部青黒灰色砂質シルトがみられ、河川B001の一部が及んでいる。層序は、上から盛土（0.1 m～0.2 m）、橙色土（0.05 m～0.1 m）、灰褐色土（約0.1 m）、灰褐色粘質土（約0.1 m）となる。この灰褐色粘質土は、瓦器や土師器などを含む中世の遺物包含層である。その下は、暗灰色土（約0.15 m）、暗灰色粘質土（約0.15 m）となり、須恵器や土師器などを含む古墳～奈良時代の遺物包含層である。地山は緑灰色微砂で、その高さはT.P＋5.95 mをはかる。北端から5 m付近ではピット一つがかかっており、その埋土は黄褐色砂質土である。また北端から2 m付近で河川B001の肩が検出されており、その埋土は青黒灰色砂質シルト（0.2 m）、黒灰色シルト

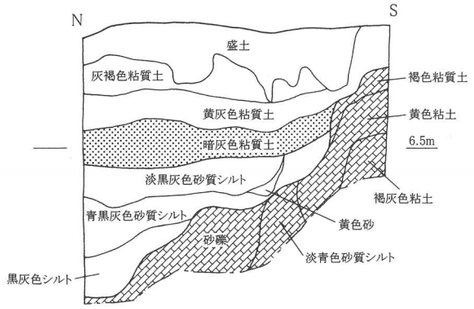




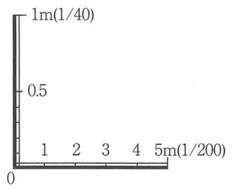
北壁土層断面図



西壁土層断面図



東壁土層断面図



第 15 図　平成 11 年度　B調査区平面図・断面図

(約 0.15 m) である。河川肩の高さは T.P + 5.90 mで、底面の高さが T.P + 5.55 mであり、そのレベル差は約 0.35 mをはかる。

b　検出された遺構と出土遺物 (第 15 ～ 18 図)

検出された遺構には、河川、溝、土坑、ピットなどがある。

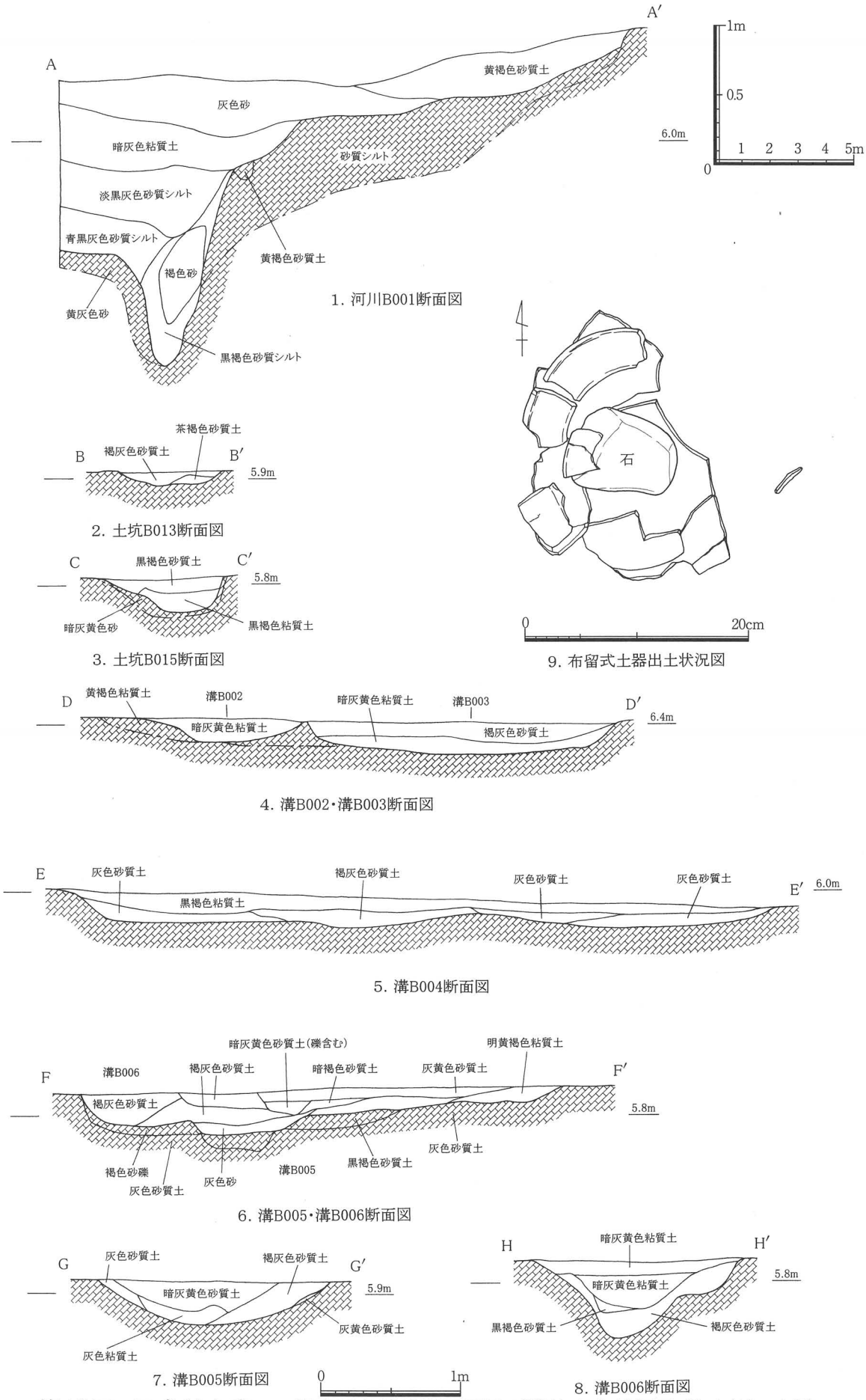
河川 B001 (第 15・16 図)　層序の項でも説明したように、本調査区の全体を覆う形で本河川の堆積が及んでいる。最終的に検出された規模は、東西約 27 m、南北約 8.5 m、深さ約 2 mである。調査区が真東西ではなく、東に偏しているため、河川が東南から西北方向に伸びているようにみえるが、実際はほぼ東から西に流れている。河川に直交する形でアゼを設定したが、その断面 (第 16 図) をみると、河川底面が北から約 1 m付近で幅約 2 mにわたって窪んでいるのがわかる。南から北へ傾斜していくと考えられていた流路がこの部分ではそのかぎりではない。一時的な澱みと考えられる。この付近の層序は、上から灰色砂 (約 0.15 m)、暗灰色粘質土 (約 0.15 m)、淡黒灰色砂質シルト (約 0.23 m)、暗褐色砂 (約 0.1 m)、褐色砂 (約 0.2 m)、黒灰色砂質シルト (約 0.15 m) になる。地山は砂礫層及び淡青色砂質シルトである。河川底面のレベルは T.P + 5.3 mをはかる。河川内からは、布留式土器、6 世紀後半頃の須恵器、8 世紀中頃の須恵器や土師器、フイゴの羽口、須恵器飯蛸壷、土錘などが出土している。海浜部に近い集落の様相を示している。これら出土遺物の年代から、この河川は約 500 年間流れていたことになる。また、調査区東端から約 7 m、北から約 1.3 m付近の河川肩斜面に貼りつく形で、布留式土器の甕一点 (第 16 図) が口縁部を上にして出土している。底部を欠いていたが、ほぼ全容がわかる土器である。

溝 B003(第 15・16 図)　河川 B001 の肩から南へ約 1 m離れて、それに沿う形でほぼ真っ直ぐに伸びる溝である。検出面で長さ約 16 m、幅約 2.2 m、深さ 0.25 mをはかる。断面は皿形を呈し、埋土は上層が灰褐色砂質土 (0.15 m)、下層が暗灰色粘質土 (0.1 m) である。溝内より 6 世紀後半～ 8 世紀にかけての須恵器や土師器の他、瓦質と土師質の土錘が出土している。

溝 B004(第 15・16 図)　調査区東端から西へ約 20 m付近で検出された溝である。ほぼ、東から西へ伸びる溝であり、西端で溝 B005 を切りこんでいる。検出面で最大幅約 5 mあるが、北端では幅約 1 mと狭くなる。長さ約 17 m、深さ約 0.22 mをはかる。断面は皿形を呈し、埋土は上層が黒褐色粘質土 (約 0.1 m)、下層が灰褐色砂質土 (約 0.1 m) である。また、断面をみると二回の掘り直しが確認される。

溝 B005(第 15・16 図)　調査区の中央付近から真っ直ぐ西北へ伸びる溝である。西端で溝 B004 と溝 B006 に切られている。長さ 9.5 m以上、幅 1.65 ～ 3.2 m、深さ 0.3 mをはかる。断面はU字形を呈し、埋土は上層が暗灰黄色砂質土 (約 0.2 m)、下層が灰色粘質土 (約 0.1 m) である。断面をみると、一回の掘り直しが確認される。溝内より手捏ねの小形壷が出土している。6 世紀後半頃であろうか。

溝 B006(第 16 図)　調査区西南端から東へ約 11 m付近で検出された溝である。北に向かっ



第 16 図　平成 11 年度　B調査区各遺構断面図及び遺物出土状況図 (S=1/40, 1/5)

てやや蛇行しながら伸びている。北端では溝 B005 を切りこんでいる。長さ 14 m以上、幅 0.6 ～ 1.5 m、最大深度約 0.6 mをはかる。断面はV字状を呈している。埋土は上から暗灰黄色土 (約 0.1 m)、暗灰黄色粘質土 (約 0.25 m)、灰褐色砂質土 (約 0.15 m) となる。溝内より土師器広口壷などが出土している。溝 B005 を切りこんでいるが、あまり時期は変わらないものと考えられる。なお、検出されたすべての溝は、河川 B001 に注いでいる。

土坑 B010(第 15・16 図)　調査区西北端から東へ約 10 m、南へ約 4 m付近で検出された。長さ約 0.9 m、幅約 0.4 mをはかる方形の浅い土坑である。土坑内より 6 世紀後半頃の土師器直口壷片が出土している。

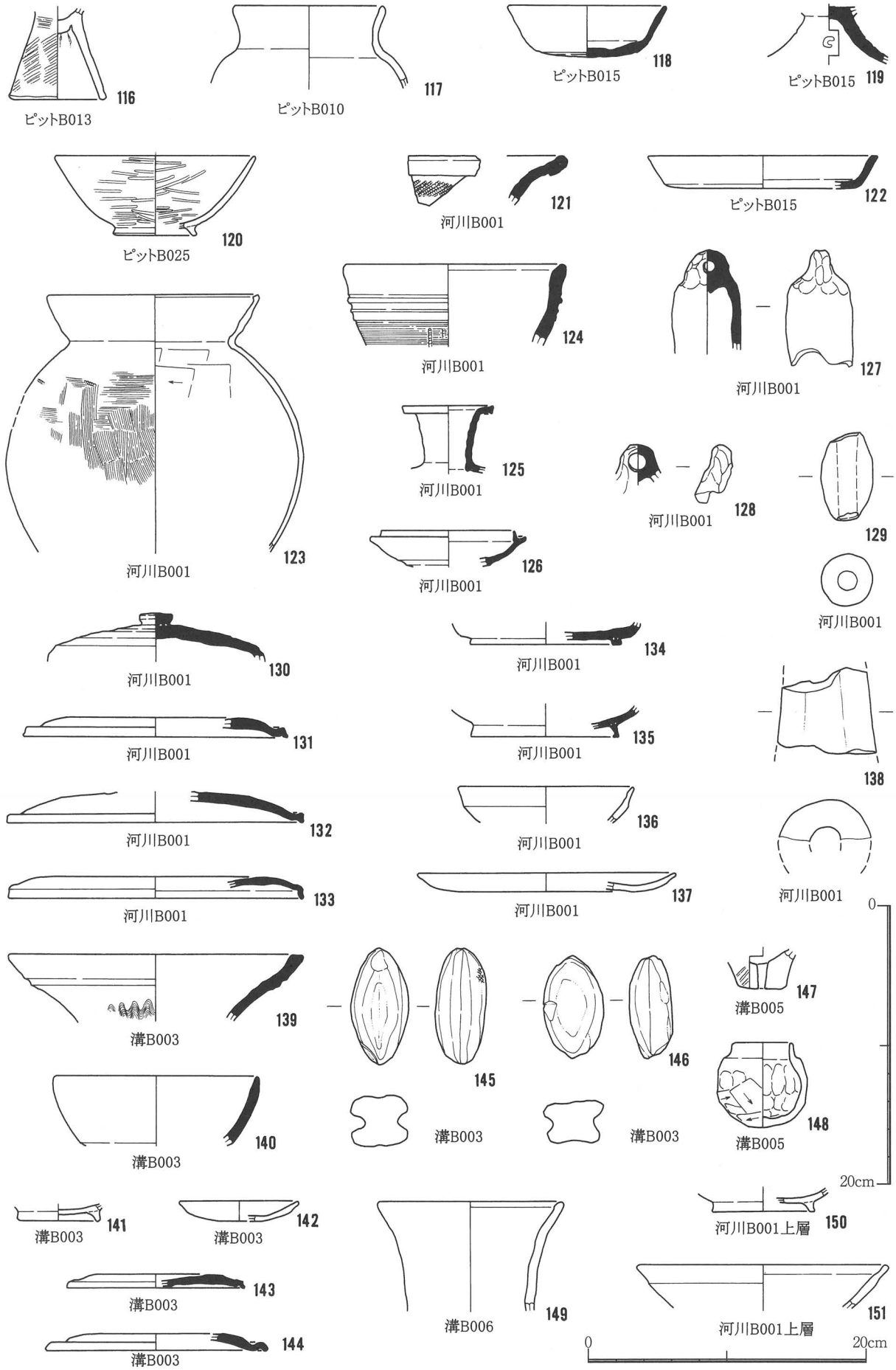
土坑 B013(第 15・16 図)　調査区西北端から東へ約 11 m、南へ約 1 m付近で検出された。長さ約 3 m、幅約 1 m、深さ約 0.1 mの長楕円形を呈する浅い土坑で、埋土は灰褐色砂質土である。また、土坑内より古相の脚台式の製塩土器が出土しており、確実に庄内式まで遡るものであろう。この一点の土器で確実とはいえないが、河川 B001 も庄内式に遡る可能性があろう。

土坑 B015(第 15・16 図)　調査区東南端から西へ約 5.5 m、北へ約 3.5 m付近で検出された。長さ約 2 m、幅約 1 m、深さ約 0.25 mの長楕円形を呈する土坑である。断面はU字形を呈する。埋土は上層が黒褐色砂質土で、下層が黒褐色粘質土である。また土坑内より 7 世紀前半～ 8 世紀中頃の須恵器杯身などが出土している。

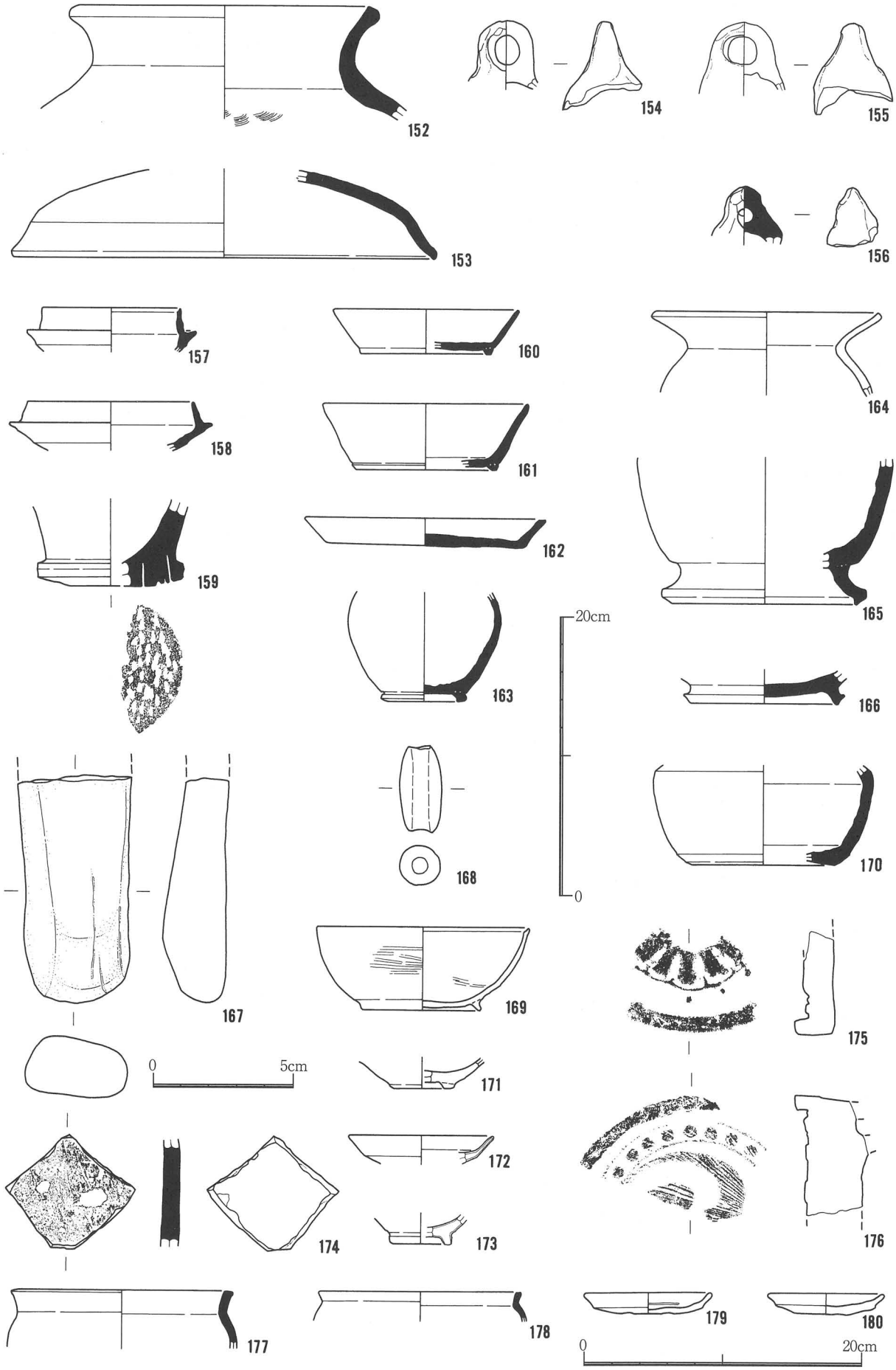
ピット B025(第 15・16 図)　調査区東南端から西へ約 22.5 m、北へ約 5 m付近、調査区のほぼ中央で検出された。長さ約 0.5 m、幅約 0.4 m、深さ約 0.1 mの浅いピットである。断面はU字形を呈している。埋土は灰褐色砂質土であり、層内より 12 世紀後葉頃の瓦器椀が出土している。

c　小結

以上、B調査区における層序と検出された遺構と遺物について述べてきたが、ここでは簡単にまとめておきたい。検出された遺構には、その他にも数多くの土坑やピットがあるが、遺物がまったく出土していなかったり、出土していても小片であり、時期判定ができなかった。ただ、この調査区で検出された遺構は、概ね五つの時期に分類できよう。まず、河川 B001 が最初に流れていた庄内式～布留式の時期、それから溝や土坑で示される 6 世紀後半の時期、紀年木簡で示される 8 世紀中頃から 9 世紀の時期、11 ～ 12 世紀の時期、最後に 12 ～ 13 世紀の時期である。その他、目立った遺物としては、黒色土器椀や軒丸瓦などがある。A調査区南端で検出された遺構が、一部及んでいるのだろうか。なお、本調査区内では建物を構成するような遺構はなかったが、製塩土器や土錘、飯蛸壺、フイゴの羽口といった生産に関わる遺物を伴った遺構が特徴的であると考えられる。



第 17 図　平成 11 年度　B 調査区出土遺物①各遺構 (S=1/4)



第 18 図　平成 11 年度　B調査区出土遺物②包含層他 (S=1/4)

試掘調査区（第19～27図）

試掘調査区は、遺構の有無や調査深度を確認するため、住棟部分のA調査区とB調査区の北・南・東側の地区に幅2m、長さ5mのトレンチ25本を設定した。北側が1・2トレンチの2本、南側が3～10トレンチの8本、東側が最も多い11～25トレンチの15本である。なお、紙数の都合上、すべてのトレンチの実測図を掲載することはできないが、柱状模式図を作成した。（第21・22図）ただし、重要な遺構が検出されているトレンチについては実測図を掲げている。

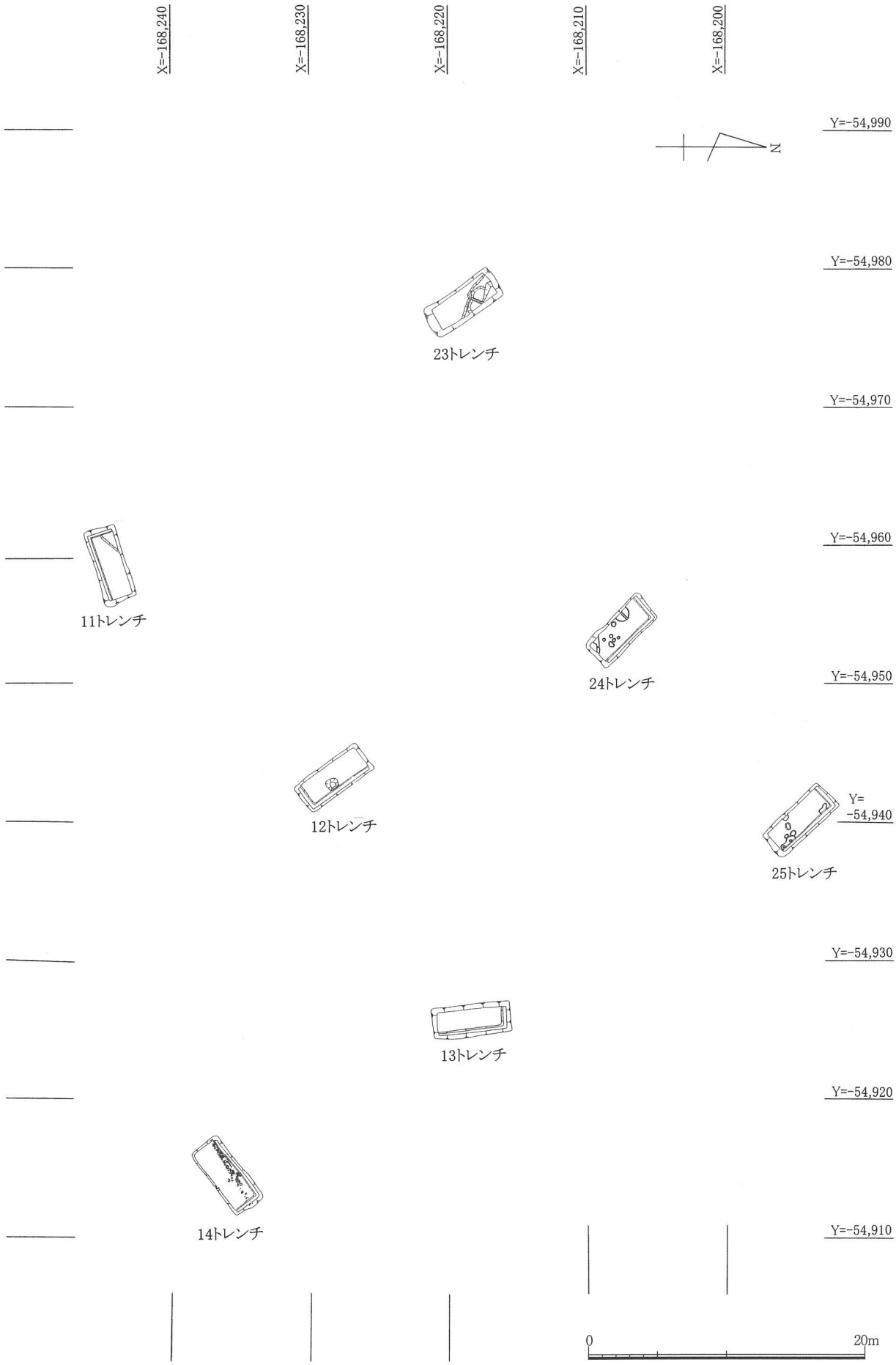
1トレンチ（第23図）　B調査区の北西約15m付近に設定した東西方向のトレンチである。層序は上から撹乱土（約0.3m）、旧耕土（約0.1m）、黄色粘質土（約0.1m）、灰褐色砂質土（約0.2m）、灰褐色粘質土（約0.2m・中世の包含層）であり、その下は黄色粘質土の地山となる。地山面の高さはT.P＋6.25mをはかる。このトレンチからは鎌倉時代の遺物が出土し、溝や落ち込み（河川B001の肩か）などの遺構が検出されている。

2トレンチ（第23図）　1トレンチから東へ約40m付近に設定した東西方向のトレンチである。層序は上から表土（約0.1m）、撹乱土（約0.2m）、灰褐色粘質土（約0.3m）、暗灰色粘質土（約0.2m・包含層）、茶灰色砂質土（約0.1m・遺構の埋土）、茶灰色砂質シルト（約0.15m・遺構の埋土）であり、その下は黄色粘質土の地山になる。地山面の高さはT.P＋6.4mをはかる。このトレンチは河川B001内に位置しているものと考えられ、土師器片や青磁片、磨石などの遺物が出土している。

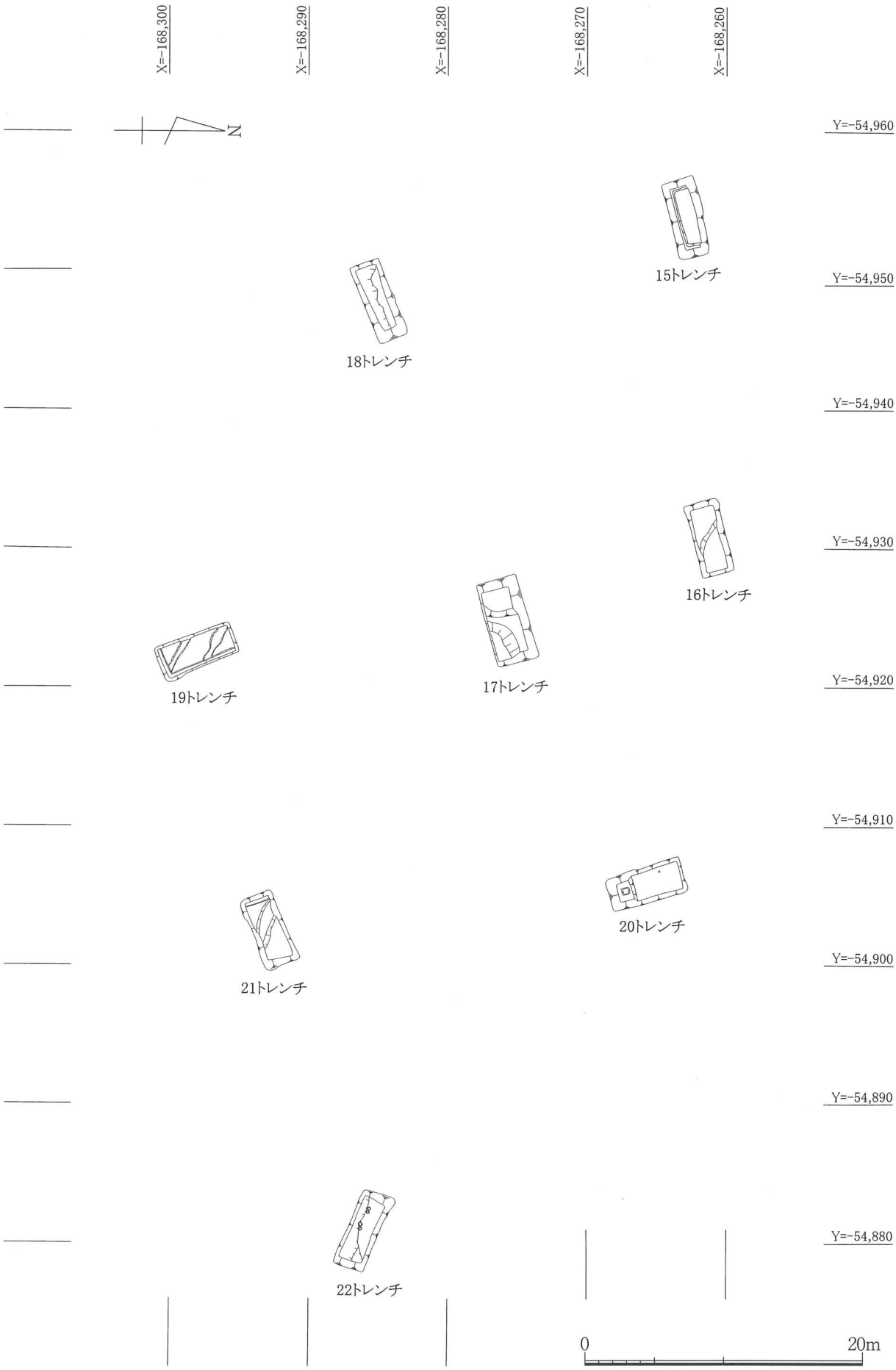
3トレンチ　A調査区の中央部付近から南へ約18m付近に設定した東西方向のトレンチである。層序は表土（約0.1m）をめくると、すぐに黄色粘質土の地山となる。地山面の高さはT.P＋6.5mをはかる。地山はかなり削平されていたが、遺構は存在した。このトレンチの調査結果によって、本遺跡の地形が東南に高く、西北にむけて低くなっていくのがわかる。

4トレンチ（第23図）　A調査区の西南端付近に設定した東西方向のトレンチである。層序は上から盛土（約0.2m）、耕土（約0.1m）、床土（約0.06m）、灰褐色土（約0.1m・包含層）、黄灰色粘質土（約0.1m）、灰黄色粘質土（約0.15m）であり、その下は黄色粘質土の地山になる。地山面の高さはT.P＋5.6mをはかる。このトレンチでは、二面の遺構面が確認されており、建物を構成すると考えられるピットが検出されている。ピットの中には柱根が遺存しているものもみられた。二面の遺構面は、上面が灰褐色土直下で鎌倉時代前葉頃の遺構面、下面が黄灰色粘質土直下で平安時代後葉頃の遺構面と考えられる。すなわち、下面に平安時代後葉の遺構が形成された後、黄灰色粘質土で整地された面が鎌倉時代前葉の遺構面になる。平安時代後葉の「て」の字状口縁をもつ土師器皿や土錘などが出土している。

5トレンチ　4トレンチから東へ約25m、3トレンチから南へ約22m付近に設定した東西方向のトレンチである。層序は上から盛土（約0.15m）、表土（約0.06m）、耕土（約0.2m）、灰黄色砂質土（約0.1m）であり、その下は黄色系粘質土の地山になる。地山面の高さはT.P＋6.1



第 19 図　平成 11 年度　試掘調査区 11 ～ 14，23 ～ 25 トレンチ平面図 (S=1/40)



第20図　平成11年度　試掘調査区15～22トレンチ平面図（S=1/40）

mをはかる。このトレンチでは北側に下がる落ち込みが遺物を伴なって検出されている。なお、下層の堆積を確認するため、重機による深掘りを実施した。その結果、地山である黄色系粘質土(約0.2 m)の下は、黄色粘土(約0.3 m)、マンガン混じり灰茶色土(約0.2 m)、淡褐色砂質シルト(約0.2 m)、微砂混じりシルト(約0.22 m)、汚れた粘土(約0.5 m)となり、その下は完全なバラス層に変化する。表土から約2 mの深さでバラス層に到達することが判明した。

6トレンチ　5トレンチから東へ約25m付近に設定した東西方向のトレンチである。層序は上から表土(約0.1 m)、マンガン混じり灰黄色粘質土(約0.1 m)であり、その下は黄色粘質土の地山になる。地山面の高さはT.P＋6.7 mをはかる。地山がかなり削平されていたが、遺構は存在した。なお、本トレンチと3トレンチを結んだラインの東では地形が高く、ラインの西では徐々に低くなっていくものと考えられる。

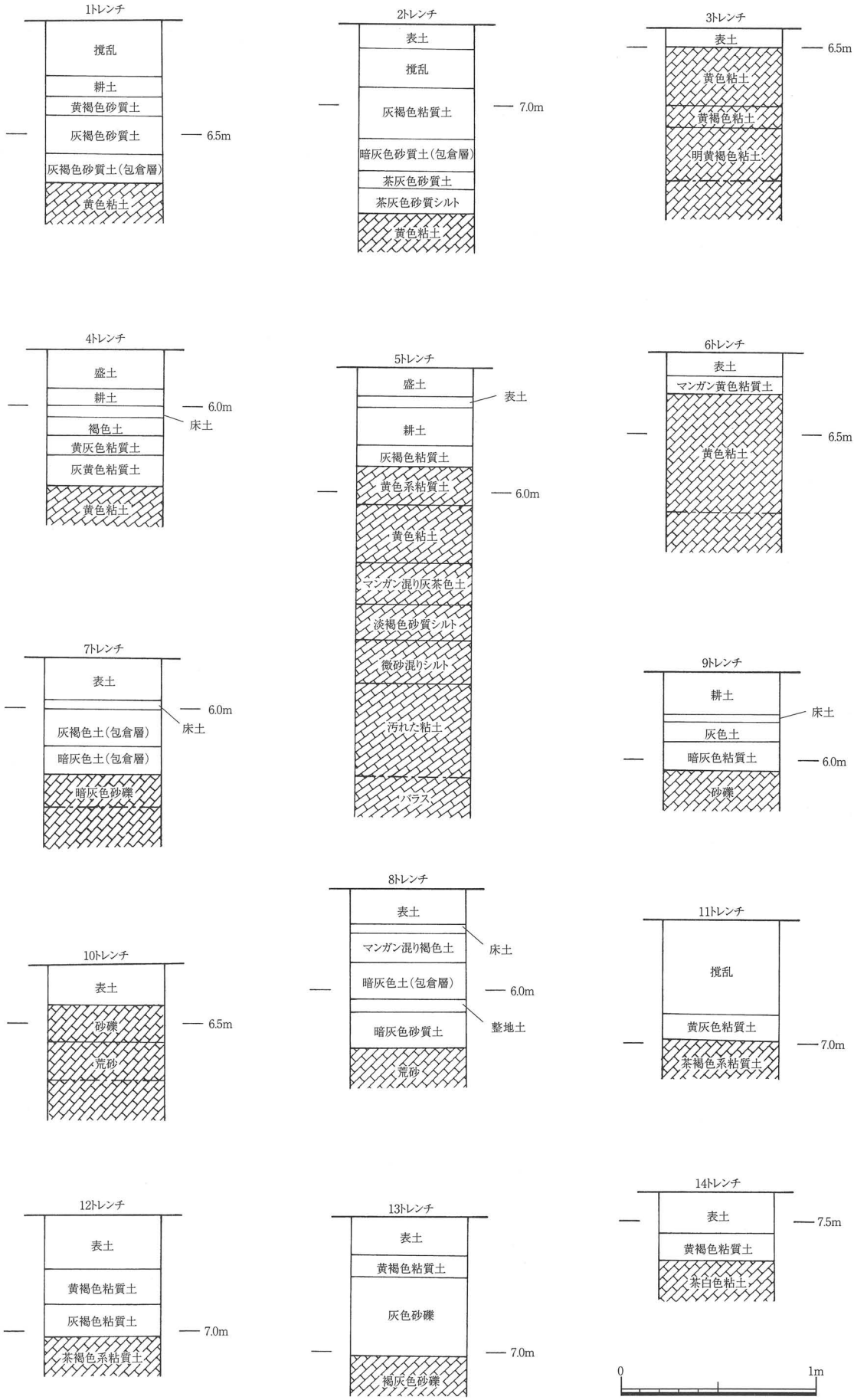
7トレンチ(第23図)　4トレンチから南へ約20m付近に設定した南北方向のトレンチである。層序は上から表土(約0.22 m)、床土(約0.05 m)、灰褐色土(約0.2 m・包含層)、暗灰色土(約0.15 m・包含層)であり、その下は砂礫層の地山になる。地山面の高さはT.P＋5.64 mをはかる。本トレンチでも、4トレンチ同様、二面の遺構面が確認されており、ピットなどが検出されている。また、本トレンチと4トレンチを南北に結んだラインは、地山面の高さも共通しており、二面の遺構面(平安時代後葉と鎌倉時代前葉)が広がっているものと考えられる。

8トレンチ(第23図)　7トレンチから東へ約23m付近に設定した東西方向のトレンチである。層序は上から表土(約0.22 m)、床土(約0.05 m)、マンガン混じり褐色土(約0.08 m)、褐色土(約0.06 m)、暗灰色土(約0.2 m・包含層)、整地土(約0.06 m)、暗灰色砂質土(約0.2 m)であり、その下は砂礫の地山になる。地山面の高さはT.P＋5.7 mをはかる。本トレンチでは、ピットや溝などの遺構が確認されている。なお、梵字(日本語では「阿弥陀」の意味)を印した軒丸瓦片が出土しており、周辺に寺院の存在をうかがうことができる。本遺跡の西南に位置した上品寺跡(平安時代か)に関連するものであろう。他に、12世紀後葉頃の土師質土釜の口縁部片などが出土している。

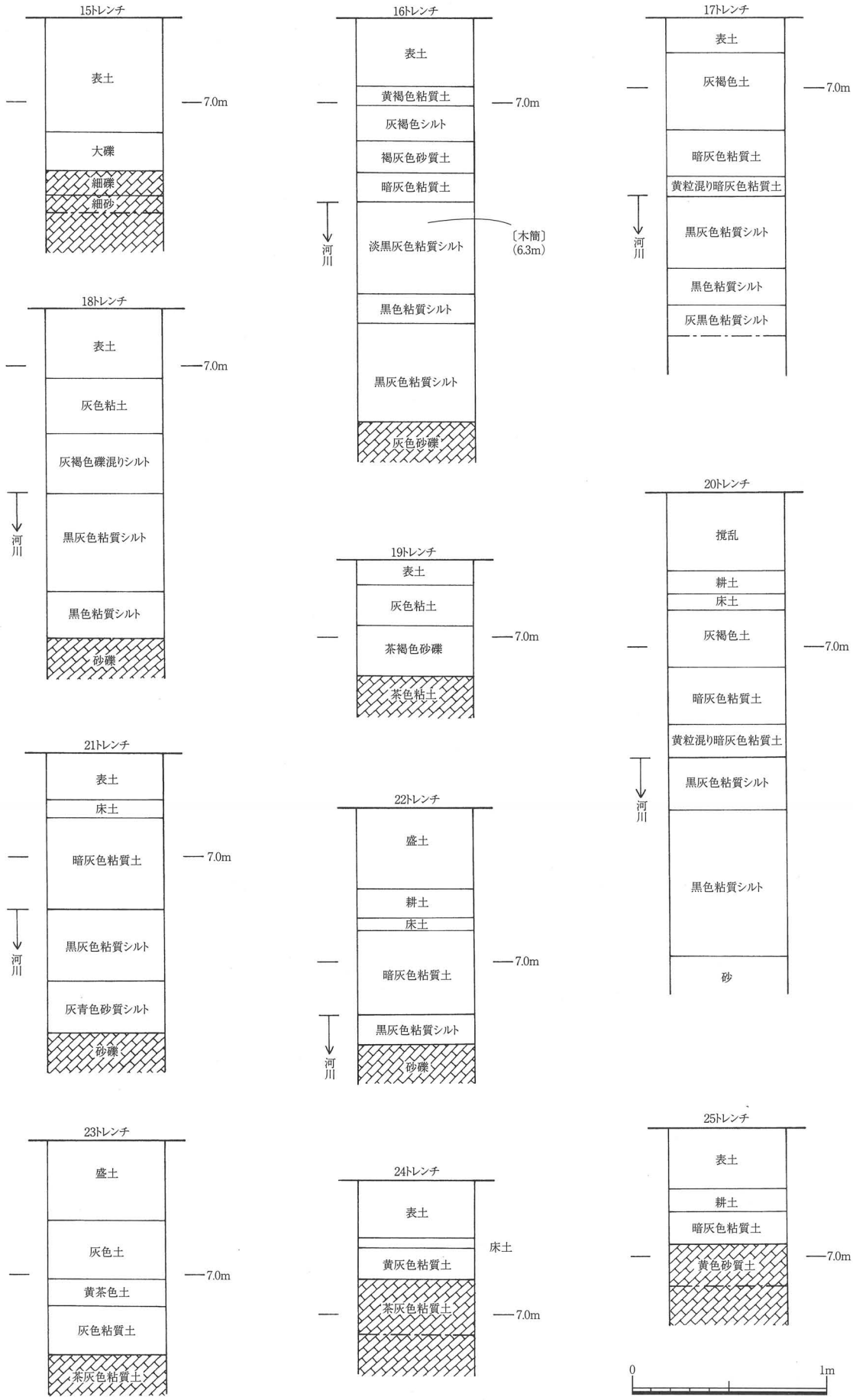
9トレンチ　8トレンチから南へ約25 m付近に設定した東西方向のトレンチである。層序は上から耕土(約0.2 m)、床土(約0.05 m)、灰褐色土(約0.1 m・包含層)、暗灰色土(約0.15 m・包含層)であり、地山は砂礫となる。地山面の高さはT.P＋5.94 mをはかる。8トレンチとのレベル差は約0.24 mあり、ここでも東南から西北に向かって地形が傾斜していることがわかる。

10トレンチ　6トレンチから南へ約18 m付近に設定したほぼ東西方向のトレンチである。層序は表土(約0.2 m)をめくると、すぐに砂礫の地山になる。大部分が削平されているのであろう。地山面の高さはT.P＋6.6 mであり、南側の10本のトレンチの中ではもっとも高い。遺構、遺物とも検出されていない。

11トレンチ　A・B調査区の東、道路を挟んだ空き地に設定した東西方向のトレンチである。層序は上から撹乱土(約0.5 m)、黄灰色粘質土(約0.15 m)であり、地山は茶褐色系粘質土である。



第 21 図　平成 11 年度　試掘調査区柱状土層模式図① (S=1/30)



第22図　平成11年度　試掘調査区柱状土層模式図②（S=1/30）

地山面の高さはT.P ＋ 7.02 mをはかる。明確な遺構は検出されていない。

12 トレンチ　11 トレンチから東へ約 21 m付近に設定した南北方向のトレンチである。層序は上から表土 (約 0.3 m)、黄灰色粘質土 (約 0.18 m)、灰褐色粘質土 (約 0.18 m) であり、地山は茶褐色系粘質土である。地山面の高さはT.P ＋ 6.96 mをはかる。明確な遺構は検出されていない。

13 トレンチ　12 トレンチから東へ約 17 m付近に設定したトレンチである。層序は上から表土 (約 0.2 m)、黄灰色粘質土 (約 0.1 m)、灰色砂礫 (約 0.4 m) であり、地山は褐色砂礫である。地山面の高さはT.P ＋ 6.98 mをはかる。遺構、遺物とも検出されている。

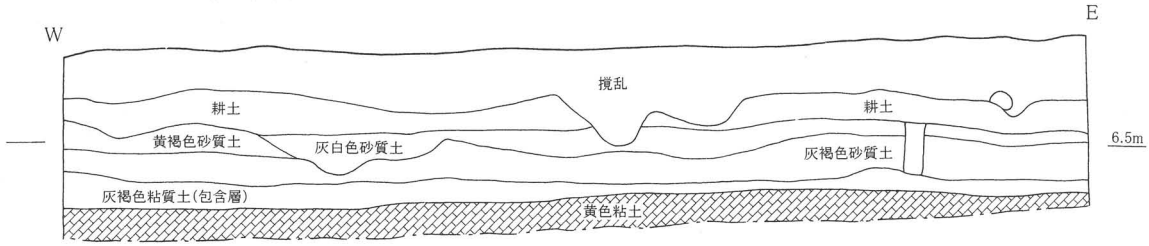
14 トレンチ　13 トレンチから南へ約 18 m付近に設定した東西方向のトレンチである。層序は上から表土 (約 0.2 m)、黄褐色粘質土 (約 0.15 m) であり、地山は茶灰色粘土である。地山面の高さはT.P ＋ 7.3 mをはかる。遺構、遺物とも検出されていない。

15 トレンチ　11 トレンチから南へ約 18 m付近に設定した東西方向のトレンチである。層序は上から表土 (約 0.6 m)、砂礫 (約 0.2 m) であり、地山は細砂になる。地山面の高さはT.P ＋ 6.65 mをはかる。遺構、遺物とも検出されていない。

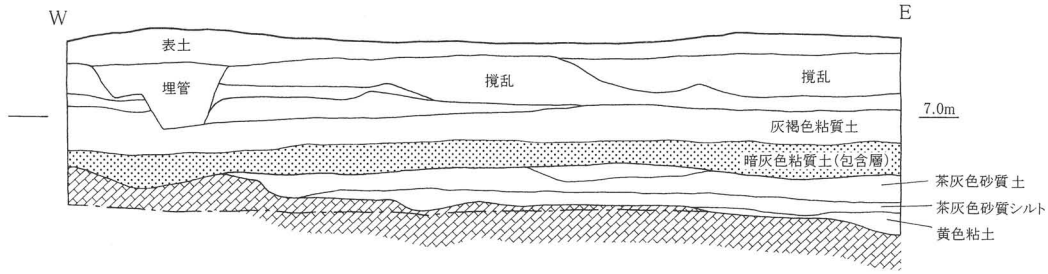
16 トレンチ (第 24・27 図)　幸運にも紀年木簡が出土したトレンチである。15 トレンチから東南へ約 21 m付近に設定した東西方向のトレンチである。層序は上から表土 (約 0.35 m)、灰色粘質土 (約 0.1 m)、灰褐色シルト (約 0.2 m)、暗灰色粘質土 (約 0.3 m・包含層)、黒褐色粘質シルト (約 0.5 m)、黒色粘質シルト (約 0.15 m)、灰黒色粘質シルト (約 0.5 m) であり、地山は砂礫となる。地山面の高さはT.P ＋ 5.35 mをはかる。基本的には、古墳～奈良時代の遺物を含む黒褐色粘質シルトより下は河川 B001 の堆積であり、紀年木簡は上層の黒褐色粘質シルトの中ほど (T.P ＋ 6.3 m付近) から出土した。その後、実施された周辺の調査結果からいえば、河川 B001 は東から流れてきて、21・22 トレンチ付近で北に大きく蛇行し、16・17 トレンチ付近では西側に流れを変えていったものと考えられる。その規模は幅 15 ～ 20 m、長さ 120m 以上と想定される古代の大河であった。現在、本調査区の南側に流路を変えている「天の川」のかつての姿かもしれない。

さて、紀年木簡は、その裏面に「天平寶字三年四月十六日主守六人阝…」(西暦 759 年) と明瞭に墨書されていたが、出土状況からいえば、本流ではなく大きく蛇行した北岸から投棄されたものと考えられ、遠くから流れてきたものではない。奈良時代中頃、この河川の岸近くは流れが滞り、ドブ川の状態であったものと想像される。ただ、こういった紀年木簡は、一般集落からはほとんど出土しないものであり、おそらく本遺跡に近接して公的施設が存在した可能性が高い。筆者などは、比較的近いところに位置する和泉国南郡八木郷の式内郷社である夜疑神社の存在が気にかかる。いずれにしても、この木簡は、『令義解』によれば、平城京にあった「刑部省」の下部機関である「囚獄司」(刑務所などを管轄する役所か) の役人である「主守」(強い権限をもつ監督官か) の「六人阝某」(六人部連氏か) が、当地周辺に発給した公的文書なのであろう。さらに、このことは、木簡の表に墨書された「…若犯之…」と、律文 (刑法か) の体裁をとっていること

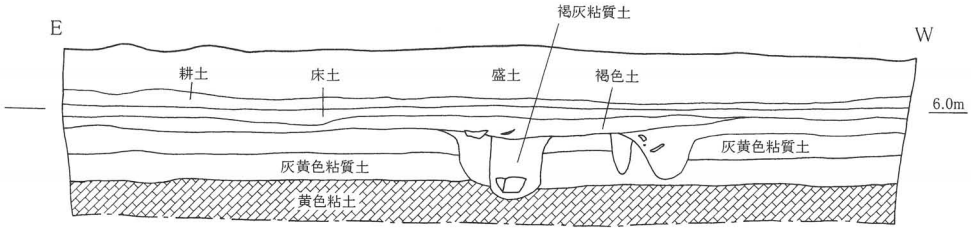
1トレンチ北壁土層断面図



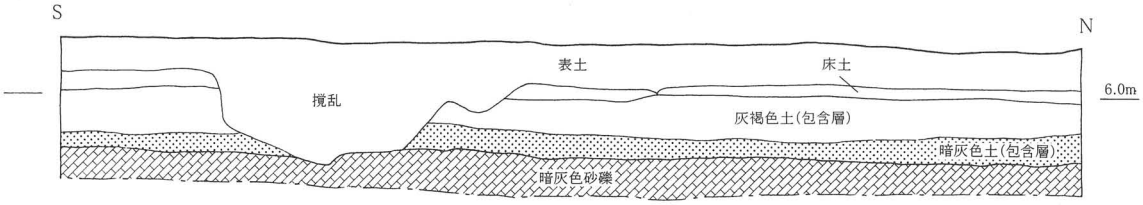
2トレンチ北壁土層断面図



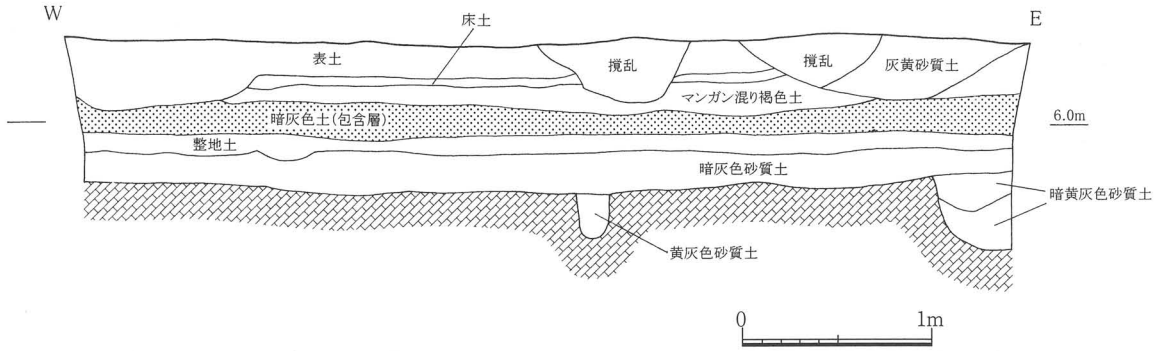
4トレンチ南壁土層断面図



7トレンチ東壁土層断面図

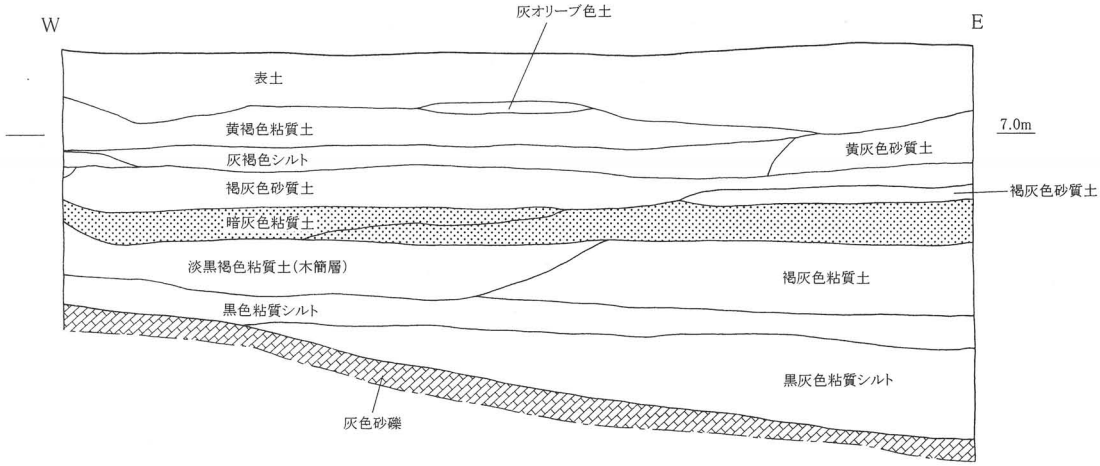


8トレンチ北壁土層断面図

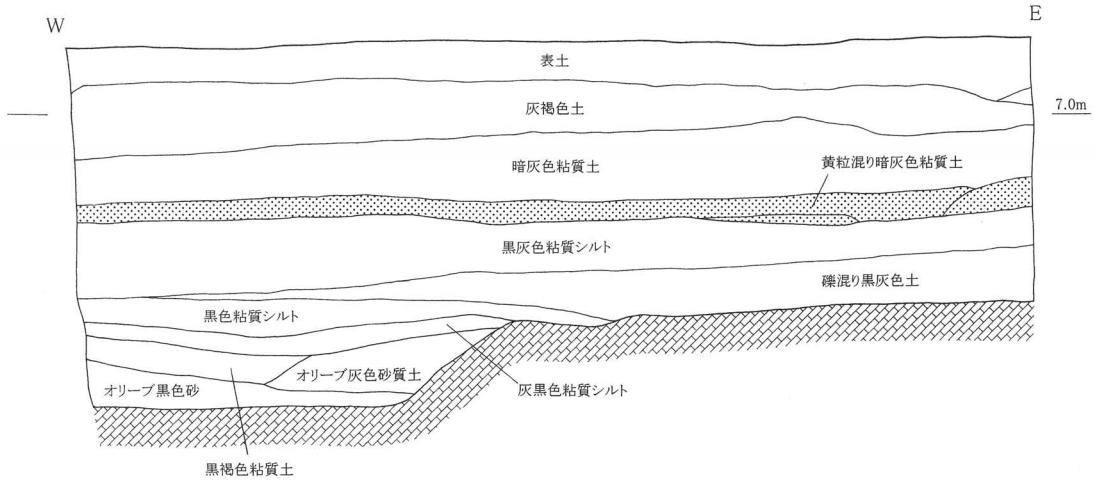


第 23 図　平成 11 年度　試掘調査区 1, 2, 4, 7, 8 トレンチ断面図 (S=1/40)

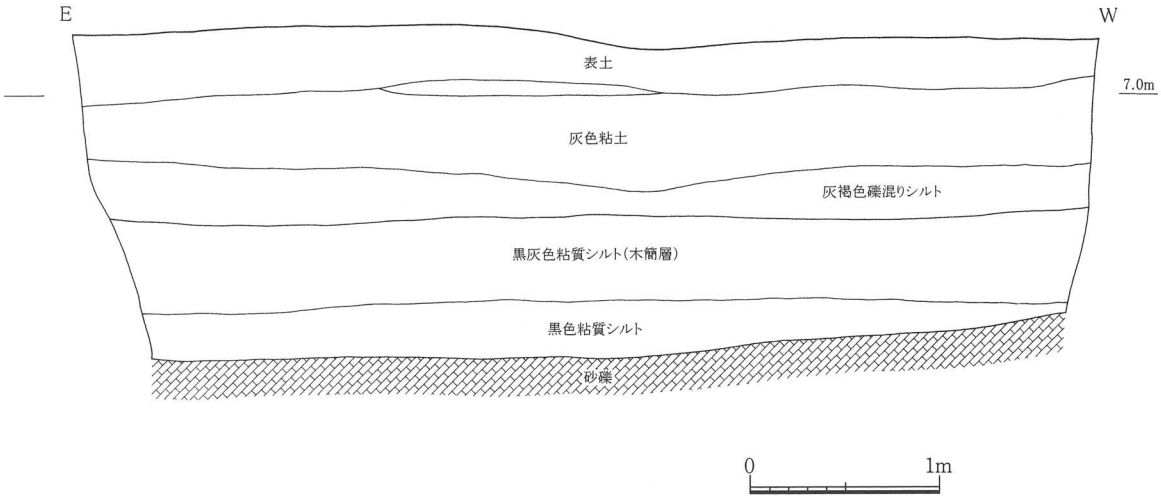
16トレンチ北壁土層断面図



17トレンチ北壁土層断面図

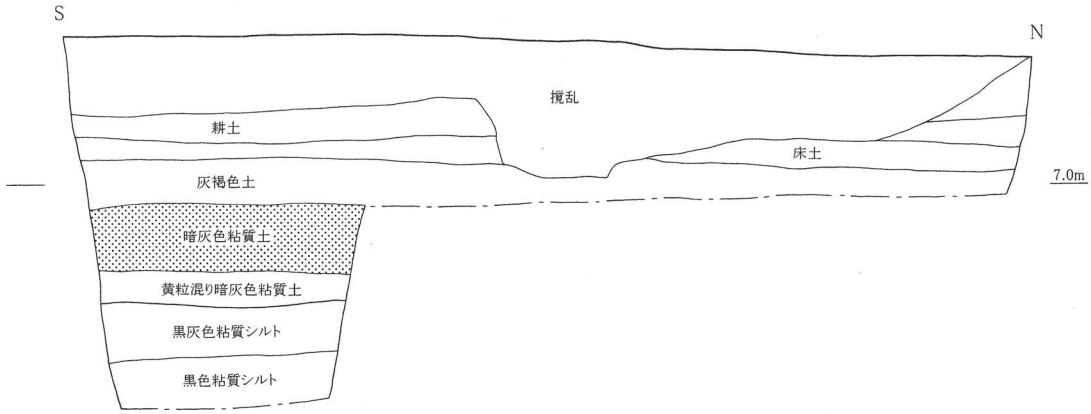


18トレンチ南壁土層断面図

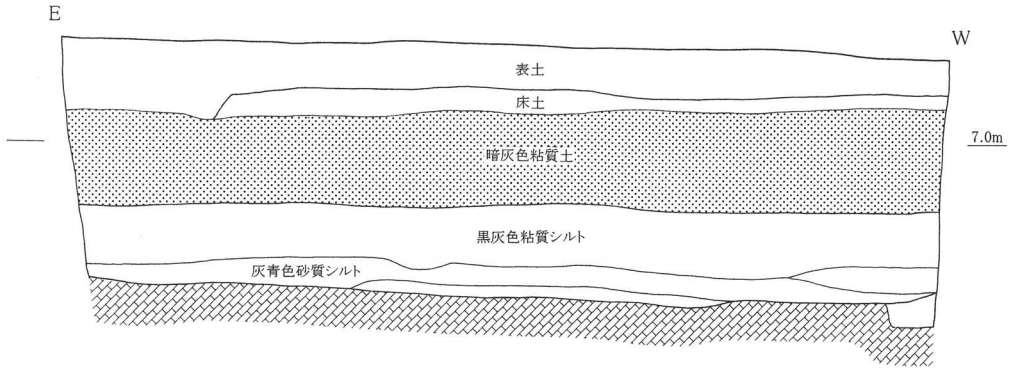


第24図　平成11年度　試掘調査区16,17,18トレンチ断面図(S=1/40)

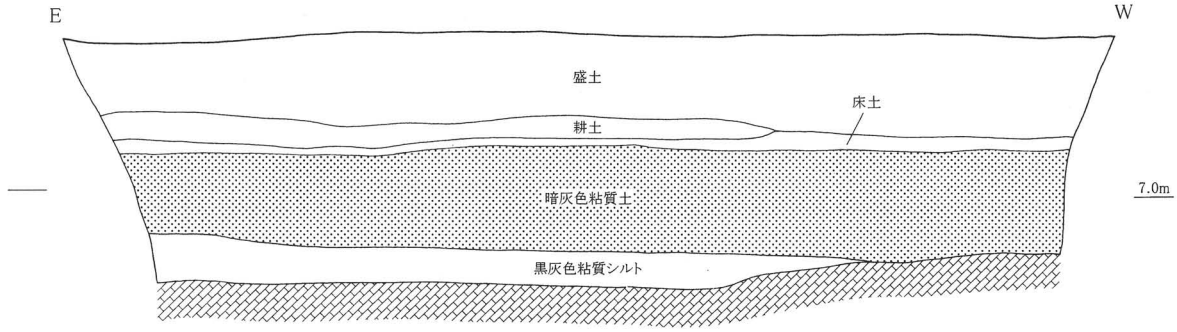
20トレンチ西壁土層断面図



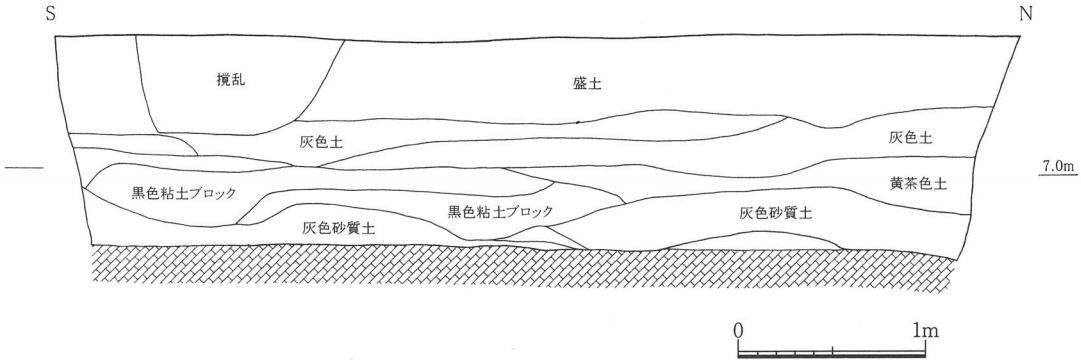
21トレンチ南壁土層断面図



22トレンチ南壁土層断面図



23トレンチ西壁土層断面図



第 25 図　平成 11 年度　試掘調査区 20, 21, 22, 23 トレンチ断面図 (S=1/40)

からも首肯されよう。その他、ほぼ完形の６世紀後半頃の須恵器短頸壷や須恵質の擂鉢などが出土している。

なお、紀年木簡については、第４章第２節でもふれているので参照されたい。

17 トレンチ（第 24 図）　16 トレンチから南へ約 10 m付近に設定した東西方向のトレンチである。層序は上から表土（約 0.2 m）、灰褐色土（約 0.4 m）、暗灰色粘質土（約 0.25 m・包含層）、ブロック土混じり暗灰色粘質土（約 0.1 m）、黒褐色粘質シルト（約 0.4 m）、黒色粘質シルト（約 0.2 m）、灰黒色粘質シルト（約 0.15 m）であり、地山は検出されていない。最下面の高さは T.P ＋ 5.7 mをはかる。16 トレンチ同様、黒褐色粘質シルトより下層は河川 B001 の堆積であり、ブロック土混じり暗灰色粘質土は河川 B001 を埋めるに際しての整地土であろう。このトレンチは、河川 B001 の南岸に近いところに位置するものと考えられる。

18 トレンチ（第 24 図）　17 トレンチから西へ約 20 m付近に設定した東西方向のトレンチである。層序は上から表土（約 0.35m）、灰色粘質土（約 0.28m）、灰褐色礫混じりシルト（約 0.3m）、黒褐色粘質シルト（約 0.5 m）、黒色粘質シルト（約 0.25 m）であり、地山は砂礫である。地山面の高さは T.P ＋ 5.6 mをはかる。黒褐色粘質シルトより下層は河川 B001 の堆積と考えられる。

19 トレンチ　17 トレンチから南へ約 18m 付近に設定した南北方向のトレンチである。層序は上から表土（約 0.15 m）、灰色粘質土（約 0.22 m）、茶褐色砂礫（約 0.25 m）であり、地山は黄色粘質土である。地山面の高さは T.P ＋ 6.8 mをはかる。このトレンチは、河川 B001 の外側に位置するものと考えられる。

20 トレンチ（第 25 図）　16 トレンチから東南へ約 21 m付近に設定した南北方向のトレンチである。層序は上から盛土（約 0.4 m）、旧耕土（約 0.12m）、床土（約 0.08 m）、灰褐色土（約 0.28 m）、暗灰色粘質土（約 0.3 m・包含層）、ブロック土混じり暗灰色粘質土（約 0.17 m）、黒褐色粘質シルト（約 0.28 m）、黒色粘質シルト（約 0.75 m）、灰砂（0.2 m以上）であり、地山は確認されていない。砂上面の高さは T.P ＋ 5.4 mをはかる。16 トレンチ同様、黒褐色粘質シルトより下層は河川 B001 の堆積であり、ブロック土混じり暗灰色粘質土は河川を埋めるに際しての整地土であろう。本トレンチは、河川 B001 の本流に近いところに位置するものと考えられる。

21 トレンチ（第 25 図）　19 トレンチから東へ約 17 m付近に設定した東西方向のトレンチである。層序は上から表土（約 0.25 m）、床土（約 0.08 m）、暗灰色粘質土（約 0.48 m・包含層）、黒灰色粘質シルト（約 0.35 m）、灰黒色砂質シルト（約 0.27 m）であり、地山は砂礫である。地山面の高さは T.P ＋ 6.1 mである。黒灰色粘質シルトより下は河川 B001 の堆積と考えられる。

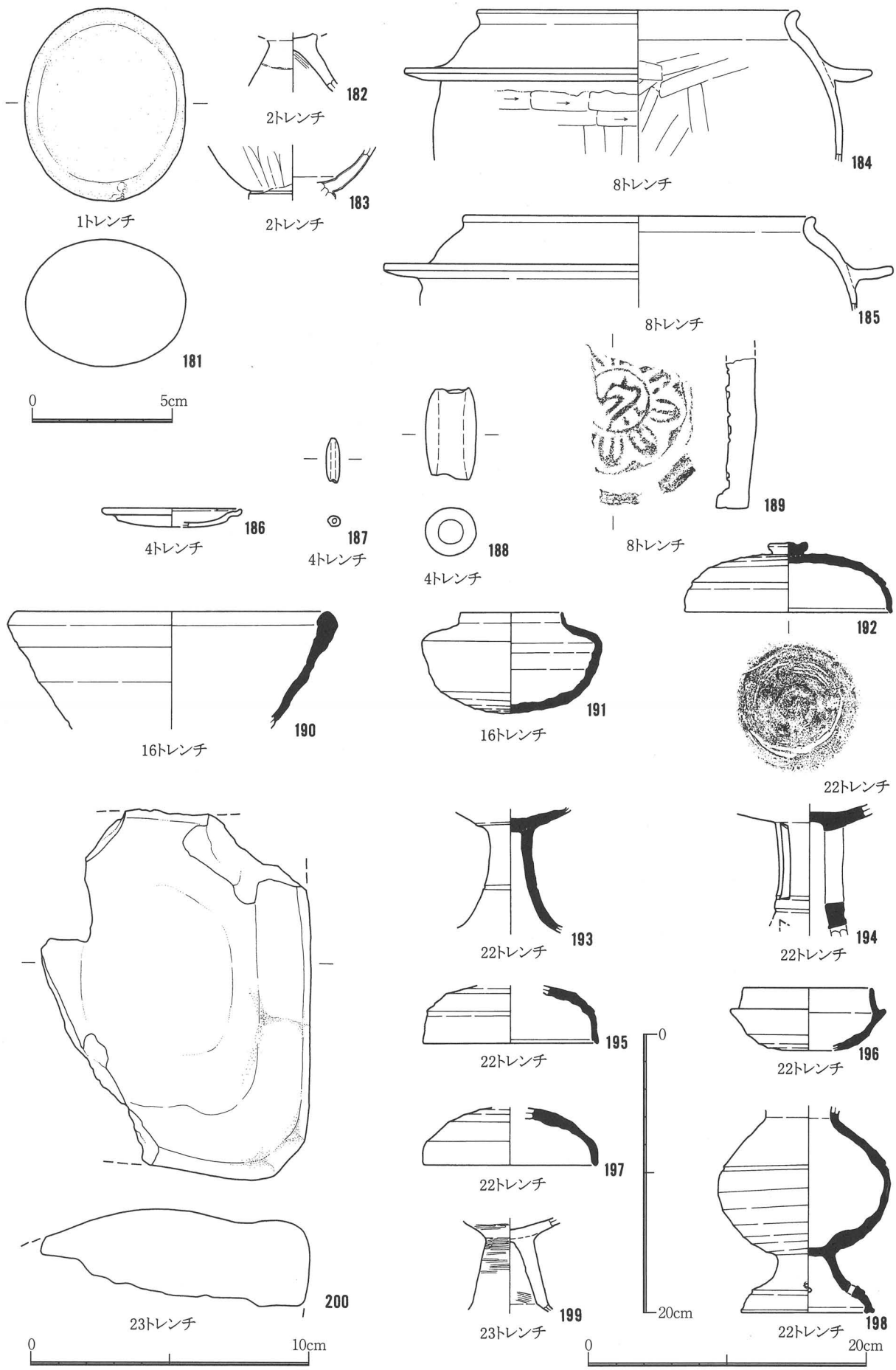
22 トレンチ（第 25 図）　21 トレンチから東へ約 18 m付近に設定したトレンチである。層序は上から盛土（約 0.42 m）、旧耕土（約 0.15 m）、床土（約 0.05 m）、暗灰色粘質土（約 0.45 m・包含層）、黒灰色粘質シルト（約 0.15 m）であり、地山は灰色砂礫である。地山面の高さは T.P ＋ 6.58 mをはかる。黒灰色粘質シルトより下層は河川 B001 の堆積と考えられる。本トレンチは、南北流する河川 B001 の東岸に近いところに位置するものと考えられる。また、６世紀後半頃の

須恵器がまとまって出土しており、その中でも口縁部を欠いていたが須恵器台付長頸壷が出土している。

23 トレンチ（第 25 図）　11 トレンチから北へ約 27 m付近に設定した南北方向のトレンチである。層序は上から盛土（約 0.4 m）、灰色土（約 0.3 m）、床土（約 0.05 m）、黄茶色土（約 0.15 m）、灰色砂質土（約 0.3 m）であり、地山は茶灰色粘質土である。地山面の高さは T.P ＋ 6.6 mをはかる。遺構、遺物とも検出されている。弥生後期末の土器片、6 世紀頃の円筒埴輪片、6 世紀後半頃の須恵器や土師器片、黒色土器片（内黒）、木製板などの遺物が出土している。

24 トレンチ　12 トレンチから北へ約 18 m付近に設定した南北方向のトレンチである。層序は上から表土（約 0.3 m）、耕土（約 0.3 m）、床土（約 0.06 m）、黄灰色粘質土（約 0.17 m）であり、地山は茶灰色粘質土である。地山面の高さは T.P ＋ 6.8 mをはかる。

25 トレンチ　24 トレンチから東へ約 17 m付近に設定した南北方向のトレンチである。層序は上から表土（約 0.33 m）、耕土（約 0.12 m）、暗灰色粘質土（約 0.17 m）であり、地山は黄色砂質土である。地山面の高さは T.P ＋ 7.06 mをはかる。旧石器のサヌカイト剥片や土師器片などの遺物が出土している。

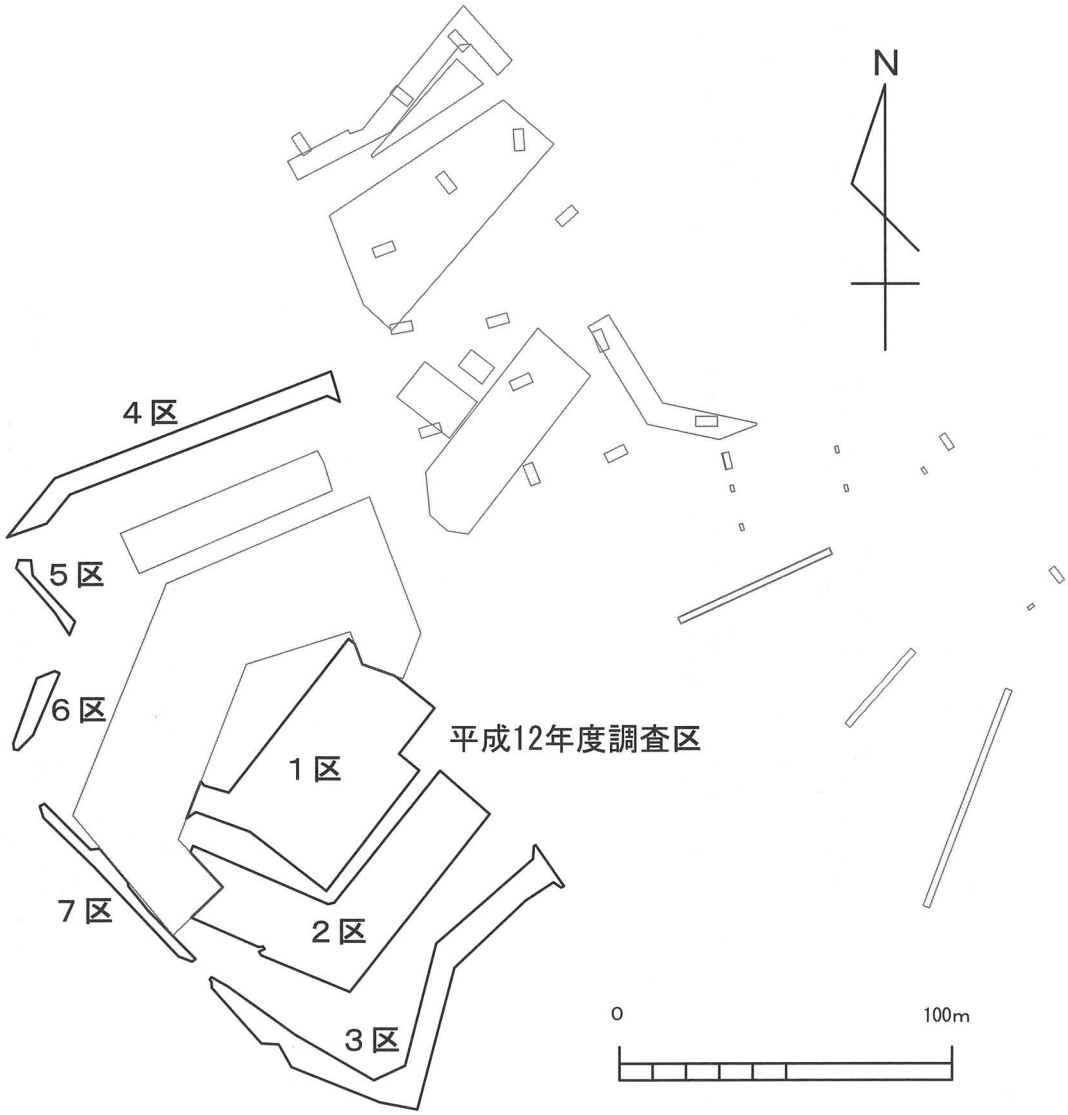


第 26 図　平成 11 年度　試掘調査区出土遺物①各トレンチ (S=1/4, 1/2)

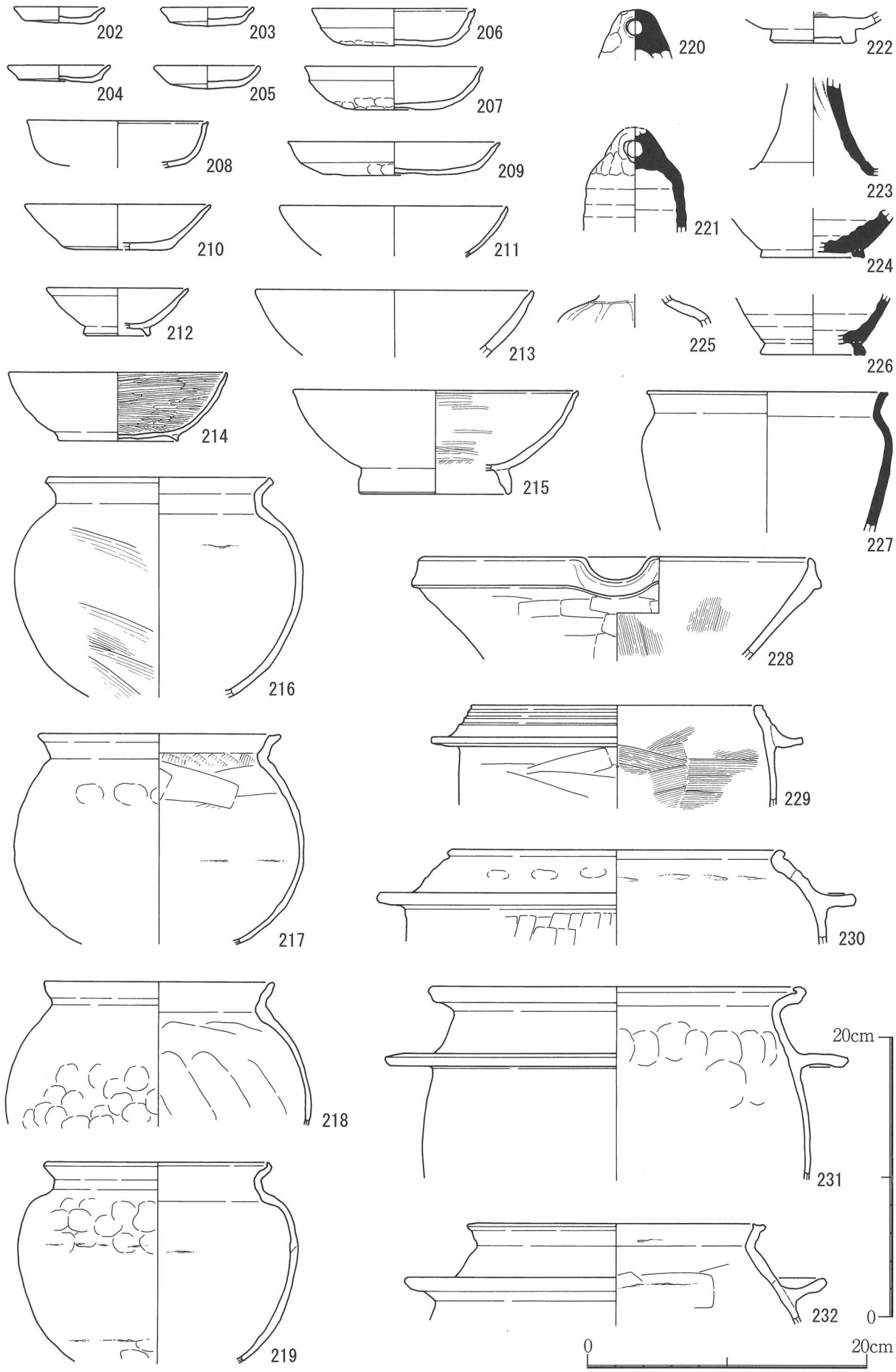
第 27 図　平成 11 年度　試掘調査区出土遺物② 16 トレンチ紀年木簡 (S=1/2)

第２節　平成 12 年度の調査（第 28 図）

調査は遺跡の中央部分の 4000 ㎡を７区に分割して行った。１区は平成 11 年度Ａ区の東南に位置する西北・東南長 32 m、東北・西南長 50 m、面積 1600 ㎡である。２区は１区の南に位置する「く」の字形の調査区で、幅 16 mで西北から東南へ約 36 m延び１区の南角を屈曲点として東北に 41 m延び面積は 720 ㎡である。３区は２区の南に位置する。幅約６mで西北から東南へ約 50 m延び東北東へほぼ直角に屈曲し、約 36 mで更に東北へ「く」の字に屈曲し約 32 m延びる細長い調査区である。４区は平成 11 年度Ｂ区の北北西 12 mに位置する幅６mで東北東から南南西に約 70 m延び西南に屈曲し約 10 m延びる細長い調査区である。５区は４区西南端から南に 10 m離れたところから幅約３mで東南へ約 20 m延びる細長い調査区である。６区は５区東南端から南に約 10 m離れたところから幅約３mで南南西に約 20 m延びる細長い調査区である。７区は６区の南南西端から南に約 18 m離れた位置から幅約２mで東南へ 50 m延びる細長い調査区である。中央部分約 12 mは幅が３mとなっている。



第 28 図　平成 12 年度調査区配置図



第 29 図　平成 12 年度 1 区第 1 層出土遺物実測図

１区の調査（第 30 図）

調査範囲上面の高さは西南半部で T.P. ＋ 6.7 ～ 6.8 m、東北半部で T.P. ＋ 7.2 mを測る。基本土層は第１層が住宅建設時の盛り土で深度 0.2 ～ 0.6 mを測り、調査区全域にある。調査区東北半部はこの盛り土のみで T.P. ＋ 6.9 mで褐色土の地山となり、西南半部は段がつき低くなる。西南半部は第２層が灰色土（旧耕作土）0.1 ～ .2 m、第３層が灰黄色土（床土）0.05 ～ 0.1 m、第４層が黄灰色粘質シルト 0.2 m、第５層が灰色粘質シルト 0.2 m、第６層が灰黄褐色粘土 0.15 ～ 0.2 mで灰黄褐色粗砂・灰褐色砂礫互層や黄褐色粘土の地山となる。遺構面は３面確認した。第１面は第４層上面で、T.P. ＋ 6.3 ～ 6.4 mを測る。第２面は第５層上面で T.P. ＋ 6.1 mを測る。第３面は西南半部の地山面で T.P. ＋ 5.7 ～ 5.8 mを測る。東北半部は遺構面が１面しか確認できていないが、本来は西南半部で確認した各面に対応する遺構面が各々分かれていたか同一であったかは不明であるが、旧耕作土・床土等も一切確認できなかったことから、住宅建設時に相当削平されたようである。

第１面は東北半部では撹乱が多く、東北端・東端・中央付近で土坑等を検出した。。西南半部では溝・土坑・柱穴等を検出した。

ＳＤ０１６（第 30 図）は調査区中央部から東南辺に平行し、西南辺から調査区外に延びる溝である。検出長約 20 m、幅約４m、深度 0.8 ～ 0.9 mを測る。出土遺物は土師小皿・瓦器碗・須恵質ネリ鉢・瓦質羽釜・土師羽釜等（第 32 図－ 233 ～ 250）である。

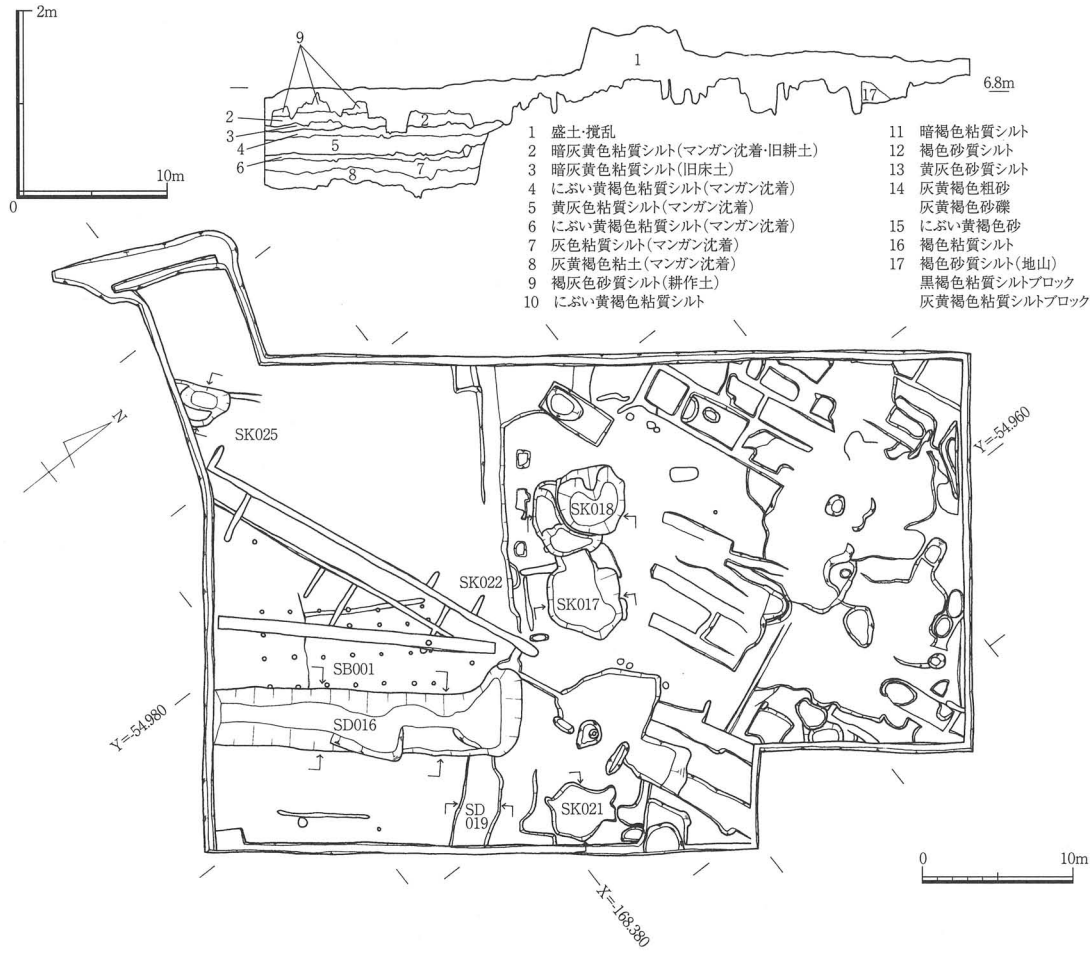
ＳＢ００１（第 31 図）はＳＤ０１６の西北に接する掘立柱建物である。Ｐit ０３０～０５４により構成されている。２間×５間で西北と東北に庇を伴う。東南面はＳＤ０１６にＰit ０４３～０４５が一部切られており、ＳＤ０１６よりも古いことが判るが、本来の規模は不明である。梁間は 1.9 mで梁行きは 3.8 mを測る。桁間は 1.9 mで桁行きは 9.5 mを測る。庇間は 1.2 mである。Ｐit ０３０からは須恵器杯蓋・黒色土器等（第 32 図－ 251・254）、Ｐit ０３１からは須恵器杯蓋（第 32 図－ 252）、Ｐit ０３５からは須恵器杯蓋（第 32 図－ 253）が出土した。

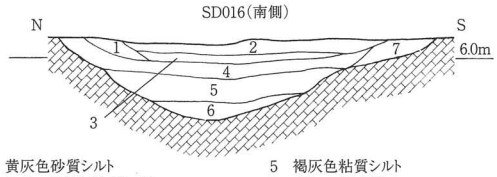
ＳＫ０２１（第 30 図）はＳＤ０１６東北端の東４mに位置する不定形の土坑である。東南～西北長 3.6 m、東北～西南長 4.6 m、深度 0.3 mを測る。

ＳＫ０２２（第 30 図）は調査区中央部で検出した半円形の土坑である。西南半部を撹乱により欠失している。残存長径 1.8 m、残存短径 0.6 m、深度 0.15 mを測る。出土遺物は土師碗（第 32 図－ 259・260）等である。

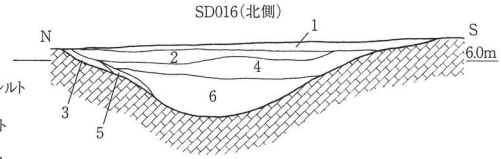
ＳＫ０２５（第 30 図）は調査区西南隅で検出した不整円形の土坑である。西南端部は調査区外に続く。東北～西南長 3.4 m、西北～東南長 2.7 m、深度 0.55 mを測る。出土遺物は黒色土器碗（第 30 図－ 261 ～ 268）等である。

ＳＫ０１７（第 30 図）は調査区中央部で検出した不整形の土坑である。西北端部をＳＫ０１８により切られており、ＳＫ０１８より古い。西北～東南長 6.0 m、東北～西南長 4.8 m、深度 0.5 mを測る。出土遺物は土師碗（第 33 図－ 269 ～ 286）等である。

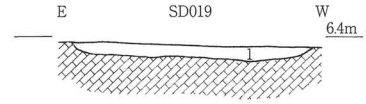




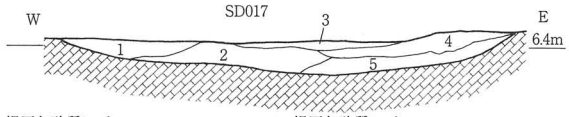
1 黄灰色砂質シルト
2 にぶい黄褐色砂質シルト
3 褐灰色砂質シルト
4 黄灰色粘質シルト
5 褐灰色粘質シルト
6 オリーブ黒色粘土
7 褐灰色砂質シルト(ブロック混じり)



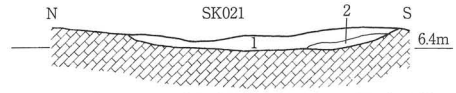
1 暗オリーブ砂質シルト
2 褐色粘質シルト
3 黄灰色粘質シルト
4 灰色粘質シルト
5 褐灰色砂質シルト
6 オリーブ黒色粘土



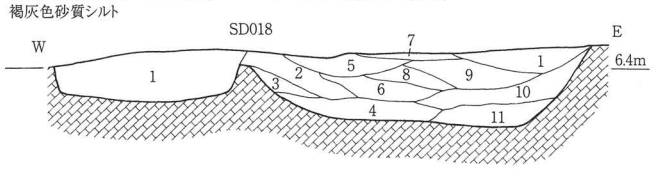
1 褐灰色粘質シルト(マンガン含む)



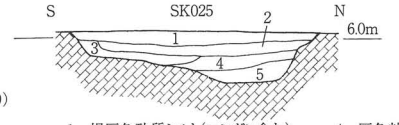
1 褐灰色砂質シルト
2 黄褐色粘質シルト
褐灰色砂質シルト(ブロック混じり)
3 褐灰色砂質シルト
4 褐灰色砂質シルト
黄褐色砂質シルト(ブロック混じり)
5 黄褐色粘質シルト(地山)



1 褐色砂質シルト(地山)
黒褐色粘質シルト(ブロック含む)
灰黄色粘質シルト(ブロック含む)
2 褐灰色粘質シルト



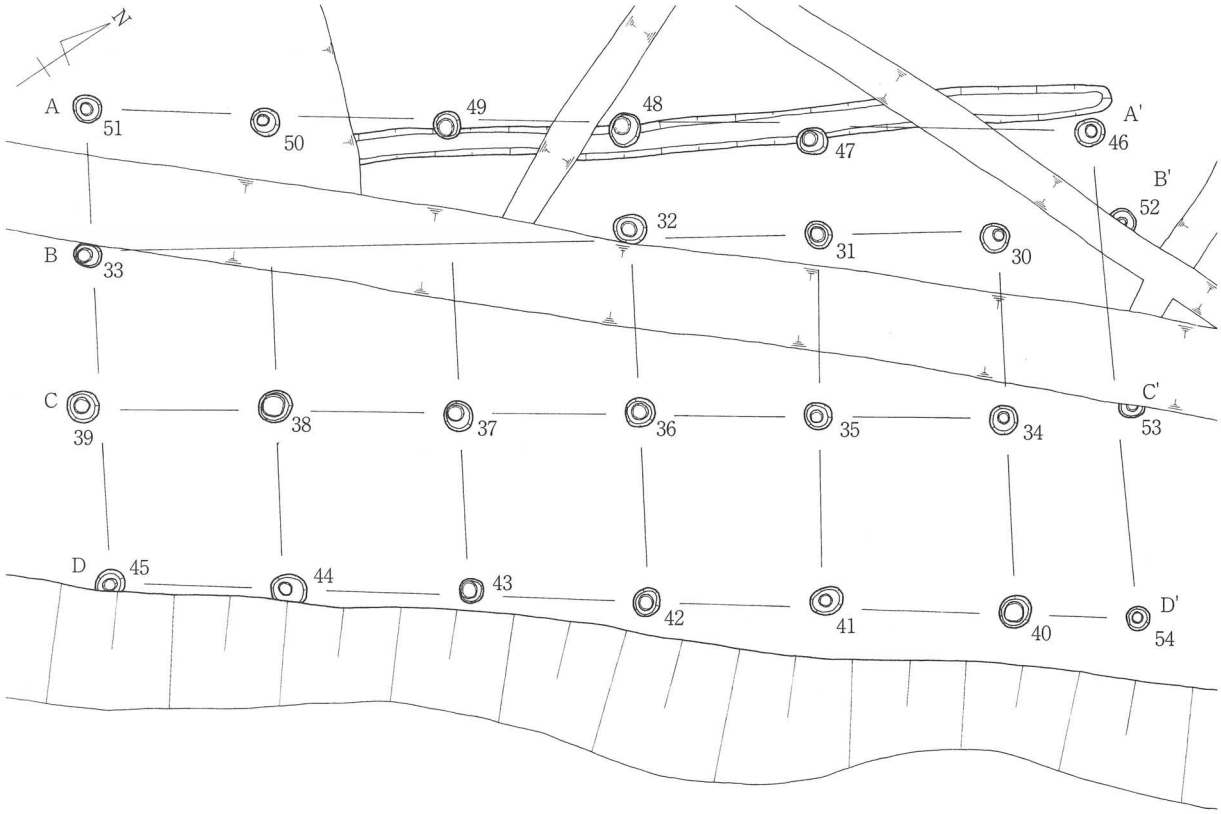
1 褐色砂質シルト(地山)
黒褐色粘質シルト(ブロック混じり)
灰黄褐色粘質シルト(ブロック混じり)
2 にぶい黄褐色粘質シルト(マンガン含む・ブロック混じり)
3 にぶい黄褐色粘質シルト(マンガン沈着)
4 灰色砂質シルト
5 灰黄褐色粘質シルト(マンガン含む)
6 にぶい黄褐色粘質シルト(マンガン含む・ブロック混じり)
7 褐灰色砂質シルト
8 黄灰色粘質シルト(マンガン含む・ブロック混じり)
9 灰黄褐色砂質シルト(マンガン含む・ブロック混じり)
10 褐灰色砂質シルト
11 黒褐色砂質シルト(ブロック混じり)

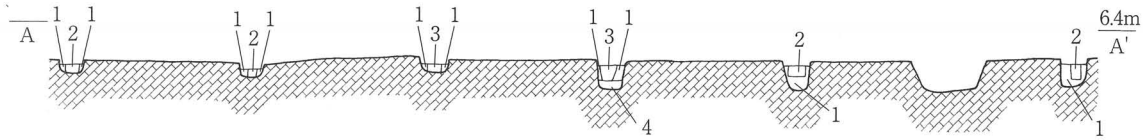


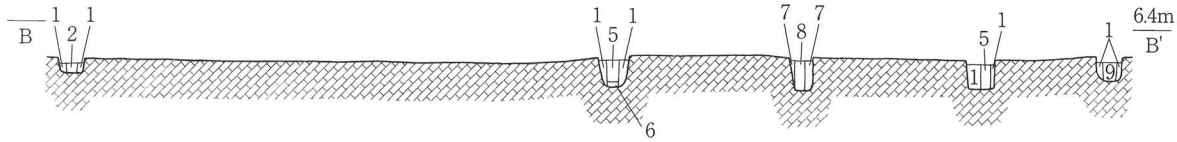
1 褐灰色砂質シルト(マンガン含む)
2 黄灰色粘質シルト
3 灰色粘土
4 灰色粘土
5 褐灰色粘土

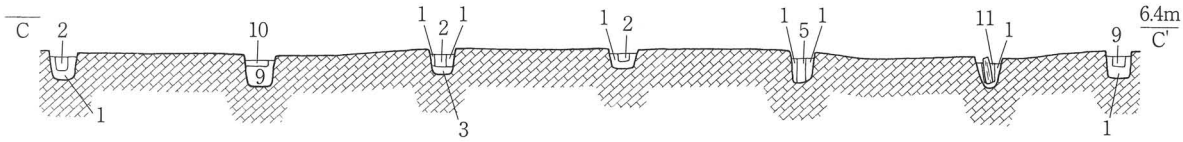
0 4m

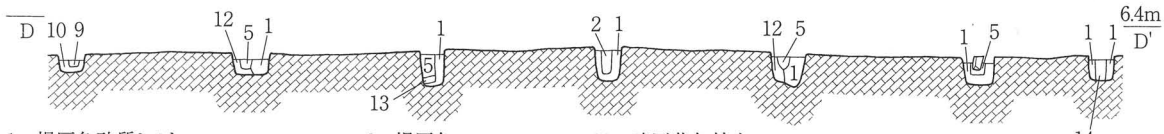
第 30 図　平成 12 年度 1 区平面図・断面略図・遺構断面図







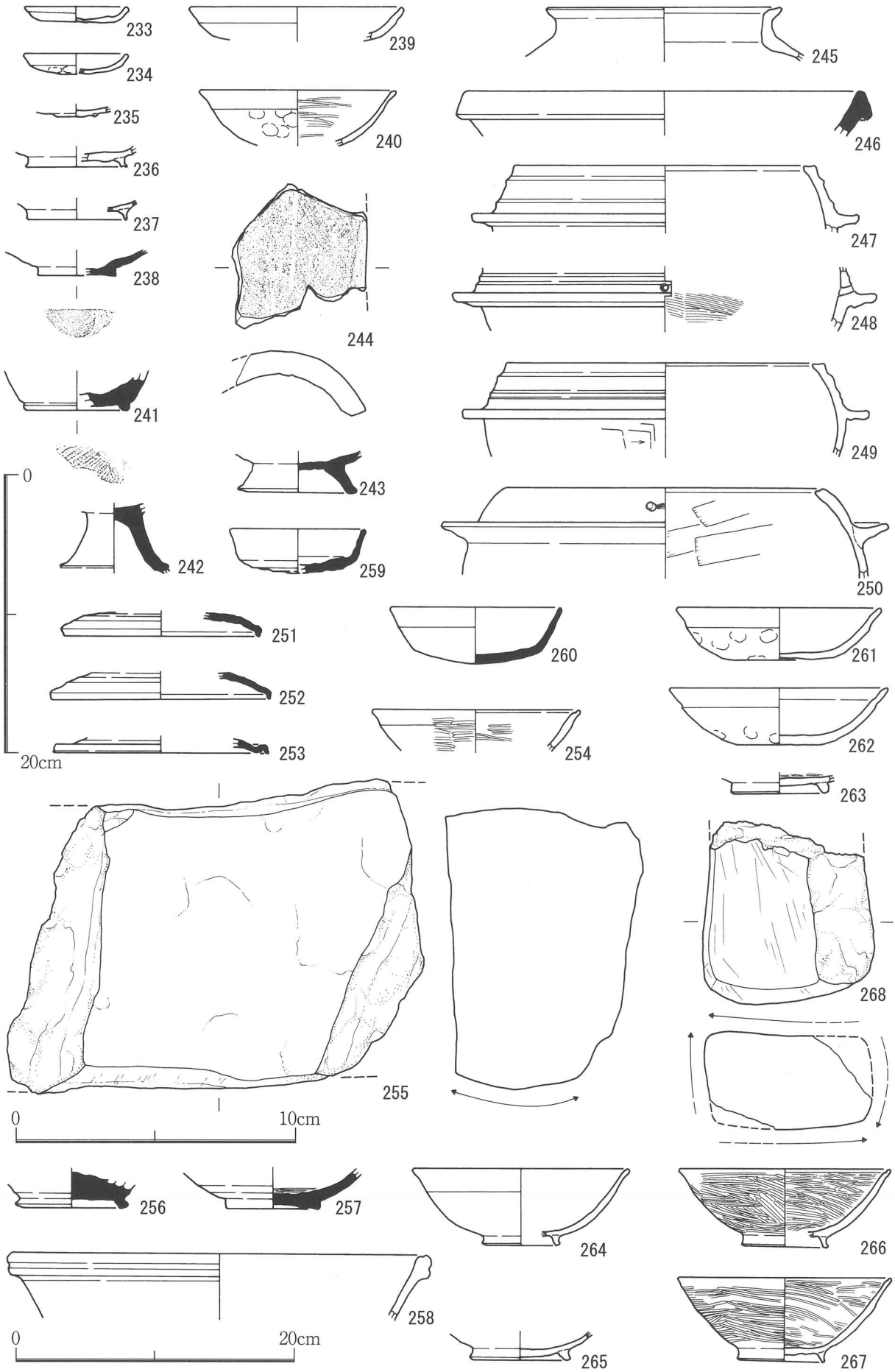




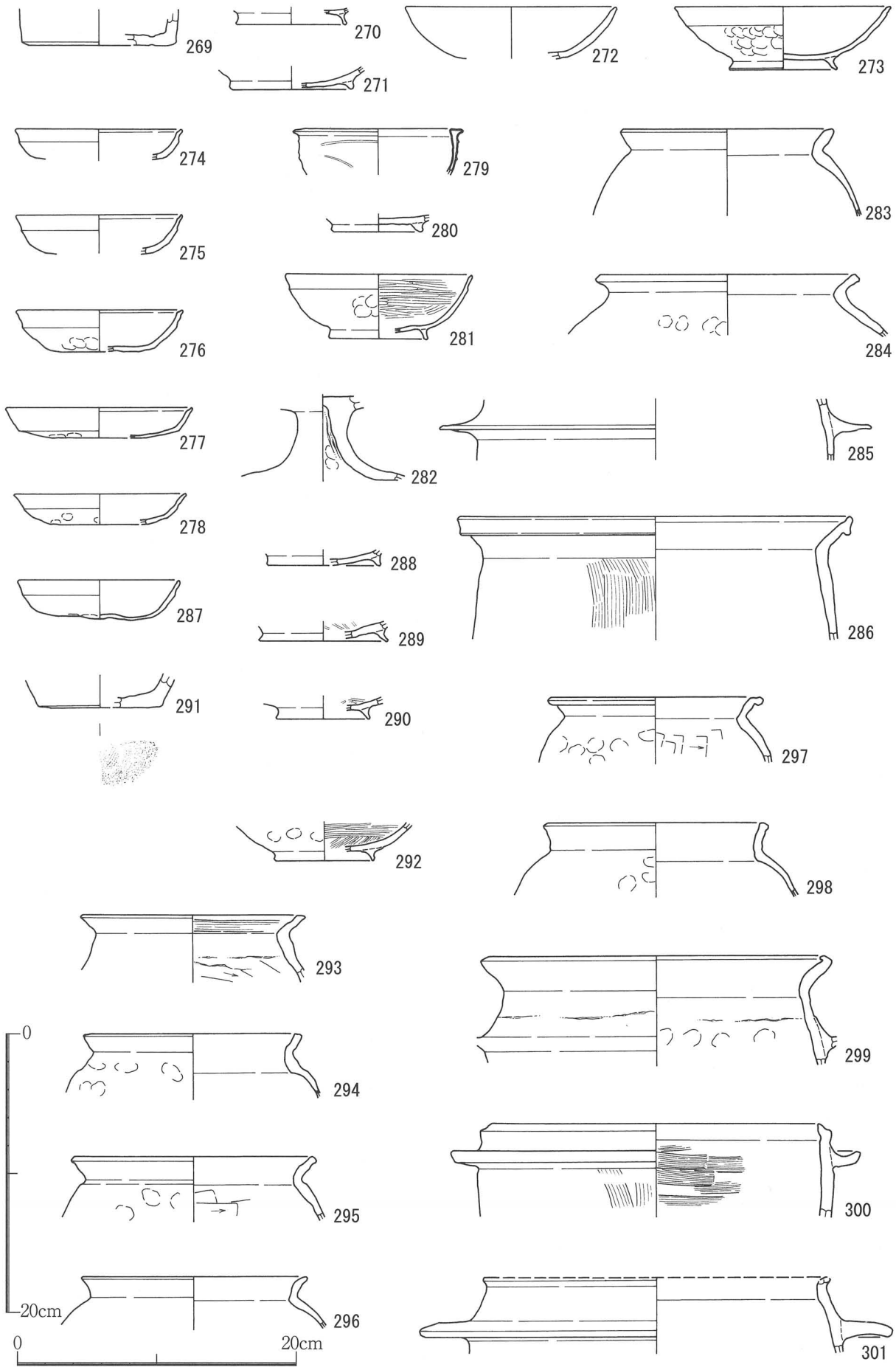
1　褐灰色砂質シルト
　　黄褐色マンガン含む
2　暗灰黄色砂質シルト
3　褐灰色粘質シルト
4　にぶい黄褐色粘質シルト
5　褐灰色粘質シルト（炭化物混じり）
6　褐灰色
7　褐灰色砂質シルト
　　黄褐色炭化物混じり
8　褐灰色粘質シルト
9　褐灰色砂質シルト
10　にぶい黄褐色
11　暗灰黄色粘土
12　にぶい黄褐色粘質シルト
13　黒褐色粘土（炭化物焼土混じり）
14　にぶい黄褐色砂質シルト

0　4m

第 31 図　平成 12 年度 1 区ＳＢ 001 柱穴配置図・断面図



第32図　平成12年度1区ＳＤ016・ＳＫ022・025・Ｐit030・031・035出土遺物実測図



第33図　平成12年度1区ＳＫ017・018・019出土遺物実測図

ＳＫ０１８（第30図）はＳＫ０１７の西南に位置する不整円形の土坑である。東北～西南長3.7 m、西北～東南長4.5 m、深度0.85 mを測る。出土遺物は土師皿・碗・甕・羽釜等（第33図－288～293）である。

ＳＤ０１９（第30図）はＳＤ０１６の東北端から東南に延び、調査区外へと続く溝である。検出長6.5 m、幅2.55 m、深度0.2 mを測る。出土遺物は土師皿・土師碗・黒色土器碗・土師甕・土師壷・土師羽釜等（第33図－294～300）である。

第２・３面は西南隅部で確認したのみであるが、遺構は浅い掘り込みを僅かに確認した程度である。

２区の調査

調査範囲上面の高さは西北部でT.P.＋6.5～6.6 m、屈曲部でT.P.＋6.7 m、東北部でT.P.＋7.2 mを測る。基本土層は第１層が住宅建設時の盛り土で深度0.2～0.6 mを測り、調査区全域にある。調査区東北部約10 mはこの盛り土のみでT.P.＋6.9 mで黄褐色土の地山となり、中央部から屈曲部側に段がつき低くなる。屈曲部から西北部は第２層が灰色土(旧耕作土)0.1～.2 m、第３層が灰黄色土（床土）0.05～0.1 m、第４層が黄灰色粘質シルト0.2 m、第５層が灰色粘質シルト0.2 m、第６層が灰黄褐色粘土0.15～0.2 mで灰黄褐色粗砂・灰褐色砂礫互層や黄褐色粘土の地山となる。遺構面は３面確認した。第１面は第４層上面で、西北端部でT.P.＋6.3 m、東北中央部で6.5 mを測る。第２面は第５層上面で西北端部でT.P.＋6.0 m、東北中央部で6.2 mを測る。第３面は西北部から屈曲部を経て東北中央部の地山面でT.P.＋5.7～6.0 mを測る。東北端部は遺構面が１面しか確認できていないが、本来は西北半部で確認した各面に対応する遺構面が各々分かれていたか同一であったかは不明であるが、旧耕作土・床土等も一切確認できなかったことから、１区同様住宅建設時に相当削平されたようである。

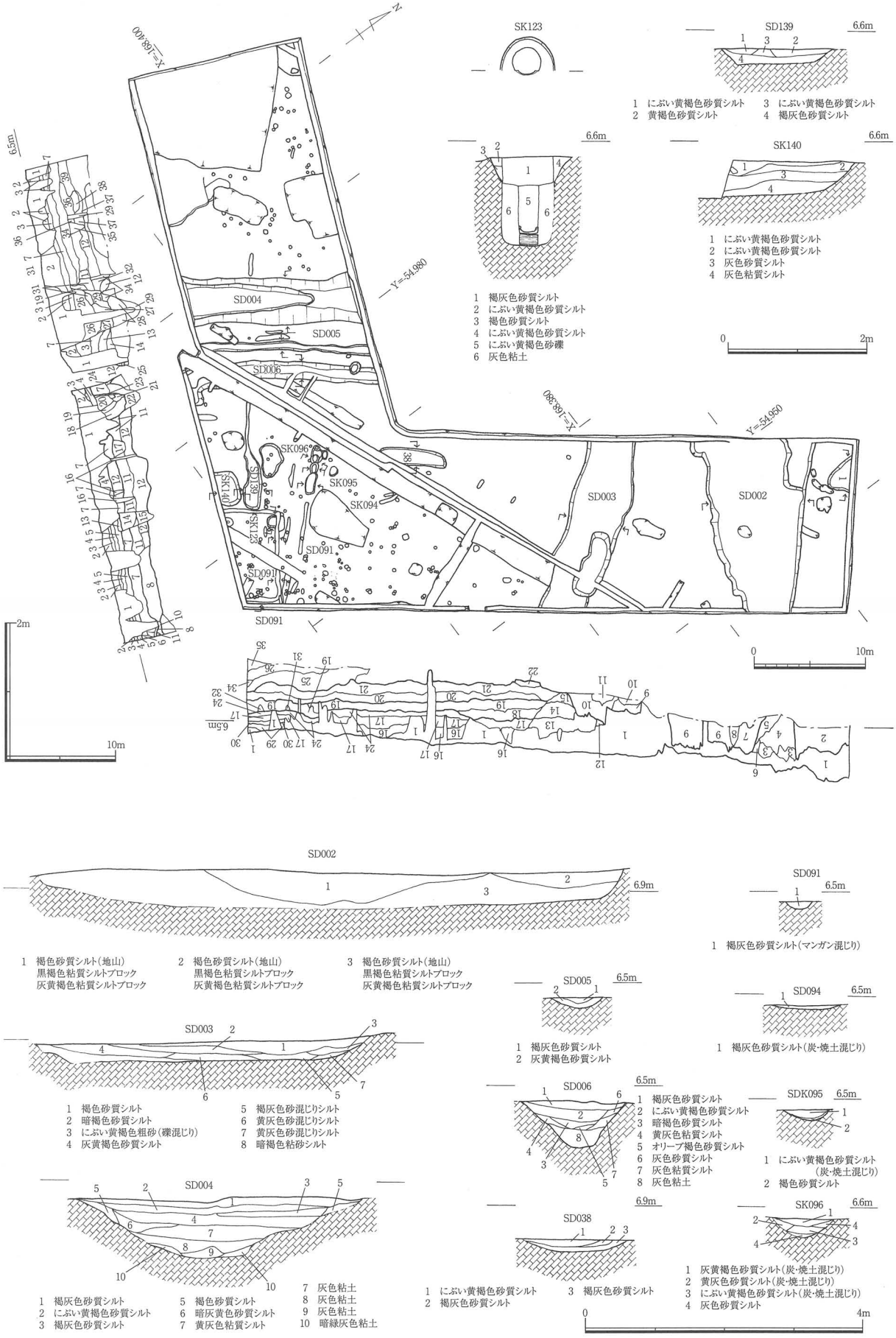
第１面（第34図）

ＳＫ００１（第34図）は調査区東北端部で検出した不整形の土坑である。東北端部は調査区外に続く西北～東南長3.2 m、東北～西南検出長2.0 m、深度0.15 mを測る。遺物は須恵器杯・土師皿・平瓶等（第35図－301～304）が出土した。

ＳＤ００２（第34図）東北部で検出した東南～西北へ調査区を横断する溝である。検出長15 m、幅4.3～8.2 m、深度0.6 mを測る。遺物は土師小皿・土師杯・土師羽釜・土師鉢・土師甕・須恵器甕等（第35図－305～313）が出土した。

ＳＤ００３（第34図）は東北中央部で検出した東南から西北へ調査区を横断する溝である。検出長15 m、幅4.0～5.5 m、深度0.4 mを測る。位置からは１区のＳＤ０１９に繋がる。埋土は７層に分かれ１・２層から瓦質小皿・土師碗・瓦器碗（第36図－314～323・331～337）が出土し、３～７層から土師小皿・瓦器碗・須恵質ネリ鉢・甕・瓦質羽釜・瓦質甕等（第36図－324～330・338～342）が出土した。

ＳＤ００４（第34図）は西北中央部で東北～西南へ調査区を横断する溝である。検出長15 m、



第 34 図　平成 12 年度２区第１面平面図・断面略図・遺構埋土断面図

幅 4.0 ～ 4.5 m、深度 0.9 mを測る。位置・規模・埋土の状況から１区のＳＤ０１６に繋がる。遺物は１～４層から瓦質小皿・瓦器碗・土師質羽釜等（第 37 図－ 343 ～ 345）が出土し、５～ 10 層から土師小皿・瓦器碗・土師質甕・瓦質甕・瓦質羽釜・土師質羽釜（第 37 図－ 346 ～ 371）・巴紋軒丸瓦・「佛」字蓮華紋軒丸瓦等（第 38 図－ 372 ～ 382）が出土した。

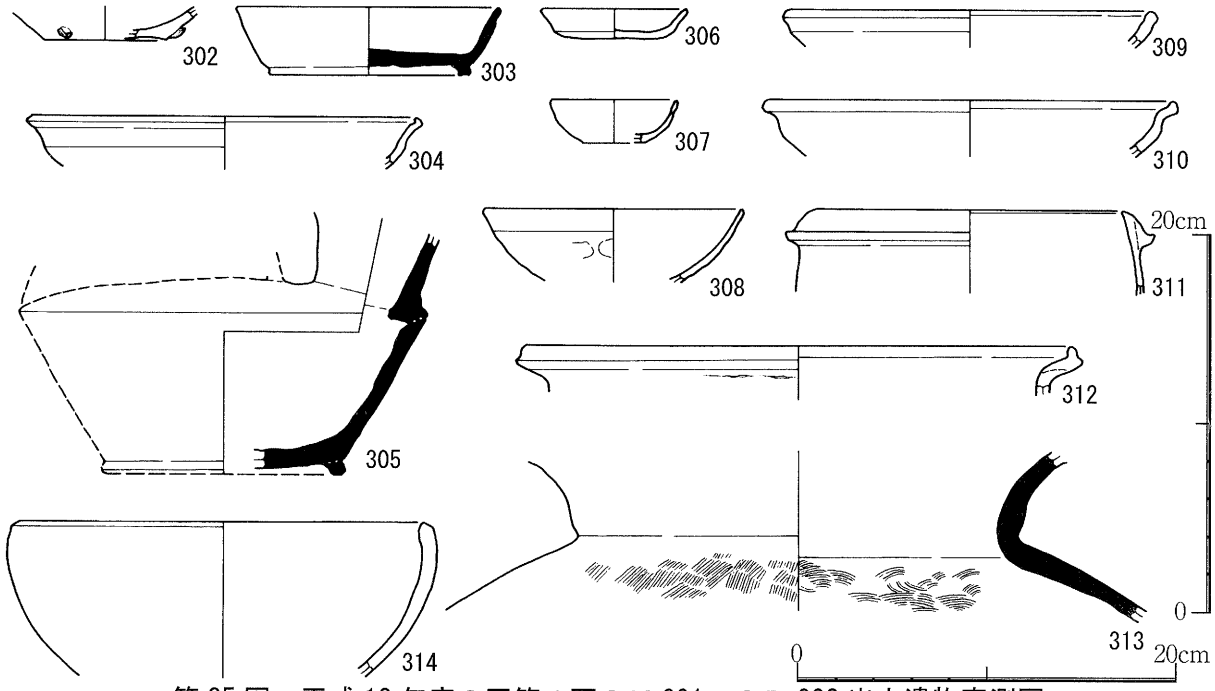
ＳＤ００５（第 34 図）はＳＤ００４の東南１ｍで平行し、東北～西南へ調査区を横断する溝である。検出長 15 m、幅 0.4 ～ 1.0 m、深度 0.2 mを測る。遺物は（第 39 図－ 383 ～ 410）が出土した。

ＳＤ００６（第 34 図）はＳＤ００５の東南１ｍで平行し、東北～西南へ調査区を横断する溝である。検出長 15 m、幅 1.5 ～ 1.8 m、深度 0.7 mを測る。遺物は（第 40 図－ 411 ～ 425）が出土した。

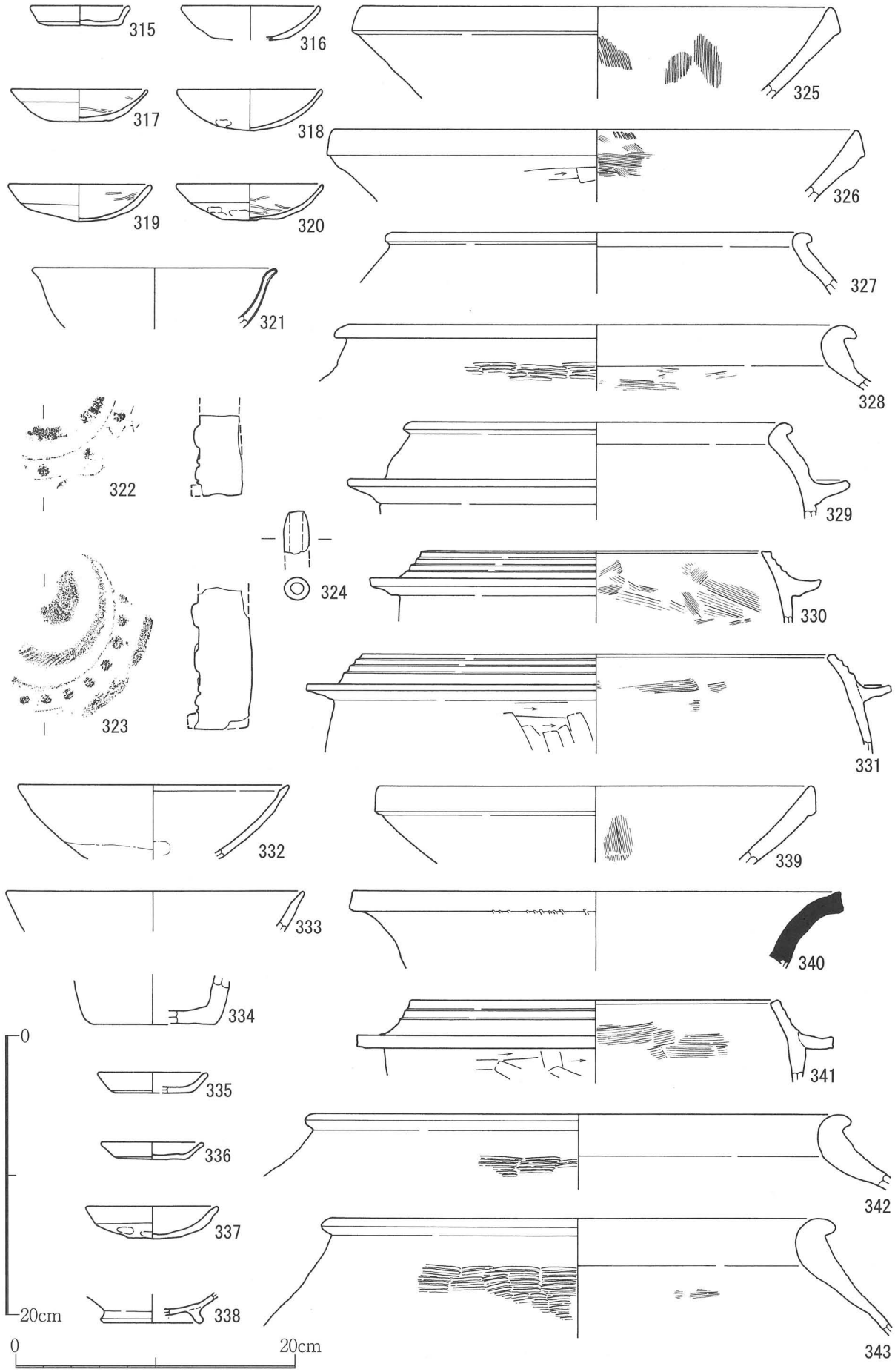
ＳＤ０３８（第 34 図）は屈曲部内側で東北から西南へ延びる溝である。西南端は撹乱により欠失している。検出長 6.0 m、幅 1.5 m、深度 0.2 mを測る。

ＳＢ００２は屈曲部で検出した掘立柱建物である。Ｐit０２５・０３０・０３２・０３４・０３６・０３９・０４０・０４３・０４５・０４８・０４９・０５０・０５３・０５４・０５５・０５６・０５７・１９９・２０１により構成されている。東北～西南２間×東南～西北４間の建物で梁間は 1.9 mで梁行きは 3.8 mを測る。桁間は 1.9 mで桁行きは 7.6 mを測る。５箇所で柱穴が重複しており、建て替えられたものと考えられる。Ｐit １９９は第２面で検出した遺構である。

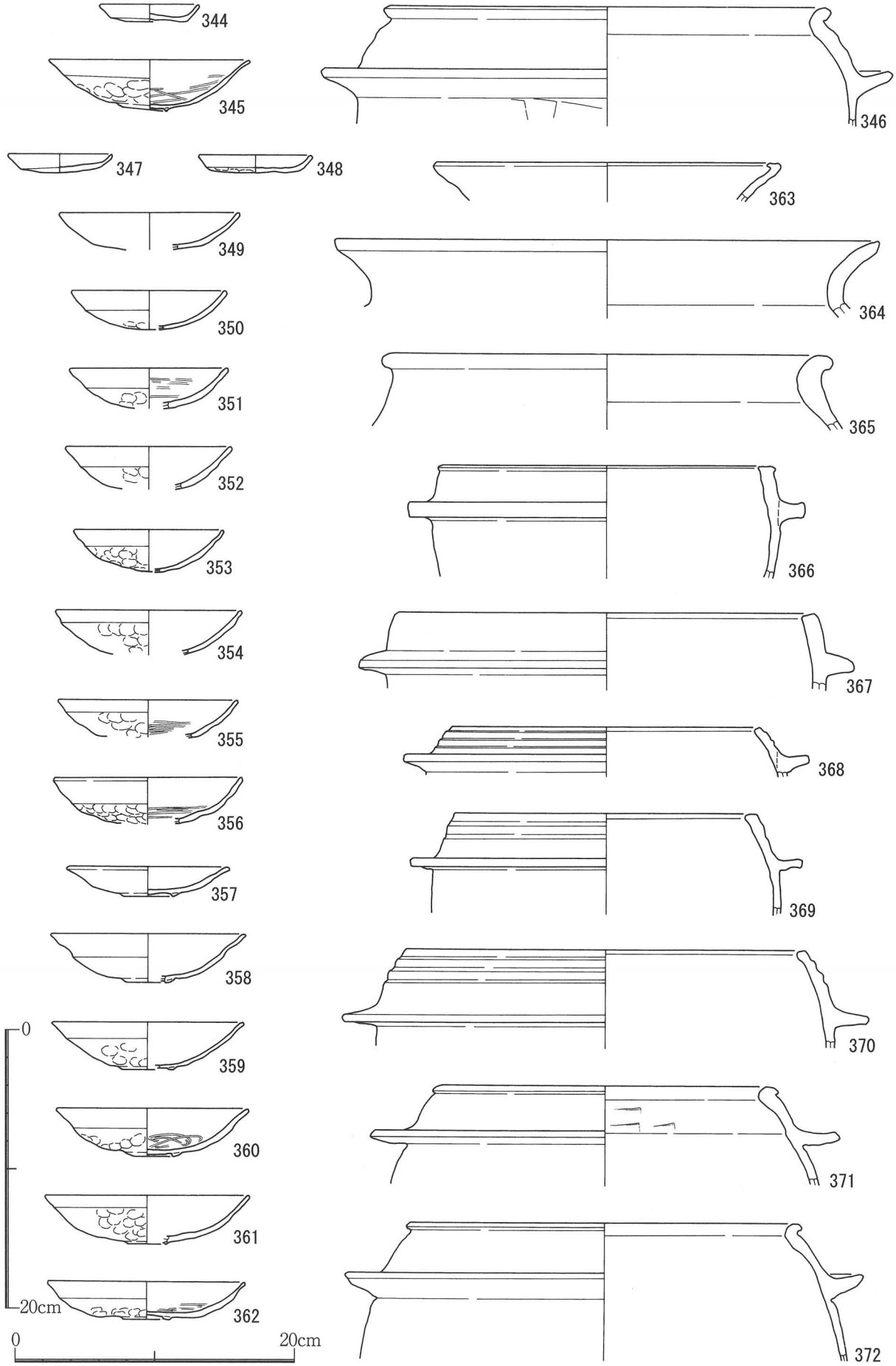
ＳＤ０９１（第 34 図）は調査区屈曲部外側で調査区西南辺東南端から始まり、東北へ３ｍ伸び、西北へ屈曲して８ｍ延び、更に西南へ屈曲して５ｍ延びて調査区外へ続く、「コ」の字形の溝である。幅 0.2 ～ 0.5 m、深度 0.05 ～ 0.1 mを測る。埋土は褐灰色砂質シルトである。遺物は（第 41 図



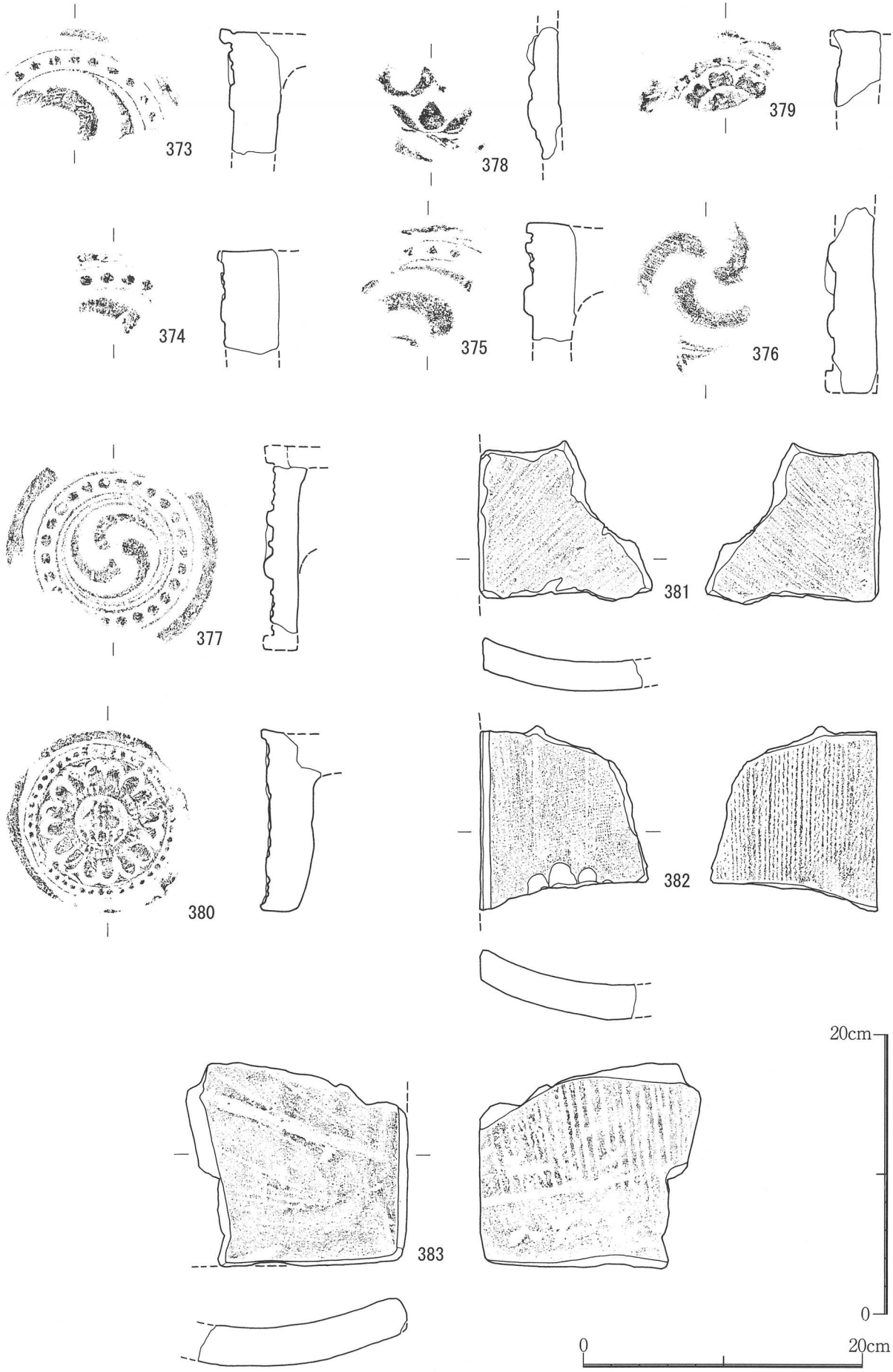
第 35 図　平成 12 年度２区第１面ＳＫ 001・ＳＤ 002 出土遺物実測図



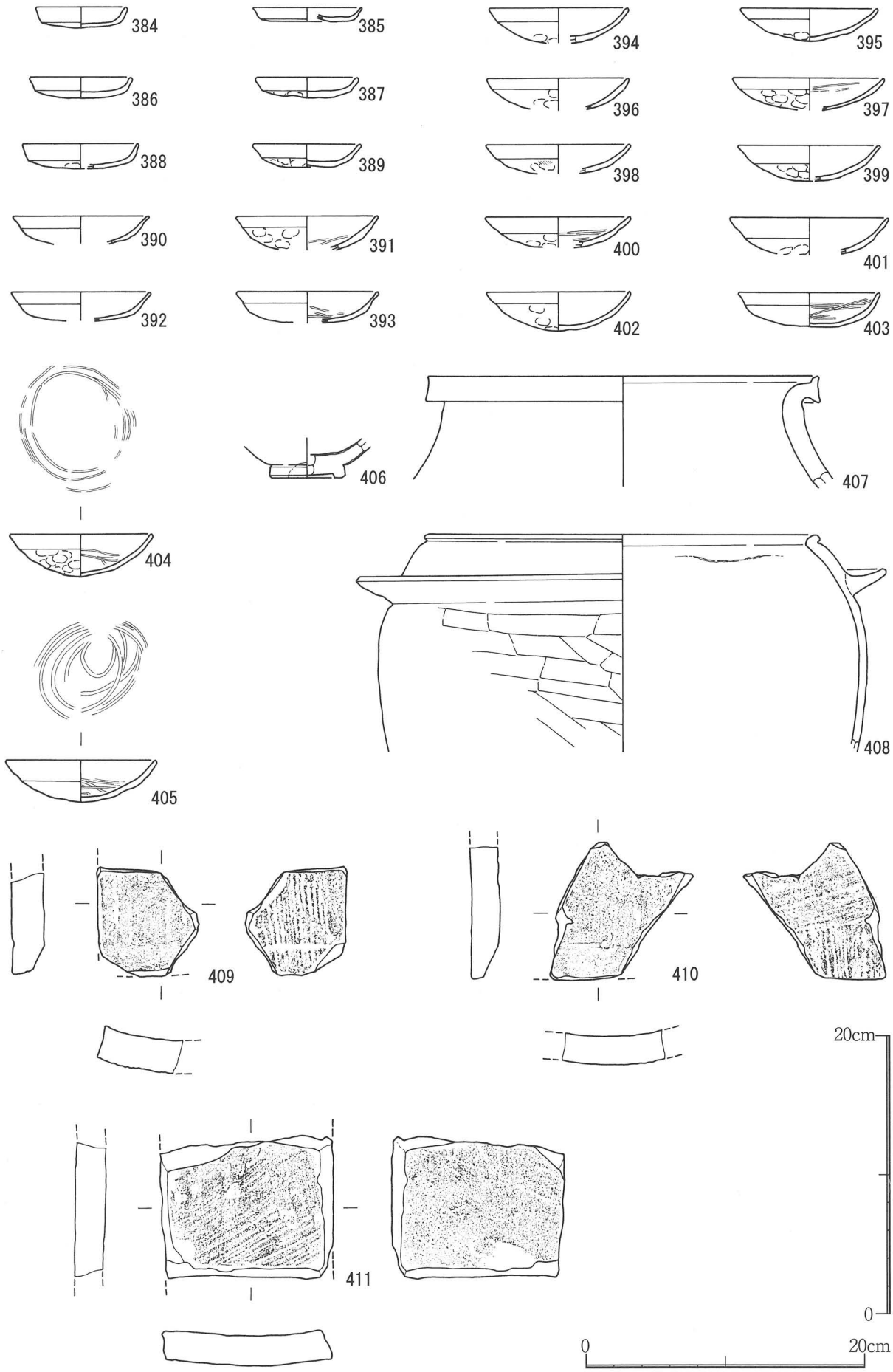
第 36 図　平成 12 年度２区第１面ＳＤ 003 出土遺物実測図



第 37 図　平成 12 年度２区第１面ＳＤ 004 出土遺物実測図 (1)



第38図　平成12年度２区第１面ＳＤ004出土遺物実測図（2）

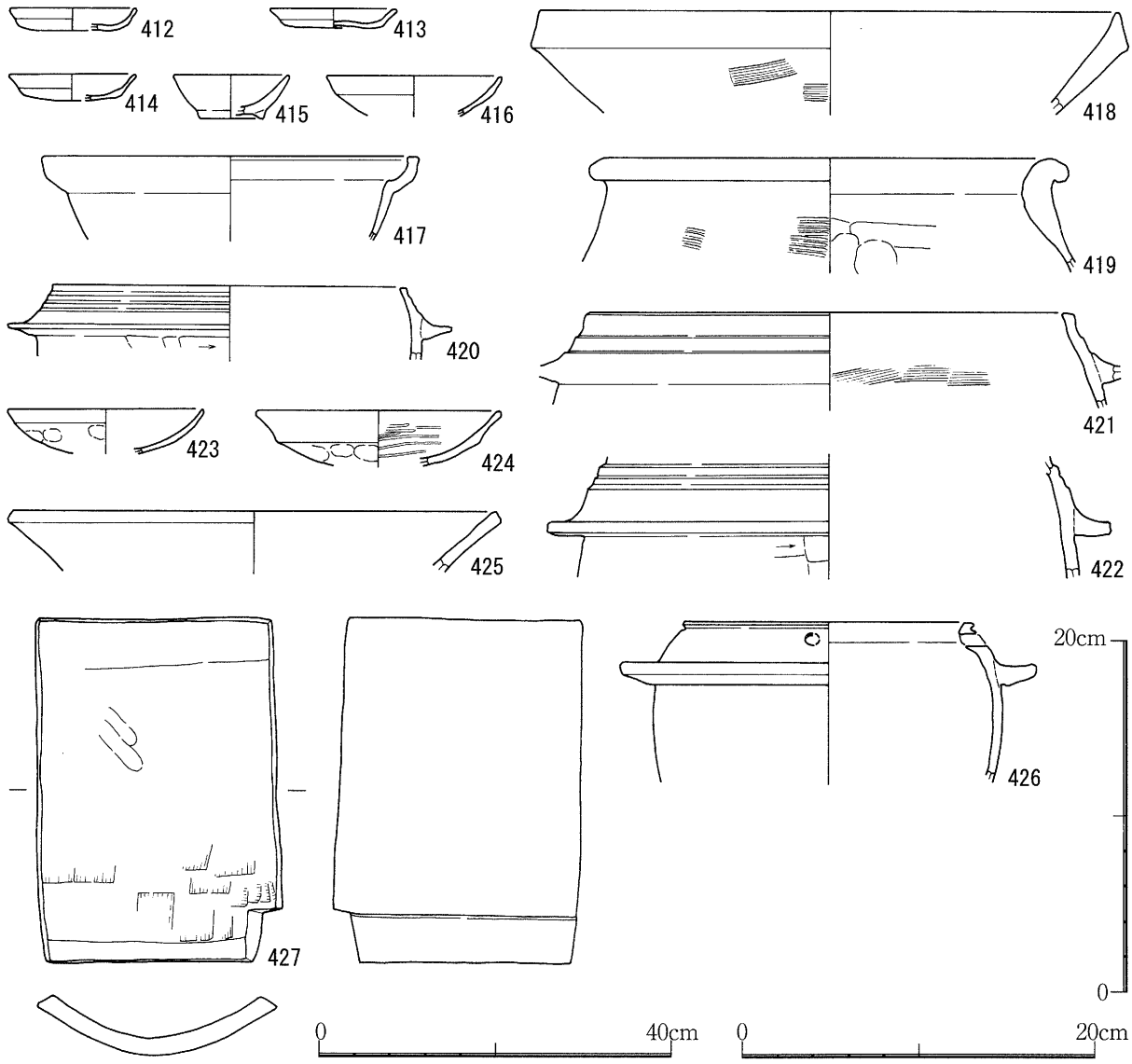


第 39 図　平成 12 年度２区第１面ＳＤ 005 出土遺物実測図

－426～446）等が出土した。

ＳＫ０９４（第34図）は調査区屈曲部で検出した東南～西北に長い不整楕円形の土坑である。長径2.0 m、短径0.9 m、深度0.1 mを測る。埋土は褐灰色砂質シルトである。　ＳＤ０９５（第34図）は調査区屈曲部で検出した東南～西北に長い楕円形の土坑である。東南端はＳＫ０９４に切られている。長径検出長0.9 m、短径0.7 m、深度0.2 mを測る。埋土は２層で、下層が褐色砂質シルト、上層が黄褐色砂質シルトである。　ＳＤ０９６（第34図）は調査区屈曲部で検出した東南～西北に長い不整円形の土坑である。長径検出長1.3 m、短径検出長1.0 m、深度0.3 mを測る。埋土は４層で、下から灰色砂質シルト0.05 m・黄褐色砂質シルト0.15 mが堆積した後、黄灰色砂質シルトが周辺に溜り、中央の窪みに灰黄褐色砂質シルトが0.1 m堆積している。

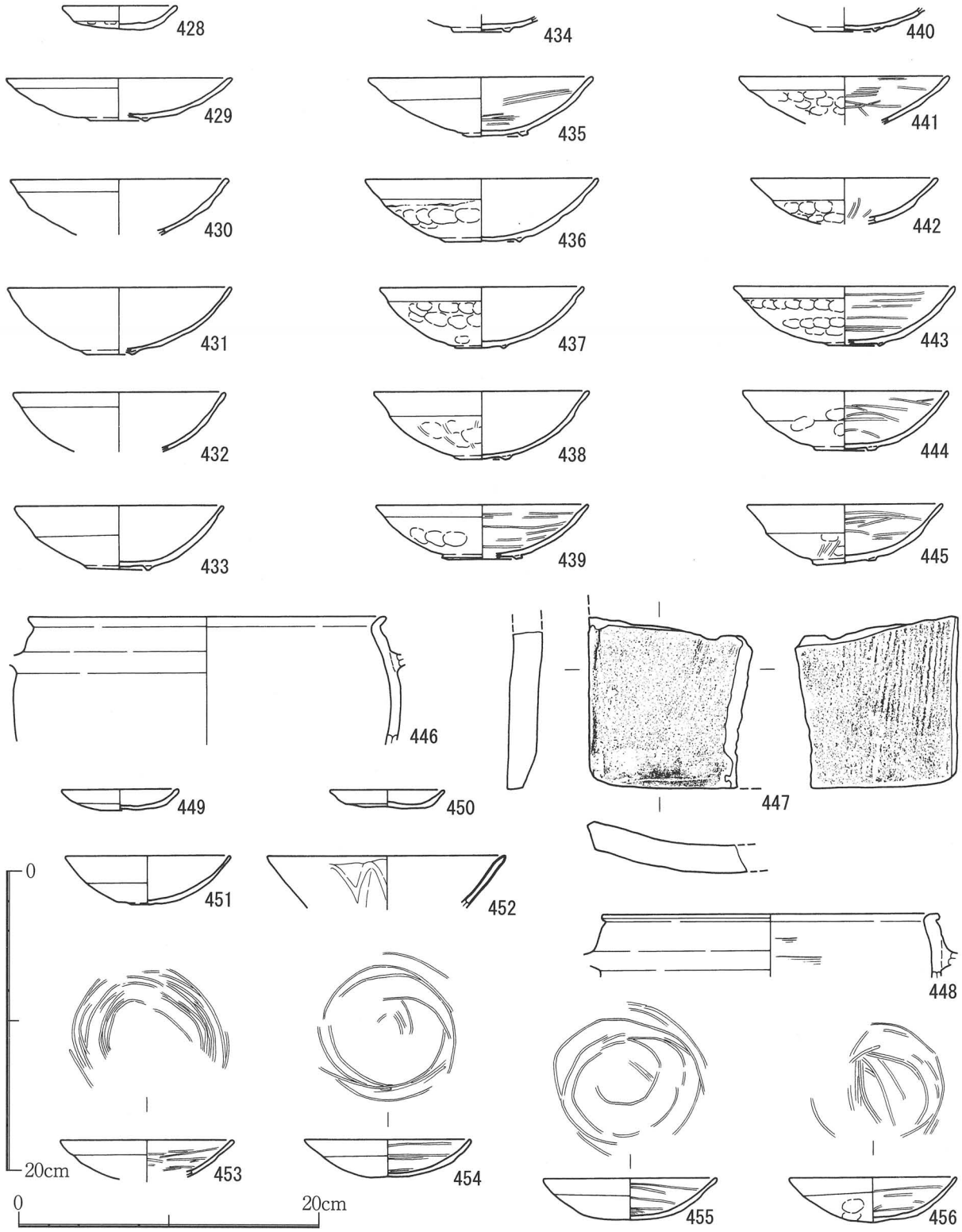
ＳＤ１３９（第34図）はＳＤ０９１の西北辺中央付近から西北に延びる琵琶形の溝である。検出長10 m、幅0.2～1.7 m、深度0.2 mを測る。東北部3.5 mは幅0.2～0.3 mと細く、東南部6.0 mは歪んだ楕円形となっている。遺物は（第41図－447～454）が出土した。



第40図　平成12年度２区第１面ＳＤ006出土遺物実測図

第２面（第 42 図）

ＳＫ２１０（第 42 図）は屈曲部で検出した東北～西南が僅かに長い隅丸長方形の土坑である。長辺 1.8 m、短辺 1.6 m、深度 1.7 mを測る。断面形状は「Ｕ」字形である。埋土は５層で、下から暗青灰色粘土 0.6 m、灰色粘質シルト 0.3 mが堆積した後に、黄灰色砂礫が東側から一部流れ込み、その上に褐色砂質シルトと褐灰色砂質シルトのブロック土 0.5 m、黄褐色砂質シルトと



第 41 図　平成 12 年度２区第１面ＳＤ 091・ＳＤ 139 出土遺物実測図

褐灰色砂質シルトのブロック土 0.3 mで埋められたようである。

ＳＫ２５９（第 42 図）は屈曲部で検出した東南～西北に長い隅丸方形の土坑である。西北部をＳＫ２６０で切られており、南西部は新しい撹乱で切られている。長辺 3.5 m、短辺検出長 1.8 m、深度 0.3 mを測る。埋土は 5 層で、下から褐色砂混じりシルト 0.15 m、黄褐色砂質シルト 0.15 mが堆積した後に東北側 0.3 m、西南側 0.5 mが掘削され、その後東北側に暗灰黄色砂質シルトが 0.15 m、西南側に灰色粘質シルト 0.3 m、黄褐色砂質シルト 0.2 mが堆積したようである。遺物は（第 43 図－ 469 ～ 487）が出土した。

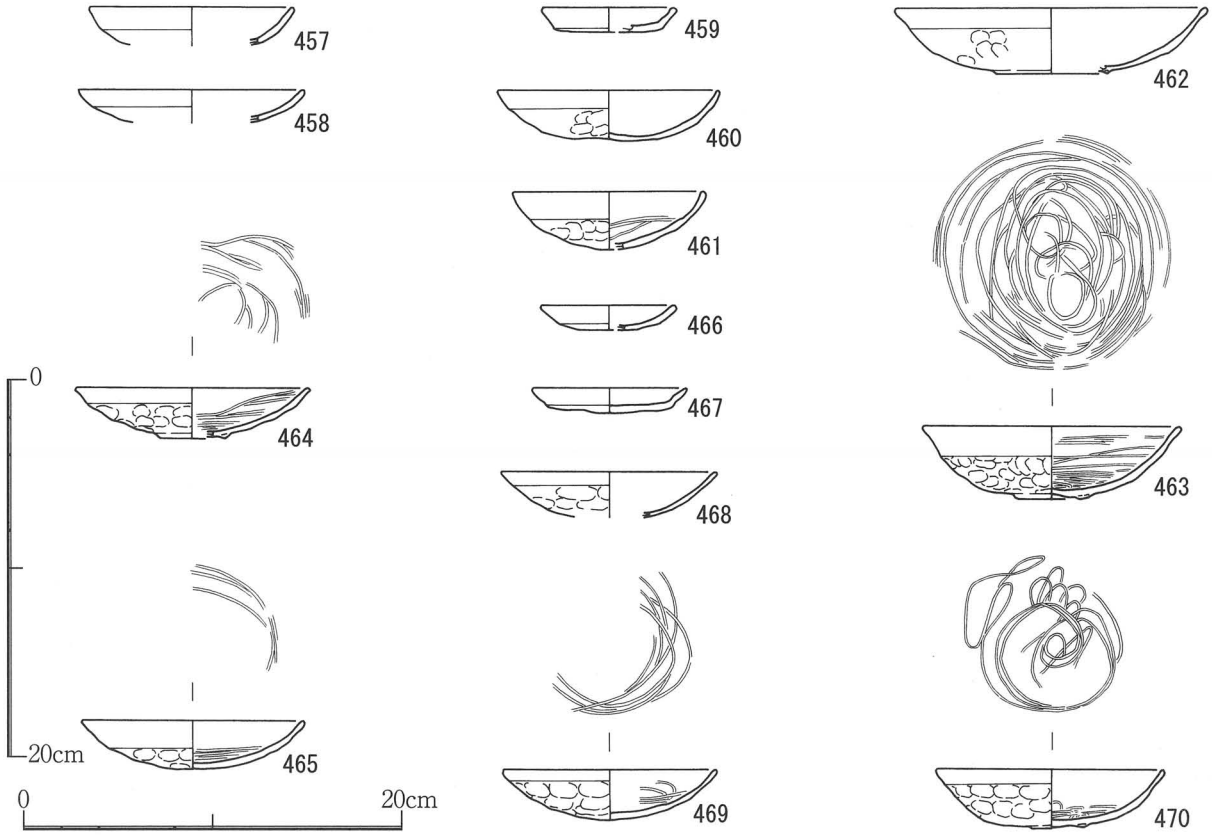
ＳＫ２６０（第 42 図）ＳＫ２５９の西北部を切って掘削された不整円形の土坑である。直径 1.4 ～ 1.6 m、深度 0.35 mを測る。遺物は（第 43 図－ 488 ～ 499）が出土した。

ＳＤ３５８（第 42 図）は西北部中央から西南に延び調査区西南辺から調査区外に延びる溝である。検出長 5.0 m、幅 0.8 ～ 1.3 m、深度 0.35 mを測る。

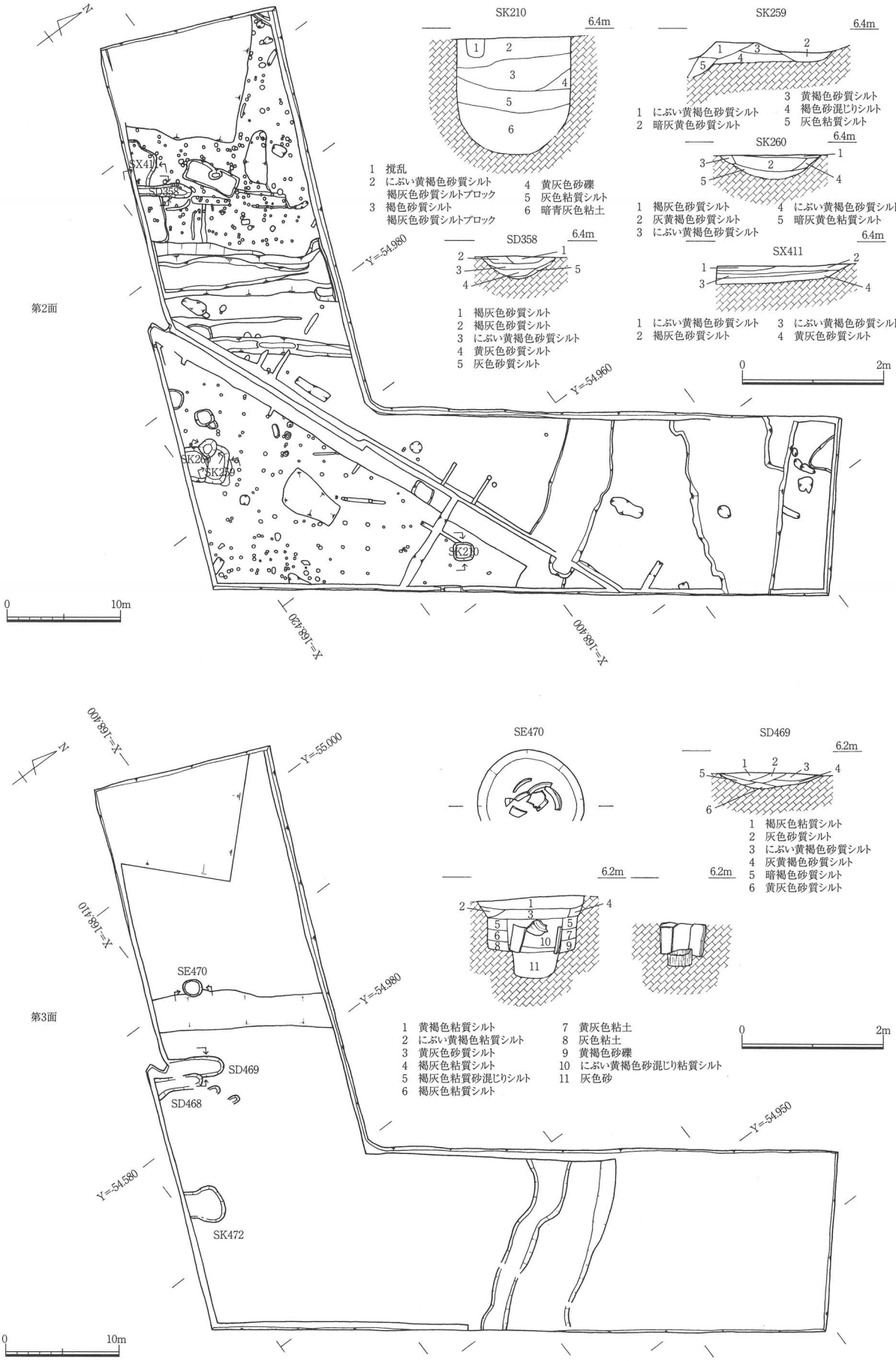
ＳＸ４１１（第 42 図）は西北部ＳＤ３５８に一部切られ、西南辺から調査区外に延びる不整形の落ち込みである。検出長 4.0 × 2.0 m、深度 0.25 mを測る。遺物は（第 44 図－ 500 ～ 522）が出土した。

第３面（第 42 図）

ＳＤ４６９（第 42 図）は西北部で検出した東北から西南に調査区外まで延びる溝である。検出長 6.5 m、幅 1.3 m、深度 0.2 mを測る。

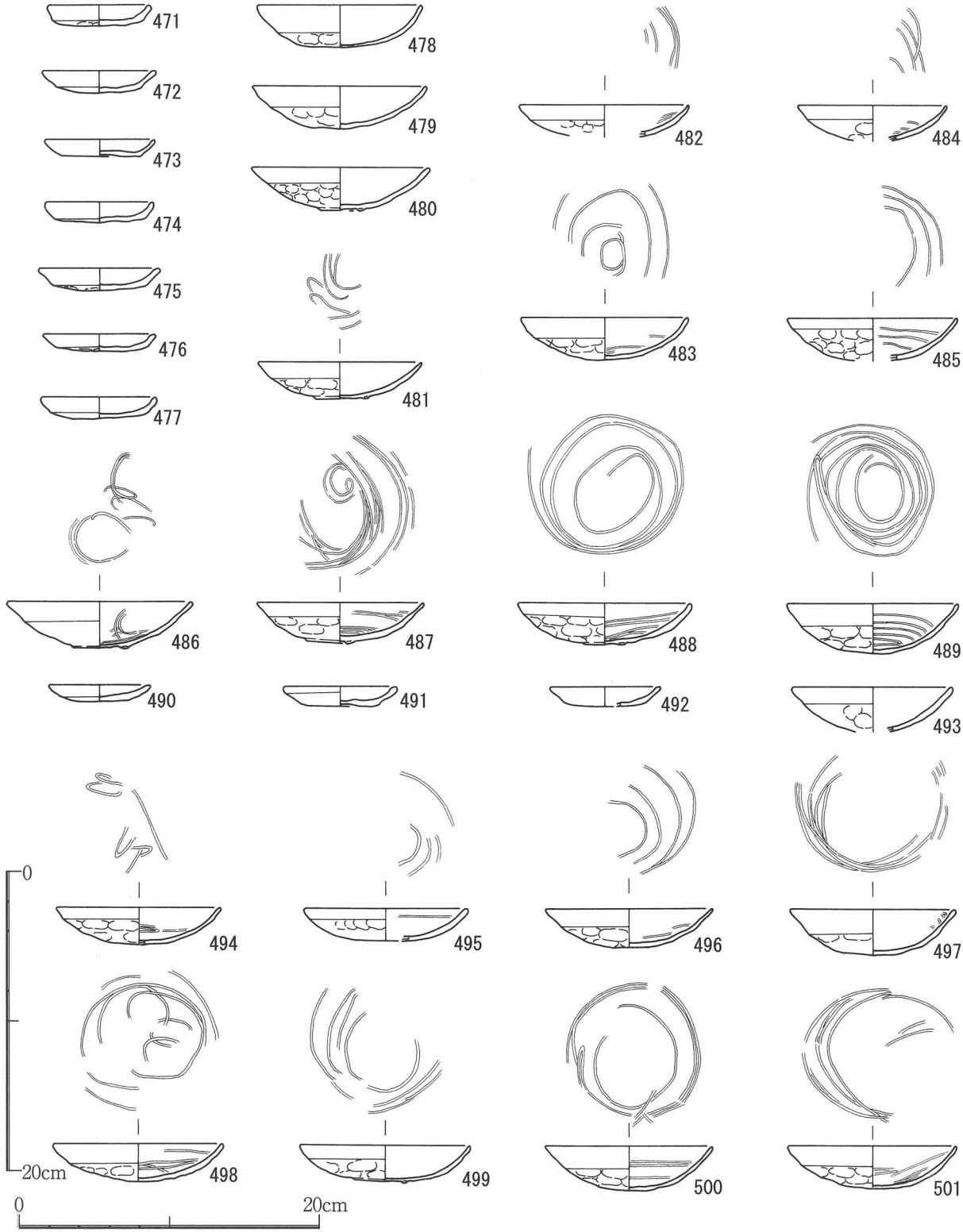


第 42 図　平成 12 年度２区第１面Ｐ it096・098・127・136・166・195 出土遺物実測図

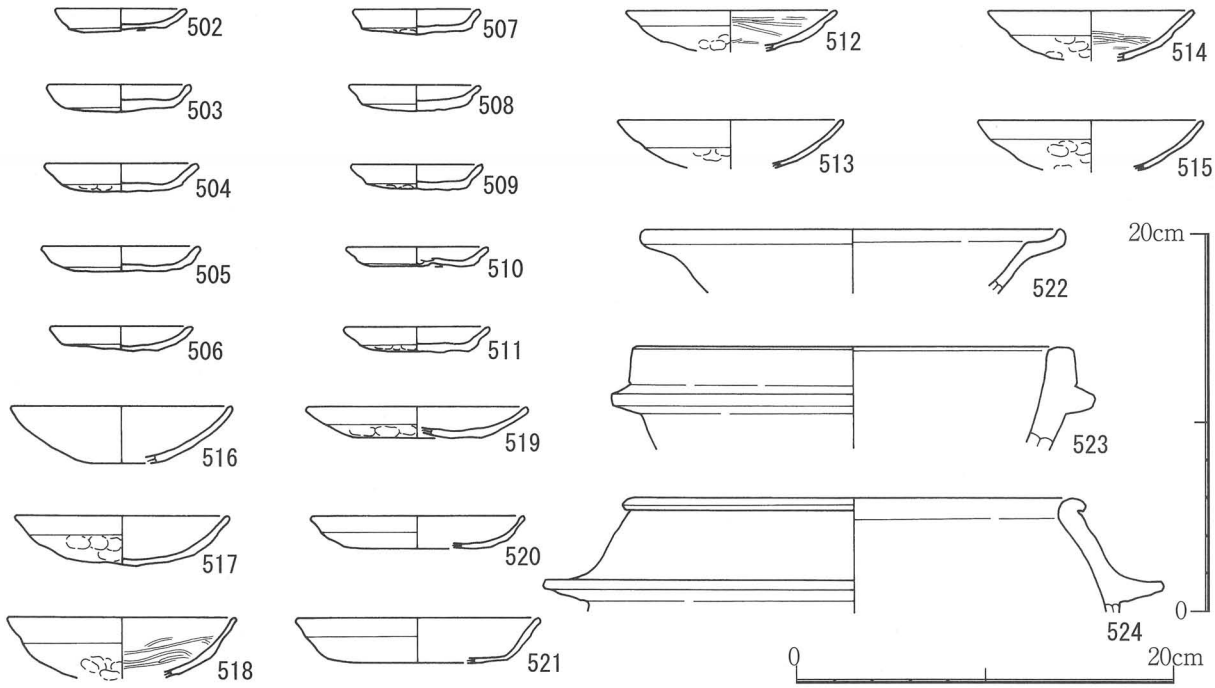


第43図　平成12年度2区第2・3面平面図・遺構平面図・埋土断面図

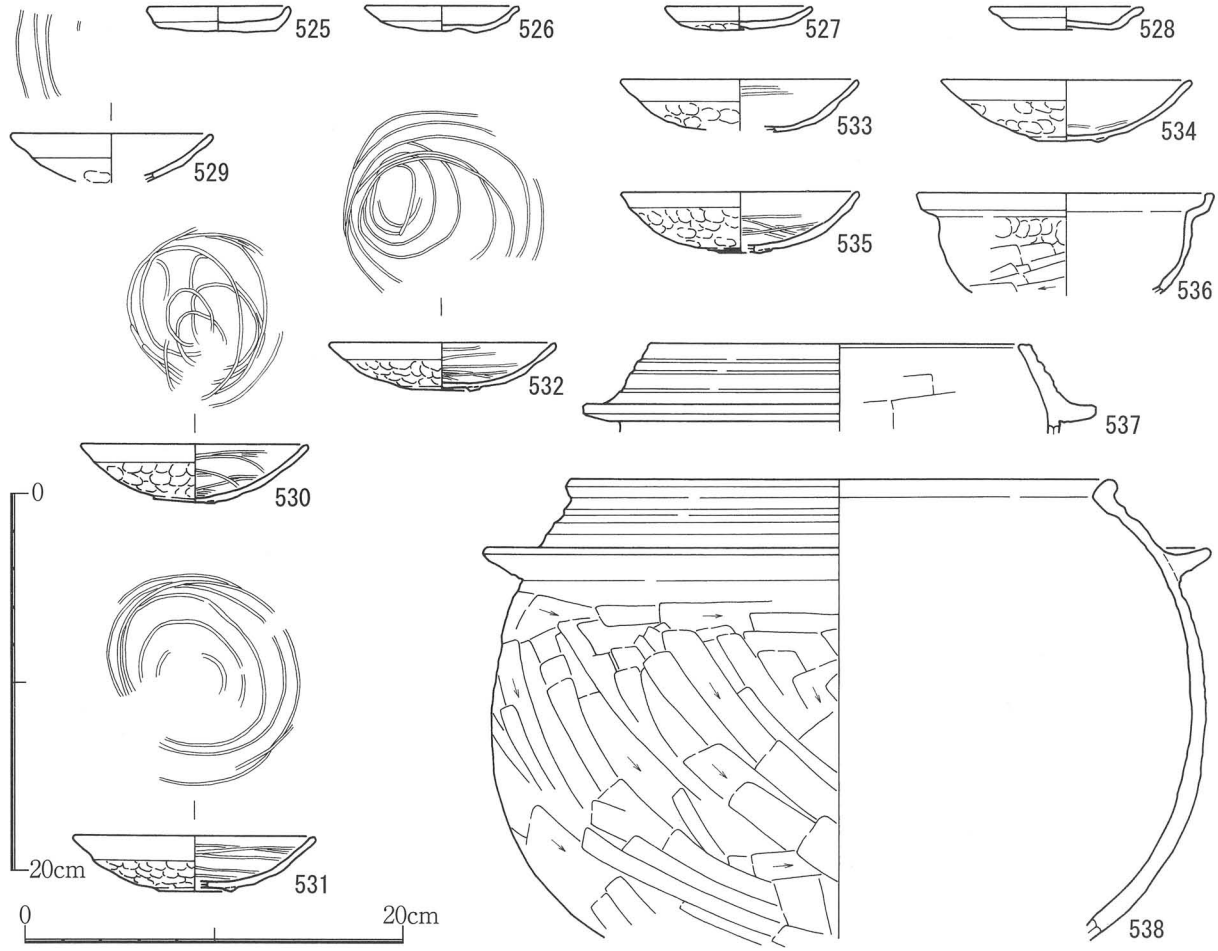
ＳＥ４７０（第42図）ＳＤ４６９から西北に５ｍ離れた円形の井戸である。東南三分の一を第１面ＳＤ００４に切られている。直径1.5ｍ、深度1.15ｍを測る。段掘りになっており、底部0.4ｍは直径0.6ｍの円筒形、中間部0.4ｍは直径1.25ｍの円筒形、上部0.35ｍは擂鉢上に掘削されている。底部に直径45cmの曲げ物が井戸枠として入っており、中間部には40cm×30cmの瓦（第46図537～542）を用いて枠としていた。遺物は（第45図－523～536）が



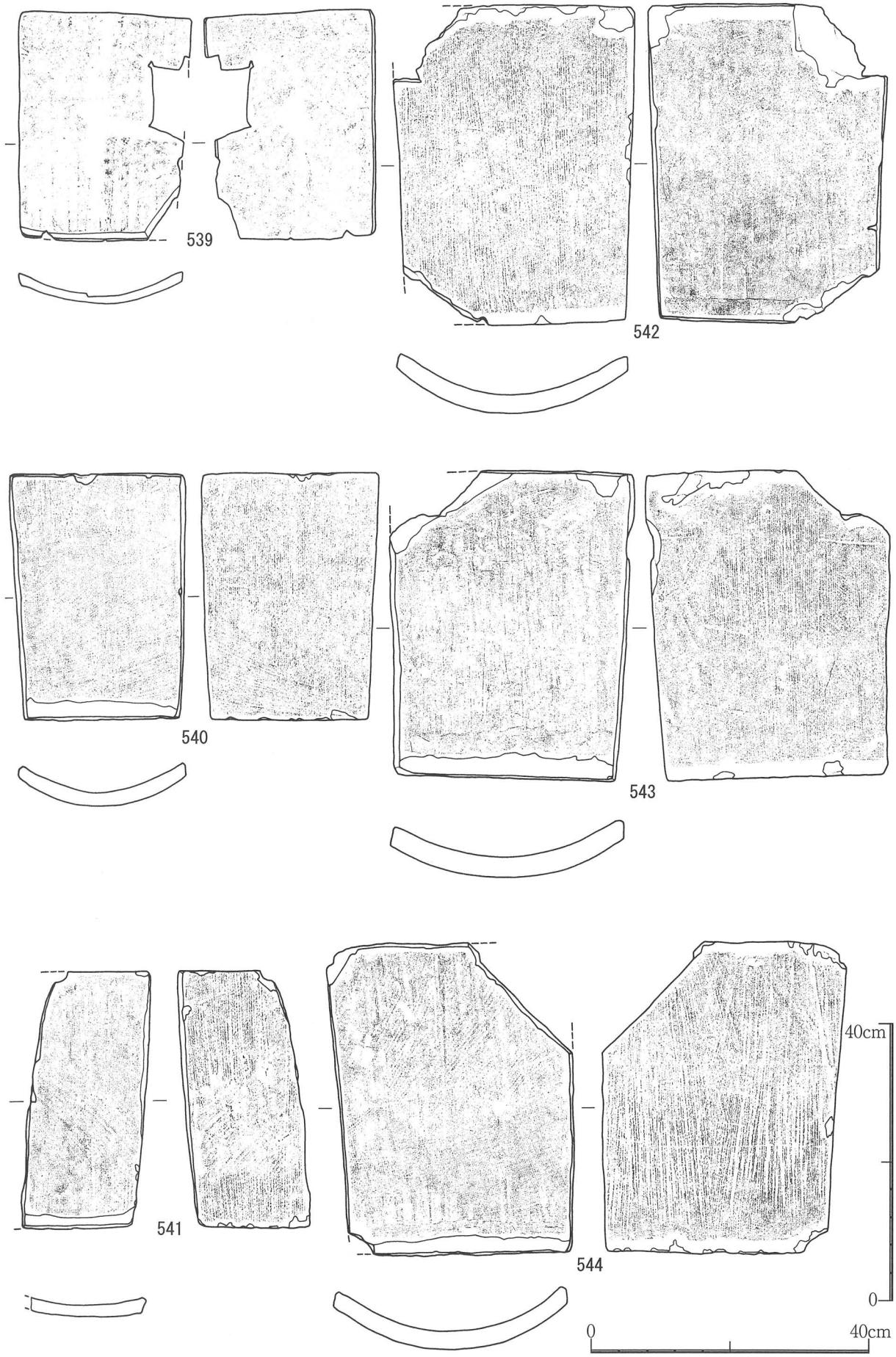
第44図　平成12年度２区第２面ＳＫ259・260出土遺物実測図



第 45 図　平成 12 年度２区第２面 SX411 出土遺物実測図



第 46 図　平成 12 年度２区第３面 SE470 出土遺物実測図 (1)



第 47 図　平成 12 年度２区第３面 SE470 出土遺物実測図 (2)

出土した。

３区の調査（第 47 図）

調査範囲上面の高さは西北部で T.P. ＋ 6.6 ～ 6.7 m、中央部で T.P. ＋ 6.7 ～ 6.8 m、東北部で T.P. ＋ 6.8 ～ 7.2 mを測る。基本土層は第 1 層が灰色土（旧耕作土）0.2 ～ 0.3 m、第 2 層が灰黄色土（床土）0.05 ～ 0.15 m、第 3 層が黄灰色土 0.2 m、第 4 層が明黄褐色土で地山となる。遺構面は 2 面確認した。第 1 面は第 3 層上面で、西北端部で T.P. ＋ 6.2 m、中央部で 6.4 m、東北部で T.P. ＋ 6.6 ～ 6.8 mを測る。第 2 面は第 4 層上面で西北端部で T.P. ＋ 6.0 m、中央部で 6.2 m、東北部で T.P. ＋ 6.6 mを測る。東北端部約 20 mは旧耕作土・床土を除去すると地山面となっているため住宅建設時以前にすでに相当の削平を受けていたものと考えられる。

第 1 面（第 47 図）

東北部で浅い落ち込み、中央部で方形の土坑、東北部で浅い楕円形の土坑を検出したのみである。

第 2 面（第 47 図）

ＳＤ０２３（第 43 図）は中央部で調査区を南南西から東北東に斜断する溝である。検出長 32.0 m、幅 0.9 ～ 2.2 m、深度 0.3 ～ 0.4 mを測る。遺物は（第 48 図－ 543 ～ 552）が出土した。

ＳＤ０２４（第 43 図）は中央部ＳＤ０２３の北を平行するように延びる溝である。検出長 11.5 m、幅 3.2 ～ 4.4 m、深度 0.7 mを測る。遺物は（第 48 図－ 553 ～ 571）が出土した。

４区の調査（第 49 図）

調査範囲上面の高さは西端部で T.P. ＋ 7.0 m、中央部で T.P. ＋ 7.2 m、東端部で T.P. ＋ 7.7 m を測る。

基本土層は第 1 層が盛り土 0.2 ～ 0.4 m、第 2 層が灰色土（旧耕作土）、第 3 層黒褐色砂質土（旧耕作土）0.2 m、第 4 層が灰黄灰色シルト 0.1 ～ 0.2 m、第 5 層が暗灰黄色砂質シルト 0.2 m で地山の黄褐色粘土になる。遺構面は部分的に 2 面確認した。第 1 面は第 5 層上面で、西端部で T.P. ＋ 6.5 m、中央部で 6.8 m、東端部で T.P. ＋ 7.5 mを測る。第 2 面は地山上面で西端部で T.P. ＋ 6.4 m、中央部で 6.8 m、東端部で T.P. ＋ 7.5 mを測る。

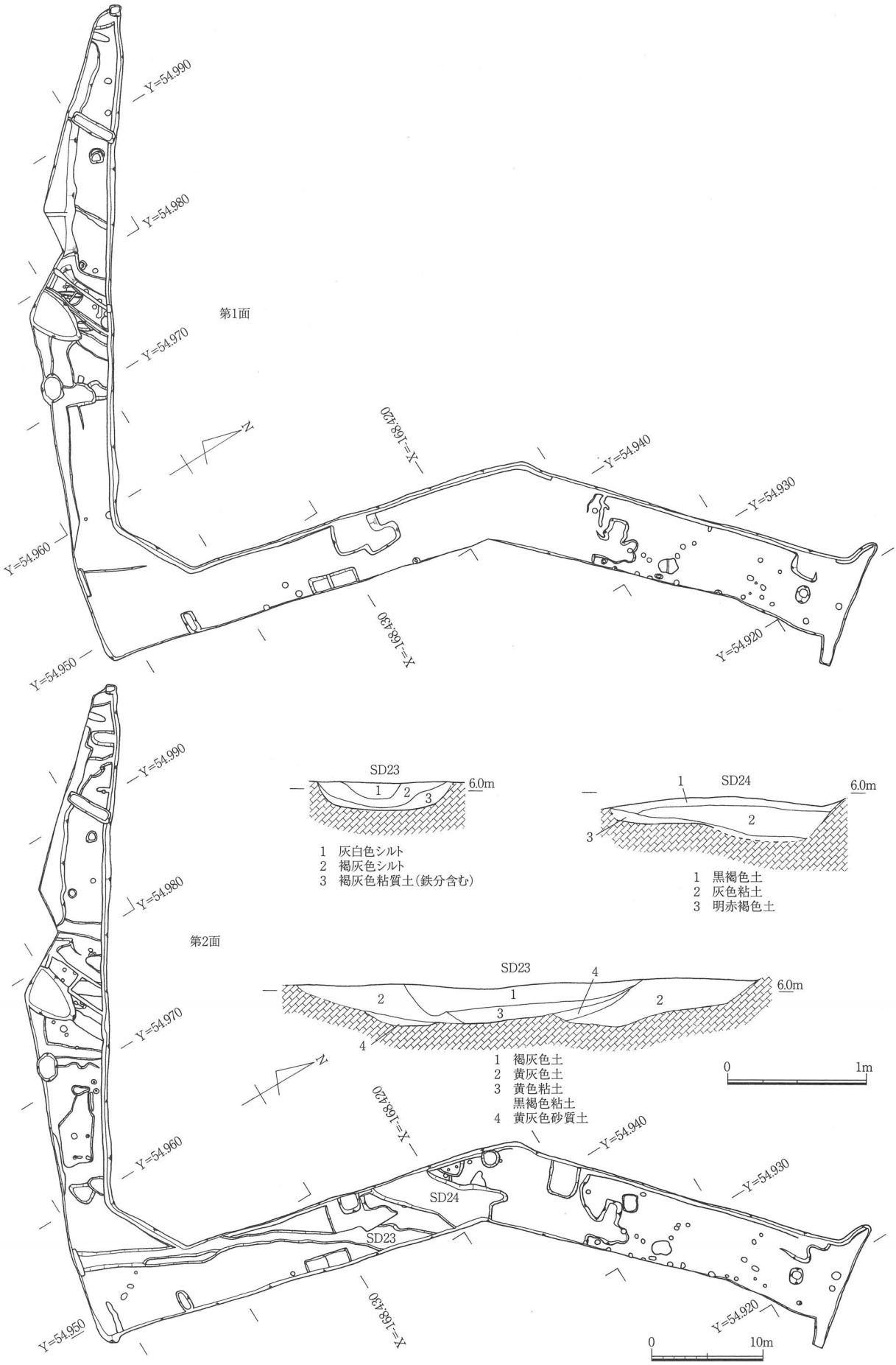
ＳＤ００１は東端部をほぼ東西に斜断する川である。検出長 25.0 m、検出幅 10.0 m、深度 1.0 m以上を測る。埋土は砂と粘土の互層である。遺物は（第 50 図－ 572 ～ 577）が出土した。

ＳＤ００２（第 45 図）は東端部はＳＤ００１に切られているが、調査区を縦断し、西端まで延びる川である。検出長 69.0 m、検出幅 3.5 m、深度 0.6 m以上を測る。遺物は（第 50 図－ 578 ～ 584）が出土した。

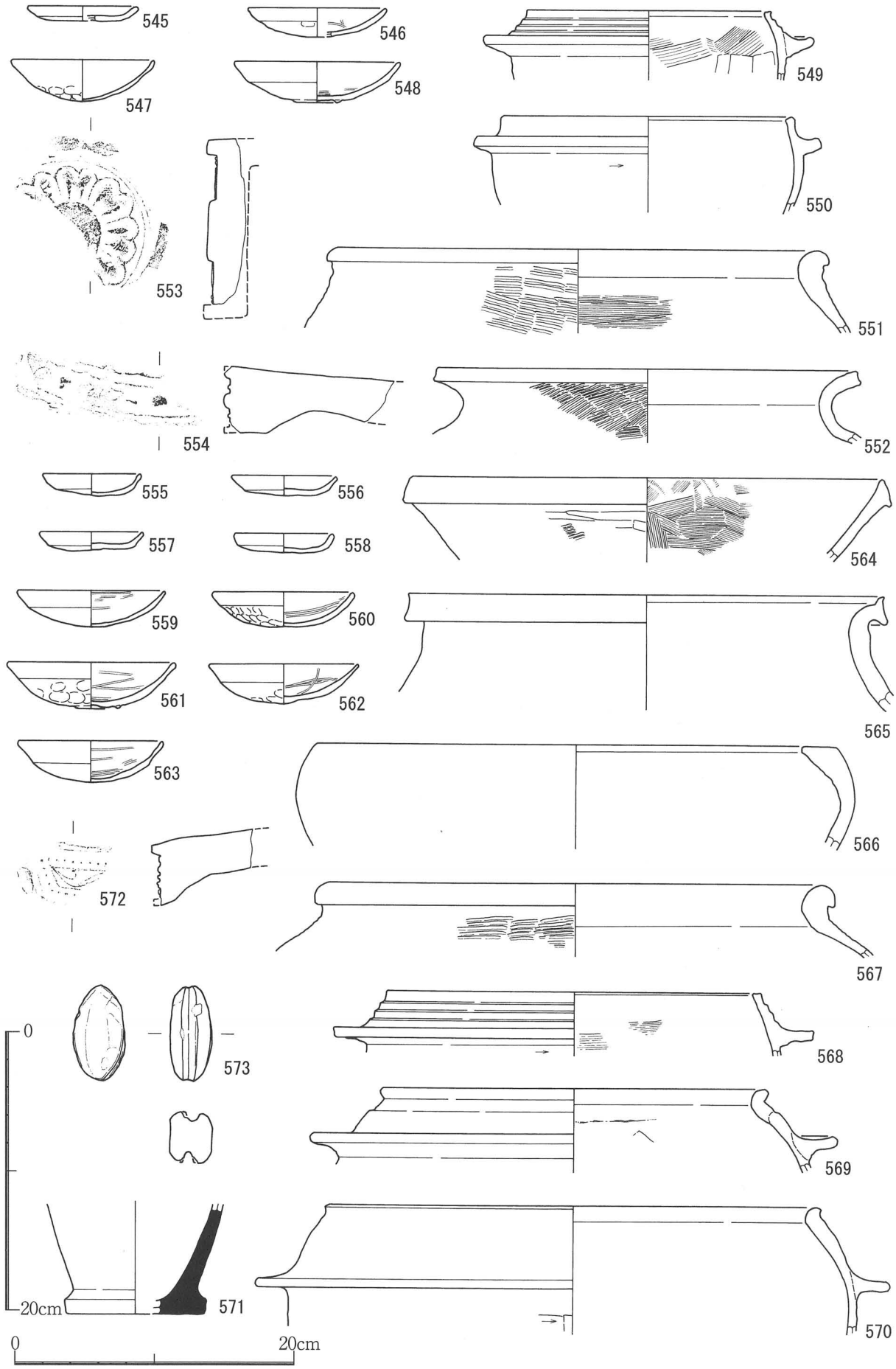
５区の調査（第 49 図）

調査範囲上面の高さは東北端部で T.P. ＋ 7.0 m、中央部で T.P. ＋ 6.95 m、西南端部で T.P. ＋ 6.9 mを測る。

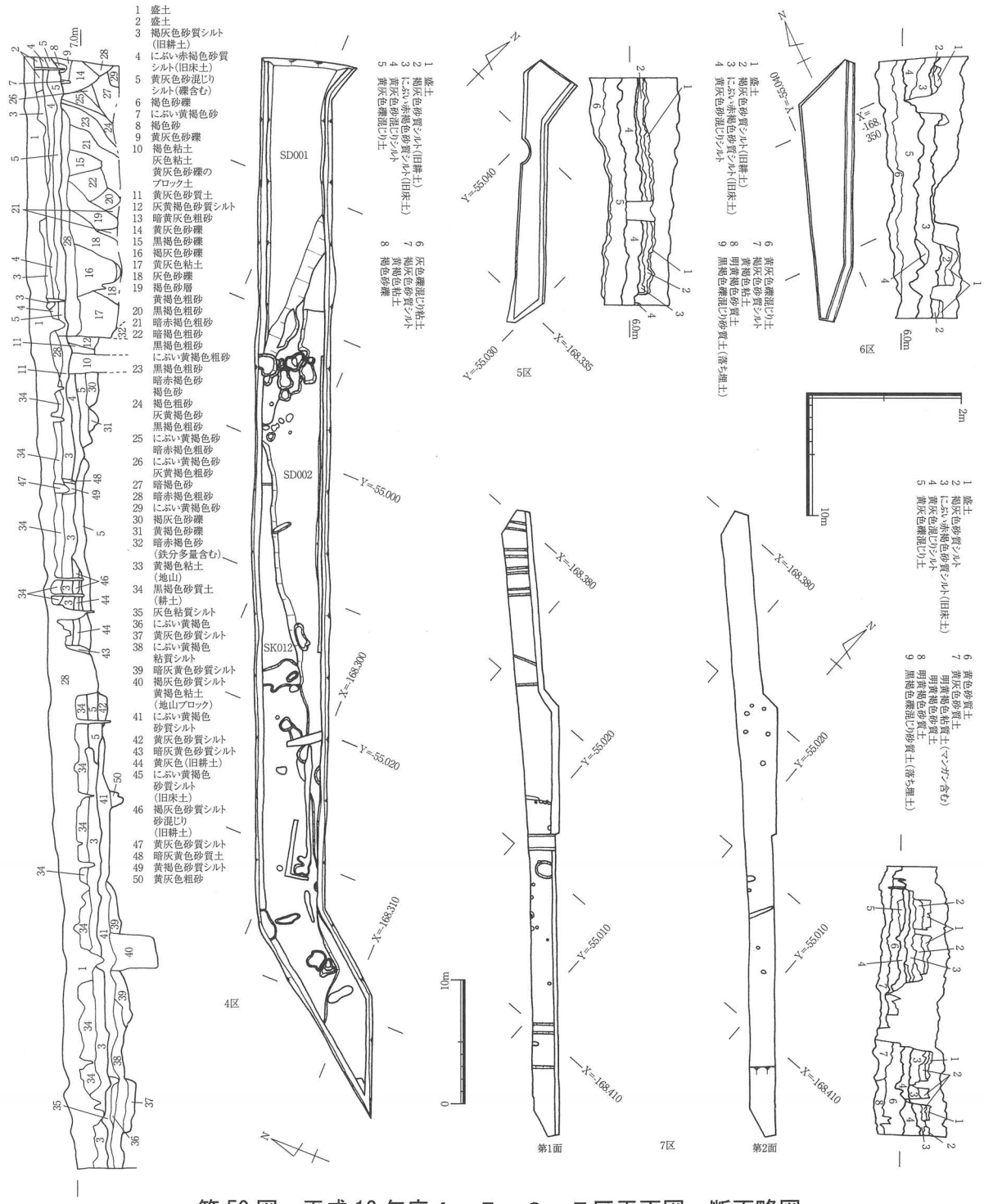
基本土層は 6 層あり、第 1 層盛り土 0.4 m、第 2 層灰色土（旧耕作土）0.05 m、第 3 層赤褐色砂質シルト（床土）0.15 m、第 4 層黄灰色礫混土 0.2 m、第 5 層灰色礫混粘土 0.2 ～ 0.25 m、



第48図　平成12年度3区第1・2面平面図・SD023・024埋土断面図



第 49 図　平成 12 年度３区ＳＤ 023・024 出土遺物実測図



第50図　平成12年度４・５・６・７区平面図・断面略図

第６層褐灰色砂質シルト 0.05 mで地山の褐色砂礫になる。

第５層上面と第６層上面の２面で遺構検出作業を行ったが、明確な遺構は確認しなかった。遺物は第４層から（第51図585・586）が出土した。

６区の調査（第49図）

調査範囲上面の高さは東南端部でT.P.＋7.1 m、中央部でT.P.＋7.1 m、西北端部でT.P.＋7.2 mを測る。

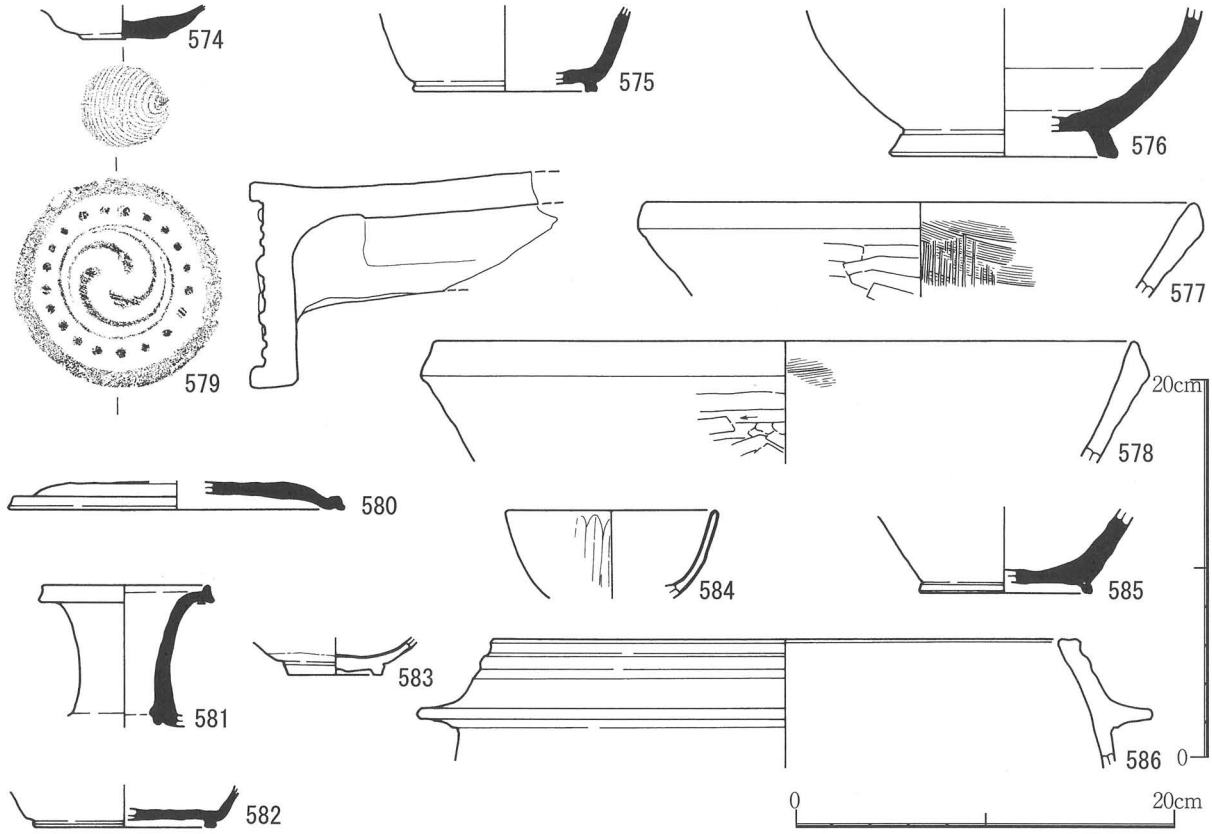
基本土層は、第１層盛り土 0.4 m、第２層灰色土（旧耕作土）0.1 m、第３層赤褐色砂質シルト（床土）0.1 m、第４層黄灰色砂混シルト 0.15 ～ 0.4 m、第５層黄灰色礫混土 0.1 ～ 0.2 m、第６層黄灰色礫混土 0.2 ～ 0.25 m、第７層灰色礫混粘土 0.2 ～ 0.3 mで地山の褐灰色砂質シルトと黄褐色粘土のブロック層になる。第５層は中央部と西北端部で部分的に存在しただけであるが、第４層よりも遺物の出土は多かった。遺物は第５層から（第 51 図 587 ～ 589）が出土した。

第６層上面と地山上面の２面遺構検出作業を行ったが、明確な遺構は確認しなかった。

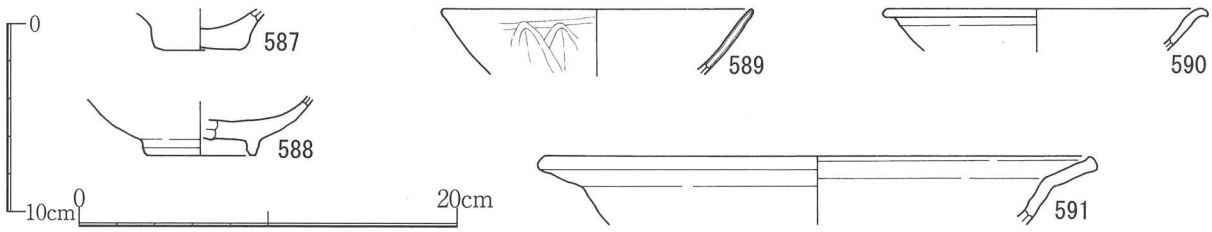
７区の調査（第 49 図）

調査範囲上面の高さは東南端部で T.P. ＋ 7.1 m、中央部で T.P. ＋ 7.1 m、西北端部で T.P. ＋ 7.2 mを測る。

基本土層は、第１層盛り土 0.4 m、第２層灰色土（旧耕作土）0.1 m、第３層赤褐色砂質シルト（床



第 51 図　平成 12 年度４区ＳＸ 001・ＳＤ 002 出土遺物実測図



第 52 図　平成 12 年度５・６区出土遺物実測図

土）0.1 m、第４層黄灰色砂混シルト 0.15 ～ 0.4 m、第５層黄灰色礫混土 0.1 ～ 0.2 m、第５層黄灰色礫混土 0.2 ～ 0.25 m、第６層灰色礫混粘土 0.2 ～ 0.3 mで地山の褐灰色砂質シルトと黄褐色粘土のブロック層になる。第５層は中央部と西北端部で部分的に存在しただけであるが、第４層よりも遺物の出土は多かった。

第６層上面と地山上面の２面遺構検出作業を行ったが、明確な遺構は確認しなかった。

第３節　平成１３年度の調査

調査は遺跡範囲の北東隅部の調査対象範囲 12,000 ㎡の内約 3,000 ㎡を６区に分割して行った。１区は最も北東部に位置する鍵型に曲がる細長い調査区で、幅５m・延長65 m・面積325 ㎡である。２区は１区の南西にほぼ接する長方形の調査区で、幅 30 m・長さ 60 mであったが、実際の調査は道路等の関係から北東辺９mを底辺とする高さ 31 mの三角形と東南辺 60 mを底辺とし南西辺９m・東北辺 16 m頂点までの高さ 29 mの不整五角形の２箇所に分割した。調査面積は 1,413 ㎡である。３区は２区の南隅から 10 m離れた点を北隅にする西北辺幅 10 m・東北辺長さ 15 mの長方形の調査区で、調査面積は 150 ㎡である。４区は、３区の東隅から北東 4.5 mを南隅にする長方形の調査区で、東南辺幅５m・南西辺長８m・調査面積 40 ㎡である。５区は３・４区の南東に接する幅 17 m・長さ 50 mの長方形の南隅３×５m・西隅８×８mをカットした不整六角形の調査区で、調査面積 810 ㎡である。６区は５区の東北辺から７m離れた点を西隅とする幅６m・延長 50 mの調査区で、中央がわずかに屈曲し「く」の字形をしており、調査面積 300 ㎡である。平成 11 年度の試掘調査で木簡が出土したトレンチは調査範囲に含まれなかった。試掘結果からは調査対象範囲の中央部分を川が流れていたことが判っていた。この川は３・４・５区で検出されるであろうことは判っていたが、どこから流れてくるのかが明らかになっていなかった。調査は川の確認と木簡の時代の遺構がどの程度検出されるかを中心に行った。

１区の調査（第 53 図）

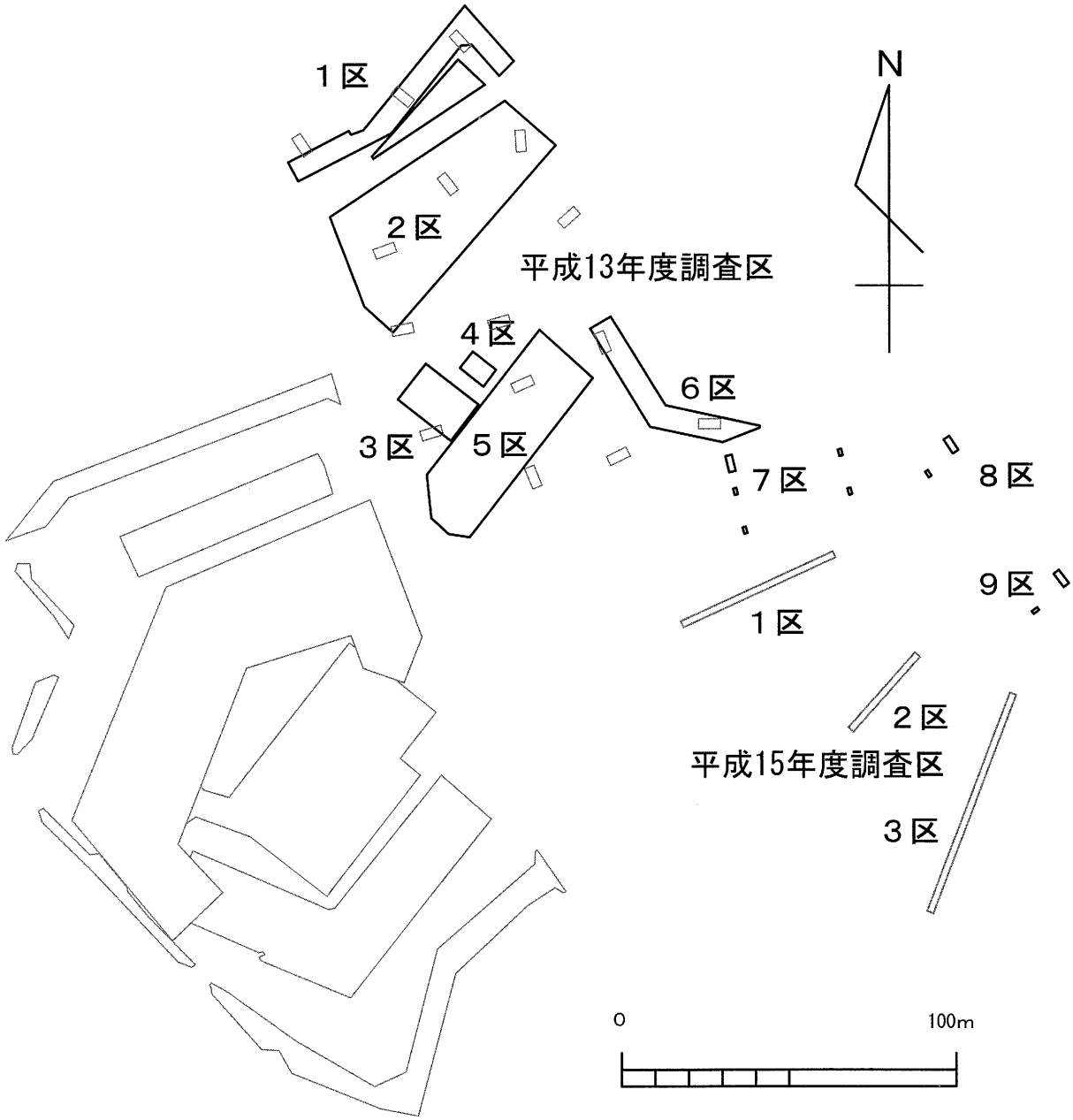
調査区上面の高さは、調査区西北端で T.P. ＋ 8.15 m、屈曲部で T.P. ＋ 8.15 m、東北端屈曲部で T.P. ＋ 8.2 m、東南端部で T.P. ＋ 8.3 mを測る。

基本土層は５層あり、その下が黄色粘土または褐色粘土の地山となる。第１層は府営住宅を建設する際の盛り土であり、0.25 ～ 0.5 mを測る。第２層灰黒色土は府営住宅建設以前の水田耕作土であり、0.15 ～ 0.35 mを測る。第３層は黄灰色土で、0.2 ～ 0.3 mを測るが、全域には無く西南端９mから東南端まで存在する。西南端部から６mまでは第４層灰褐色砂礫 0.35 m、西南端部６mから 15 mまでは第５層黄色粘土・褐色粘土ブロックが 0.6 m堆積している。９mから 15 mの間は第５層直上に第３層が堆積している。第４層は西南端部６mに浅い碗状に堆積しており、６m付近では第５層を切り込むように堆積している。第３層は中世の遺物を僅かに含んでおり、中世以降一時的に耕作に利用された土と考えられるが９m付近で畦となり、西南側と東北側とでは住宅建設以前の水田面に 0.2 mの段が生じている。遺物は第５層から須恵器等（第 54 図 590

～596）を出土した。

調査は第１・２層を重機械により掘削し、第３・４・５層上面で遺構検出作業をしたが、府営住宅の基礎跡のみで遺構は確認しなかった。第３・４層を人力により掘削し、第５層および地山上面で遺構検出作業を行った。明確な遺構は確認できなかったが、第４層を除去した部分は川もしくは一時的な流路の後と考えられる。最後に第５層を人力により掘削し、地山粘土上面で畦を一条検出した。

ＳＤ００１は西南端で検出した川である。検出長９ｍ、幅４ｍ、深度0.4ｍを測る。西南側は地山を肩部とするが、東北側は第５層を肩部としている。埋土は第３層である。ただし、第４・５層上面はT.P.＋7.7ｍ、東北部の３層地山上面はT.P.＋7.7ｍであるため、中世以降水田化されたときに削平されている可能性がある。第３層形成以前の川と考えるのが適当かと思われる。



第53図　平成13・15年度調査区配置図

ＳＡ００２は西南端から８ｍ付近で検出した畦である。検出長6.0ｍ、幅0.5～0.8ｍ、高さ0.3ｍを測る。土を盛ったのではなく、地山の削り出しである。第３層灰色砂礫と同方向でＮ20°Ｅである。畦の両側には耕作土と考えられる土はなく、地山の黄色粘土である。水田等の畦か流路による地山侵食の結果削り残されただけのものかは不明である。ＳＤ００１よりは明らかに古い。

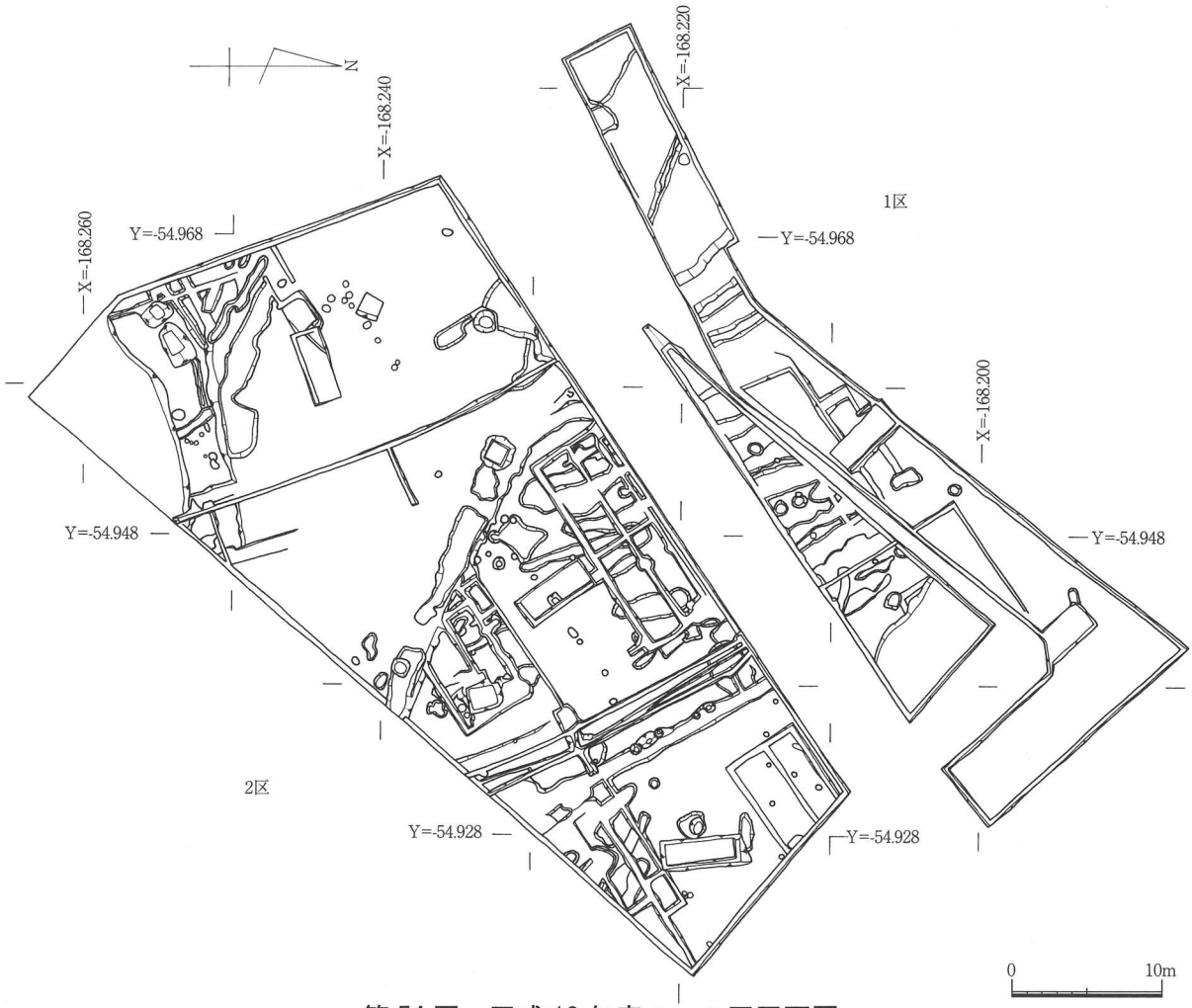
ＳＤ００３は屈曲部段上で検出した溝である。検出長3.0ｍ、幅1.0～1.4ｍ、深度0.15ｍを測る。方向はＮ30°Ｗを指す。埋土は暗灰色土１層である。

２区の調査（第53図）

調査区上面の高さは、調査区東北端でT.P.＋7.7ｍ、西南端部でT.P.＋7.6ｍを測る。

基本土層は３層あり、地山の黄色粘土となる。第１層は盛り土が0.2～0.3ｍ、第２層は灰黒色土（旧耕作土）が0.1ｍあり、、ここまでを重機械により掘削した。第３層は黄灰色粗砂混粘土0.1ｍあり、人力により掘削した。この下は地山の黄色粘土であり、T.P.＋7.0ｍを測る。第３層から染付け・須恵器の杯蓋等（第54図597～600）を出土した。

遺構面は１面で、地山面で井戸・溝・土坑・柱穴・川等を検出した。東北半部の高さはT.P.＋7.25ｍで、東南辺25ｍ・西北辺30ｍまではほぼ水平である。そこでＮ70°Ｗを指す0.25～



第54図　平成13年度１・２区平面図

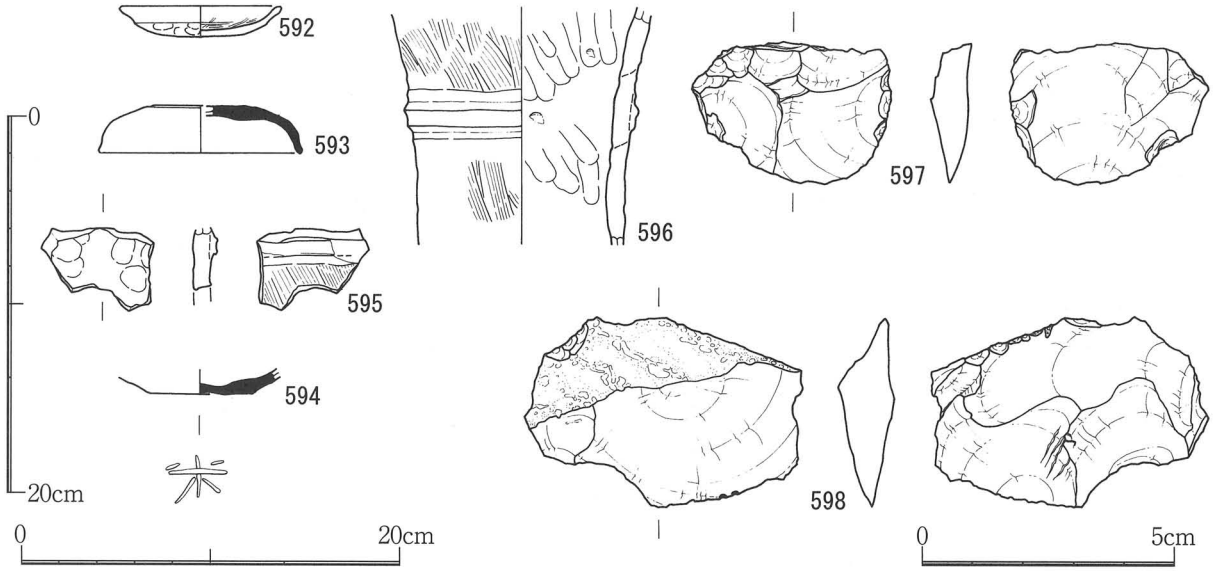
0.3 mの段があり、東南辺 40 m・西南辺 18 mまではT.P. ＋ 7.0 mと低くなっている。再びW 10° Sを指す 0.25 ～ 0.3 mの段があり、T.P. ＋ 7.25 mと高くなっている。東南辺 45 m、西南辺 23 mで再び 0.3 mの段があり、低くなっている。そこから南隅部まで次第に低くなり、隅部ではT.P. ＋ 6.7 mを測る。遺構は高い部分で溝・土坑等を検出したが、低い部分では溝・井戸・小土坑を検出した程度である。

ＳＤ３４・３６・３７・４０・４１は西南端部段の上下で検出した溝状の落ち込みである。区画とか取排水のような明確な目的を持った溝ではないようであり、検出面からの深度はどれも 0.05 ～ 0.1 mを測る。この周辺に土坑や小穴が部分的に集中しているが、どれも深度は 0.05 ～ 0.1 mと浅い。

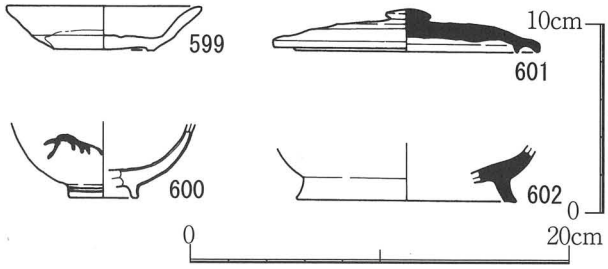
ＳＥ０６２（第 50 図・図版 25）は中央部段の下で検出した井戸である。約 1.4 mの方形で東辺はＮ 28° Ｅを指す。約 8cm の角材を 1.2 m間隔で方形に 4 本縦に打ち込み、その間に丸材を横にして渡している。埋土は暗緑灰色粘土・灰オリーブ色粘土・灰色粘土・暗灰黄色粘土であり、東北側から埋まっている。段の裾には井戸につながるように溝状の落ち込みがあるが、その関係は不明である。

ＳＤ０６６・０６７・０６９・０７１・０７６・０７７・０７９・０８０・１０３・１０４・１０６・１０７・１１１・１１２・１１３・１１４・１１５・１１７・１１８は東北半部西北辺付近に集中した溝である。幅は 0.5 ～ 1.4 mとまちまちであるが、深度は 0.05 ～ 0.1 mと浅い。方向はほぼＮ 20° ～ 30° Wを指す。

他にも土坑・小土坑・小穴等あるが、深度は 0.05 ～ 0.1 mとどれも浅く、本来の切り込み面



第 55図　平成 13 年度 1 区出土遺物実測図



第 56 図　平成 13 年度 2 区出土遺物実測図

は既に削平されていると考えられる。

３区の調査（第 56 図）

調査区上面の高さは、調査区西北端で T.P. ＋ 7.2 m、東南端部で T.P. ＋ 7.2 mを測る。

基本土層は５層あり、地山の黄色粘土となる。第１層は盛り土が 0.2 ～ 0.3 m、第２層は灰黒色土が 0.1 m、第３層は褐色粘土 0.1 mであり、ここまでを重機械により掘削した。第２層は旧耕作土、第３層は水田床土である。第４層は灰褐色粘土が 0.3 ～ 0.4 m、第５層は褐色粘土が 0.3 mである。北西端部ではこの下は地山の黄色粘土であり、T.P. ＋ 6.45 mを測る。東南部では地山は出ず、川となっている。第５層から土師皿・須恵器の杯蓋等（第 57 図 601 ～ 606）を出土した。

遺構は川を２条検出しただけである。

ＳＤ００１は調査区を東北から西南へ横断する川である。検出長 11 m、検出幅 10 ～ 13 m、深度 2.4 m以上を測る。５区で対岸を検出しており、最大幅は 16 mとなる。埋土は大別すると４層となる。川岸底部から肩部にかけて灰色粗砂 0.4 m、青灰色砂礫 0.5 m、褐色砂 0.25 m、赤褐色砂礫 0.3 m、灰色粘土が肩部に張り付くように堆積している。最下層の灰色粗砂上面で砥石（第 59 図 625 ～ 627）等を出土した。これらすべて覆うように灰色砂が川岸付近に 1.8 m堆積している。灰色砂は灰褐色粘土の薄層を含んでおり、この薄層の上で甕等（第 58 図－ 607 ～ 624）が出土した。中央部は約２m窪んでおり、灰色礫・灰色砂・黄灰色砂が約 1.6 m堆積している。これらで川が大体埋まり、深さ 0.4 ～ 0.6 mの皿上の窪みになっている。そこに下から黒色粘土が 0.1 m、灰黒色粘土が 0.2 ～ 0.3 m、灰色粘土が 0.15 ～ 0.25 m堆積し、完全に埋まっている。川の肩部に鋤跡が残っており、川の肩部に人為的な作業の痕跡が認められる。どのような作業を行ったのかは不明である。

ＳＤ００２は調査区北隅部で検出した砂礫の落ち込みである。検出長４m、検出幅２m、深度０．３mを測る。断面形状は肩部から斜めに落ち込んでいく。平成 12 年度４区のＳＤ００１につながる川の可能性が指摘できる遺構である。

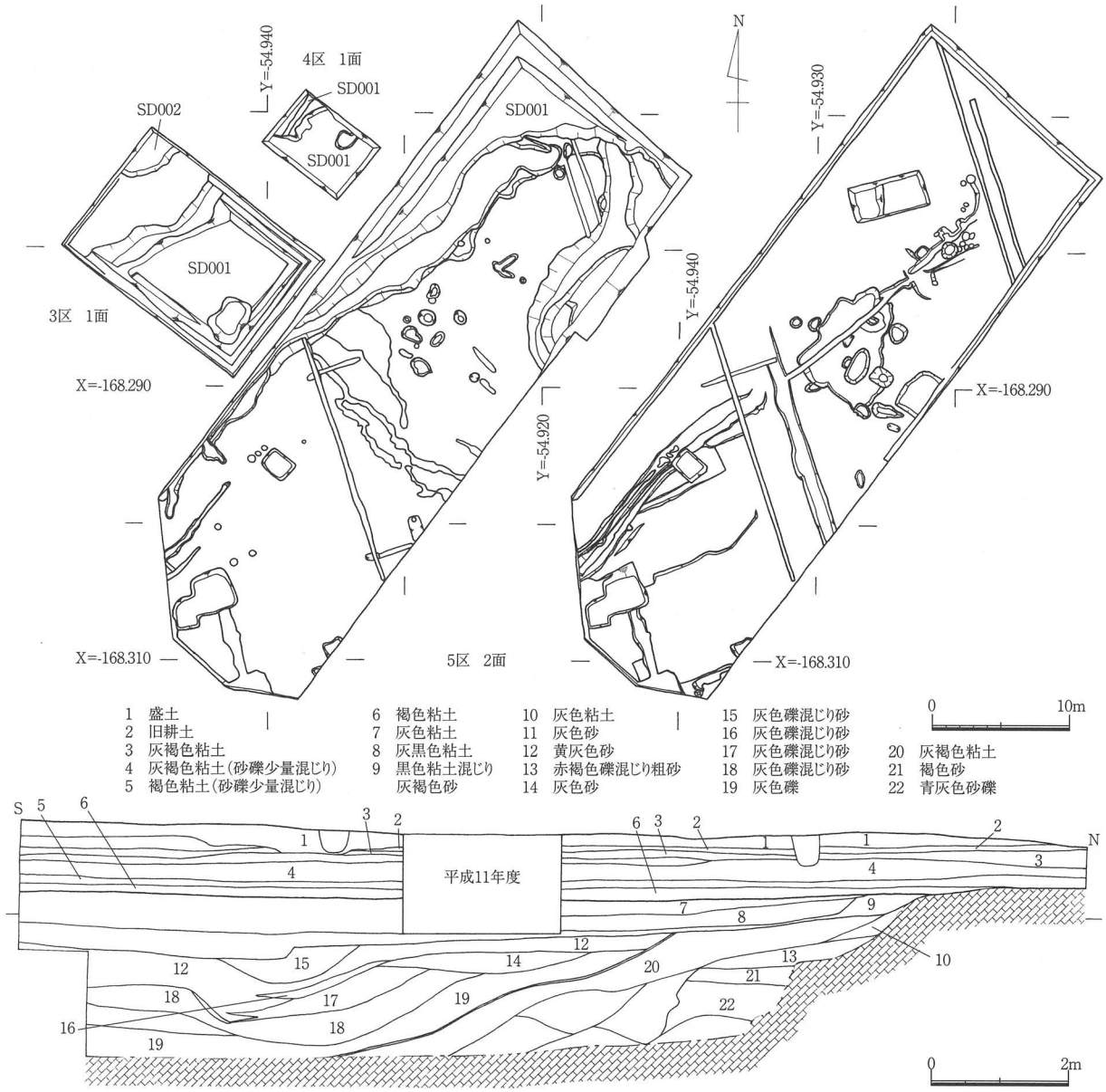
４区の調査（第 56 図）

調査区上面の高さは、調査区西北端で T.P. ＋ 7.75 m、屈曲部で T.P. ＋ 7.95 m、東南端部で T.P. ＋ 7.9 mを測る。

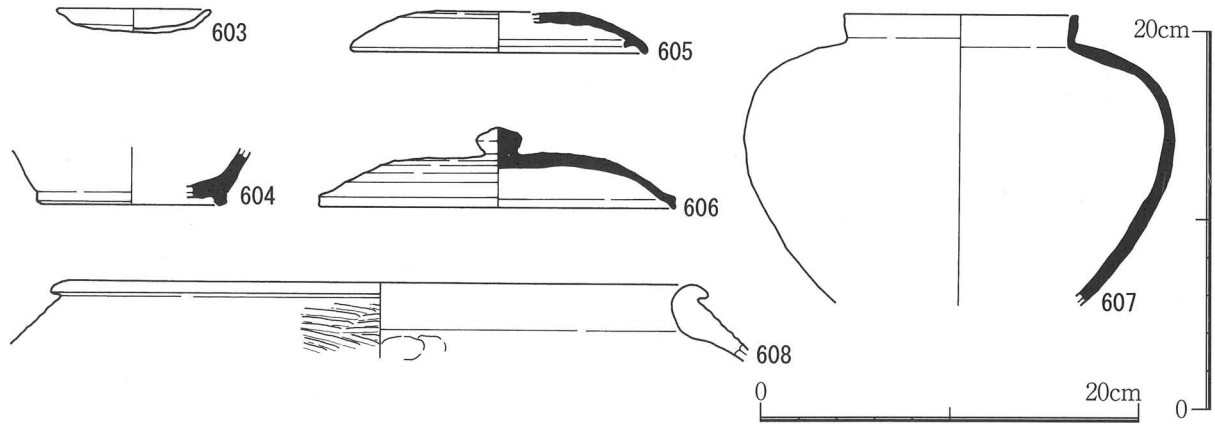
基本土層は黄白色土 0.2 m、黄灰色土 0.2 ～ 0.3 m、灰褐色粘土 0.15 ～ 0.2 m、灰褐色礫混じり粘土 0.15 ～ 0.3 m、灰黒色粘土 0.3 m、青灰色砂礫・茶褐色砂礫・青灰色シルトがあり、青色粘土となる。小規模なトレンチで深さが 1.5 mを超えていたので、川堆積土の一部を掘削して、調査を終了した。黄白色土は府営住宅を建設する際の盛り土であり、表土である。黄灰色土は中世の遺物を含んでおり、中世以降一時的に耕作に利用された土と考えられる。灰褐色粘土は中世と古代の遺物を含んでいる。灰褐色礫混じり粘土からは遺物が出土しなかった。灰黒色粘土は下 0.5 m位は下層の砂等を巻き上げて堆積したようで、砂礫混じりとなっている。古墳時代～古代の遺物が出土した。中世の遺物は含まれていない。青色粘土はいわゆる地山で遺物が出土しなか

った。

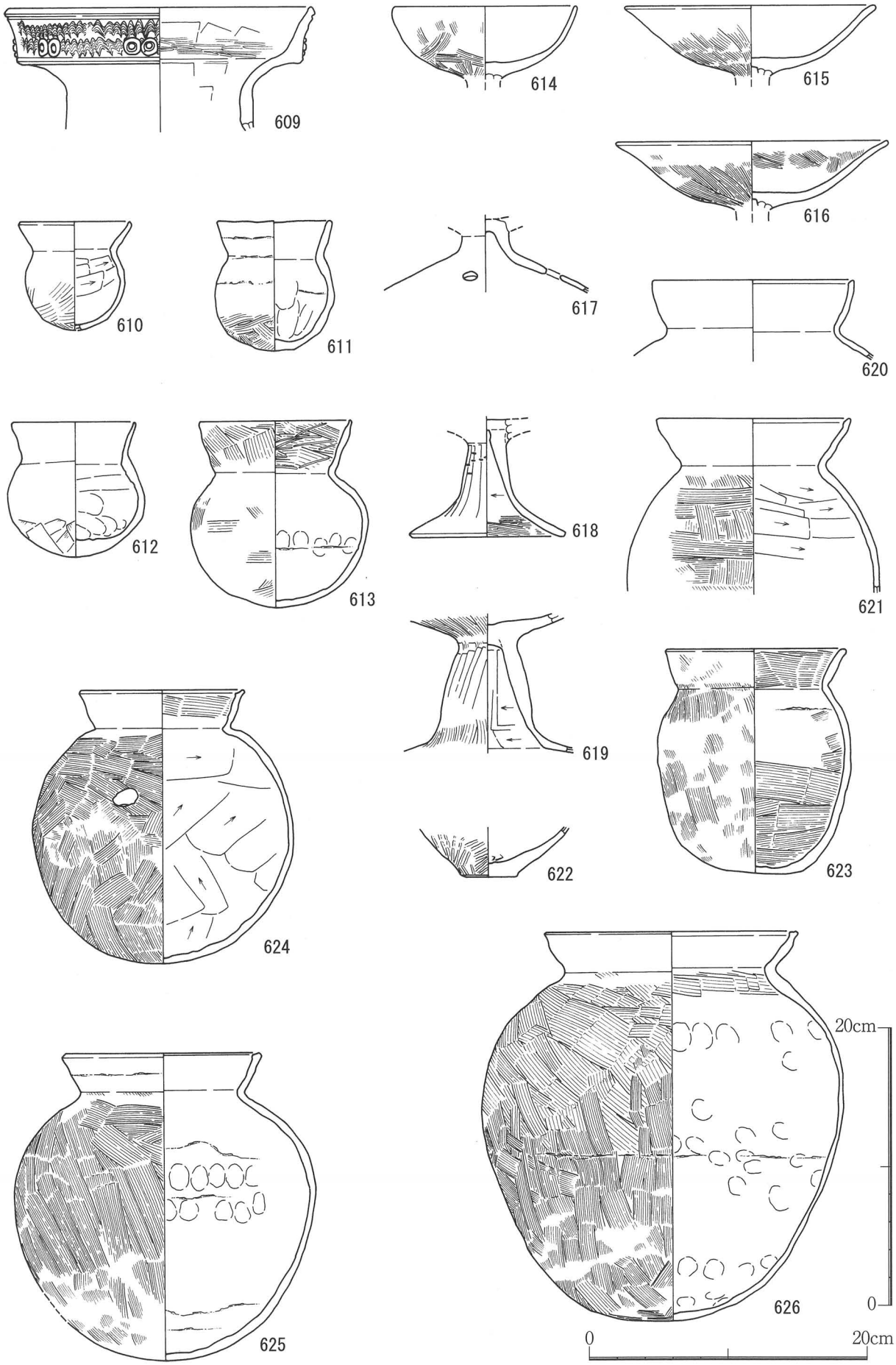
調査は黄白色土を重機械により掘削し、黄灰色土以下を人力により層ごとに掘削し、遺構の有



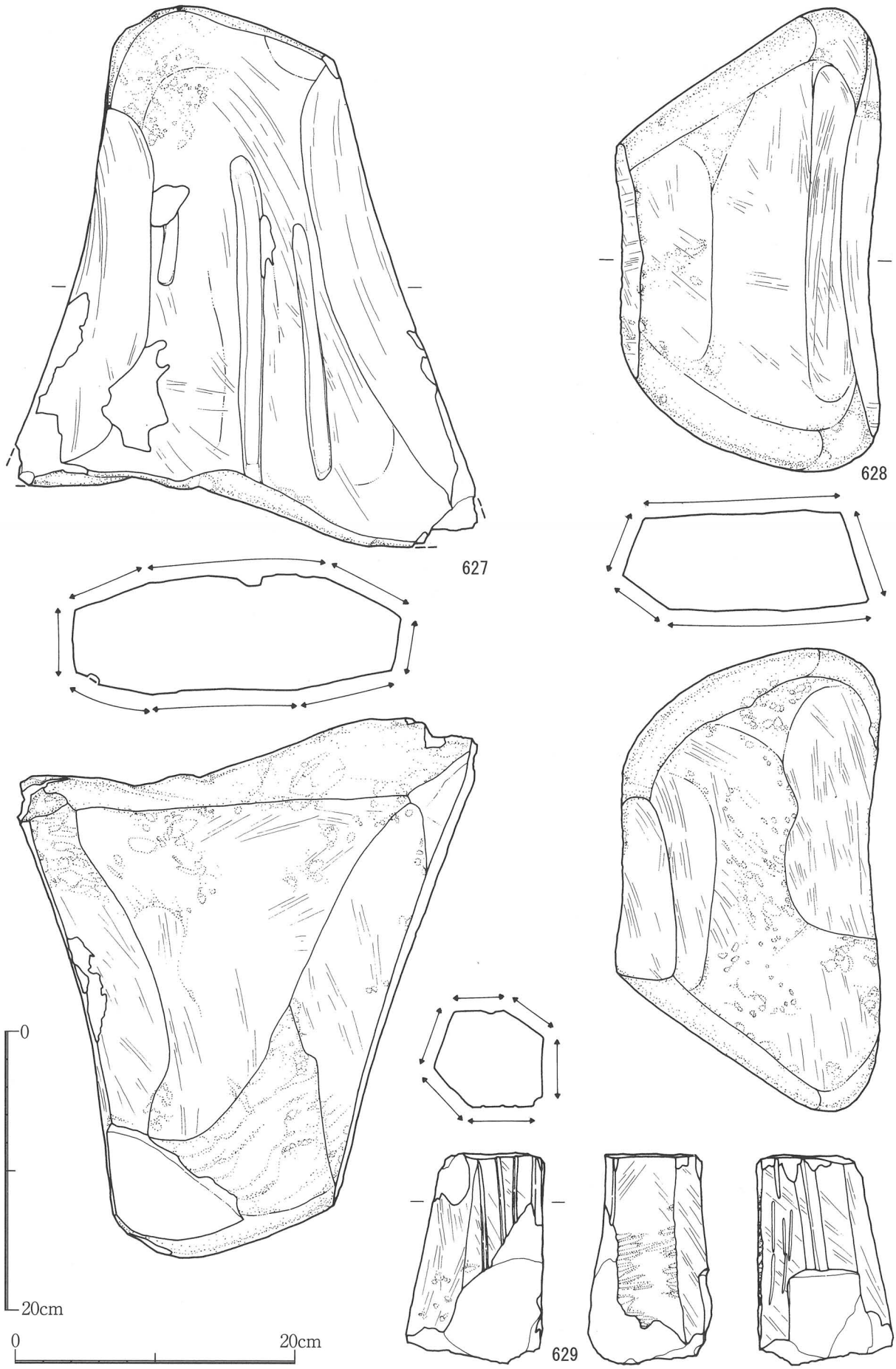
第 57 図　平成 13 年度３・４・５区平面図・SD001 埋土断面図



第 58 図　平成 13 年度３区出土遺物実測図 (1)



第 59 図　平成 13 年度３区出土遺物実測図 (2)



第 60 図　平成 13 年度３区出土遺物実測図 (3)

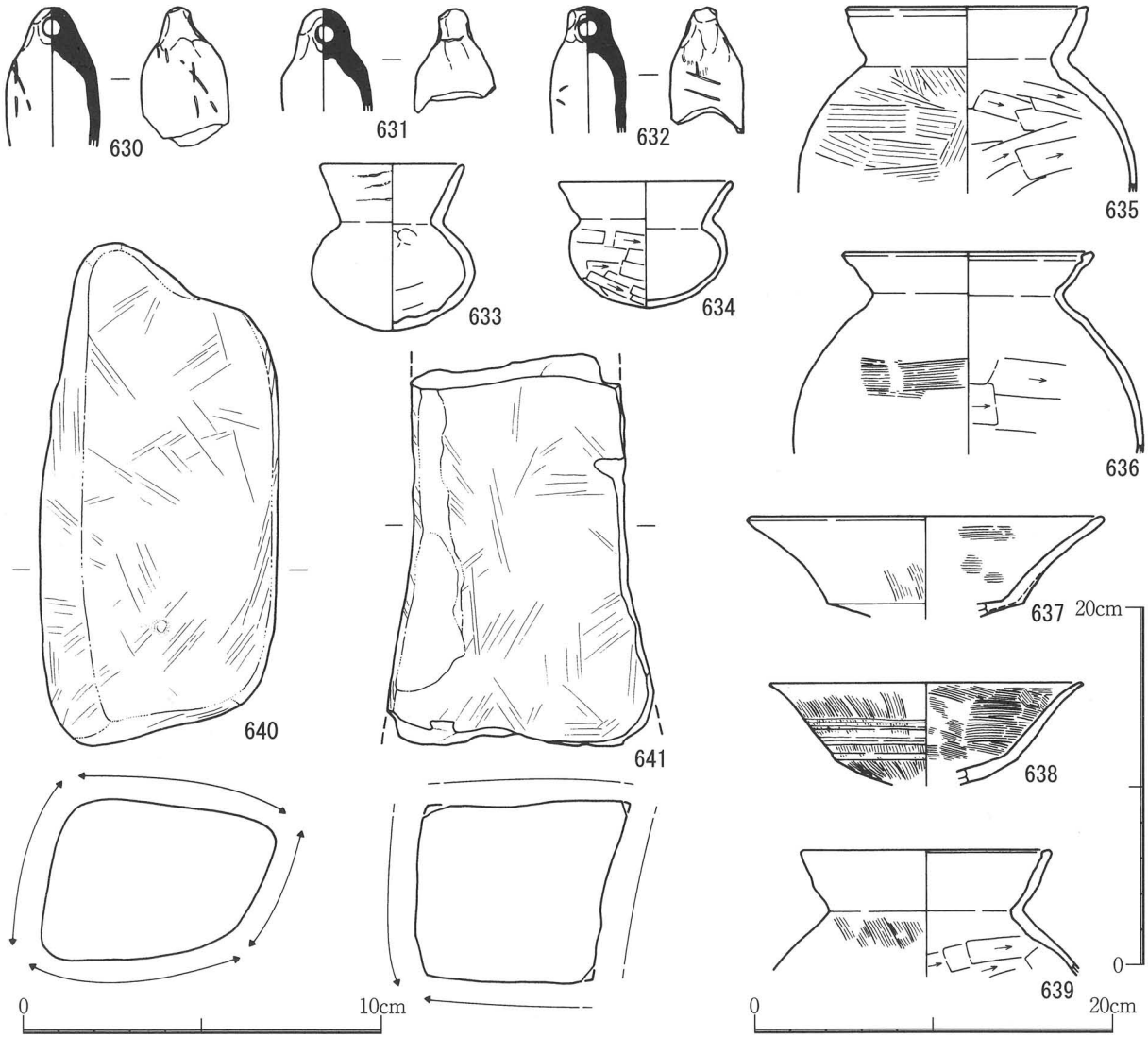
無を確認した。黄灰色土上面では府営住宅の基礎等を検出しただけである。灰褐色粘土・灰褐色礫混じり粘土・灰黒色粘土上面では遺構は確認しなかった。青色粘土上面で川を検出した。調査区の大部分が川内で青灰色砂礫・茶褐色砂礫・青灰色シルト等は川内の堆積土である。

調査区北西部で川肩部を検出したが、ほんの一部で大部分が川内であった。遺物はいわゆる庄内式土器およびその併行期の土器を出土した。川内の堆積は、上層に黒色粘土、下層に砂と粘土の互層があり、上層では古墳時代中期の須恵器（第 60 図－ 628 ～ 630）が出土した。下層からは弥生時代末から古墳時代初頭の土師器いわゆる庄内式土器およびその併行期の土器等（第 60 図－ 631 ～ 639）が出土した。

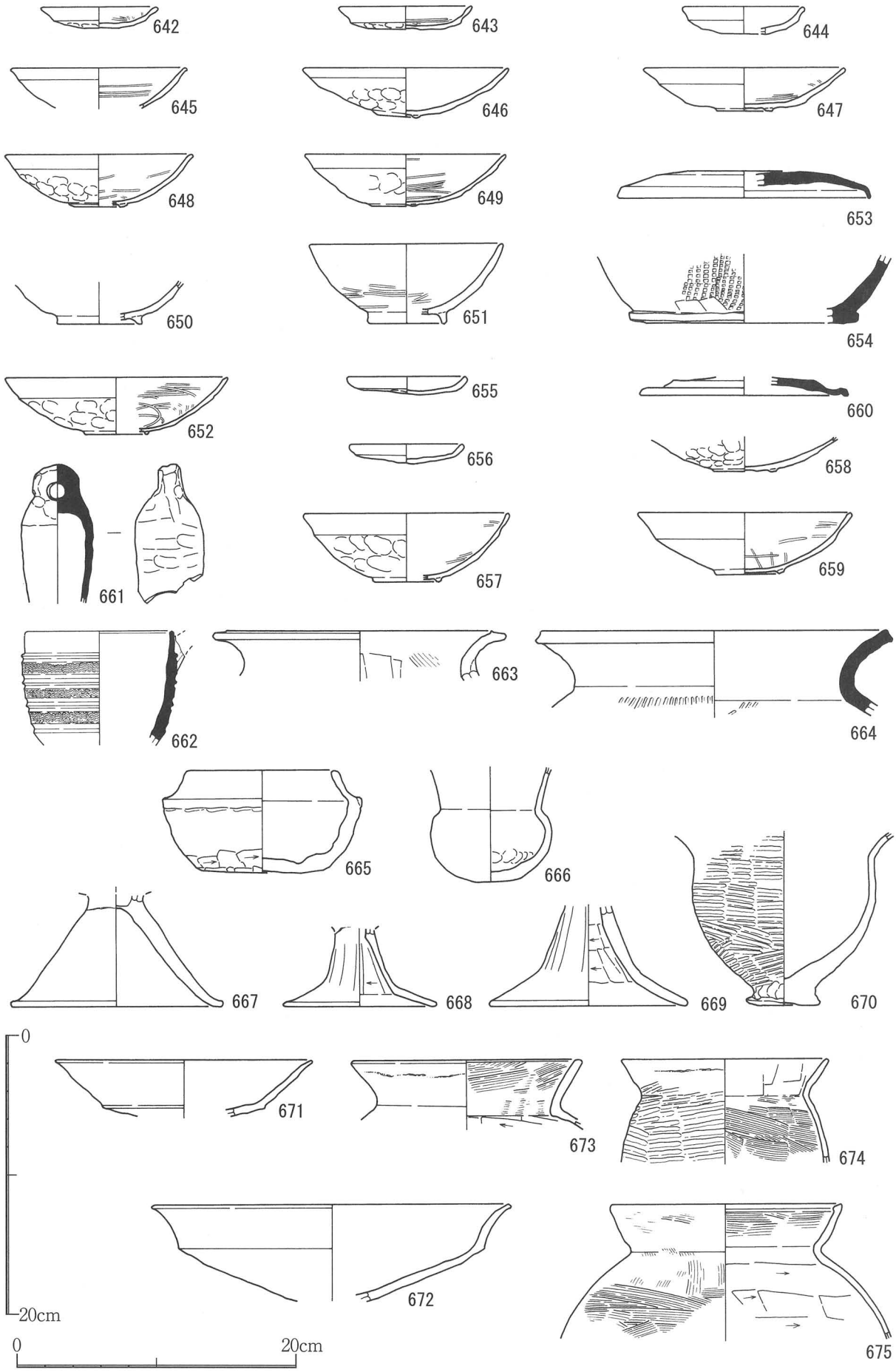
５区の調査（第 56 図）

調査区上面の高さは、調査区東北端で T.P. ＋ 7.6 m、西南端部で T.P. ＋ 7.2 mを測る。

基本土層は黄白色土 0.15 m、灰黒色土 0.15 m、黄灰色土 0.1 m、褐色粘土 0.1 m、黄色粘土 0.8 m、緑白色礫混じり粘土となる。黄白色土は府営住宅を建設する際の盛り土であり、表土である。灰黒色土は府営住宅建設以前の水田耕作土である。黄灰色土は中世の遺物等（第 61 図



第 61 図　平成 13 年度４区出土遺物実測図



第 62 図　平成 13 年度 5 区出土遺物実測図

640 ～ 662）を含んでおり、中世以降一時的に耕作に利用された土と考えられる。褐色粘土は遺物が出土せず、基本的には下層の黄色粘土が後世の影響で変色したものと考えられる。黄色粘土・緑白色礫混じり粘土はいわゆる地山で遺物が出土しなかった。検出した遺構は川である。

ＳＤ００１は調査区東北部の周囲を取り巻くように流れており、３・４・６区で検出した川と同じである。埋土中からは庄内式土器等（第 61 図 663 ～ 673）を出土した。

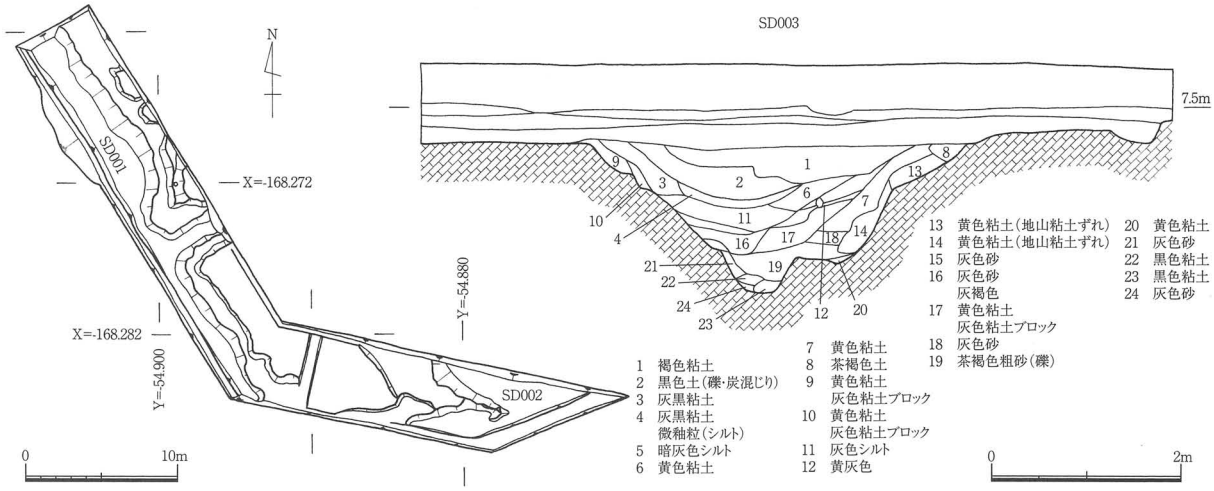
６区の調査（第 62 図）

調査区上面の高さは、調査区西北端で T.P. ＋ 7.75 m、屈曲部で T.P. ＋ 7.95 m、東南端部で T.P. ＋ 7.9 mを測る。

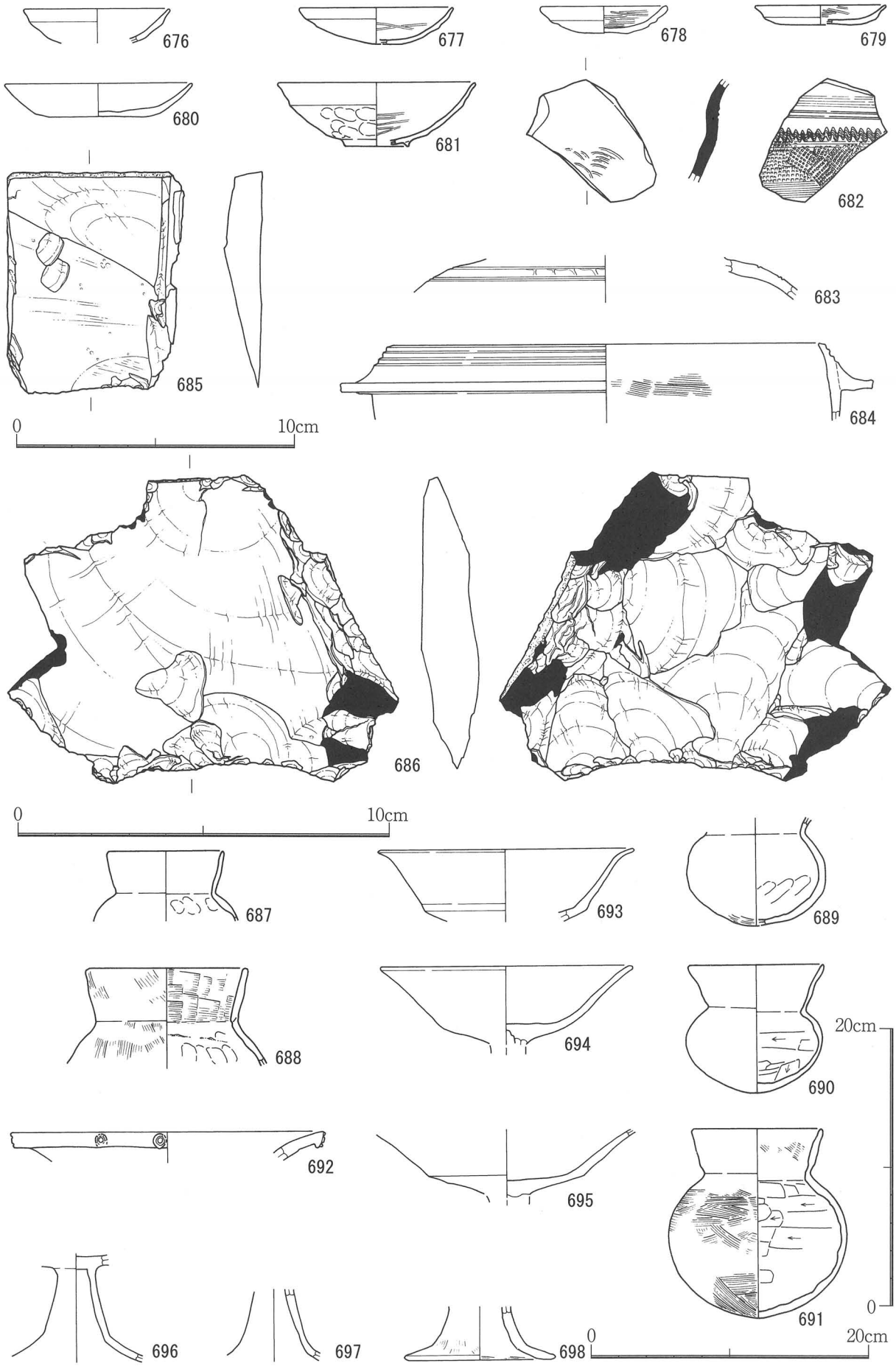
基本土層は３層あり、地山の黄色粘土・黄白色粘土・茶褐色砂礫になる。第１層は盛り土が 0.4 ～ 0.5 m、第２層は黄灰色粘土が 0.15 ～ 0.25 m、第３層は灰褐色粘土が 0.4 ～ 0.5 mである。

調査は、第１層を重機械により掘削し、第２・３層を人力により層ごとに掘削した。第２層黄灰色粘土からは瓦器・土師器の破片が少量出土した。第３層灰褐色粘土からは須恵器・土師器等（第 63 図 674 ～ 684）が出土した。第３層は中央に砂礫を含む薄層があり、細かく分層すると３層に分けられるが、出土遺物の時期に大きな差は認められない。地山面で検出した遺構は川と川に流れ込む溝だけである。第４層灰色粘土・第５層青灰色粘土・第６層灰黒色粘土・第７層青灰色シルトはすべて川の中の堆積層である。

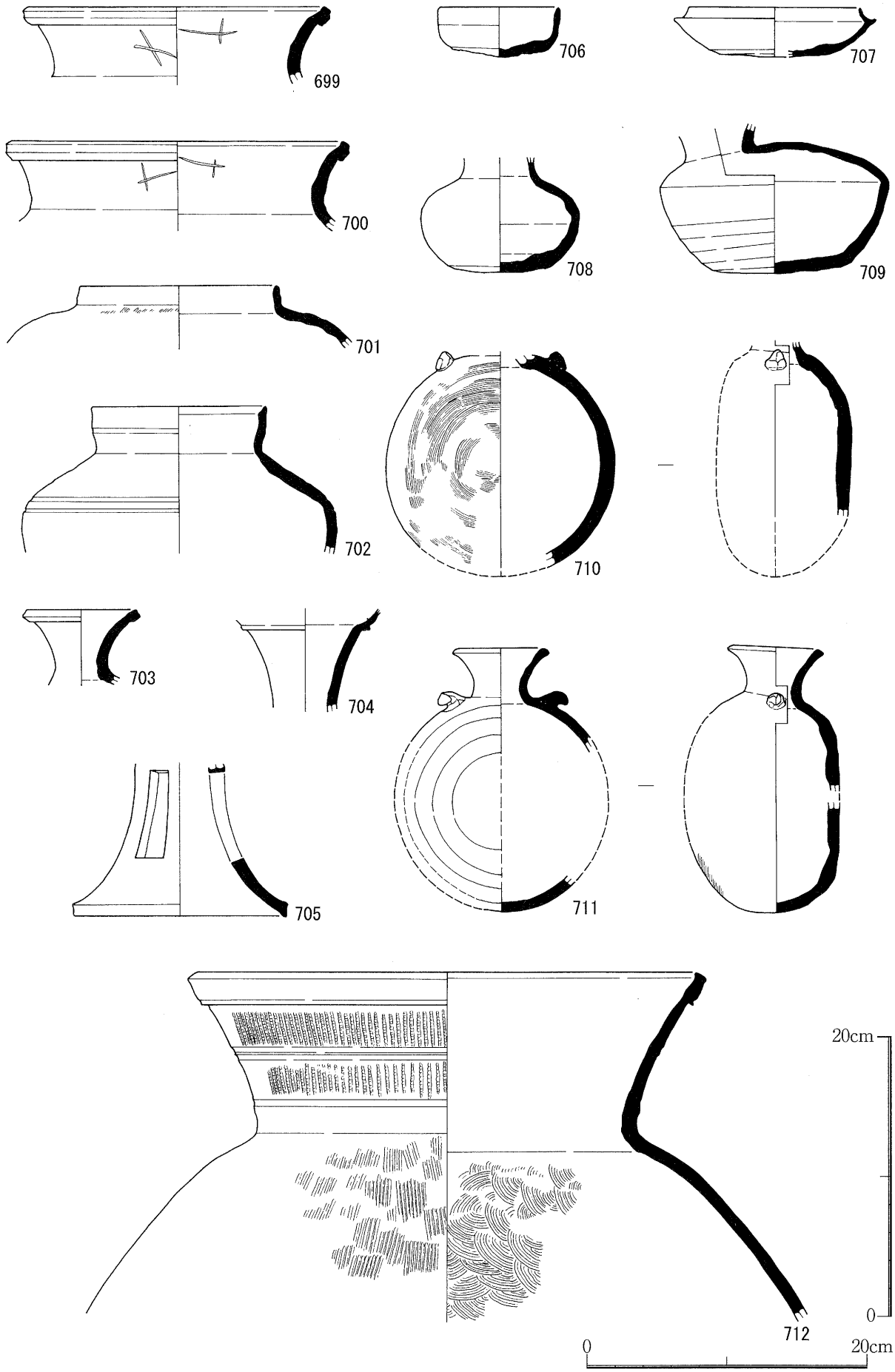
ＳＤ００１は調査区東南端南側から調査区西北部西側を縦断する川である。埋土は大別すると６層であるが、それぞれの層が細分可能である。第４層灰色粘土は 0.5 ～ 0.8 mあり、砂礫の薄層や鉄分の沈着する層で分けると５層に細分できる。第５層青灰色粘土は 0.1 ～ 0.2 mあり、白色粒の混入で分けると２層に細分できる。第６層灰黒色粘土は 0.2 ～ 0.4 mあり、砂粒の含み具合で２層に細分できる。第７層青灰色シルトは 0.3 ～ 0.6 mあり、0.15 mの灰色砂の間層を含む。第６層の灰黒色粘土から弥生時代終末～古墳時代初頭の庄内式土器等（第 65 図 715 ～ 722）が出土した。当調査区では川の右岸を検出したのみで川幅は不明であるが、５区で対岸を検出しており、川幅は最も狭いところで 12 m、最も広いところでは 25 mを測る。６区東南部から西に流



第 63 図　平成 13 年度６区平面図・SD003 埋土断面図



第 64 図　平成 13 年度６区出土遺物実測図 (1)



第 65 図　平成 13 年度 6 区出土遺物実測図 (2)

れ、５区に当たって大きく西北へ流れを変え蛇行している。そのため、５区東隅部は攻撃面となるため川幅が広くなっている。

ＳＤ００２は東南端部で検出したＳＤ００１にほぼ直交する川である。川幅は不明であるが、検出長５ｍ、検出幅５ｍ、深度0.6ｍを測る。埋土は褐色砂礫が全体に堆積した後、流路中央部の褐色砂礫を抉って砂礫を含む黒色粘土・灰色粘土ブロック層が堆積している。東南端部のＳＤ００１内堆積層を切って南～北へ堆積している褐色砂礫層等を別遺構としたものである。６世紀の須恵器（第64図－697～710）が出土し、砂礫の堆積から南～北へ流れる川と考えた。

ＳＤ００３は調査区西北中央部で東北からＳＤ００１に流れ込む溝である。検出長４ｍ、幅4.2ｍ、深度1.6ｍを測る。断面の形状（第62図）はやや口の開いた「Ｖ」字形である。埋土は黒色粘土と灰色砂が0.1～0.2ｍ交互に堆積した後、茶褐色粗砂が0.2～0.3ｍ堆積している。茶褐色粗砂の上は東南側から黄色粘土の塊が壁面に添って貼り付いており、西北側には灰色砂・灰色粘土・灰色シルト・0.5ｍ、灰黒色粘土0.1ｍ、黒色土0.3ｍ、褐色粘土0.3ｍ堆積している。断面を見ると段掘り溝が埋まった後西北側に溝を掘り直したようであるが、茶褐色粗砂が水の流れにより、東南側の底部を抉ったため、肩部の地山粘土が溝内にずれて幅を狭めたと考えられる。その後黒色土が堆積する間に土器（第63図－685～696）等が廃棄されたものと考えられる。

７区の調査

６区から道路を隔てた位置に2.0ｍ×5.0ｍのトレンチをほぼ南北に設定した。調査区上面の高さはT.P.＋7.6ｍを測る。調査は深度2.0ｍまで行った。

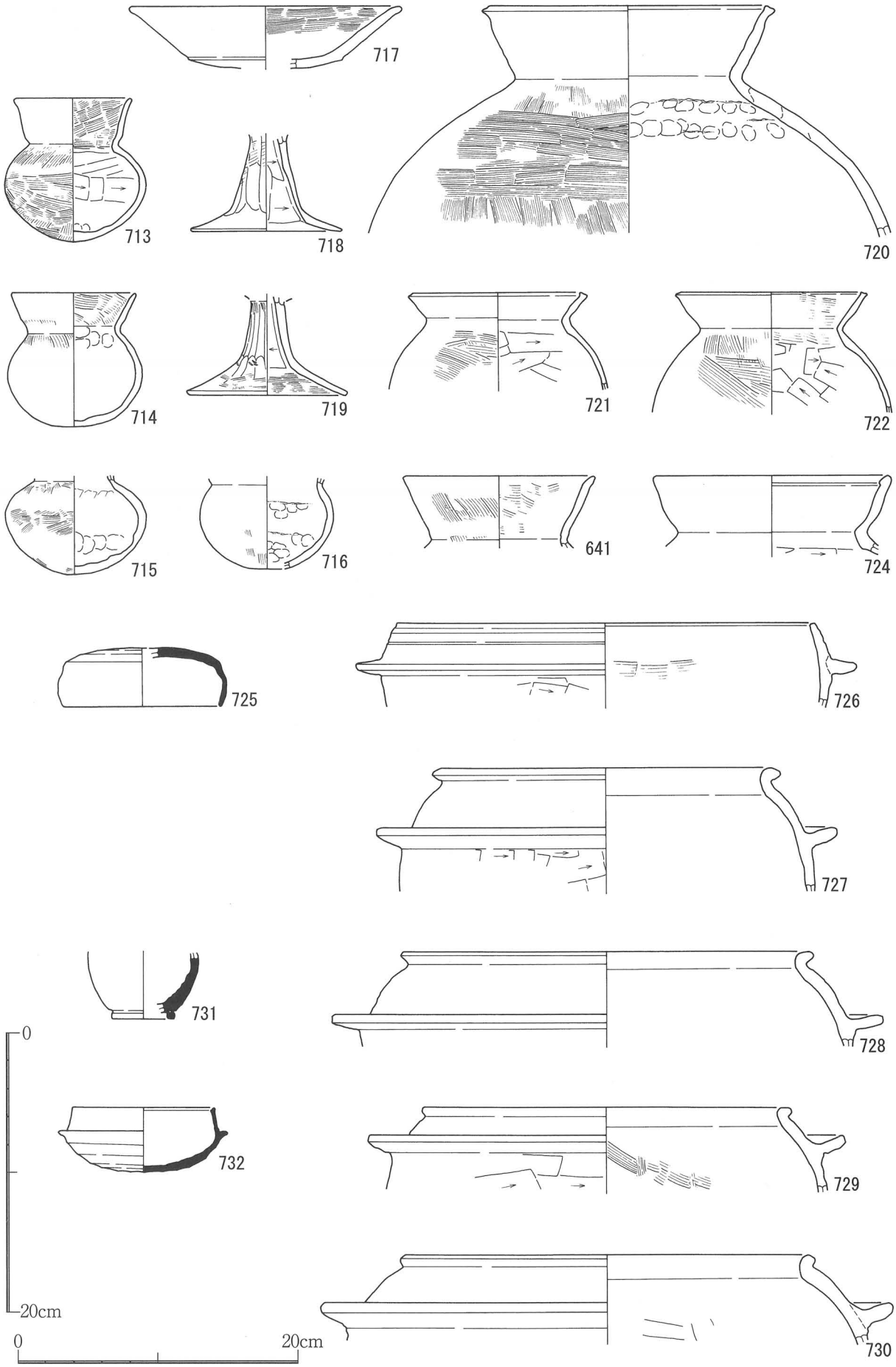
基本土層は８層確認した。第１層は盛り土が0.3ｍ、第２層は褐灰色微砂混粘土が0.2ｍ、第３層は褐灰色シルト混粘土が0.2ｍ、第４層は褐灰色微砂混粘土が0.2ｍ、第５層は暗灰黄色シルト混粘土が0.3～0.4ｍ、第６層は灰色シルト混粘土が0.2ｍ、第７層は暗オリーブ灰色粘質細砂が0.1ｍ、第８層は灰色粘土が0.4ｍ堆積していた。第７層暗オリーブ灰色粘質細砂以下は６区で検出した川の堆積層と考えられる。上面の高さはT.P.＋6.2ｍを測る。

川の中である可能性が高いので、川岸を確認するため南に５ｍ離れたところに小規模なトレンチを設定した。約1.6ｍ下で地山である黄色砂礫を確認した。更に10ｍ南でも掘削した。ここでは0.2ｍで黄色砂礫を確認した。

８区の調査

７区から約50ｍ東に2.0ｍ×5.0ｍのトレンチをほぼ西北から東南方向に設定した。調査区上面の高さはT.P.＋8.4ｍを測る。調査は深度2.7ｍまで行った。

基本土層は５層あり、地山の暗黄灰色砂礫となる。第１層は盛り土が0.4ｍ、第２層は灰黒色土が0.1ｍ、第３層は褐灰色シルト混粘土が0.4～0.5ｍ、第４層は灰黄褐色微砂混粘土が0.2ｍ、第５層は褐灰色細砂混粘土が0.15ｍ、第６層以下は0.05～0.15ｍの黒褐色シルト混粘土・黒褐色細砂混粘土・黒色粘土等が折り重なって堆積しており、川の上層の様相を呈している。南端ではT.P.＋7.0ｍで地山である暗黄灰色砂礫が確認でき、東南方向に向かって次第に下がり、調



第66図　平成13年度６区出土遺物実測図（3）８・９区出土遺物実測図

査区東南端ではT.P. ＋ 5.7 mを測る。この部分に第６層以下が堆積している。西北端は川の肩部に当たるものと考えられる。ここから５m西南に確認トレンチを設定した。ＧＬ－ 1.4 mで地山の暗黄灰色砂礫を確認した。更に 10 m西南で確認トレンチを設定した。ここではＧＬ－ 0.2 mで地山の黄灰色砂礫を確認した。

９区の調査

８区から 50 m東南に西北～東南方向に長い 2.0 m× 5.0 mのトレンチを設定した。調査区上面の高さはT.P. ＋ 8.2 mを測り、調査はT.P. ＋ 6.6 mまで行った。

基本土層は８層で地山のオリーブ黄色砂礫になる。第１層は盛り土が 0.3 ～ 0.4 m、第２層は褐灰色細砂混粘土が 0.3 ～ 0.4 m、第３層は灰黄褐色粗砂混粘土が 0.2 m、第４層は灰黄褐色細砂混粘土が 0.1 m、第５層は褐灰色粗砂混粘土が 0.15 m、第６層は灰黄褐色細砂混粘土が 0.2 ～ 0.3 m、第７層は褐灰色粘土が 0.2 m、第８層は暗オリーブ灰色粘土が 0.2 ～ 0.3 mである。

川の中ではないようであるが、肩部に近いところのようである。

第４節　平成 15 年度の調査

平成 13 年度の確認トレンチを設定した部分の西南側に遺跡がどの程度広がっているのかを確認するために調査した。調査はトレンチを設定して行うことにした。

１区の調査

東西方向に長さ 50m、幅２m のトレンチを設定した。基本土層は２層あり、第１層が盛り土 0.4m で、第２層が灰黄色土、黄色粘土ブロック 0.1m、その下は黄色粘土の地山である。地山面では東北端部でわずかに低くなっているだけで、大部分はほぼ平坦である。ただ、東端部から 1.5m で灰褐色土が現れ、東端部で 0.05m と厚くなっていくのが確認できた。灰褐色土からは瓦器碗の小破片が出土し、遺物包含層と考えられる。調査区域内では、遺構は確認できず、大部分がかなりの削平を受けている状態が確認できた。

２区の調査

１区から 40m 南に幅 2m、延長 30m のトレンチを設定した。基本土層は２層あり、第１層は盛り土が 0.6m、第２層は灰黄色土・黄色粘土ブロックが 0.15m、その下は黄色粘土の地山である。地山面では東北端部でわずかに低くなっているだけで、大部分はほぼ平坦である。遺物は第２層から瓦器・土師器の小破片が出土したが、現代の遺物も混じっていた。明確な遺物包含層はなく、遺構も確認できなかった。１区と同様にかなりの削平を受けている状態が確認できた。

３区の調査

２区から 40m 南で幅 2m、東北から西南方向に延長 70m のトレンチを設定した。基本土層は２層あり、第１層が盛り土 0.4m で、第２層が灰黄色土、黄色粘土ブッ 0.1m、その下は黄色粘土の地山である。地山面では東北端部でわずかに低くなっているだけで、大部分はほぼ平坦である。東北端部から 40m ～ 50m にかけては黄色の砂層の堆積があり、川の可能性が考えられるが、砂

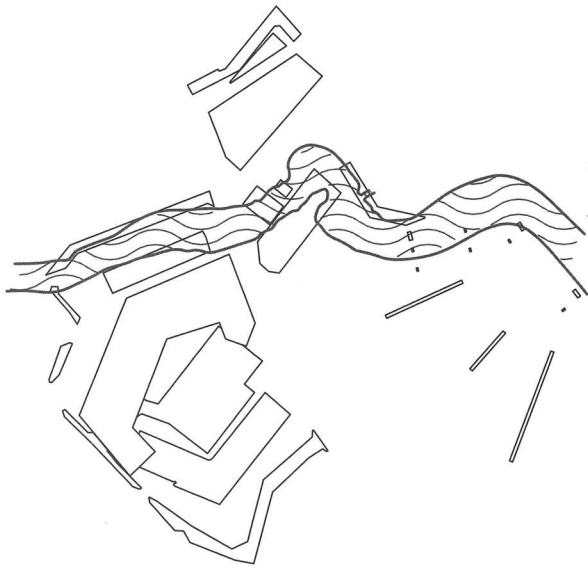
や堆積の状態からは平成13年度に検出した川とは違い、相当古い可能性が考えられる。明確な遺構はこの川だけであり、遺物は第1・2層で現代の物に混じって出土した程度である。

3地区の調査結果から当該範囲は調査不要と判断した。

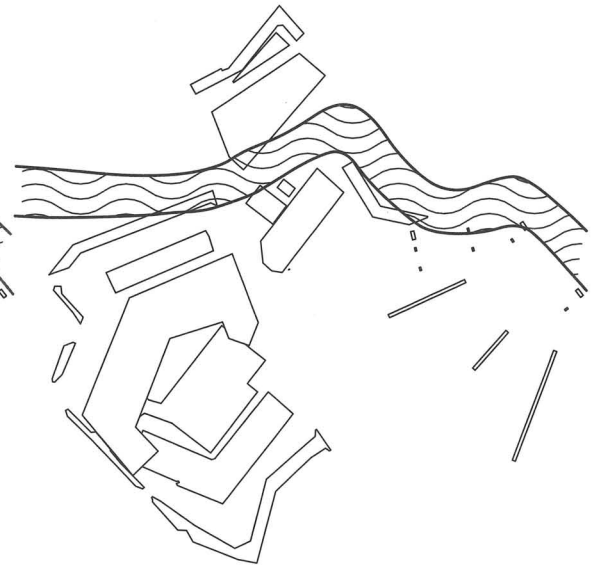
第4章　まとめ

第1節　調査のまとめ

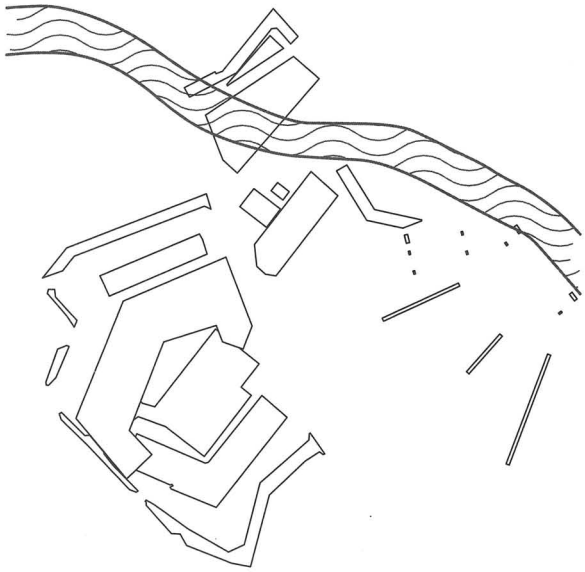
遺構面は最も多いところで3面検出した。第3面は遺跡南西部のやや低い部分でのみ検出し得た。東北部や南部ではほとんど遺構を検出できない部分が多く、後世の削平を受けたものと考えられる。特に府営住宅建設時に相当の削平が行われたようである。遺構や遺物からは弥生時代末から古墳時代・奈良・平安時代、鎌倉・室町時代、そして近世の痕跡が見受けられる。弥生時代末～古墳時代前期は第67図－1のように、平成13年度確認調査地の東南端から平成13年度6区・5区・4区・3区を通り平成11年度B区・平成12年度4区を両岸として流れる川を検出した。この川は久米田池へと続く谷地形の中を流れている。川はその後もずっと同じ場所を流れているのではなく、時代ごとに僅かにその位置を変化させている。古墳時代中期には、第67図－2のように、平成13年度6区東南端を通る川が4区の北隅をかすめて平成12年度4区東北隅をかすめて流れている。古墳時代の明確な遺構はほとんどなく、すでに削平された東南部分か東北部の忠岡町側に生活の中心があったと考えられる。弥生時代末から古墳時代にかけては平成13年度3区で出土した砥石に残された痕跡から鑓を研いたと考えられ、単なる使用のためだけのものか、生産に関わっていたのかは不明であるが、出土遺物からは集落での使用に限定されると考えられる。古墳時代中期は平成13年度6区の東端において北側から須恵器が大量に投棄されていたことから忠岡町側に生活の中心があったと考えられる。平成13年度の調査区では明確な遺構はこの川のみと言ってよいほど遺構がなく、川の埋まった後の窪みに黒色粘質土が堆積しておりこの中から奈良時代～平安時代の遺物が出土する。その中に平成11年度に出土した木簡が含まれていた。この頃には川が北に移動したため、次第に南西部も湿地でなくなり、掘立柱建物が建てられるようになる。平成11・12年度に検出した掘立柱建物等がこの時期にあたると考えられる。平成12年度の第1面は平安時代末から室町時代の面と考えられる。この頃には川は第67図－3のように、平成13年度1区で確認した砂礫層やそれに続く2区西南部の窪みが川の痕跡と考えられる。中世末以降周辺の水田開発が活発になるにつれ、第67図－4のように、現在の岸和田市と忠岡町境を流れる久米田池から引かれている水路へと形を変えていったのであろう。



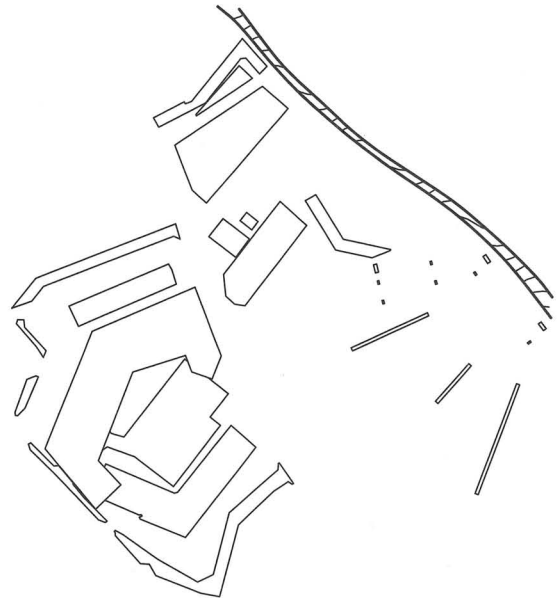
～古墳時代前期



古墳時代中期～古代



古代～近世



近世～現代

第 67 図　　吉井遺跡の流路変遷

第２節　吉井遺跡出土の紀年木簡（巻頭カラー１・第27・67図）

吉井遺跡出土の紀年木簡は、平成12年（2000年）２月16日の水曜日夕方、第16トレンチと呼ばれる試掘調査区で発見された。調査補助員が、夕方その日の出土遺物のラベルを入れるため各調査区を廻っている時に、バスケットに入れられた木片をみつけた。出土してから数時間経っていたらしい。出土状況を知るのは、このトレンチを掘削していた作業員だけである。数日後、その作業員に出土状況を聞いたが、当を得ない。必死で掘削していたため、およそのことしかわからないという。もちろん発掘時、木簡には黒い粘質土がこびり付き、墨書ははっきりわからなかった。ただ、長方形をした木片であり、自然のものではないと思いバスケットに入れたという。長さ５m、幅２mの小規模なトレンチで、遺構や遺物の有無、地山面までの深度を確認するためだけの調査であったゆえ、無理もなかろう。長さ32.3㎝、幅3.8㎝、厚さ0.55㎝の木片を残してくれたことに、筆者たちはまだ感謝しなければならないであろう。

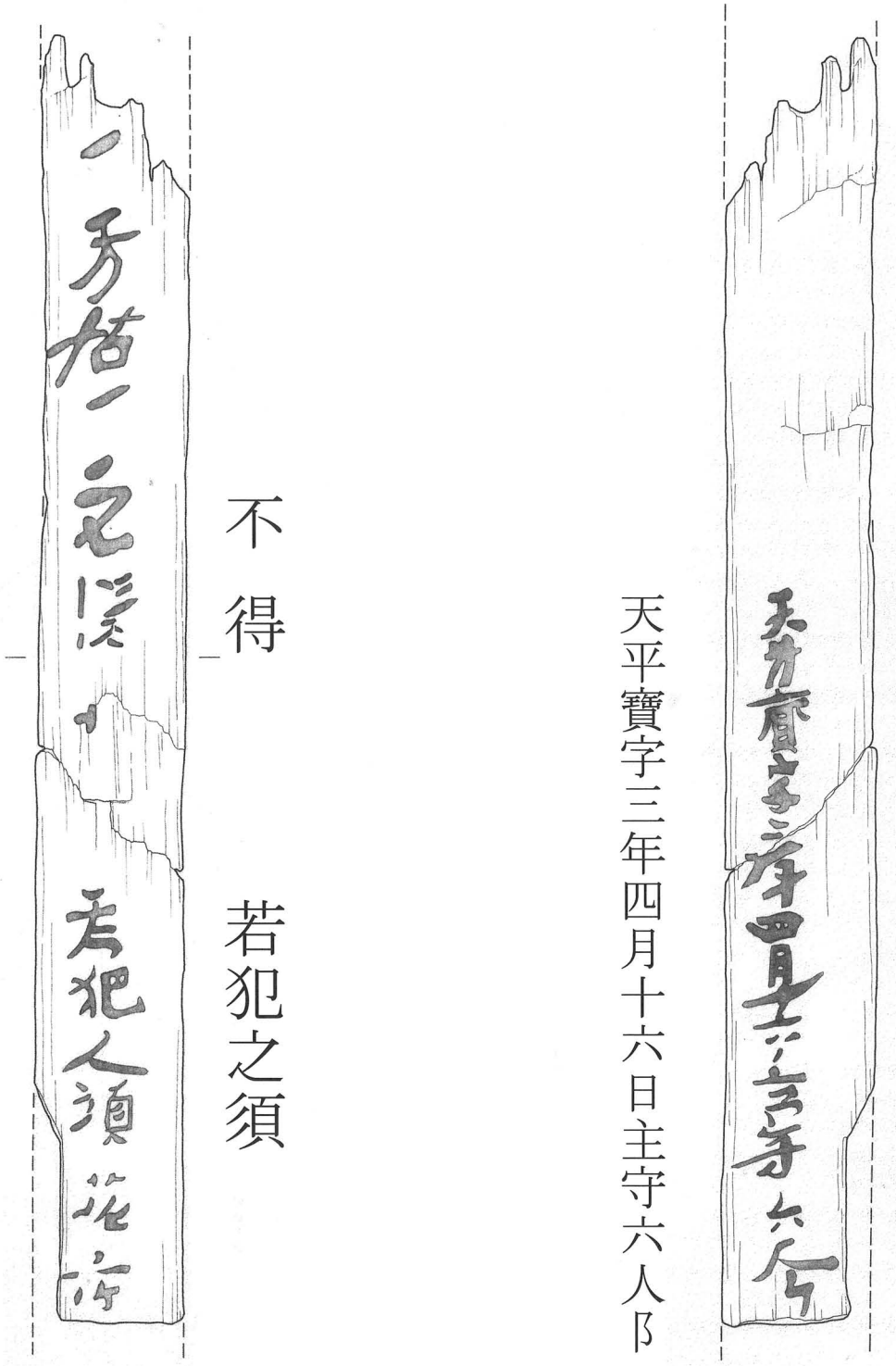
さて、平成11年度の吉井遺跡の調査であるが、調査区はＡ調査区（3200㎡）、Ｂ調査区（500㎡）、試掘調査区（１～25トレンチ・250㎡）にわかれ、調査面積の合計は3,950㎡になる。

Ａ・Ｂ両調査区で検出された主要な遺構には、弥生時代終末期から鎌倉時代にかけての河川・掘立柱建物・ピット・井戸・溝・土坑などがある。

Ａ調査区では、二面の遺構面が確認されている。中でも掘立柱建物は、鎌倉時代前葉頃の三間×四間の庇付の総柱建物が重複して検出されており、重量物などを納めた倉庫と考えられる。また、Ｂ調査区では、ほぼ東西方向に伸びる弥生時代終末期から平安時代にかけての河川が検出されている。この河川B001は、その規模が長さ120m以上、幅15～20m、深さ2.2m以上と想定される古代の大河であった。現在、調査区の南側に流路を変えている、かつての「天の川」の姿かもしれない。

今回、報告する木簡は、試掘調査区の第16トレンチから出土したものであるが、このトレンチはＢ調査区の東西方向の河川B001内に含まれるものと考えられる。土層の堆積は、上から暗灰色粘質土（0.25～0.4m）、黒色粘質シルト（約0.1m）、黒灰色粘質シルト（約0.55m）であり、地山は灰色砂礫土となる。その後、実施された周辺の調査結果からいえば、河川B001は東側から流れてきて、21・22トレンチ付近で北側に大きく蛇行し、16・17トレンチ付近で西側に流れを変えていったものと考えられる。なお、木簡は上層の暗灰色粘質土の中程から出土しているが、この層は河川が機能を停止しつつあった時に徐々に堆積していったものと考えられる。

河川B001の年代については、堆積土から出土した遺物やこの河川に注ぐ溝から出土した遺物から、弥生時代終末期頃から流れ出し、その後古墳時代後期頃まで流れ続けたが、奈良時代頃には機能が停止つつあり、平安時代前葉頃には完全に埋没していったものと考えられる。



第 68 図　紀年木簡釈文

次に木簡をみてみよう。

表　　×□□□不得□□□若犯之□□□×

裏　　天平寶字三年四月十六日主守六人ア×

木簡は、上下両端が欠損し、また二片に分離している。表と裏の両面には墨書が認められ、破断面の観察から裏面を外側にして折られていたと推定することができる。表面は墨の残り具合が

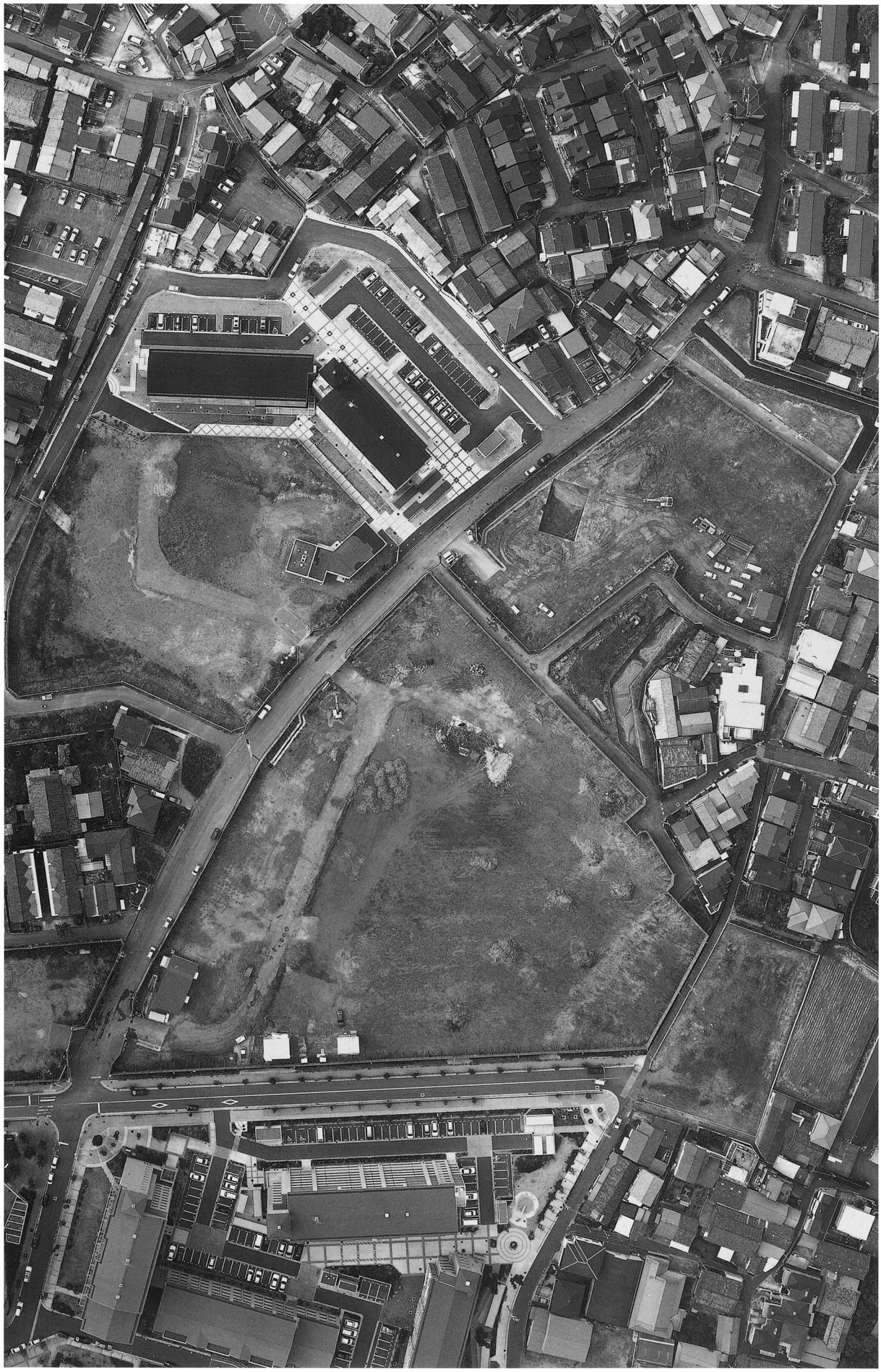
悪く、墨付けの部分の木質がわずかな盛り上がりとなって遺存している状態である。これは、一定期間、外気にさらされていたためと考えられる。それに対して、裏面は湿潤な粘質土中にあったためか、墨痕が鮮やかに遺存していた。表面は読めない文字が多い。確実に判読できるのは「…若犯之…」だけである。これは、「若し之れを犯さば…」と読むことができよう。おそらく、ここで一旦墨を浸けなおして文字を書き始めたため、明瞭に遺ったのであろう。「之」の下の一文字は「須(すべからく)」の可能性が考えられる。裏面は、木簡の中程より下に、年月日である「天平寶字三年四月十六日」、役職名と考えられる「主守」、人名「六人阝…」が記されていた。「天平寶字三年」は西暦７５９年にあたる。『続日本紀』によれば、この年は「廃帝」と記された「淳仁天皇」の治世であった。年号と年月日が同時に記載されており、その日が特別な意味をもつ日であったことが想像できよう。「主守」については、『令義解』巻十の「獄令」有疾病条に次の記述がある。「主守申牒謂。主守者。主当獄囚之物部也。」とある。また、『令義解』巻一の「職員令」にも次の記述がある。「囚獄司　正一人。掌禁囚罪人。(謂。衛府糺捉罪人。及諸司送徒以上者。皆此司任罪禁囚。)徒役。功程及配決事。佑一人。大令史一人。小令史一人。物部四十人。(謂。此伴部色。故式部補任。其衛門府門部亦同也。)掌主當罪人。決罰事。物部丁廿人。(謂。諸国仕丁。帯杖守獄者。即自民部省所充也。)」とある。囚獄司(ひとやのつかさ)とは、当時の刑部省の下部官庁であり、衛府(警察か)が逮捕した罪人や諸司から送致された徒(懲役刑)以上の罪人の拘禁や、徒罪人の労役の監督・配流・決杖をつかさどる。伴部である物部が執行を担当した。現在でいえば、検察庁や拘置所・刑務所にあたるものであろう。そこには、正(長官)が一名、佑(次官)が一名、大令史が一名、小令史が一名配属され、その下に主守という官人が四十名配置されている。なお、「主守」は「囚獄司」という当時の役所に限定された職名だったらしい。また、「六人阝」は、六人部であり、「阝」は「部」の省略字であろう。『新撰姓氏録』(弘仁六年・815)によれば、和泉国諸蕃に「六人部連。百済公と同じき祖。酒王の後なり」とある。おそらく、奈良～平安時代に六人部連氏が和泉国に蟠居していたことは確実であろう。ただ、同書には、六人部氏は和泉国だけではなく、右京や摂津国、山城国の神別にもみえている。

いずれにしても、この木簡は、『令義解』によれば、平城京にあった「刑部省」の下部官庁である「囚獄司」の役人である「主守」(強い権限をもつ監督官か)の「六人阝某」(六人部連氏か)が、当地周辺に発給した公的文書なのであろう。さらに、このことは、木簡の表に墨書された「…若犯之…」と、律文(刑法)の体裁をとっていることからも首肯されよう。ただ、現在遺存している中国の『故唐律疏議』や日本の『律令』の中には、この文言は見出せない。

参考文献

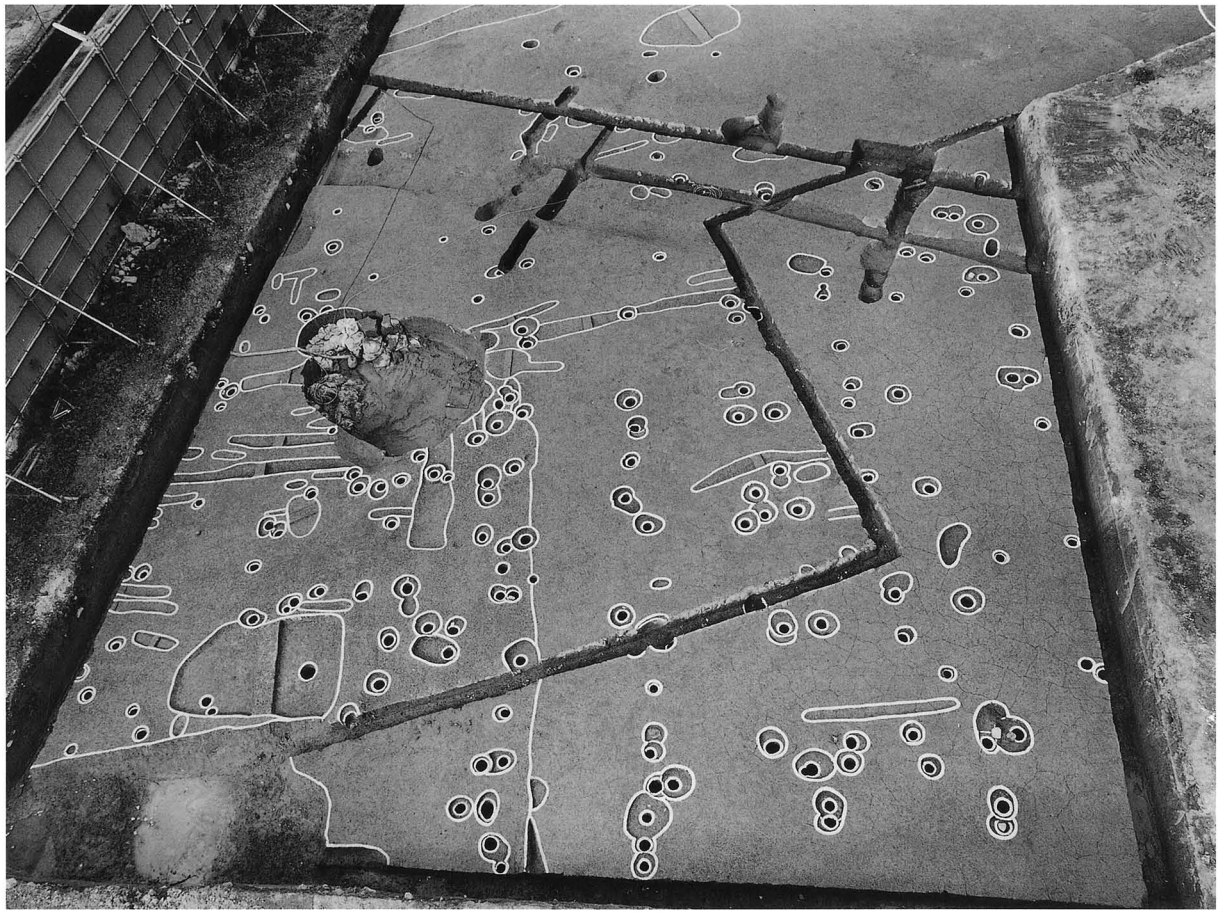
・上林史郎「大阪・吉井遺跡」『木簡研究』第二二号　木簡学会　平成十二年
・『續日本記』新訂増補国史大系２　吉川弘文館　昭和四十一年
・『律 令義解』新訂増補国史大系22　吉川弘文館　昭和四十一年
・『令集解』前篇　新訂増補国史大系23　吉川弘文館　昭和四十一年
・『令集解』後篇　新訂増補国史大系24　吉川弘文館　昭和四十一年

図　　版

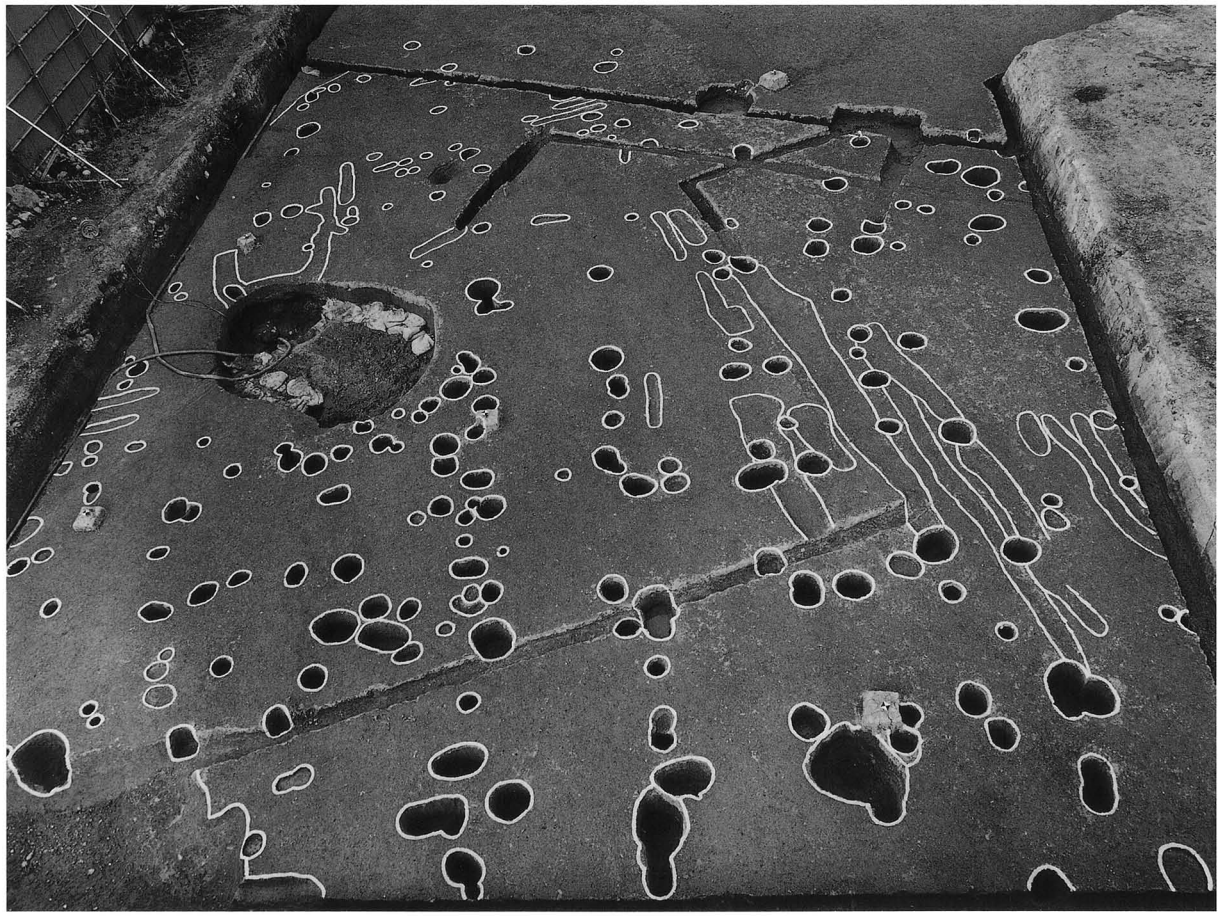


図版1　調査地全景

図版2　平成11年度A調査区①



南端部上面建物群（南から）



南端部下面建物群（南から）

図版3　平成11年度A調査区②

南端部全景（南から）

南半部全景（西から）

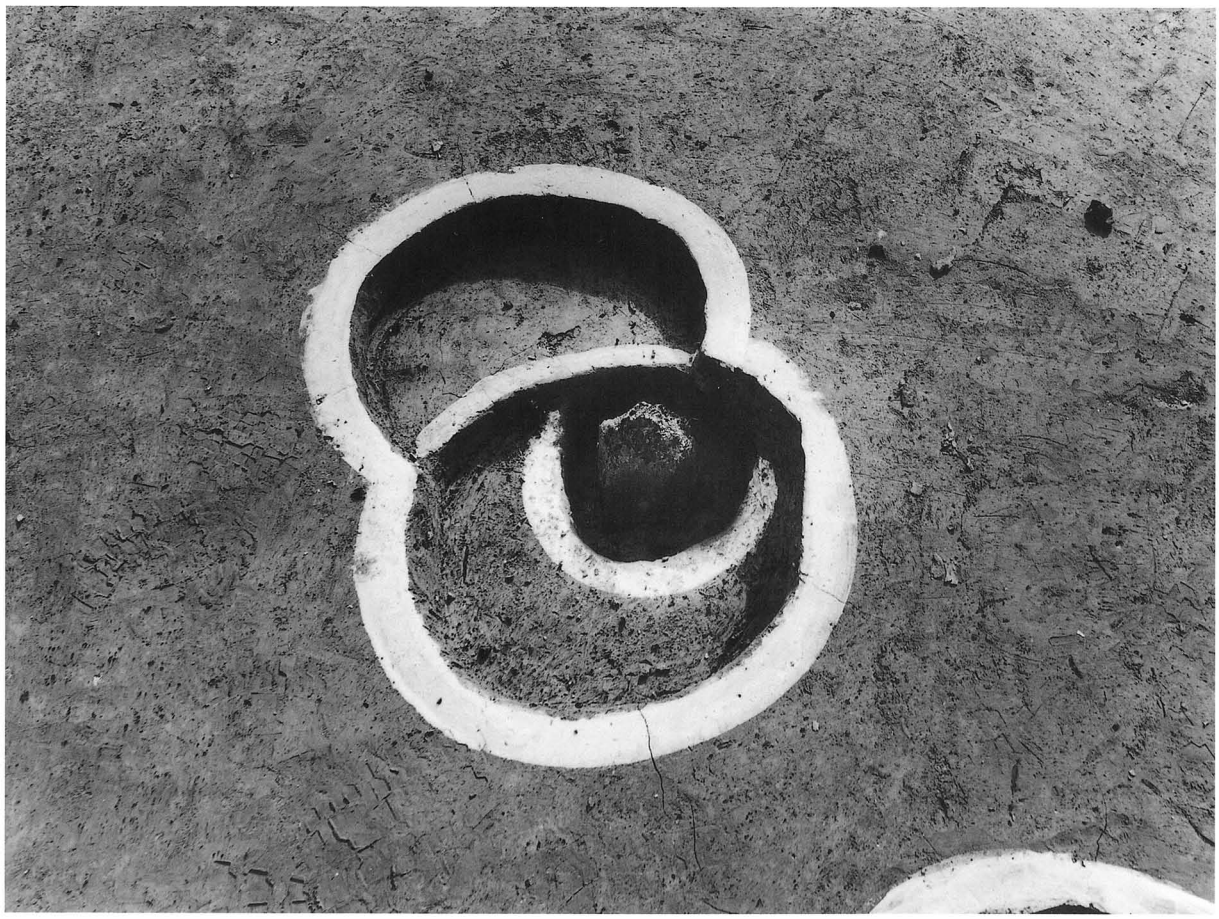
図版4　平成11年度A調査区③

中央部全景（北から）

北端部全景（東南から）

図版5　平成11年度A調査区④

東南部 A-A' 断面（西南から）



建物 A001 柱穴（西北から）

図版6　平成11年度B調査区①

全景（東北から）

全景（西南から）

図版7　平成11年度B調査区②

河川 B001（東南から）

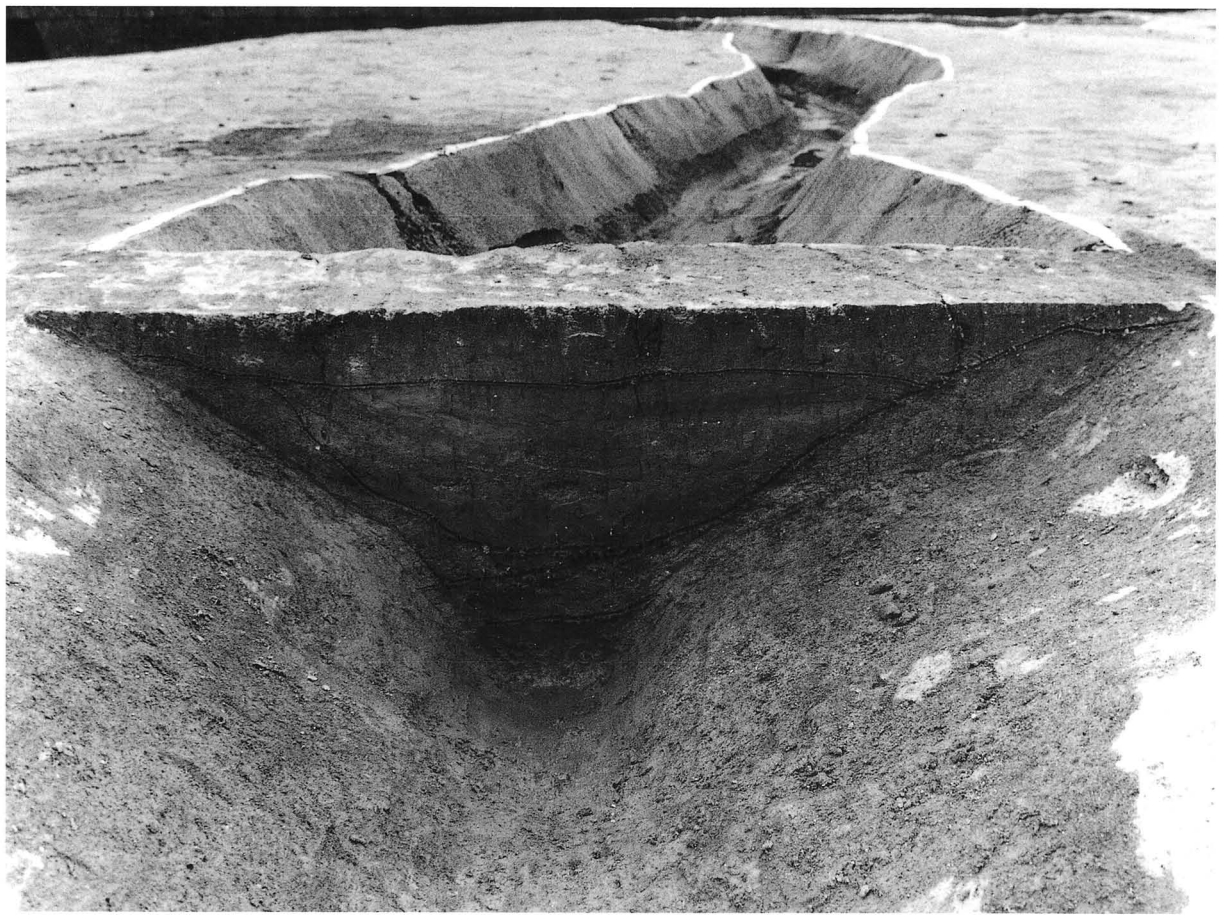
河川 B001、溝 B004、溝 B003（東南から）

図版8　平成11年度B調査区③

河川 B006、溝 B005、溝 B004（東南から）

調査区西南部全景（東南から）

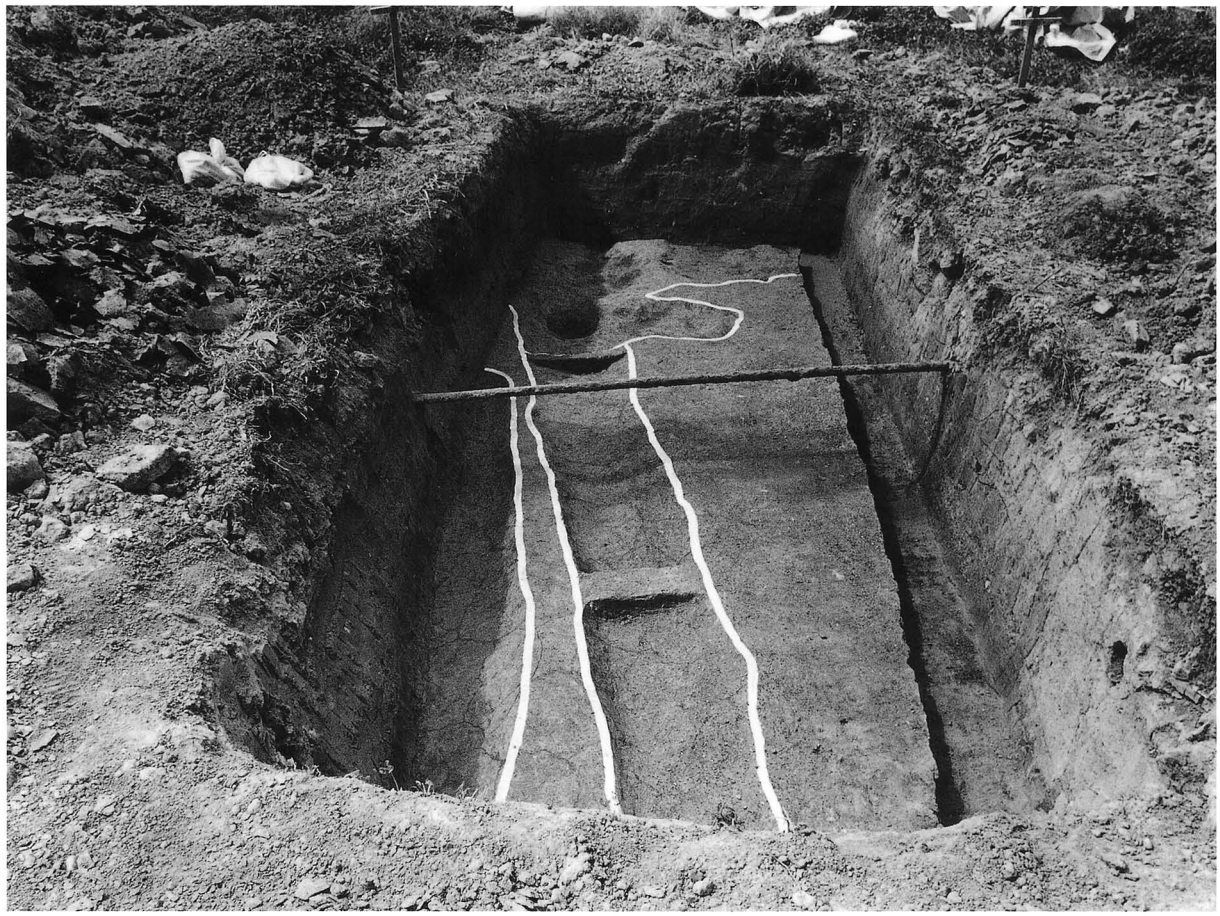
図版9　平成11年度B調査区④



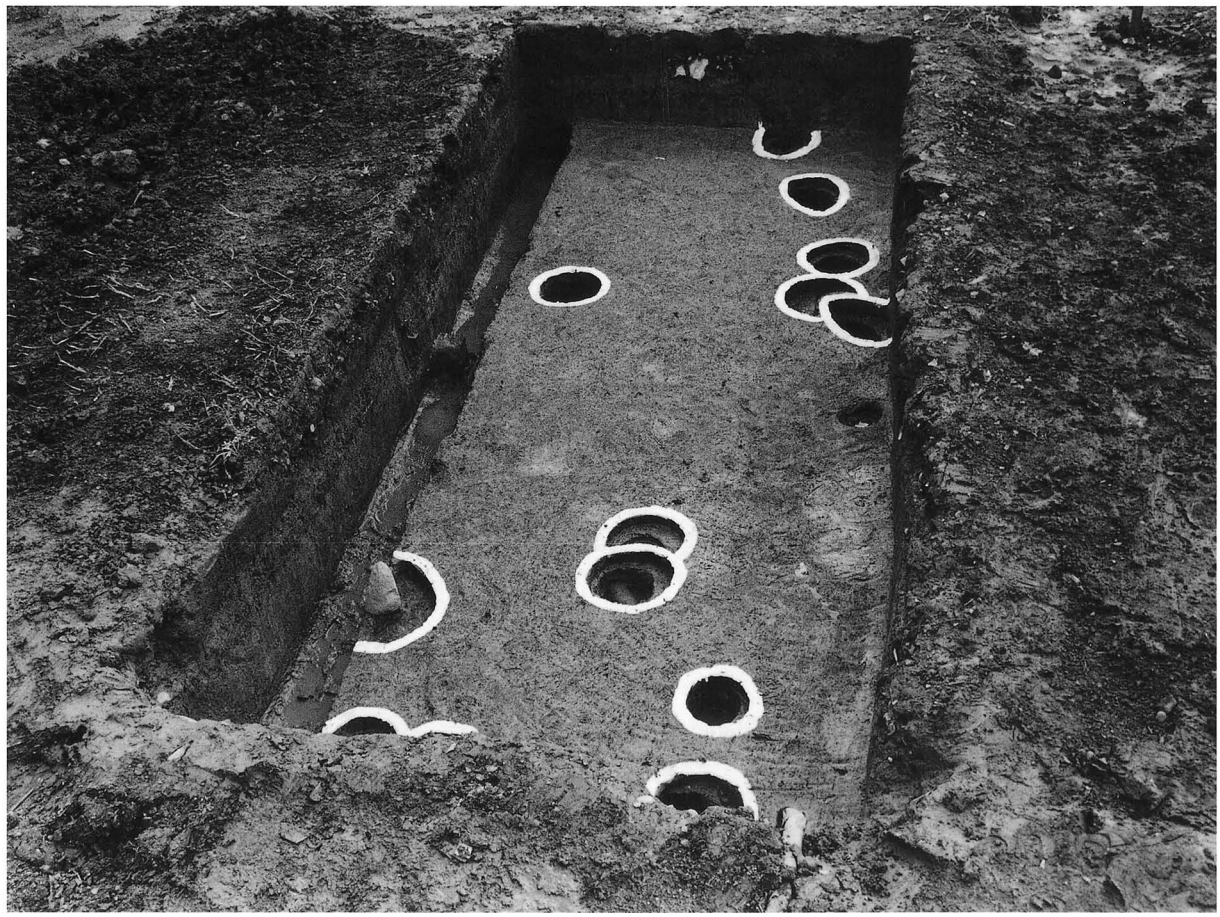
溝 B006 断面（北から）

河川 B001 布留式土器出土状況（南から）

図版10　平成11年度試掘調査区①



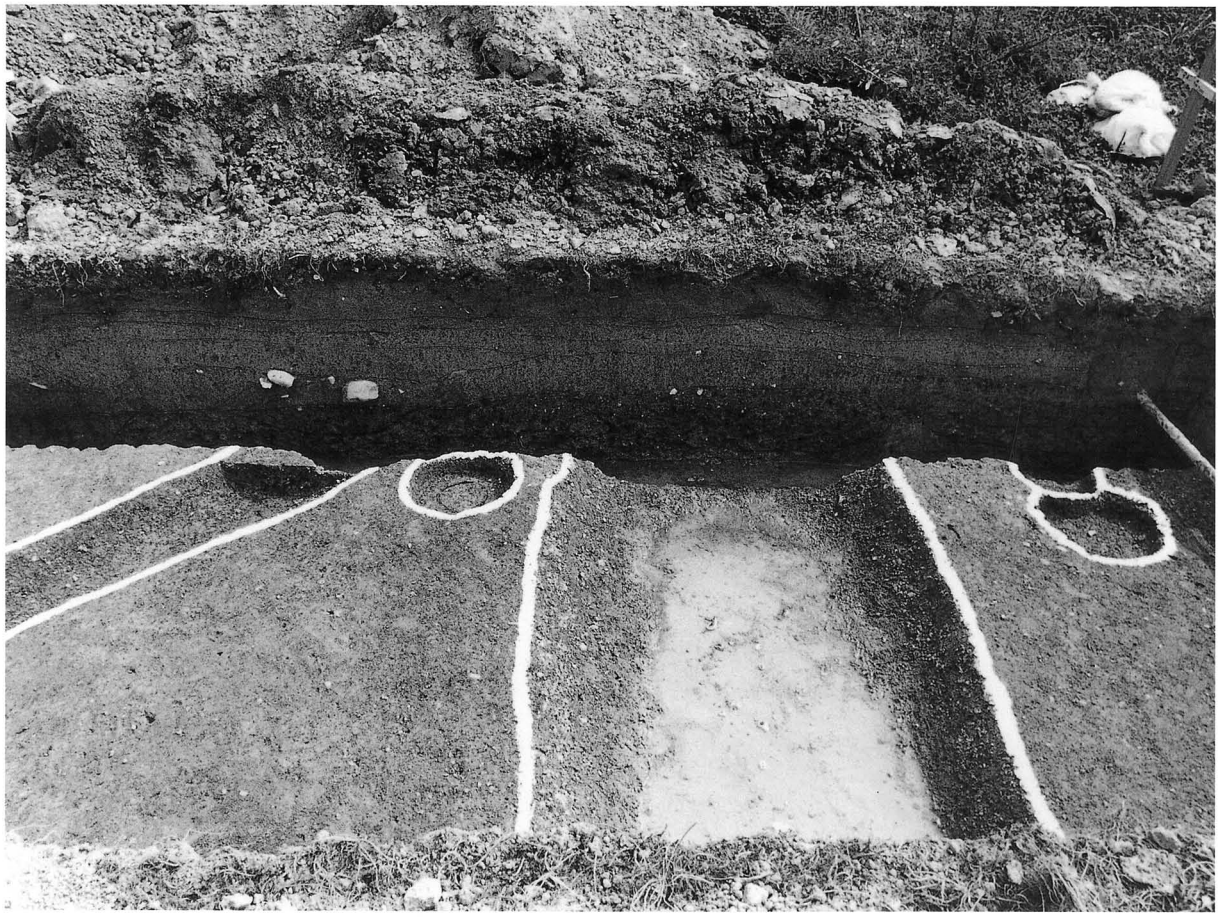
1トレンチ全景（東から）



4トレンチ全景（東から）

図版11　平成11年度試掘調査区②

7トレンチ全景（東北から）

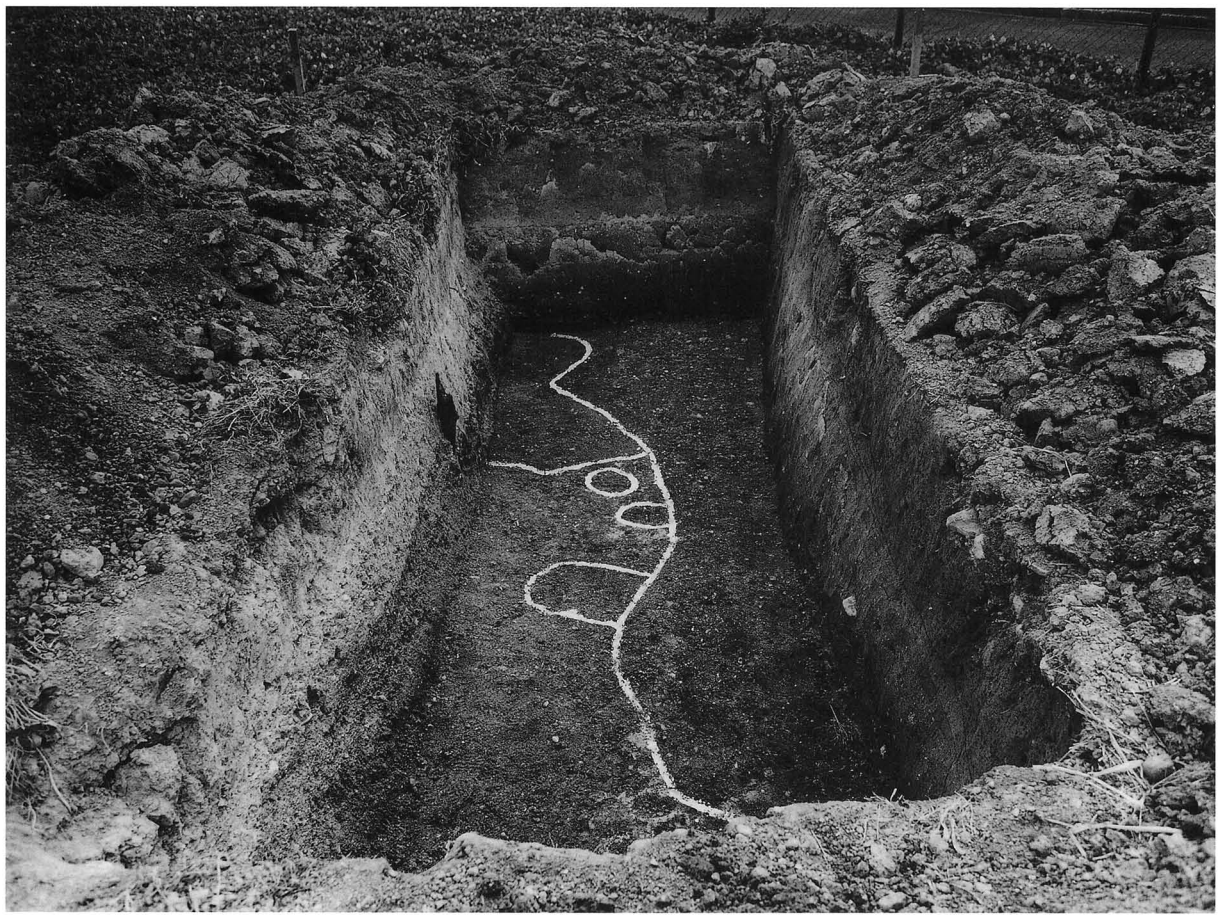


9トレンチ南壁断面（北から）

図版12　平成11年度試掘調査区③

16 トレンチ西壁断面（東から）

16 トレンチ北壁断面（南から）



22 トレンチ全景（南から）

23 トレンチ全景（南から）

図版14　平成11年度試掘調査区⑤

24 トレンチ全景（南から）

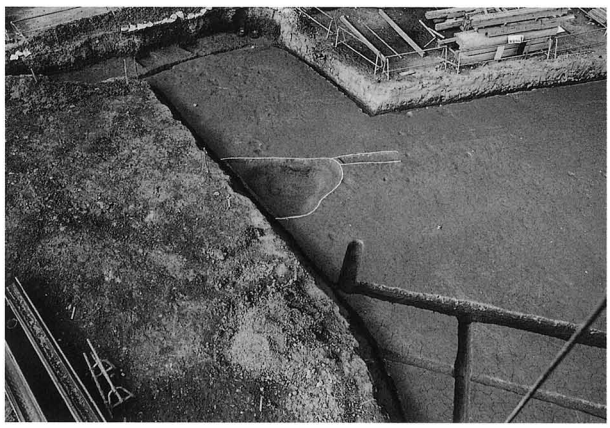
25 トレンチ全景（南から）

図版15　平成12年度1区

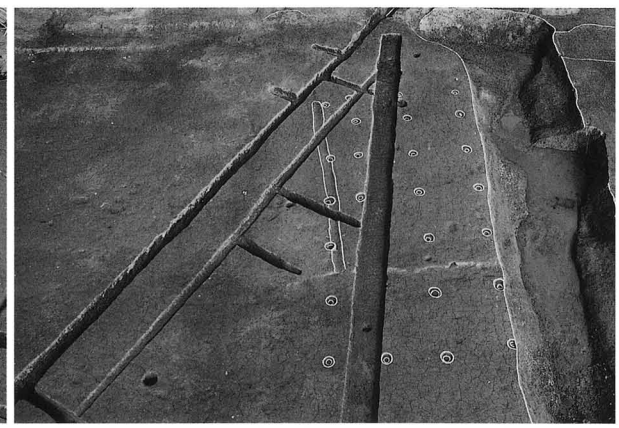
第１面東北半部全景（東南から）

第１面東北半部全景（西南から）

第１面西南半部全景（東南から）



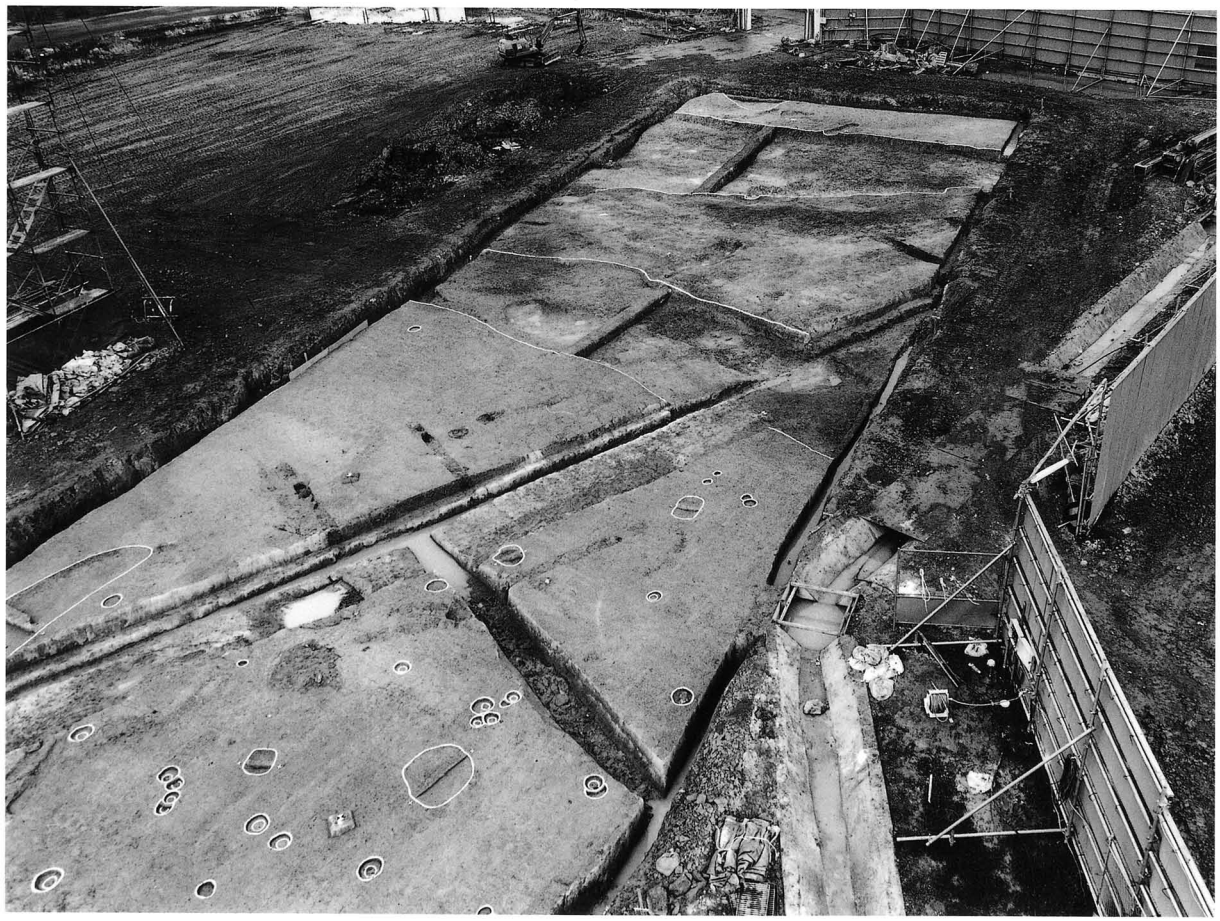
第１面西端部（南から）



第１面掘立柱建物全景（南西から）

図版16　平成12年度2区第1面

中央部（東南から）



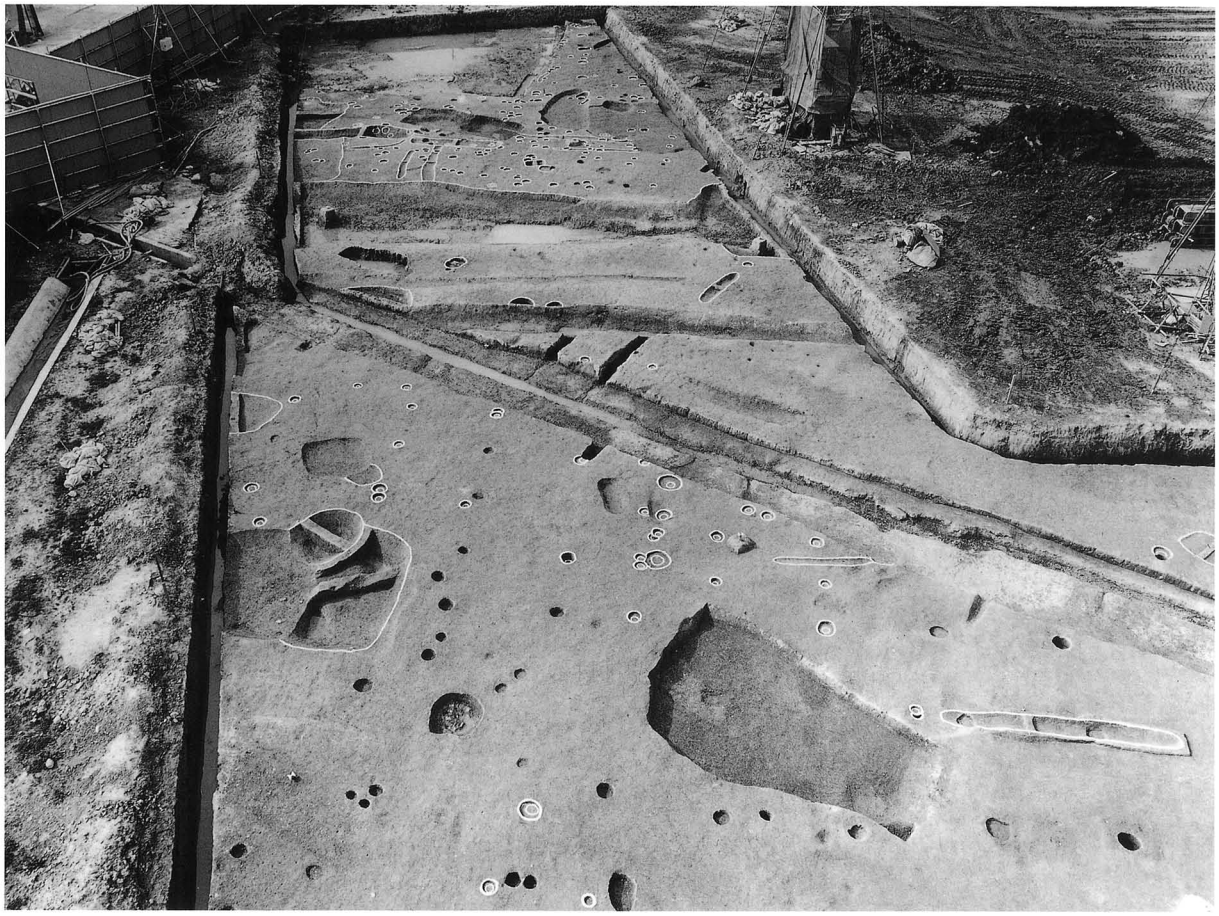
東北半部（南から）

図版17　平成12年度2区・第1面

西半部（東から）

西端部（東から）

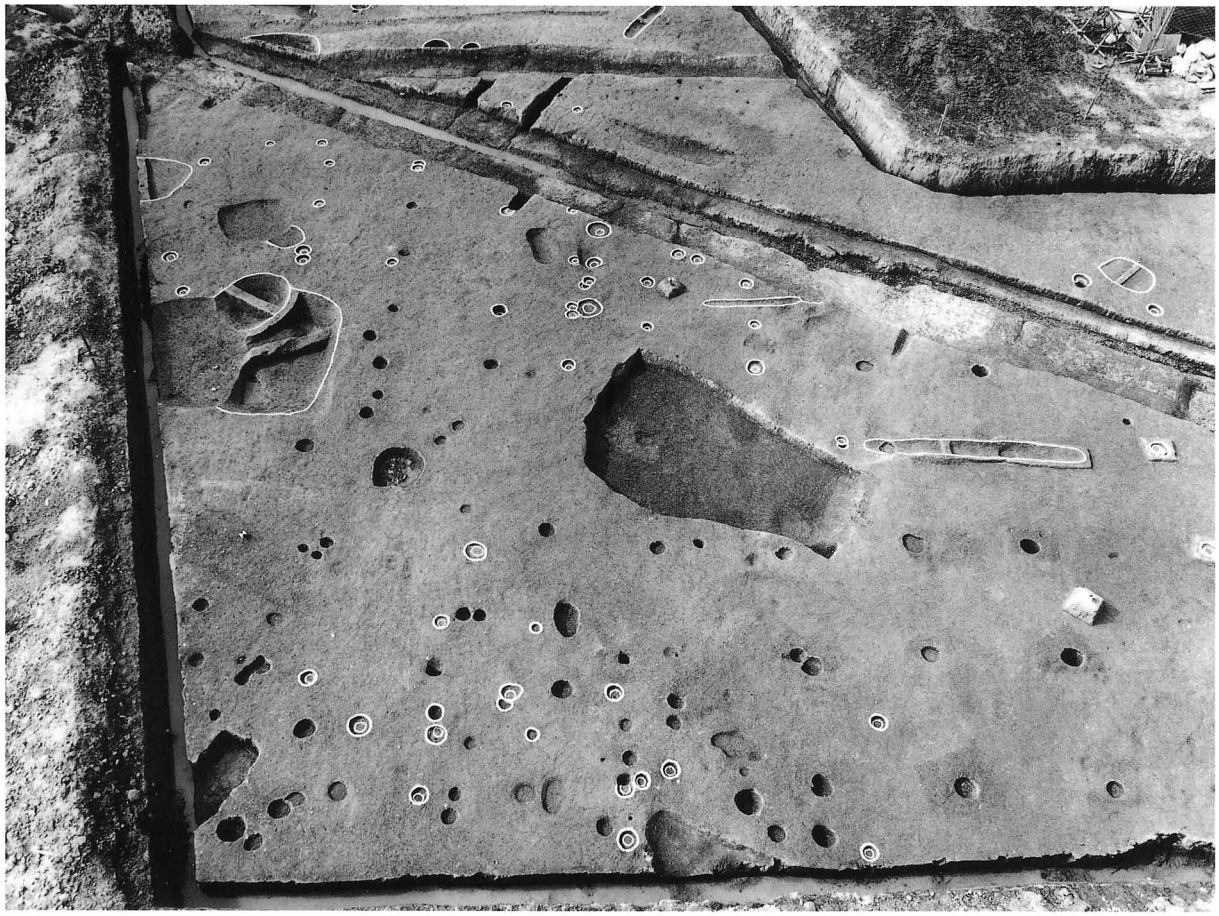
図版18　平成12年度2区第2面



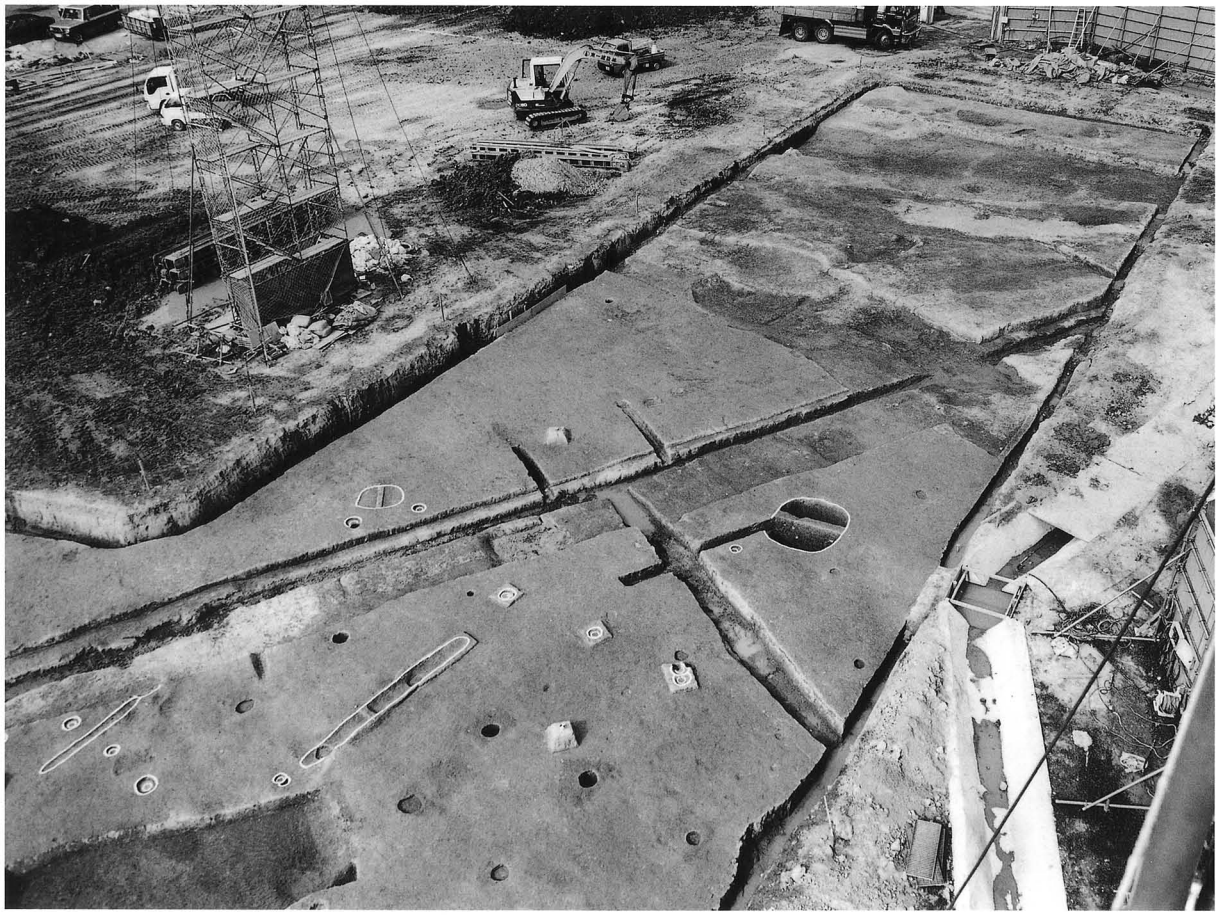
西半部（東から）

西端部（東北から）

図版19　平成12年度2区第2面



中央部（東南から）



東北半部（南から）

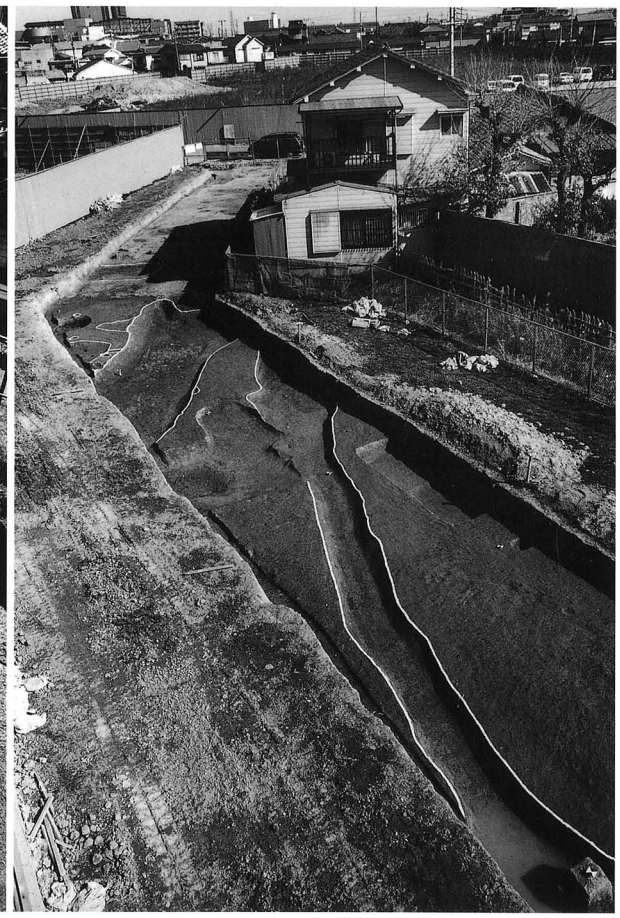
図版20　平成12年度2区第3面

西半部（東南から）

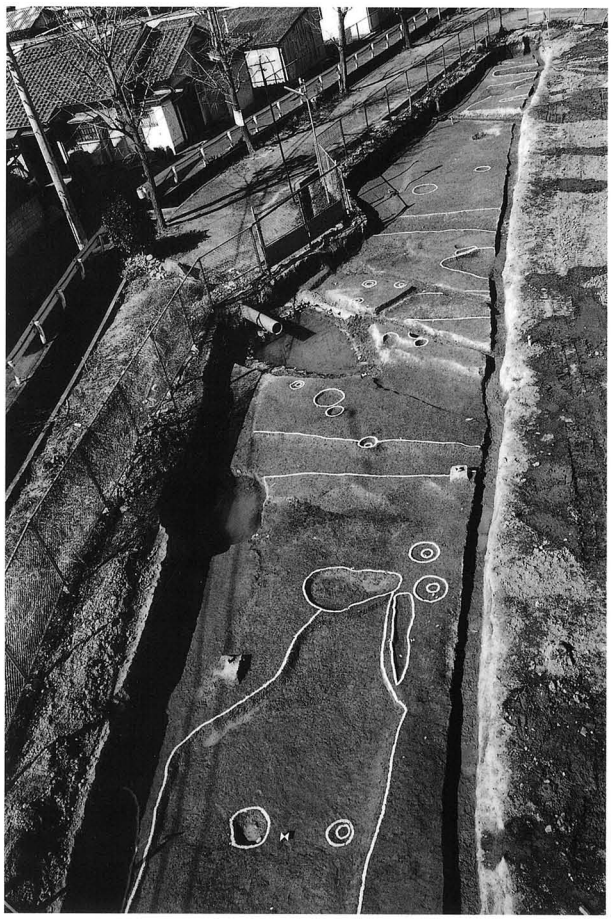
東北半部（南から）

図版21　平成12年度3区

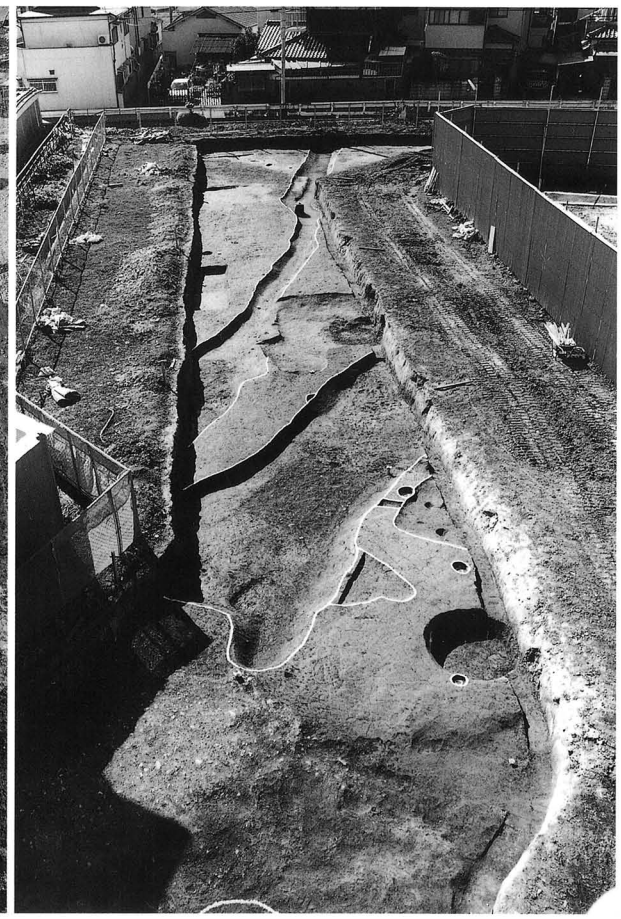
西端部（西北から）



中央部（南から）

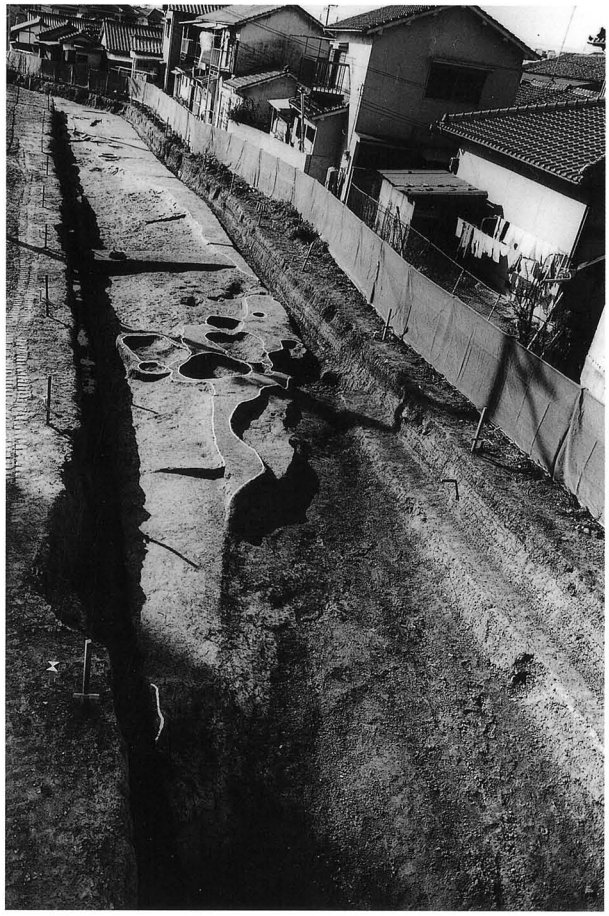


西端部（東南から）



中央部（北から）

図版22　平成12年度4・5・6区



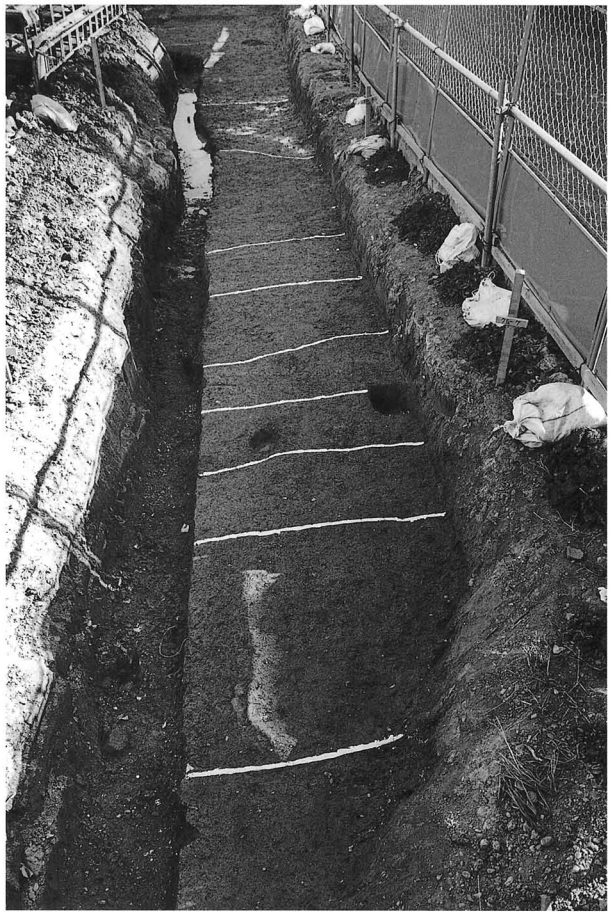
4区全景（西から）

5区全景（西北から）

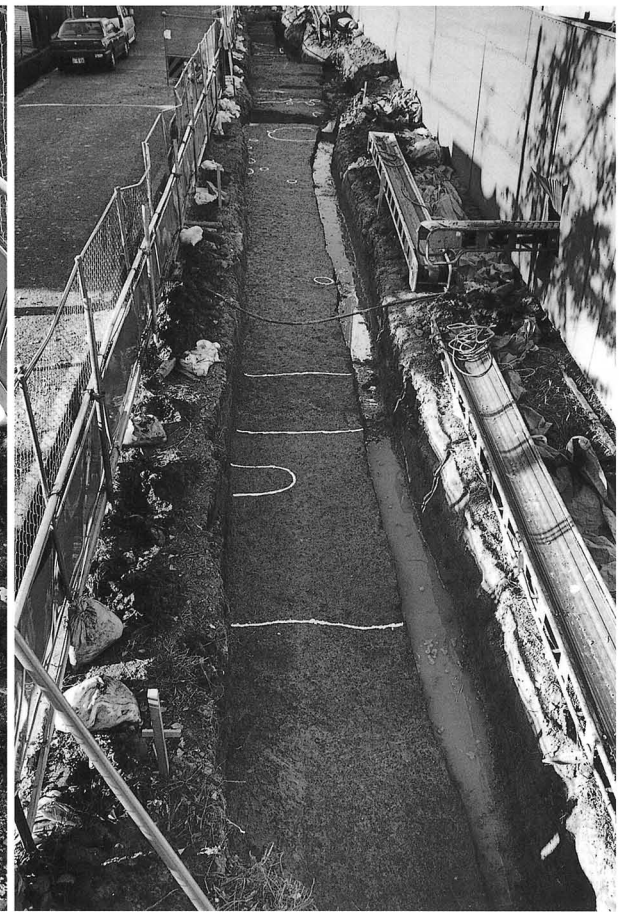
5区全景（東南から）

6区全景（南から）

図版23　平成12年度7区



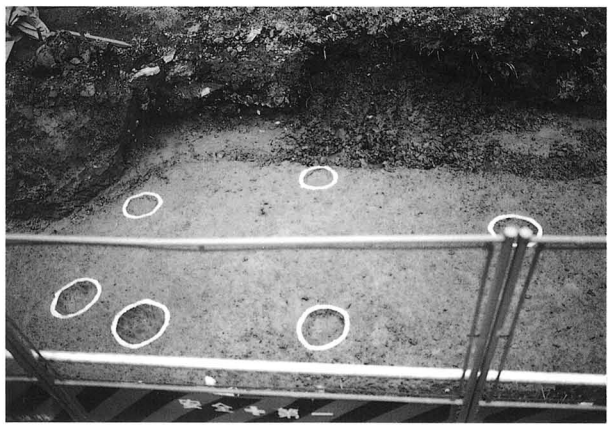
掘削完了全景（西北から）



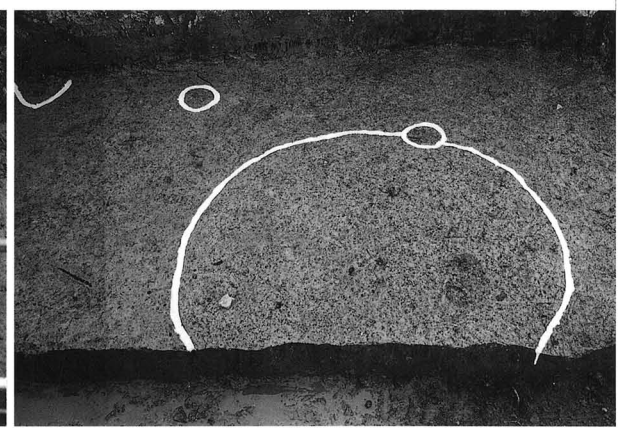
掘削完了全景（東南から）

西南端（西北から）

東南端（東南から）



中央部柱穴群（西南から）



中央部遺構検出状況（東北から）

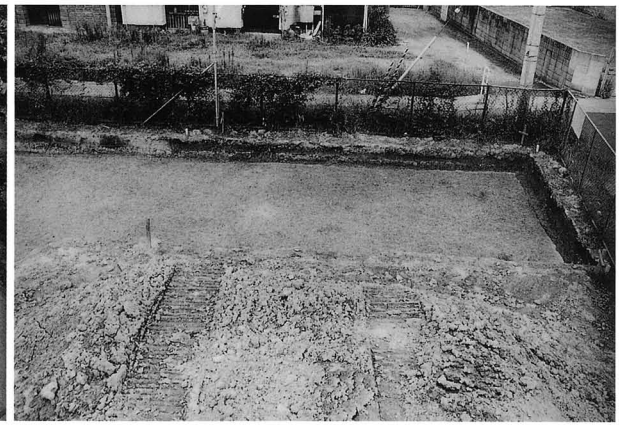
図版24　平成13年度1区

全景

中央部（南から）

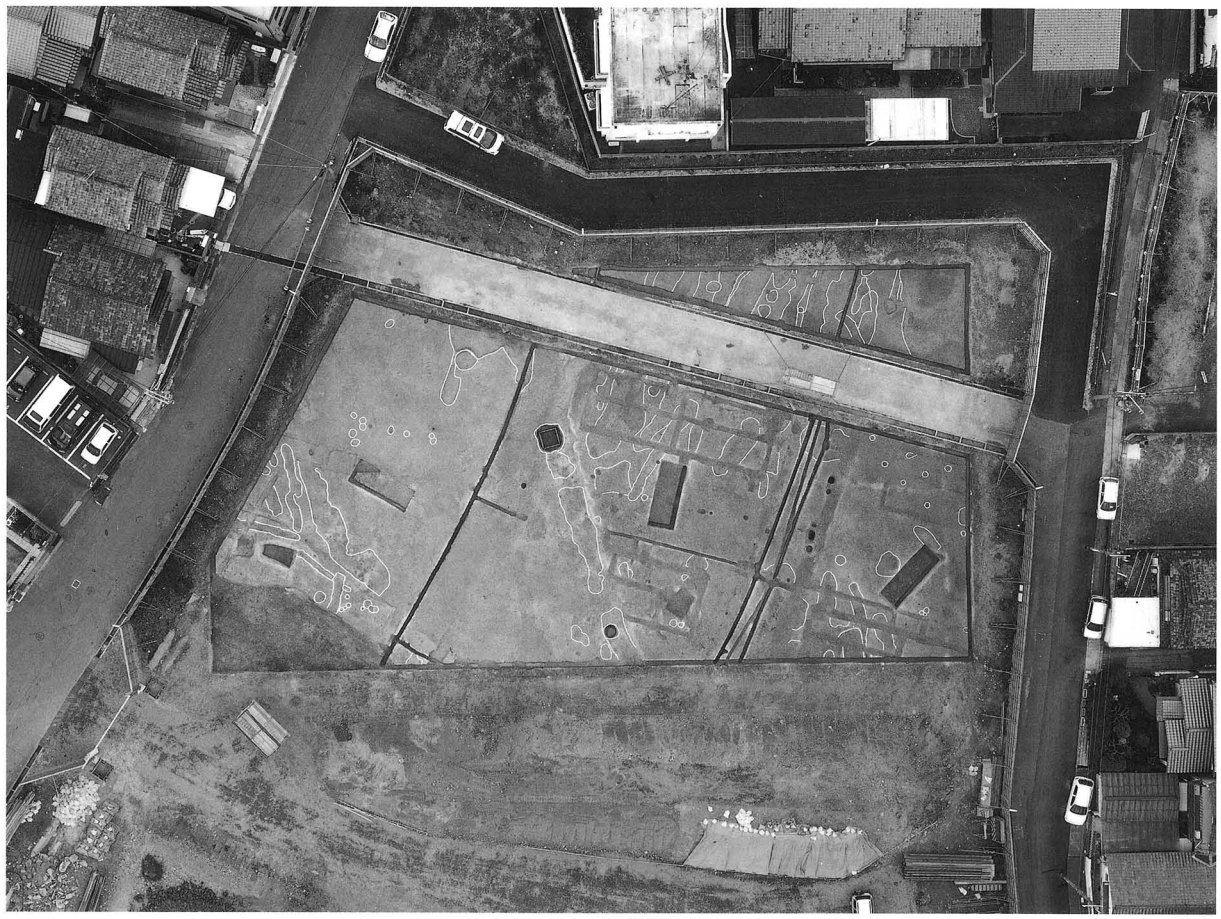
西南端部（東北から）

中央部東北端（東南から）

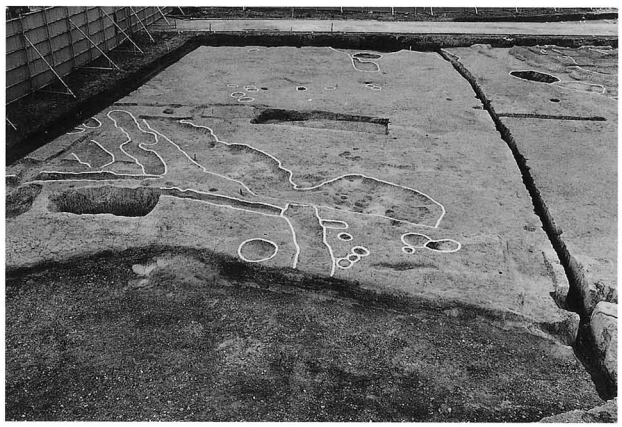


東北端部（西南から）

図版25　平成13年度2区

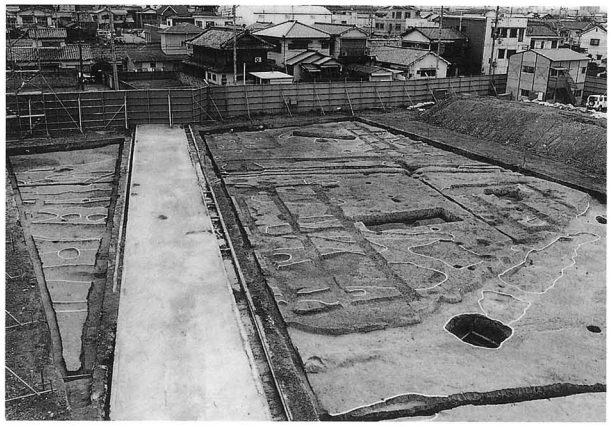


全景



西南端部（南から）

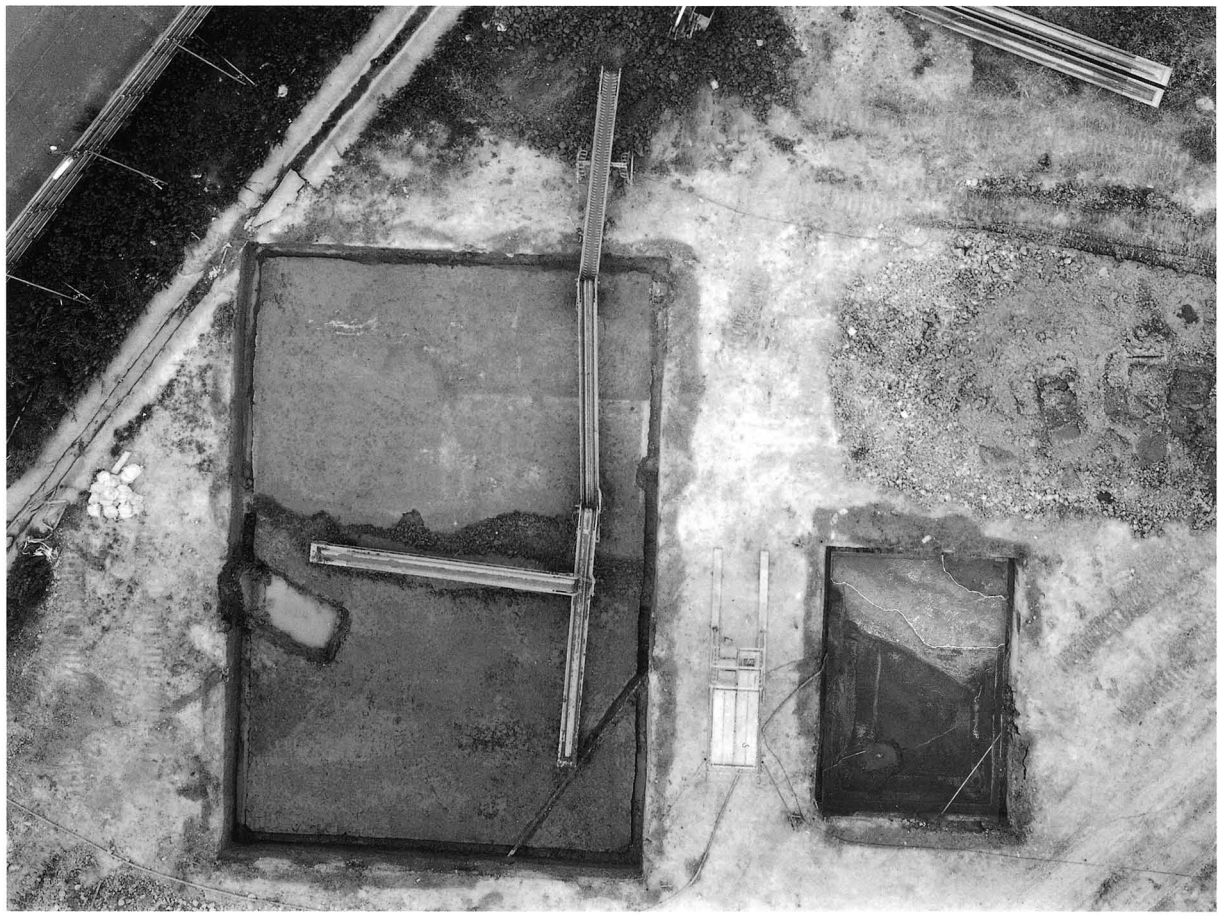
中央部（南から）



全景（西南から）

中央部井戸（西北から）

図版26　平成13年度3・4区



3・4区全景（東南から）

遺物出土状況（西南から）

砥石出土状況（西南から）

甕出土状況（西南から）

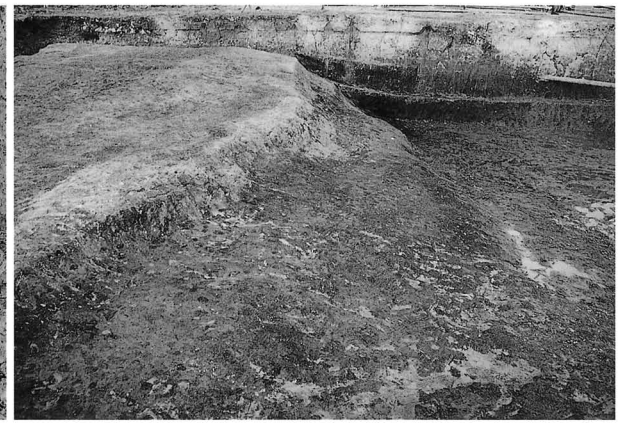
甕出土状況（西南から）

図版27　平成13年度3・4区

河川完掘状況底部（東北から）

河川完掘状況底部（東北から）

河川完掘状況（東南から）

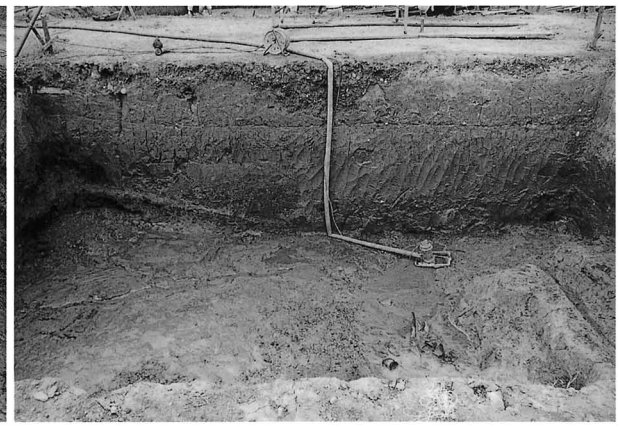


河川完掘状況（西南から）

全景（西南から）

河川肩部・溝・遺物出土状況（西南から）

河川埋土断面（西南から）



河川埋土断面（東北から）

図版28　平成13年度5区

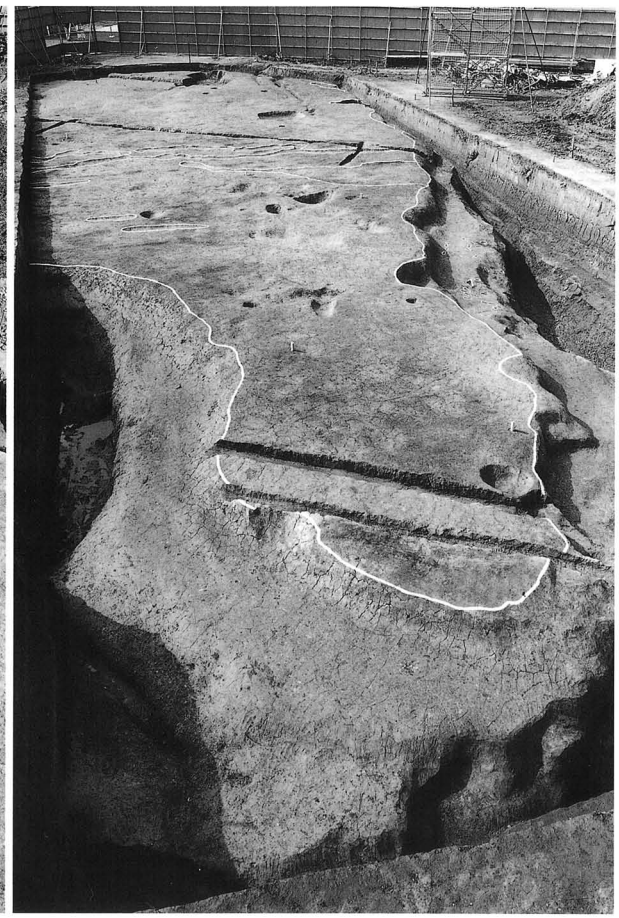
第1面全景（東南から）

第2面全景（東南から）

図版29　平成13年度5区

第２面全景（西から）

第２面全景（西南から）



第２面全景（東北から）

図版30　平成13年度6区

全景

北半部（北北西から）

土器溜り上面（東北から）

土器溜り遺物出土状況（西南から）

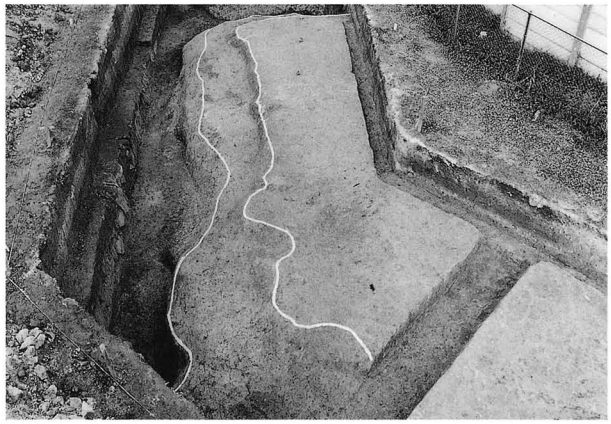
土器溜り完堀状況（西南から）

第２面北半部（南から）

第２面北半部河川完掘状況（南から）

第２面北半部（西南から）

第２面北半部（東南から）

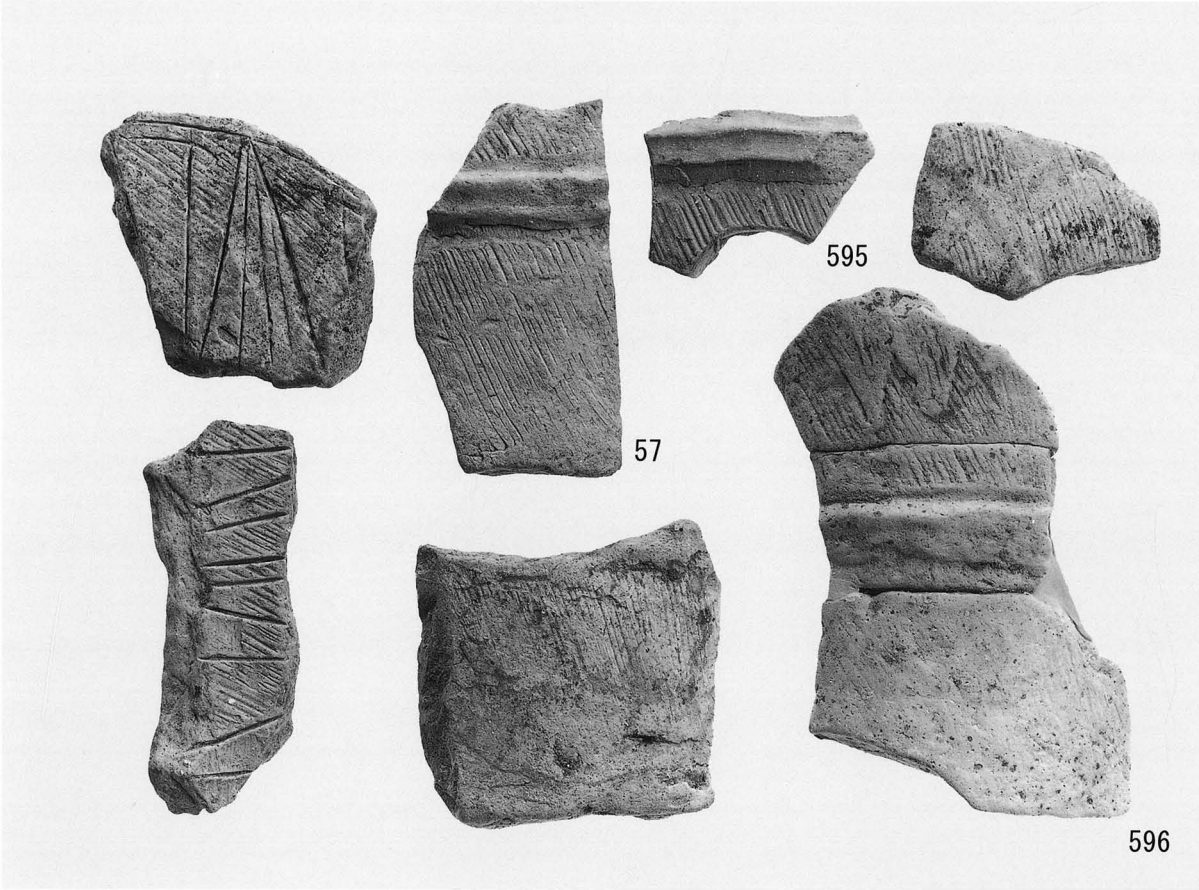


第２面中央部（東南から）

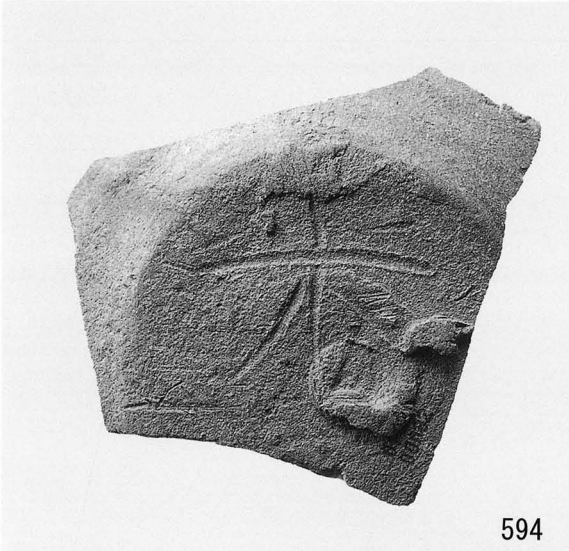
第２面中央部（南から）

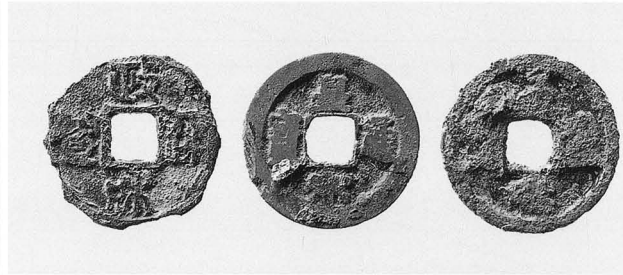
第２面東端部（南から）

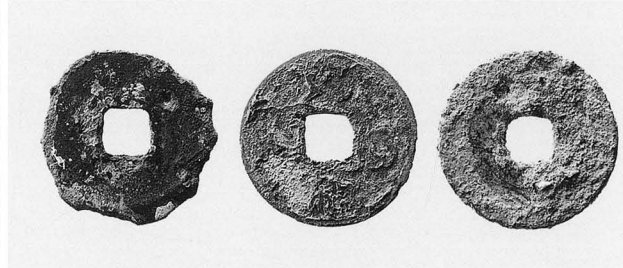
第２面東半部（西から）



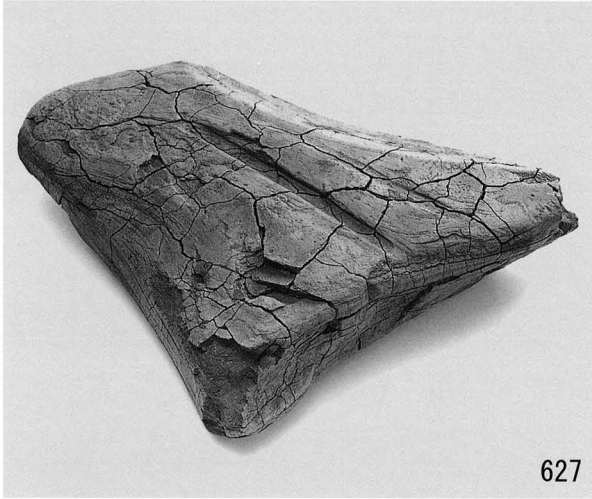
盾形・円筒埴輪







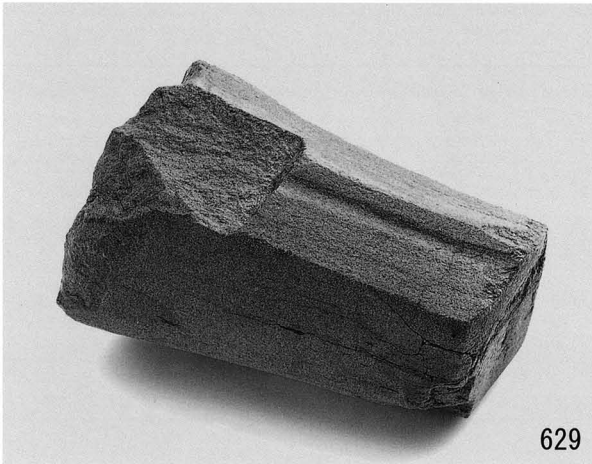
図版33　出土遺物2

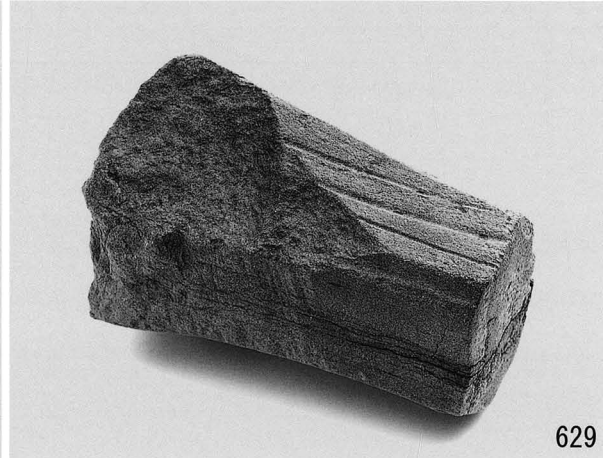

627

627

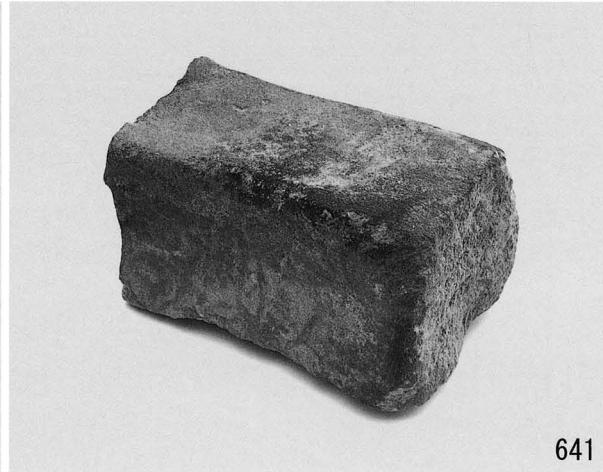
628

628


629

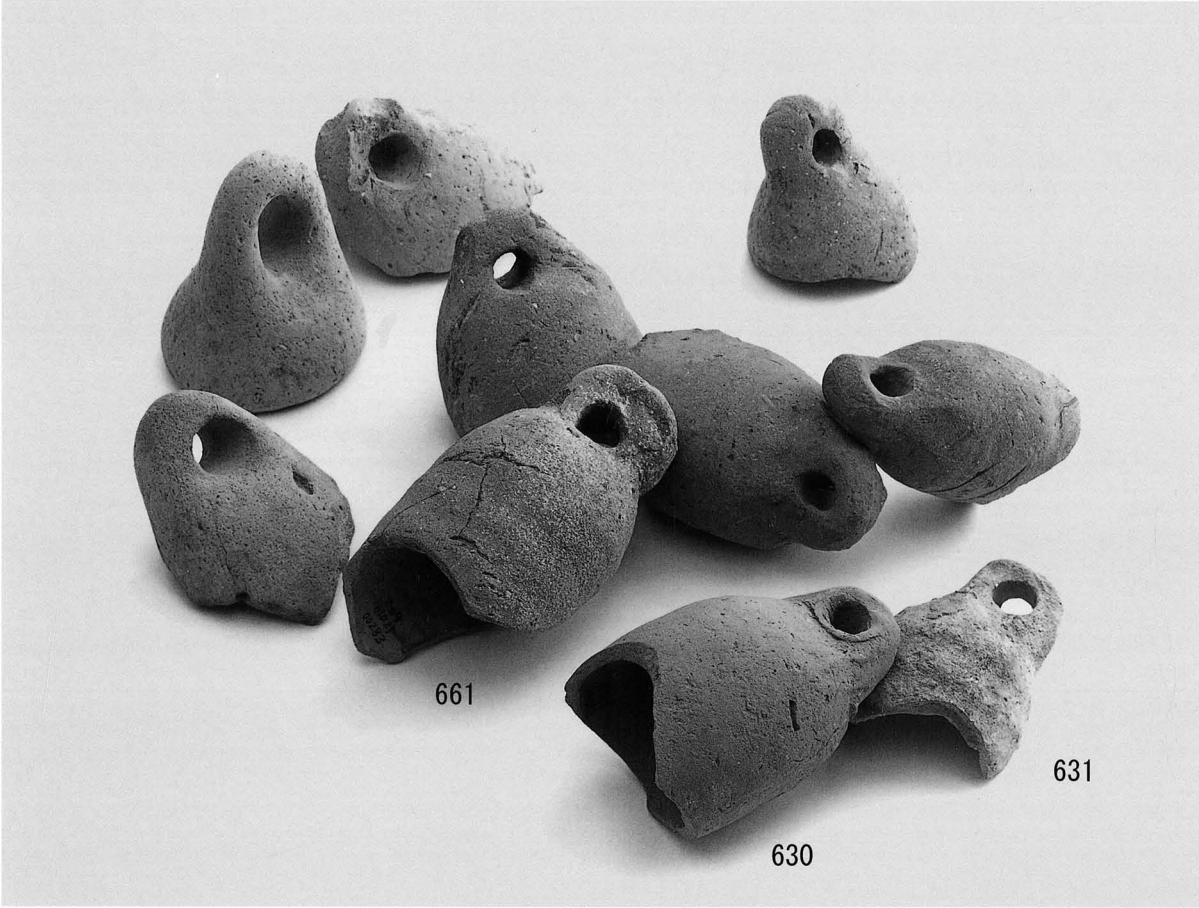

629

641


641

台石・砥石など

図版34　出土遺物3



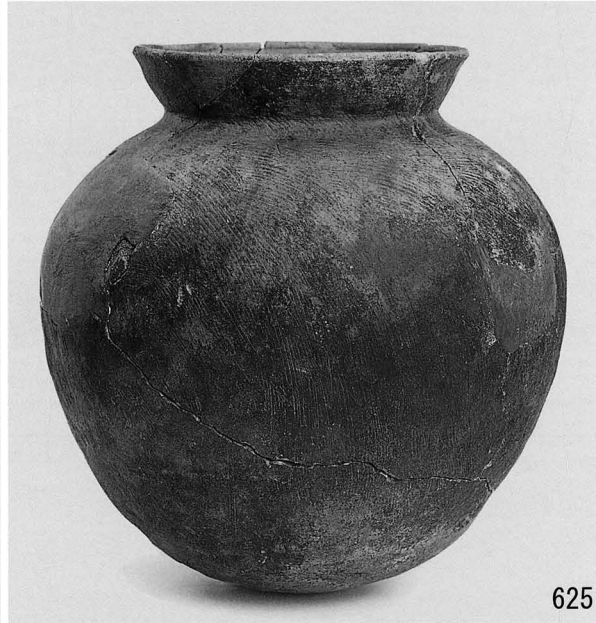
須恵器飯蛸壺

土錘など

614

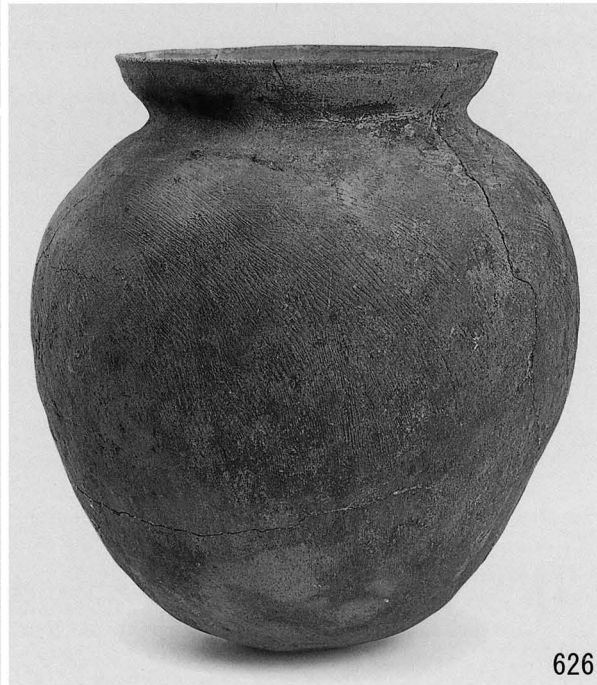
668

615


625

613

624

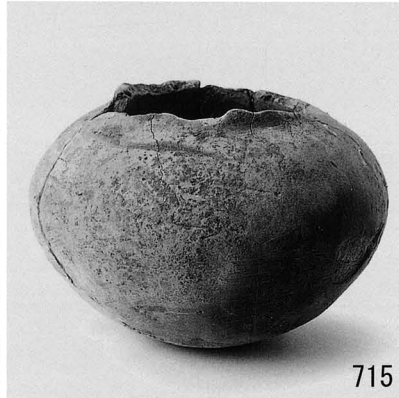

626

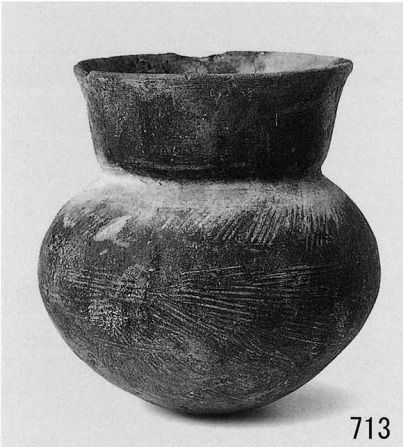
布留式土器

図版36　出土遺物5

609

634

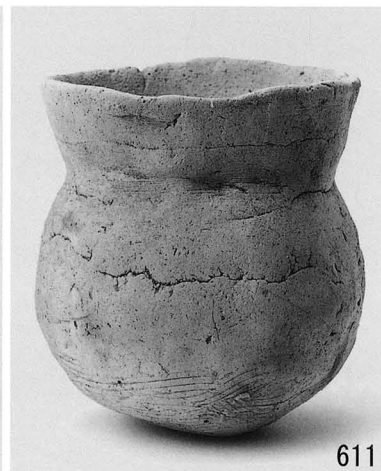

715


713

633

714

612


611

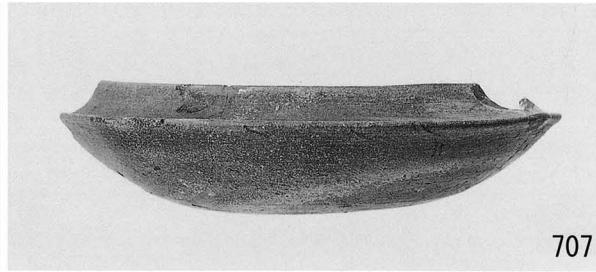
布留式土器など

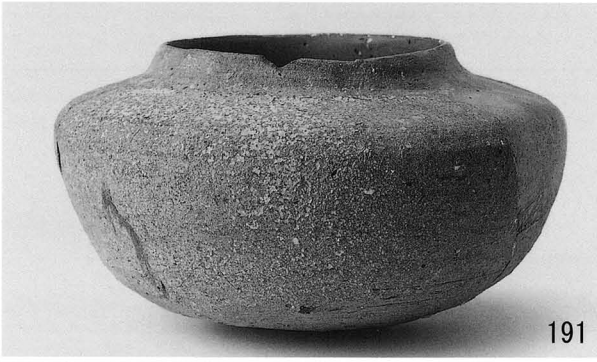
図版37　出土遺物6

69

192

732


707

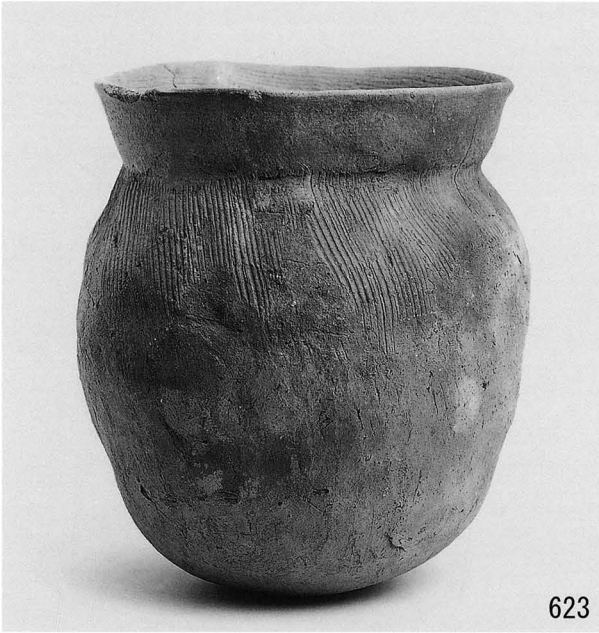

191

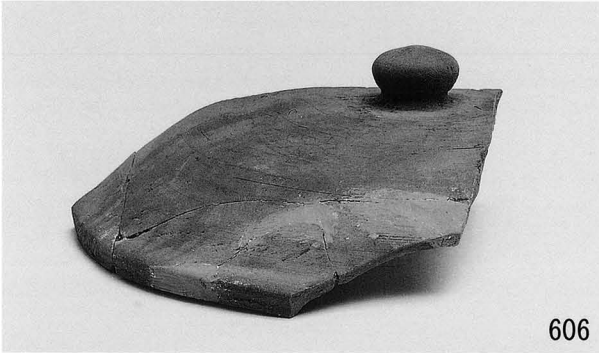
665

198

711

図版38　出土遺物7





7～8世紀 須恵器・土師器

9～10世紀 須恵器・土師器

214

281

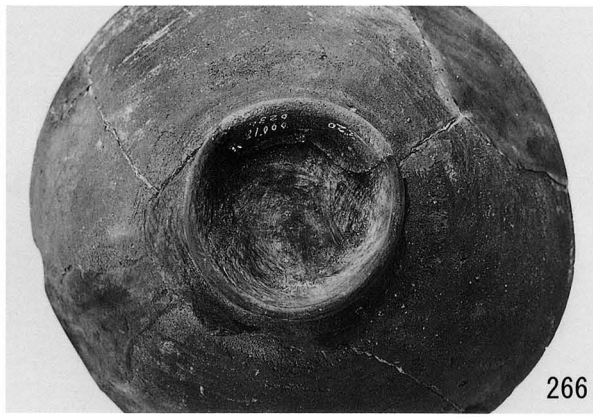
214

281

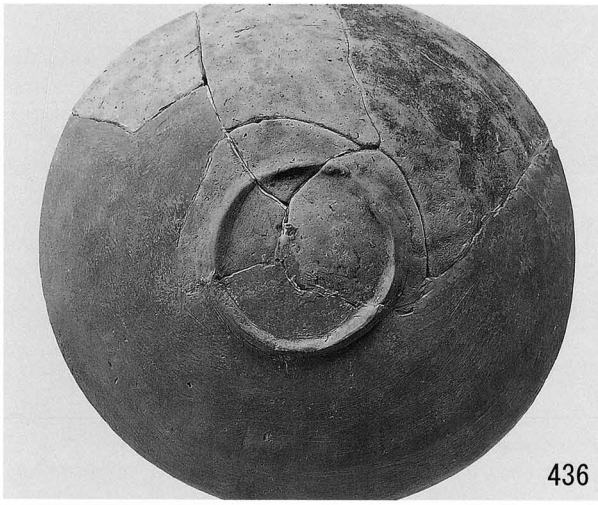
267

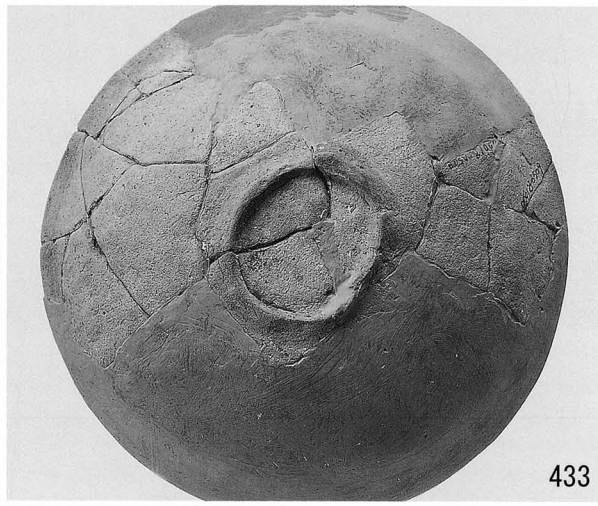
266

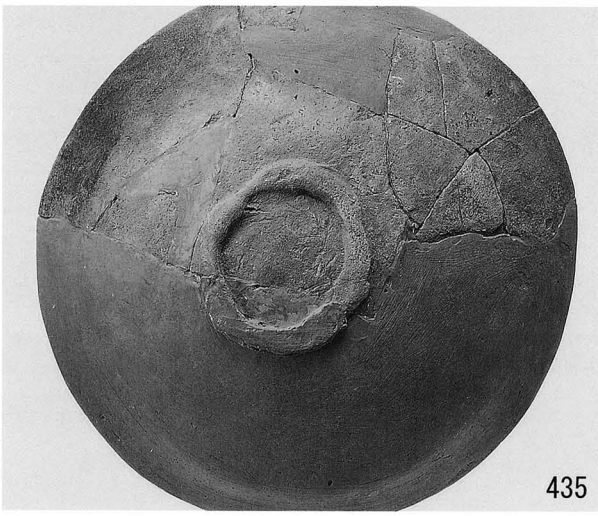
267


266

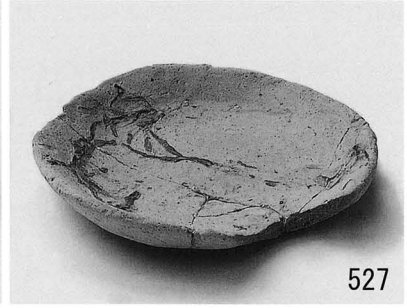
10～11世紀　黒色土器椀・土師器皿



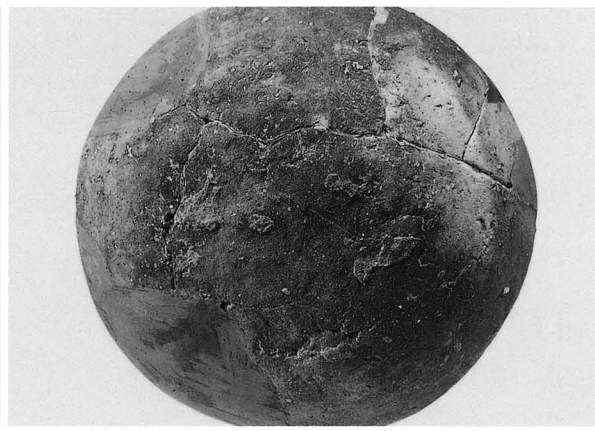




12～13世紀　瓦器椀・土師器皿



13 世紀後半　瓦器椀・土師器皿

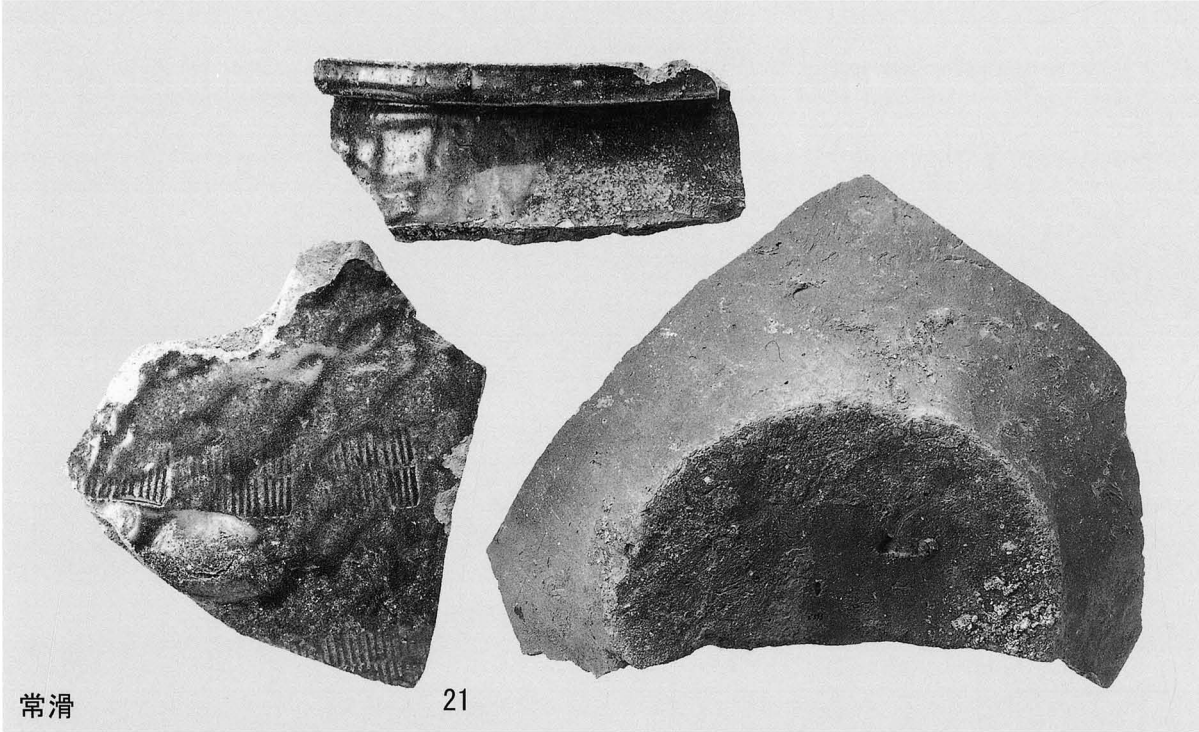


14 世紀前半　瓦器椀・土師器皿

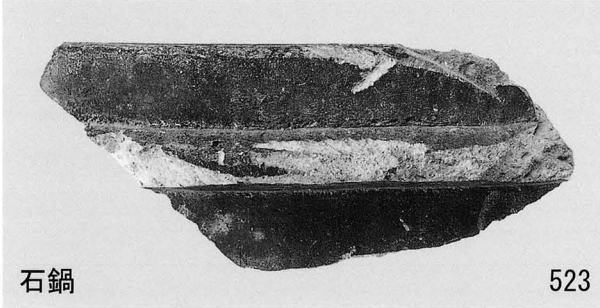
図版44　出土遺物13

青磁など

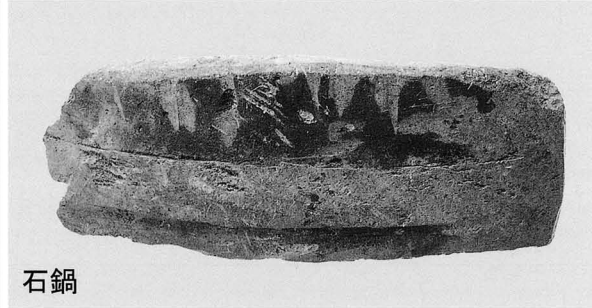
瀬戸・美濃焼など



常滑　21



石鍋　523



石鍋

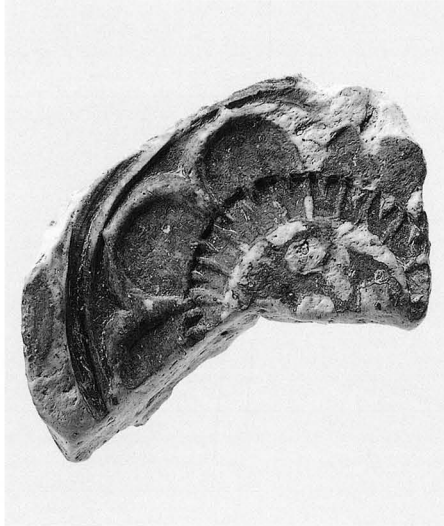
538

231

土師質土釜

梵字瓦（阿弥陀）　189

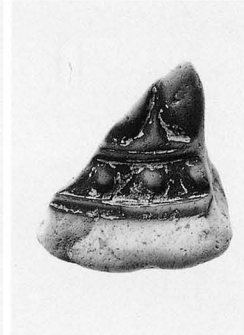
378



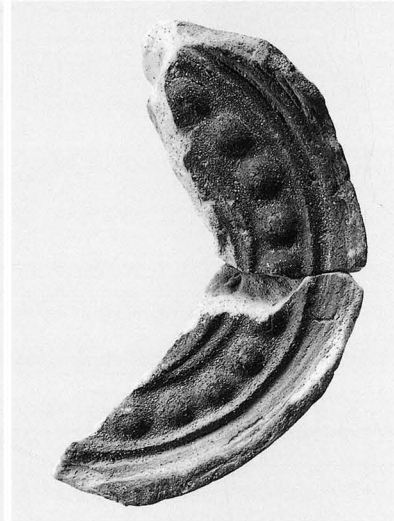
553

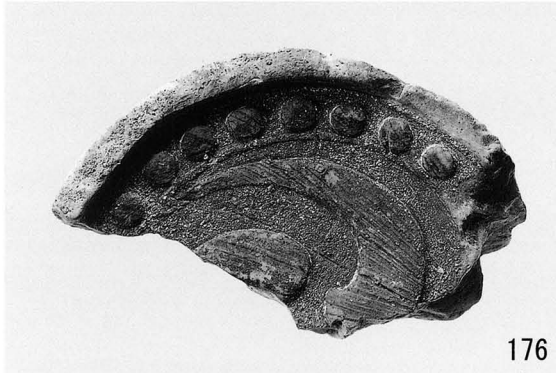
175

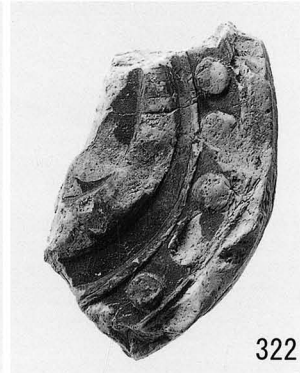
379



軒丸瓦（蓮華文）





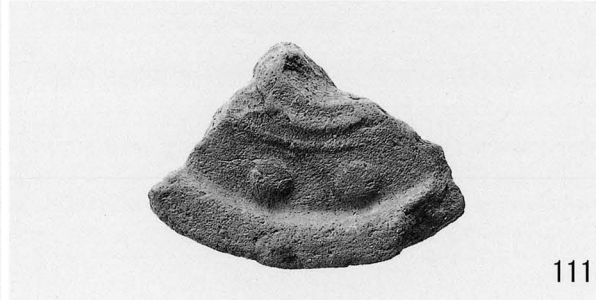


軒丸瓦（巴文）

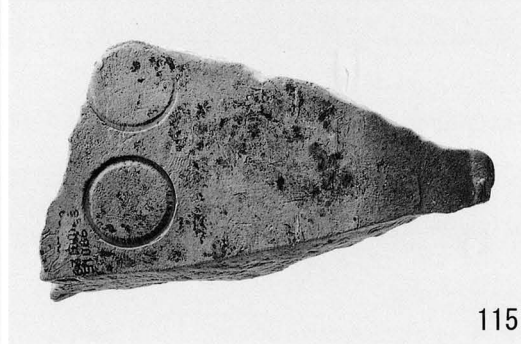
377

579

110


111

52

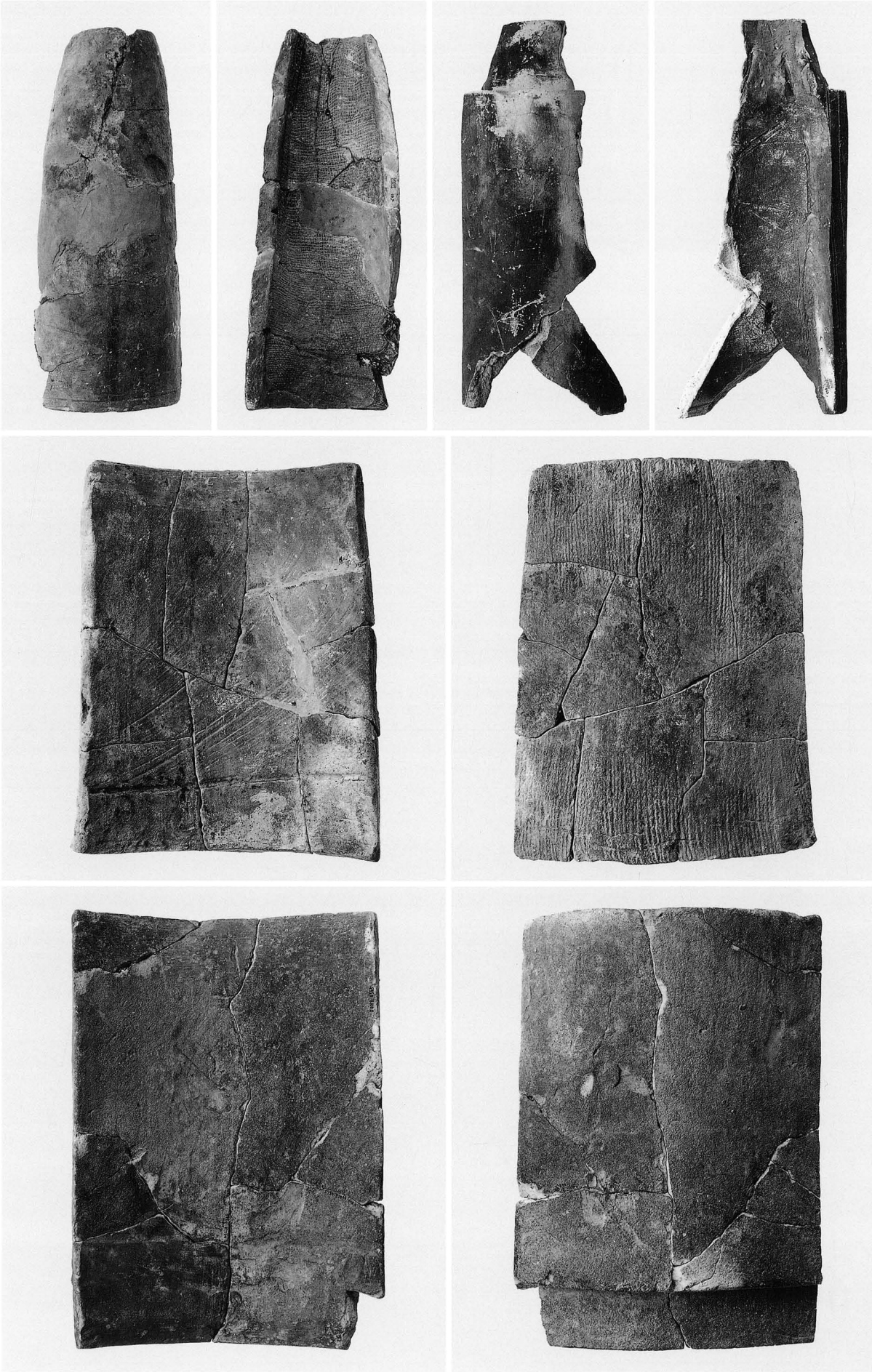

115

軒丸瓦（巴文など）

554

572

軒平瓦



丸瓦・平瓦

報　告　書　抄　録

ふりがな	よしいいせき
書名	吉井遺跡
副書名	府営岸和田吉井住宅建替えに伴う発掘調査
巻次	
シリーズ名	大阪府埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	２００５－４
編著者名	高島　徹・西口陽一・藤澤眞依・上林史郎
編集機関	大阪府教育委員会文化財保護課
所在地	〒540-8571　大阪府大阪市中央区大手前２丁目　TEL　06-6941-0351
発行年月日	2006年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	面積 (㎡)	調査原因
よしいいせき 吉井遺跡	きしわだし 岸和田市 よしいちょう 吉井町地内	27202	135	34° 28′ 40″	135° 24′ 30″	1999年9月10日～ 2004年3月31日	12,264	府営住宅建替

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
吉井遺跡	集落跡	古墳～奈良時代	河川	紀年木簡 須恵器・土師器	奈良時代の河川から「天平寶字三年四月十六日主守六人ㄋ…」と記した紀年木簡が出土している。
		中世	建物７棟 井戸２基 柱穴多数	須恵器・土師器 瓦器・軒瓦 青磁・白磁	
		近世	水田区画溝 鋤溝跡	近世陶磁器	

大阪府埋蔵文化財調査報告 2005-4

吉　井　遺　跡

－府営岸和田吉井住宅建替えに伴う発掘調査－

発　行　大阪府教育委員会
〒540-8571
大阪市中央区大手前２丁目
TEL 06-6941-0351
発行日　2006年３月31日
印　刷　㈱近畿印刷センター
〒582－0001
柏原市本郷５丁目６－25